

なにわ

大阪

研究

第 8 号



関西大学なにわ大阪研究センター

なにわ
大阪
研究
第 8 号

目 次

論文

子どもの学習支援活動、居場所づくりの歴史の変遷と 大阪府内の子ども食堂での学習支援活動の取組みの実態	真 弓 昂 廣 川 空 美 菊 池 美 奈 子 大 井 美 紀 植 田 紀 美 子 元 吉 忠 寛 近 藤 誠 司 高 鳥 敏 雄	1
大阪にカジノが来たら、依存症の人は増える？ — パチンコのデータ分析からの含意 —	兼 森 宏 太 座 主 祥 伸	11

研究ノート

OSK と舞台装置家・山田伸吉	奥 本 未 世	27
-----------------	---------	----

資料

堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家所蔵資料選「メーカーの銃砲史」3 大筒張立記録	藪 田 貫	1
堺鉄炮鍛冶屋敷 井上関右衛門家文書「鉄炮作法秘伝書」について	中 田 佳 子	19
大正12年竣工 大阪松竹座設計図面資料目録 — 道頓堀 CG 復元研究の基礎資料として —	林 武 文 稲 森 穂 乃 香 李 信 雨	45
契沖歌軸4点	乾 善 彦	55

なにわ大阪研究センター事業に係る研究成果報告

2024年度なにわ大阪研究センター基幹研究班 「なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化」	林 武 文 乾 善 彦 藪 田 貫 崇 井 浦 寺 知 子 橋 丸 山 川 徹 子 北 川 博 信 雨 李	63
2023～2024年度なにわ大阪研究センター公募研究班 「甘樫丘遺跡群の変遷と土地利用に関する研究 — 発掘調査の成果を中心に —」	井 上 主 税 西 本 昌 弘 長 谷 川 透	67

なにわ大阪研究センター事業に係る研究概要報告

2025年度なにわ大阪研究センター基幹研究班 「なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化と情報公開」……………	林 乾 武 文 藪 田 善 彦 井 浦 貫 崇 橋 寺 知 子 丸 山 子 徹 北 川 博 子 李 川 信 雨 奥 本 未 世	73
2024～2025年度なにわ大阪研究センター公募研究班 「大大阪」の形成・発展と山岡順太郎——山岡家文書の総合的研究—— ……	官 田 光 史 伊 藤 信 明 佐 藤 健 太郎	95
2024～2025年度なにわ大阪研究センター公募研究班 大阪府内における「子ども支援」サービスの調査とガイド作成……………	廣 川 空 美 菊 池 美 奈 子 植 田 紀 美 子 元 吉 忠 寛 近 藤 誠 司 高 鳥 毛 敏 雄 大 井 美 紀 真 弓 昂	99

なにわ大阪研究センター事業に係る研究中間報告

2025～2026年度なにわ大阪研究センター公募研究班 映像制作初学者におけるロケーション選択行動の分析 —近接性バイアスと行動圏の固定化に着目して—……………	長 谷 海 平 乾 善 彦	105
表紙にちなんで……………	橋 寺 知 子	111
2025年度なにわ大阪研究センター事業紹介……………		113
投稿規程……………		119
関西大学なにわ大阪研究センター設立の趣意……………		120
編集後記……………	林 武 文	121

表紙：赤松麟作『大阪三十六景』より「天王寺公園口」
裏表紙：赤松麟作『大阪三十六景』より「動物園」

Journal of Naniwa-Osaka Studies

Contents

Articles

- Historical changes in learning support and safe-space (Ibasho) initiatives for children and the current state of learning support activities in Children's Cafeterias (Kodomo Shokudou) in Osaka Prefecture
..... MAYUMI Subaru 1
HIROKAWA Kumi
KIKUCHI Minako
OI Miki
UEDA Kimiko
MOTOYOSHI Tadahiro
KONDO Seiji
TAKATORIGE Toshio
- An Empirical Analysis of Pachinko in Japan KANEMORI Kota 11
ZASU Yoshinobu

Research Note

- The Relationship between OSK and Set Designer Shinkichi Yamada OKUMOTO Miyo 27

Materials

- Selection of Records of Gunmaker *Inoue Sekiemon* in Sakai in Early Modern Japan 3
..... YABUTA Yutaka 1
- Secret Book on Gunmaking, One of Records of Gunmaker *Inoue Sekiemon* in Sakai in Early Modern Japan NAKATA Yoshiko 19
- Catalogue of Architectural Drawings of the Osaka Shochikuza Theatre, Completed in 1923 — As Fundamental Source Materials for the Dotonbori CG Reconstruction Project —
..... HAYASHI Takefumi 45
INAMORI Honoka
LEE Shinwoo
- Introduction: Four rolls of *KEITYŪ* kajiku INUI Yoshihiko 55

Report of the Research Projects

Report on the Results of the Core Research Group 2024 —Visualisation and dissemination of research results at the Naniwa Osaka Research Centre	HAYASHI Takefumi 63 INUI Yoshihiko YABUTA Yutaka IURA Takashi HASHITERA Tomoko MARUYAMA Toru KITAGAWA Hiroko LEE Shinwoo
A study on the transition and land use of the Amakashinooka Site Group —Focusing on the results of excavation research	INOUE Chikara 67 NISHIMOTO Masahiro HASEGAWA Toru
Summary of the Research Projects	73
Annual Research Project	105
Cover Art: 36 Views of Osaka by Akamatsu Rinsaku: Osaka City Museum of Fine Arts in Tennoji Park	HASHITERA Tomoko 111
Research Projects in 2025	113
Submission Guidelines for Naniwa–Osaka Studies	119
Prospectus of Establishing the Research Center for Naniwa–Osaka Studies, Kansai University: Its Mission and Goals.	120
Editorial Note	HAYASHI Takefumi 121

子どもの学習支援活動、居場所づくりの歴史的変遷と大阪府内の子ども食堂での学習支援活動の取組みの実態

真弓 昂 廣川 空美 菊池 美奈子
大井 美紀 植田 紀美子 元吉 忠寛
近藤 誠司 高鳥毛 敏雄

要旨：現在、日本の自治体の60%以上で子どもを対象とした学習、生活支援活動が行われており、その重要性が広く認識されている。学習支援活動の始まりは1980年代後半の不登校生徒の増加が発端であり、その後、90年代後半に入ると貧困の連鎖が社会問題となり、その防止の観点から子どもの自立、就労にむけた高校就学を目標に学習支援活動は広く始められていった。さらに「居場所」としての機能が求められるようになった。本研究では、地域における学習支援活動と居場所づくりに関する歴史的な変遷について文献のレビューを行い、大阪府内の学習支援活動を行っている子ども食堂を対象に、学習支援活動の実施状況や実施内容など、取組みの実態を調査した。

キーワード：学習支援活動、居場所、子ども食堂

1. 学習支援、居場所づくりの歴史的変遷

現在、日本の自治体の60%以上で子どもを対象とした学習支援活動が行われており（厚生労働省2020）^[1]、その重要性が広く認識されている。学習支援活動の始まりは、1980年代後半の不登校生徒の増加問題が発端である。当時の中学生3年生を対象とした学習支援活動の実践者による「江戸川中3勉強会」によれば、不登校となる子どもは、生活困窮世帯であることが多く、学校に行かないことによって、基礎学力を身につける機会が失われ、高校に進学する意欲を失ってしまうという（宮武2014）^[2]。具体的な活動としては、成績不振などで高校進学をあきらめている子どもを説得するところから始まり、英語や国語、数学の最も簡単な問題から解かせていくといった（宮武2014）^[2]基礎的な学習から高校進学意欲を付け、高校進学を目指す為の支援が行われていた。そのため、1980年代の学習支援活動の目的は、不登校の生徒を対象に高校進学を目標に学力を身に付けさせる為であり、学習支援の場そのものに「居場所」としての目的があることは確認できなかった（船橋2022）^[3]。このように、自主的事業としての学習支援活動は80年代から行われていたが、国として貧困世帯の子ども教育の機会が議論され、対策が講じられるといったことは少なかった。

一方で、学校に居場所がない子ども達のための居場所づくりの重要性が取り上げられており、「登

校拒否（不登校）問題について——児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して」（文部省 1992）^[4]という報告書では、学校が「居場所」である必要性が提唱された。

そして、90年代後半以降になると、貧困の再生産、貧困の連鎖が徐々に社会問題として顕在化するようになった。こうした流れを受け、2000年代に入ると厚生労働省の専門委員会などで、保護世帯の子どもの自立・就労を促すための子どもの高校進学必要性が提起されたことにより、「生業扶助の高等学校等就学費の創設」（2004年）、「子どもの学習支援費の創設」（2009年）といった政策が進められていくこととなった。また、生活保護世帯の中学生を対象とした、「子どもの健全教育支援事業」の一部として、2009年から学習支援活動が開始されており、翌年度からは、全国で35の自治体で実施されている（厚生労働省 2011）^[5]。文部科学省（2004）^[6]でも「子どもの居場所づくり新プラン」が打ち出され、すべての小中学生を対象に放課後や週末を利用してスポーツや文化的活動の様々な体験や地域住民との交流を目的として、3ヵ年計画で子どもの居場所を用意する政策を発表している。

このように、学習支援活動が始まった1980年代から2000年代前半までに、学習支援活動に居場所としての意義が含まれていくようになった。

2. 学習支援活動の変化の兆し

学習支援活動において「学習」としての目的だけではなく「居場所」としての目的を意識的に行われた実践の例を紹介する。

日置（2009）^[7]が実態を調査した北海道釧路市で実施された「Zっと！Scrum」（以下「スクラム」と呼称）は2007年から実践が開始し、市からNPO法人への委託事業として行われ、活動時間は夏休み及び冬休みに1日を通して行われた。対象者は生活保護世帯の中学3年生であった。取り組みの内容としては、事業は子どもたちへの受験勉強のお手伝いが主であるが、学習面だけではなく、日々の送迎、給食の提供、ミーティングやゲストを呼んでの課外授業や行事などの生活支援や精神面へのバックアップも含めて行う総合的な居場所づくりとなっていた（日置 2009）^[7]。このように、多くの時間が受験を意識した学習時間として設定している一方で、課外授業や給食の提供などを通じた居場所づくりが強く意識されている。

学習支援活動に居場所としての目的が組み込まれている理由として、「スクラム」の特徴の一つである学習支援のプログラムやクラスの分け方、勉強会の継続などについて子ども達の意見を聞く機会を設けて設計しており、利用者が主体として関わっていた（日置 2009）^[7]。勝橋（2022）^[3]は、「スクラム」は、「居場所」の中に「学習」が包括されて取り組まれており、「学習」と「居場所」の目的の間に葛藤は存在しないと述べている。

また、「スクラム」の実践は、厚生労働省（2010）^[8]の「生活保護受給者の社会的居場所づくりと新しい公共に関する報告書」で取り上げられるなどして全国的に注目された。「スクラム」に存在する「場づくり実践」の思想について、高嶋ら（2016）^[9]は、学習支援事業に関する研究において欠かすことのできないものと述べている。「スクラム」の実践は学習支援活動において、学習そのものの支援と、居場所づくりとしての支援のバランスを考えるうえで極めて重要な取り組みであるといえる。

その後、学習支援事業そのものの政策については、2013年に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立し、貧困世帯の子どもへの教育支援を柱と位置づける「子供の貧困対策大綱」（内閣府 2014）^[10]が閣議決定された。高校進学率が子どもの貧困に関する指標の1つとして設定されたうえ

で、指標の改善に向けた重要施策のうち、「教育の支援」として学習支援事業について言及がなされている。2015年には学習支援事業を自治体が地域の実情に応じて実施する任意事業とする「生活困窮者自立支援制度」が始まった。

しかし、松村（2016）^[11]は、学習支援そのものについて、社会的に認知され始めた2000年代半ばから法律策定間の成り立ちを分析した先行研究は見当たらないと述べている。教育社会学の領域では、学習支援実践の実例報告にとどまっておらず、福祉の領域においては、子どもの教育はあくまで最低限度の水準を保障する扶助の視点、または、経済面に重きを置き、「自立の支援」という観点から多く語られている（荒牧 2015）^[12]。また、福祉・教育政策上の意義や位置づけを考察したものは見受けられない。こうした背景により、子どもの学習支援活動の意義や位置づけが十分に定義されないまま各地に取り組みが拡大した（松村 2016）^[11]。

居場所づくりにおいても、「子どもの居場所づくり新プラン」（文部科学省 2004）^[6]後、行政やボランティア団体によって実践が増加していったが、西中（2014）^[13]は、居場所づくりを定義しないまま行われている実践が多く、何をターゲットに居場所づくりが行われているか明確にされていないと述べている。学習支援活動、居場所づくり双方において十分に位置づけが行われず全国に活動が広がっていったと思われる。2019年には、「子どもの貧困対策推進法」が改正され、目的規定として子どもの「将来」だけでなく「現在」に向けた対策であること、児童の権利条約から貧困対策を推進することを明記し、これに合わせて改正された「子供の貧困に対する大綱」（内閣府 2019）^[14]では、学習支援が学力の向上のみならず、学習や将来への意欲を高める機能も期待されると明記された。これ以降、学習支援事業では「学習」のみではなく「学習」と「居場所」の両立した支援を必要とするようになった政策の変化点であると読み取ることが出来る。

こういった政策面での変化を踏まえた学習支援活動に、「居場所」としての目的を持った実践として金沢市における学習支援活動がある（森山・神崎 2019）^[15]。この活動は、大学生のボランティアと話すことによって親や教師と違った形で大人との関係が形成することに子ども達が意味を見出ししており、学習支援で「居場所」としての目的をもって展開することの重要性が指摘されている。

3. 学習支援と居場所づくりのジレンマ

2019年に改正された「子供の貧困に対する大綱」（内閣府 2019）^[14]により、政策面で学習支援に「居場所」の機能が期待されるようになった。森山・神崎（2019）^[15]の実践紹介においても「居場所」の目的を持つ学習支援の展開の重要性が指摘されたが、「学習」と「居場所」という両方の目的を果たすことには葛藤が生じることが分かっている。

田谷（2012）^[16]が指摘するように「居場所」という概念は、「学習」と相容れないとされている。成澤（2018）^[17]が関東近辺で学習支援事業に取り組んでいるNPO法人及びボランティア団体7か所に対して行った聞き取り調査では、「学習」によって、より多様な貧困層の子どもの高校進学を可能にし、居場所づくりを行うことによって多様な層の包摂を可能とし、学校、家庭で居場所のない子どもとの関わりを築くことができたとした。

しかし、「学習」に加えて「居場所」の提供支援を行うほど「学習」の目的が果たせなくなり、受験勉強や学習塾の代替として利用している子ども達が排除されてしまうという状況が生じた。逆に「学習」に特化した団体においては、学習に適応できない層（学習に意欲がない子、障がいを持った子）などが排除されてしまう状況が生まれていることを明らかにしている。

また、竹井・小長井・御代田（2019）^[18]は、政令指定都市で実践を行っている5つの団体に対しヒアリング調査を行い、「居場所」の位置づけが団体ごとに異なっていることを明らかにした。その結果、「学習」と「居場所」において、葛藤があるとした団体がある一方、「学習」と「居場所」の両立に葛藤がないとした実践もあり、その場合、「居場所」の捉え方として、日置（2009）^[7]の「スクラム」のように利用者を主体としてみているという共通点がみられた。

4. 居場所とは何を指すのか

藤竹（2000）^[19]は、居場所について、自分のものであり、落ち着きや安定感、充実観や所属感覚、さらには保護されているという感覚を持つことが出来る場であるとした。そのうえで、居場所を「社会的居場所」と「人間的居場所」に分類している。「社会的居場所」は、他者によって自分が必要とされる場所、資質や能力を発揮できる場所、「人間的居場所」は自分を取り戻すことが出来る場であるとした。太田（2015）^[20]は、両者に共通していることは、社会的、人間的どちらであれ、自分が自分であることを確かめることが出来る環境を指し、これが確認できたときに社会の中で生きているということを理解し、幸福感・満足感を得られると述べている。

また、藤竹（2000）^[19]は、「社会的居場所」、「人間的居場所」という分類に加え、「永続的居場所」、「一時的居場所」を設定したうえで、「永続的居場所」の重要性を指摘し、社会的、人間的どちらの居場所であれ永続的居場所でなければならないとしている。「永続的居場所」は、人間関係が安定的に構築されつづけ、それにより自己が承認できる場であるとされる。「一時的居場所」は明確には定義されていないが、例として、仕事の緊張から逃れて、たとえひとときでも、自分を取り戻すことのできる場所とし、屋上やトイレも居場所になるとしている。「一時的居場所」は、「永続的居場所」と比べ、安定的な拠り所にならないと述べている。

5. 居場所としての子ども食堂

近年、子どもの貧困対策だけではなく、居場所の一環として、子ども食堂が重要な役割を担っている。子ども食堂は、無料又は安価で栄養のある食事や温かな団らんを子どもたちに提供する取組（農林水産省 2018）^[21]であり、2012年に東京で食事を十分に取れていない子ども達を助けるために食事を提供したのが始まりとされている（農林水産省 2018）^[21]。2019年には全国で3718ヶ所、2024年には10867ヶ所の拠点で活動が行われている（むすびえ 2024）^[22]。子ども食堂について、尾添（2019）^[23]は、子ども食堂のフィールド調査を通して「一時的居場所」として、選択、離脱可能な点こそ現代的意義があると主張している。この調査（尾添 2019）^[23]において、子ども食堂は月2回開催され、食事代は子ども無料、大人300円である。参加するスタッフ、子どもも毎回同じではなく、尾添（2019）^[23]もボランティアスタッフとして定期的に参加している。具体的な活動は、午後4時前後に子どもたちが集まり、食事ができるまでの5時半ごろまで各々学校の宿題や遊びを行い、食事が終わった子どもから食器を返却後に遊びを再開し、日没をめどに解散する。こうした活動内の関わり合いで子どもとボランティアの間で食事の擬制家族的なかわり、勉強中の擬制学校的なかわり、その他の擬制的関係性を確認し、この関係性は子ども食堂が開催されるたびに始まり、終了すれば消えるという前提で成り立っている。尾添（2019）^[23]は、子どもたちとのかかわりの心地よさは、居場所やそこでの関係性の責務から「いつでも離脱できる」ことにありと述べ、現代社

会において、孤立や排除のリスクの高まりを考えた時、「結晶化しない関係性を生み出す」場である一時的居場所を現代的な居場所として捉えることを指摘している。

6. 大阪府内の子ども食堂における学習支援の実態調査

一時的居場所の提供として機能する「子ども食堂」において、学習支援活動がどのように取組まれているのかは不明である。本調査は、大阪府内の子ども食堂を対象に、学習支援活動の実施状況について調査を行った。子ども食堂における学習支援活動が、居場所の提供の一環として実施されているのかを検証した。

6.1. 方法

大阪府内にある562件の子ども食堂を対象に、学習支援活動の有無、学習支援の内容、開催頻度、参加を受け入れている学生、参加費の有無、学習支援以外のサービスの提供についての郵送調査を行った。オンライン回答も可能とし、書面にて調査の目的や方法を説明し、調査への回答に同意が得られた施設からのデータを収集した。実施期間は2024年9月から12月であった。宛先不明は40件(7.1%)、郵送回答は103件(18.3%)、オンライン回答は104件(18.5%)より回答を得た(回収率36.8%)。本調査の実施方法については別紙にも報告している(廣川ら 2026)^[24]。

学習支援の内容、開催頻度、参加を受け入れている学生、参加費の有無については自由記述で回答を得た。

関西大学社会安全学部倫理審査委員会による審査を受け、本調査の実施について承認を得た(審査番号: FY2024_003)。

6.2. 結果

207件の子ども食堂から回答のうち、学習支援活動を行っている子ども食堂は68件(32.9%)であった(図1)。

学習支援活動の内容(図2)は宿題の支援・見守り等の宿題に関する事柄が39件(57.4%)と最も多く、次にそれ以外の自主学習や英会話等の学習25件(36.8%)、学習支援以外の事柄22件(32.4%)であった。

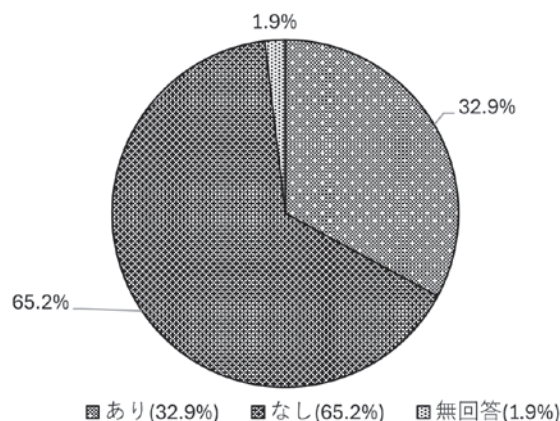


図1 大阪府一部地域の子ども食堂での学習支援活動の有無 n = 207

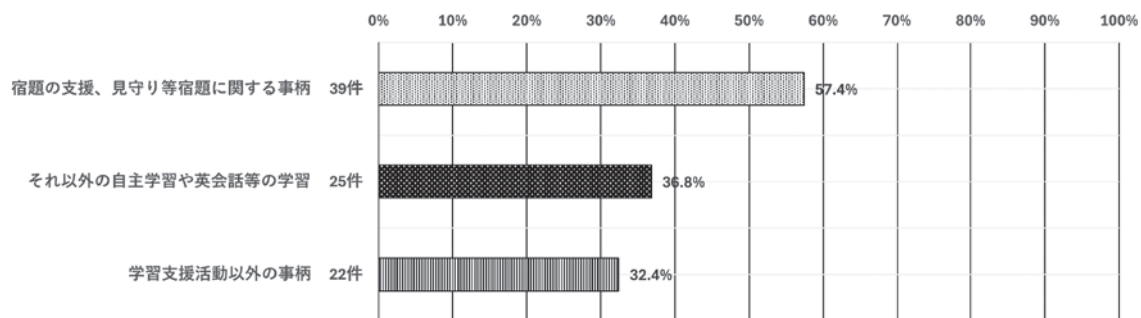


図2 学習支援の内容

開催頻度（図3）は、週1回程度が19件（28%）と最も多く、次に長期休みなどの不定期開催が13件（19%）となっていた。

参加費の有無（図5）は無料55件（80.9%）が最も多く、有料は10件（14.7%）であった。有料の場合100円（食事提供に含まれる場合もあり）から月2000円としていた。

参加を受け入れている学生（図4）は小学生が64件（94.1%）と最も多く、次に中学生は54件（79.4%）、高校生19件（27.9%）であった。

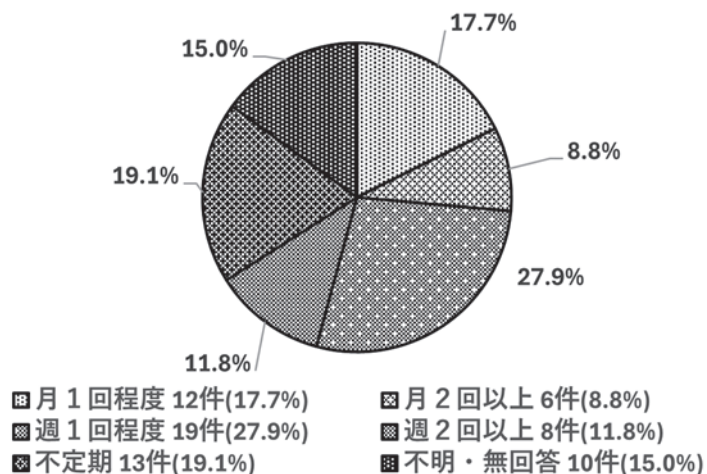


図3 開催頻度

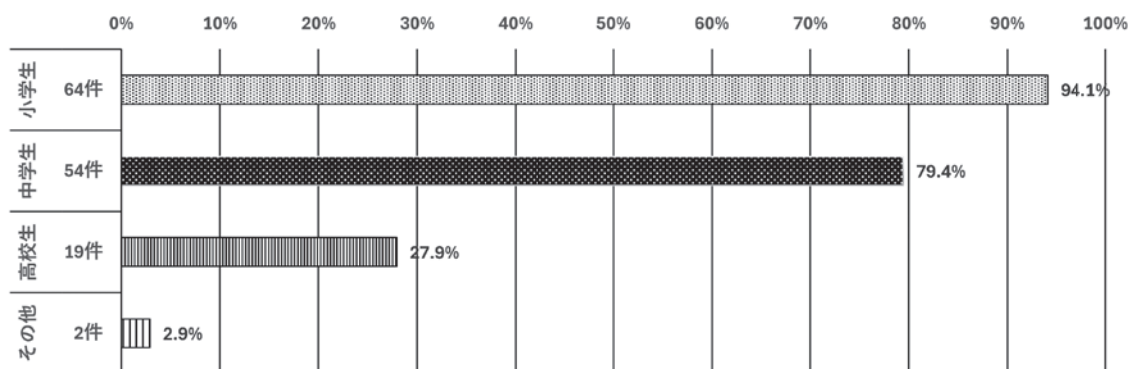


図4 参加を受け入れている学生

学習支援活動と、居場所の提供（図6）、子どもの交流（図7）、遊び場の提供（図8）のサービス提供の有無との関連を調査した。有意差は χ^2 検定で判定した。学習支援活動と居場所の提供では $\chi^2(1)=4.75$, $P=0.037$ と有意な関連がみられ、学習支援の提供が行われている場合、居場所の提供を行っているという回答が多いことが示された。一方、学習支援の提供が行われている場合、子どもの交流を行っているという回答は多かったが、統計的に有意ではなかった（ $\chi^2(1)=3.69$, $P=0.065$ ）。学習支援の提供が行われている場合も遊び場の提供を行っているという回答が多かったが、統計的に有意な関連は示されなかった（ $\chi^2(1)=3.36$, $P=0.088$ ）。

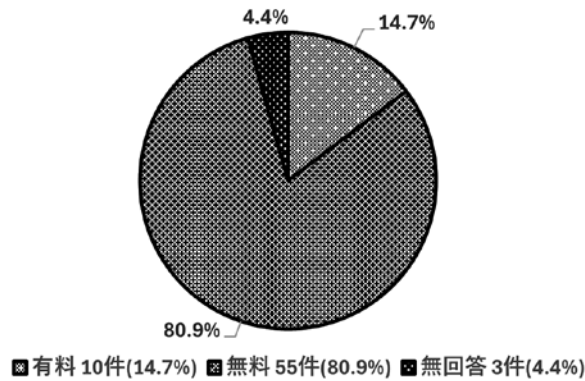


図5 参加費の有無

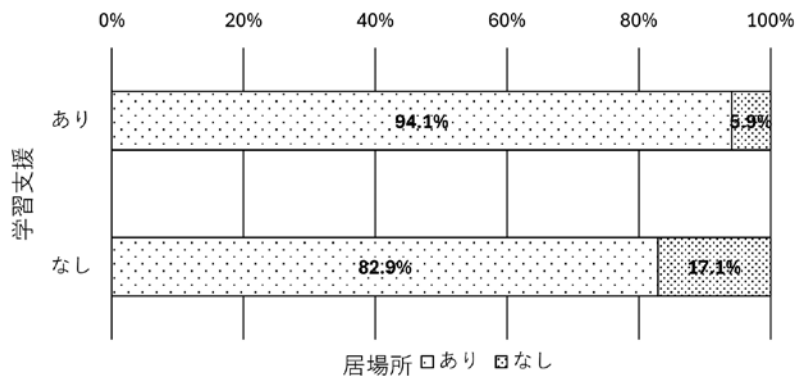


図6 学習支援と居場所の提供状況

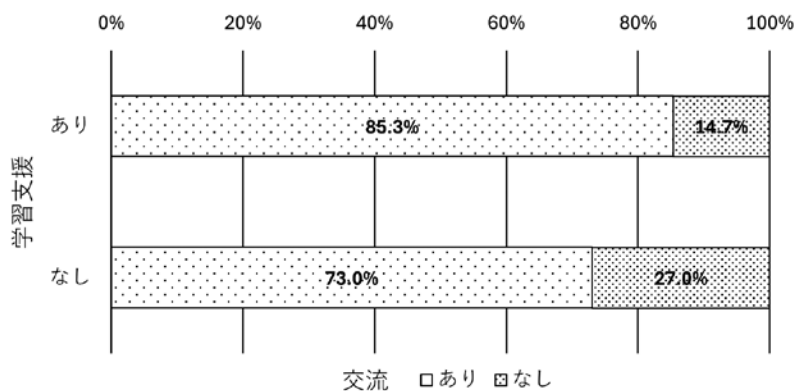


図7 学習支援と子どもの交流の提供状況

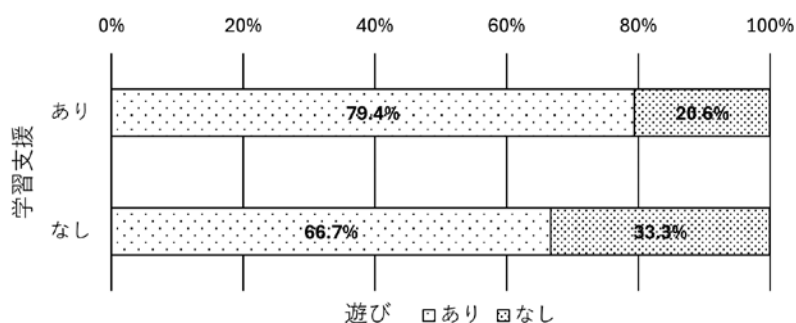


図8 学習支援と遊び場の提供状況

6.3. 考察

本調査の結果、「子ども食堂」において学習支援を提供しているのは、大阪府内において36.8%であった。これらの子ども食堂では、子どもの交流や遊び場の提供よりも学習支援が「居場所」の一環として提供されていることが示された。これは、「子供の貧困に対する大綱」（内閣府 2019）^[14]で、生活困窮者世帯、ひとり親家庭に対し、学習支援や食事の提供など、「学習」と「居場所」の両立が可能な支援が求められていることも反映しているのではないかと考える。

対象者の受け入れ状況については、小学生が64件（94.1%）と高い割合であり、学習支援の内容も宿題のサポートに限定されていた。成績の向上を意識して学習支援が行われているのかは不明であるが、中学生を対象にした「学習」による高校進学よりも、小学生を中心とした「居場所」の提供の目的に主眼が置かれているのではないかと推察される。

本調査は大阪府内の「子ども食堂」を対象とした調査であり、他の都道府県での状況と同一であるとはいえない。また、回答率が36.8%であり、回答が得られていない「子ども食堂」における状況は不明である。むすびえ（2024）^[25]の第2回全国子ども食堂実態調査の結果では、食事提供以外のサービスとしての学習支援の提供をしている子ども食堂は1483件のうち46.5%であった。学習支援が子ども食堂の活動目的としているところも32.7%あり、地域による差やサービス提供の目的の違いについてもさらに詳細に検討する必要がある。

7. まとめ

1980年代から始まった学習支援の実践では、成績不振の中学生に対する高校進学という明確な目的が持たれた「学習」の支援に特化した実践であり、「居場所」の支援はなかった。2000年代に入り貧困の再生産、貧困の連鎖が徐々に社会問題として顕在化するようになった流れを受け、政策として学習支援活動、居場所づくりが開始されていったが、「学習」、「居場所」両者の目的を持った実践において十分な定義づけ、位置づけが行われていなかったという指摘がある（松村 2016, 西中 2014）^{[11][13]}。2000年代後半に入り、「学習」のみが目的であった学習支援活動において「居場所」の目的が組み込まれた実践が登場し、2010年代に入り、政策としてはまだ「学習」に重きを置いたものであったが、2019年に改正された「子供の貧困に関する大綱」において政策面で明確に学習支援活動の目的として「学習」のみではなく「居場所」としての目的が付与されるようになった。今回の調査対象である大阪府内の子ども食堂では、「居場所」としての役割を「学習支援」が担っている傾向が示されたかもしれない。

しかし、「学習」と、「居場所」という役割は本来交わらず（田谷 2012）^[16]、学習支援活動にそぐわない子どもが排除されてしまうという指摘がされており（成澤 2018）^[17]、「学習」と「居場所」の両立がどのような条件において可能であるのか検討する必要がある。

また、「居場所」という概念も様々な側面を持ち、実践によってどのような「居場所」が子どもたちにとって望ましいのか判断することは困難であり、居場所のあり方も多様になりつつあることに留意しなければならない。

謝辞

本研究は、2024～2025年度なにわ大阪研究センター公募研究班において、研究課題「大阪府下における「子ども支援」サービスの調査とガイド作成」として研究費を受け、その成果を公表するものである。

本研究では、大阪府から多大なご協力を賜りました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

引用文献

- [1] 「生活困窮者自立支援法等に基づく各事業の令和2年度事業実績調査」厚生労働省（2020） <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000092189.html>（2025/7/28閲覧）
- [2] 「子どもの貧困 貧困の連鎖と学習支援」宮武正明（2014） みらい（2025/07/31閲覧）
- [3] 「学習支援の目的としての「居場所」——生活困窮世帯の中学生を対象とした学習支援に関する研究レビューを通して——」船橋理仁（2022） <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000092189.html>（2025/07/28閲覧）
- [4] 「学校不適応対策調査研究協力者会議「登校拒否（不登校）問題について——児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して」」文部科学省（1992）（2025/07/28閲覧）
- [5] 「第2回社会保障審議会生活保護基準部会 資料3「生活保護基準の体系等について」」厚生労働省（2011） <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001d2yo.html>（2025/07/28閲覧）
- [6] 「子どもの居場所づくり新プラン」文部科学省（2004） https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/03120801/002.pdf（2025/07/28閲覧）
- [7] 「人が育ち合う「場づくり実践」の可能性と必要性：コミュニティハウス冬月荘の学習会の検討」日置真世（2009） <https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/38709>（2025/07/29閲覧）
- [8] 「生活保護受給者の社会的な居場所づくりと新しい公共に関する研究会報告書」厚生労働省（2010） https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-syakai_141274.html（2025/07/29閲覧）
- [9] 「生活保護受給世帯・就学援助利用世帯・ひとり親家庭の子どもへの学習支援：札幌市における2つの事業の意義と課題」高嶋真之、王婷、井川賢司、武田麻依、飛田岳、福田耀介、眞鍋優志、安江厚貴、篠原岳司（2016） <https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/62609>（2025/07/29閲覧）
- [10] 「子供の貧困対策に関する大綱～全ての子供たちが夢と希望を持って成長していける社会の実現を目指して～ 資料3-2」内閣府（2013） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1352204_3_2.pdf（2025/07/29閲覧）
- [11] 「貧困世帯の子どもの学習支援事業の成り立ちと福祉・教育政策上の位置づけの変化——行政審議、国会審理および新聞報道から——」松村智史（2016） https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssw/57/2/57_43/_article/-char/ja（2025/07/29閲覧）
- [12] 「教育機会を保障する政策の機能分析——学習支援費の創設の議論から」荒牧孝次（2015） https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssw/56/1/56_KJ00010039175/_article/-char/ja/（2025/07/30閲覧）

- [13] 「心理学的観点及び学校教育の観点から検討した小学生の居場所感：小学生の居場所感の構造と学年差および性差の検討」西中華子（2014） https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjdp/25/4/25_466/_article/-char/ja/（2025/07/30閲覧）
- [14] 「子供の貧困対策に関する大綱～日本の将来を担う子供たちを誰一人取り残すことがない社会に向けて～資料4-3」内閣府（2019） https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/834d4ee3-212d-4f35-ae6a-6b795ebc913a/26e5c8a9/20230522_councils_shingikai_kihon-seisaku_JapZTAT7_10.pdf（2025/07/30閲覧）
- [15] 「居場所としての学習支援事業の意味——金沢市「子どもの学習支援事業」に対する考察から——」森川治、神崎淳子（2020） <https://kanazawau.repo.nii.ac.jp/records/50277>（2025/07/31閲覧）
- [16] 「生活保護・生活困難世帯の子どもの学習支援——千葉県A市における3年間の実践から」「帝京平成大学紀要第23巻第1号」田谷幸子（2012） https://thu.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=1736485449744（2025/07/31閲覧）
- [17] 「学習と居場所のディレンマ：非営利学習支援団体からみえる子どもの貧困対策の限界」成澤雅寛（2018） https://www.jstage.jst.go.jp/article/eds/103/0/103_5/_article/-char/ja/（2025/07/31閲覧）
- [18] 「生活困窮世帯を対象とした学習支援における「学習」と「居場所」の様相——X市に着目して——」竹井沙織、小長井昌子、御代田桜子（2019） https://nagoya.repo.nii.ac.jp/record/27517/files/kiyou65_2_06.pdf（2025/07/31閲覧）
- [19] 「居場所を考える」藤竹暁編「現代人の居場所（現代のエスプリ別冊生活文化シリーズ3）」至文堂藤竹暁（2000）（2025/07/20閲覧）
- [20] 「居場所がないということ」「居場所の喪失これからの居場所」学分社 太田明（2015）（2025/07/23閲覧）
- [21] 「子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集～地域との連携で食育の環が広がっています～」農林水産省(2018) <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kodomosyokudo-33.pdf>（2025/11/21閲覧）
- [22] 「2024年度確定値 こども食堂全国箇所数調査結果を発表」認定NPO法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ（2025） <https://musubie.org/news/uncategorized/11208>（2025/11/24閲覧）
- [23] 「居場所概念の再検討——子ども食堂における関与観察をとおして——」尾添侑太（2019） https://www.jstage.jst.go.jp/article/soshioroji/64/2/64_39/_article/-char/ja/（2025/07/31 閲覧）
- [24] 「大阪府内における「子ども支援」サービスの調査とガイド作成」「関西大学なにわ大阪研究 第8号 印刷中」廣川空美、菊池美奈子、植田紀美子、元吉忠寛、近藤誠司、高鳥毛敏雄、大井美紀、真弓昂（2026）
- [25] 「第2回全国こども食堂実態調査報告書」認定NPO法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ（2024） https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2024/06/Report_Jittai_Chousa.pdf（2025/12/7閲覧）

（まゆみ すばる 関西大学大学院社会安全研究科博士課程前期課程1年）

（ひろかわ くうみ 関西大学社会安全学部教授）

（きくち みなこ 梅花女子大学看護保健学部教授）

（おおい みき 高知学園短期大学幼児保育学科非常勤講師）

（うえだ きみこ 関西大学人間健康学部教授）

（もとよし ただひろ 関西大学社会安全学部教授）

（こんどう せいじ 関西大学社会安全学部教授）

（たかとりげ としお 関西大学社会安全学部教授）

大阪にカジノが来たら、依存症の人は増える？

——パチンコのデータ分析からの含意——*

兼 森 宏 太[†] 座 主 祥 伸[‡]

要 旨：2025年に開催された大阪・関西万博の会場である大阪・夢洲では、万博閉幕後の跡地利用として統合型リゾート（IR）の整備が計画されており、日本で初めてカジノが設置される予定である。一方で、カジノ導入に伴う治安悪化やギャンブル依存症患者の増加といった社会的影響に対する懸念は根強く、特にギャンブル依存症人口が増加するか否かは重要な政策的・学術的課題となっている。しかし、日本は既にパチンコ・パチスロという大規模なギャンブル市場を有しており、カジノ導入が新たなギャンブル参加を生むのか、それとも既存のギャンブル行動の代替にとどまるのかは必ずしも自明ではない。本稿では、日本における代表的なギャンブルであるパチンコに着目し、その需要が所得水準とどのような関係にあるかを実証的に分析する。具体的には、JGSS-2002の調査データを用い、所得とパチンコ利用行動の関係について、内生性を考慮した操作変数法による分析を行った。その結果、パチンコは所得の増加に伴って需要が減少する劣等財であることが確認された。すなわち、所得の低い個人ほどパチンコをプレーする傾向が強く、所得の高い個人ほどパチンコを利用していないことが明らかとなった。この結果は、カジノ導入後も所得の低い層がパチンコからカジノへ移行する可能性は低く、主として所得の高い層が新たにカジノを利用する可能性が高いことを示唆している。以上より、本稿の分析からは、カジノ導入がギャンブル依存症人口を大幅に増加させる可能性は限定的であると考えられる。

キーワード：ギャンブル、劣等財、操作変数法

* 本研究は、2024年度関西大学研修員研修費、MEXT 科研費（JP25K04718、JP23K25461）の助成を受けている。本稿の分析にあたり、JGSS-2002のデータを利用した。二次分析に当たり、JGSS データダウンロードシステムで個票データの提供を受けた。提供に感謝する。日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、大阪商業大学の支援を得て実施している研究プロジェクトである。JGSS-2002は、学術フロンティア推進拠点の助成を受け、東京大学社会科学研究所と共同で実施した（研究代表：谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事：佐藤博樹・岩井紀子、事務局長：大澤美苗）。

[†] 村田製作所

[‡] corresponding author: 関西大学 経済学部 zasu@kansai-u.ac.jp

1 はじめに

2025年に開催された大阪・関西万博の会場である大阪・夢洲では、万博閉幕後の跡地利用として統合型リゾート（Integrated Resort: IR）の整備が計画されており、その中には日本で初めてのカジノの設置が含まれている。一方で、カジノ導入を伴うIR整備に対しては、治安の悪化やギャンブル依存症患者の増加といった社会的影響を懸念する声が根強く、新聞報道をはじめとするメディアにおいても繰り返し指摘されてきた^{*1}。とりわけ、ギャンブル依存症人口が増加するか否かは、政策的にも学術的にも重要な検討課題である^{*2}。しかし、日本は既にパチンコ・パチスロ（以下、パチンコと呼ぶ）といった巨大なギャンブル関連市場を有しており、日常的に多くの人々が金銭を伴う遊技に接しているという特徴を持つ。このような状況下において、カジノという新たなギャンブル形態の導入が、ギャンブル依存症人口の「純増」をもたらすのか、それとも既存のギャンブル行動の「代替」ととどまるのかは必ずしも自明ではない。そこで本稿では、日本における代表的なギャンブル関連市場であるパチンコに着目し、その利用行動に関するデータ分析を通じて、カジノ導入がギャンブル依存症人口の増加につながるか否かについて、間接的ではあるが考察を試みる。

一方で、パチンコはカジノと同様に金銭を伴うギャンブルであり、経済学的にはカジノの代替財である。このため、カジノの導入によってパチンコ利用者がカジノへと移行し、パチンコの利用が減少するというシナリオが考えられる。他方で、カジノが導入されたとしても、距離的・金銭的制約や嗜好の違いなどからカジノを利用せず、従来どおりパチンコの利用頻度を維持する人々が存在する可能性も否定できない。とりわけ、パチンコが所得の増加に伴って需要が減少する「劣等財」である場合には、所得の低い個人はカジノを利用せずパチンコを継続するという行動が考えられる。反対に、パチンコが所得の増加に伴って需要が増加する「正常財」である場合には、現時点でパチンコをしていない人であってもカジノが導入されることでカジノでの新たなギャンブルを始める可能性が想定される。したがって、パチンコが正常財であるのか、あるいは劣等財であるのかを実証的に明らかにすることは、学術的意義を有するだけでなく、ギャンブル対策や近い将来導入されるカジノへの政策対応を検討する上でも重要な示唆を与える。本稿では、JGSS-2002の調査データ内にある、パチンコ利用行動に関するデータを用い、パチンコが正常財であるか劣等財であるかを実証的に検証する。

本稿の分析から得られた主な結果は以下のとおりである。パチンコ利用行動に関するデータ分析の結果、パチンコは所得の増加に伴って需要が減少する「劣等財」であることが確認できた。すなわち、所得の高い個人ほどパチンコをプレーしておらず、所得が低い個人ほどパチンコをプレーし

*1 例えば、日本経済新聞（2023c）、日本経済新聞（2023a）、日本経済新聞（2023b）、朝日新聞（2023）などを参照せよ。

*2 ギャンブル依存症に関して、なにわ大阪研究第5号において、井上（2023）、座主（2023）、多治川（2023）、三島（2023）は、それぞれ医学的、経済学的、法学的視点から考察している。井上（2023）は、脳内報酬系の機能異常によって生じるギャンブル障害についての医学的知見を整理するとともに、心理学的・経済学的にどのような理論が当てはまるかについても考察している。座主（2023）は、上限金利規制と非合法な消費者金融（ヤミ金）の関係についてミクロ経済学のアプローチで分析を行っている。ギャンブル依存症の人が消費者金融の利用者となった場合、上限金利規制の規制強化やヤミ金業者に対する罰則強化は、依存症の消費者に最も負担を与えることを示した。多治川（2023）は、伝統的な法学で考察されていなかったギャンブル依存症の人間像を法学の文脈で検討し、ギャンブル依存症の人に対して現在の法的枠組みの中において、保護することの難しさについて考察している。三島（2023）は、「ギャンブル等依存症対策基本法」等のIR関連法案の展開について考察している。

ていることが分かった。この結果は、所得の高い個人はより高価な代替的ギャンブルであるカジノを利用する可能性が相対的に高い一方で、所得の低い個人はカジノを利用せず、引き続きパチンコを利用する傾向にあることを示唆している。利用したデータセットからの分析からは、カジノの導入が新たに低所得層を中心としたギャンブル参加を誘発し、ギャンブル依存症人口を大きく増加させる可能性は限定的であると指摘できる。

本稿の構成は、以下の通りである。第2節では、関連する研究の紹介を行う。第3節では、データの説明と記述統計について説明する。第4節では、回帰分析や操作変数法による分析結果について説明する。第5節において、順序ロジットモデルにより、前節の分析の頑健性を確認する。第6節では、本稿での分析を踏まえたカジノの利用について検討する。最後に、第7節において、簡潔にまとめを行う。

2 関連する研究

本稿では、パチンコが劣等財としての性質を有するか否かについて、計量経済学的手法を用いて実証的に検証する。パチンコに関する実証分析の先駆的研究としては、谷岡（2005）が挙げられる。同研究は、JGSS-2002の個票データを用い、パチンコ利用者の社会経済的特徴を分析している。谷岡（2005）によれば、パチンコの利用頻度が高い者の特徴として、男性では若年・未婚・高卒程度で中程度の所得を有する層が多く、女性では若年・未婚で高卒未満または短大・大学中退レベルかつ平均より低い所得を有する層が多いことが報告されている。本稿では、谷岡（2005）と同様にJGSS-2002の調査データを用いるが、特にパチンコの利用頻度と所得との関係に焦点を当て、パチンコが劣等財であるか否かを明示的に検証する点に特徴がある。具体的には、所得とパチンコ利用頻度の間に存在しうる内生性の問題を考慮し、操作変数法を用いた実証分析を行う。

パチンコやカジノの利用に関連する問題として、ギャンブル依存症はわが国において深刻な社会問題となっている。これに関して、独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター（2024）は全国の住民を対象としたアンケート調査（調査（A））を実施し、「ギャンブル等依存が疑われる者」において、過去1年間で最も多くの金額を費やしたギャンブルとして、パチンコおよびパチスロが最も多いことを報告している。さらに同報告書は、依存の問題により相談機関を利用した者を対象としたアンケート調査（調査（B））も行っており、当事者自身が問題として認識しているギャンブルの種類としては、パチスロ、パチンコ、競馬の順に多いことが示されている。これら二つの調査結果から、わが国においてパチンコおよびパチスロは、ギャンブル依存症患者を生み出している主要なギャンブルであることが分かる。以上を踏まえ、本稿では、社会的問題との関連が特に大きいわが国の主要なギャンブルであるパチンコおよびパチスロに焦点を当てて分析を行う。

本稿で考察するパチンコの劣等財仮説に関して、パチンコが劣等財であるとすれば、なぜとりわけ所得の低い人々がパチンコを継続的にプレーするのかという疑問が生じる。この点について、近年の行動経済学の発展は有力な説明仮説を提示しており、その一つがサンクコスト・バイアスである。サンクコスト（sunk cost）とは、すでに支払われた結果、その後回収不可能な費用を指す。例えば、映画館に入場した後に映画がつまらないと感じた場合でも、支払ったチケット代は返金されないため、当該費用はサンクコストとなる^{*3}。標準的な経済学の観点からは、映画が駄作であると判

*3 購入したが、入場前であるため、チケット代が返金される場合であれば、そのチケットの費用はサンクコスト

明した時点でサックコストを考慮せず（チケット代はサックしているため）、退場して他の有益な活動に時間を割くことが合理的である。しかし実際には、「支払った代金もったいない」という心理から、効用を生まない行動を継続してしまうことが多く、これをサックコスト・バイアス（あるいはサックコスト効果、サックコストの誤謬）と呼ぶ。Kovács (2024) は、金銭的サックコストに加え、時間や労力といった行動的サックコストも含めた体系的なレビューを行い、人々が投入済みの費用を合理的に切り離せない状況を整理している。本稿との関連で言えば、高所得者はギャンブルによる損失をサックコストとして比較的容易に割り切ることができる一方、低所得者は一度の損失をサックできず、「ここでやめれば支払ったお金が無駄になる」というサックコスト・バイアスが強く働くことで、さらなるギャンブル行動に向かいやすい可能性が考えられる。

所得の低い人々がギャンブル行動に向かいやすい理由としては、サックコスト・バイアスに加えて、希少性バイアス (scarcity bias) も重要な仮説として挙げられる。希少性バイアスとは、金銭や時間、社会的資本といったリソースが「不足している」と知覚される状況において、当該リソースやそれを補完し得る対象に対する注意や価値評価が過剰に高まり、意思決定が短期的かつ非合理的になりやすいという心理的傾向を指す。Mullainathan and Shafir (2013) は、金銭的制約や時間的余裕の欠如といった希少性が、人々の認知資源を消耗させ、長期的な視点に基づく合理的判断を困難にすることを、豊富な事例とともに示している。さらに、Mani et al. (2013) は、貧困が単なる所得水準の問題にとどまらず、注意力や問題解決能力といった認知機能そのものに影響を及ぼすことを、ラボ実験およびフィールド実験の双方から実証的に明らかにしている。これらの知見を踏まえると、所得制約が強いと認知している個人ほど、短期的な金銭獲得への期待が過大に評価され、期待値の低いギャンブル行動に引き寄せられやすくなる可能性が考えられる。本稿では、所得水準とギャンブル行動との関係を明らかにすることを目的として、日本における代表的なギャンブルであるパチンコの需要を対象に実証的検討を行う。

3 データと仮説

本節では、分析で利用するアンケート調査について、本稿に利用するデータを中心に概説する。加えて、本稿のテーマであるパチンコは劣等財であるかについての仮説を説明する。

3.1 アンケートの内容

本稿で使用する JGSS-2002 のアンケート調査結果は、大阪商業大学・比較地域研究所と東京大学・社会科学研究所が共同して 2002 年 10～11 月に実施した調査（日本版 General Social Surveys）である*⁴。アンケートに関する変数が 600 以上存在し、サンプル数は日本全国より 341 地点 5000 人（年齢 20 歳以上 89 歳未満）、有効回答数は 2953 票である。本稿では、このアンケート調査のパチンコ・パチスロ（以下、単にパチンコと表記する）に関する質問項目と、いくつかの個人属性に関する変数を用いる。

ではない。

*⁴ JGSS について、詳しくは、大阪商業大学 JGSS 研究センターのホームページ (<https://jgss.daishodai.ac.jp>) を参照せよ。

3.2 用いる変数

JGSS-2002では、パチンコの利用について、Q22「あなたは過去1年間に、以下の事項を何回くらい行いましたか。」という質問項目がある。その選択肢は、「やらなかった」「1年に数回」「月に1回程度」「週に1回程度」「週に2～3回程度」の5つである。このパチンコの利用頻度に関する変数を、本稿の分析における被説明変数として利用する。

加えて、回答者に関する変数として、回答者本人の性別、所得、学歴（最終学校）、年齢を使用する。基のサンプル数は2953であったが、パチンコの利用頻度と所得と学歴^{*5}を報告した人に限定したサンプル数は1526である。このうち、男性は834人であり、女性は692である。男性の割合は、約55%である。年齢は、最小が20歳で、最高が75歳、平均は44.69歳である。本人の所得（年収）は、「なし」、「70万円未満」、「70万円以上100万円未満」、……、「150万円以上250万円未満」、……、「1000万円以上1200万円未満」、……「1850万円以上2300万円未満」、「2300万円以上」と、19の階層となっている。「なし」が1、「2300万円以上」が19とするときの、サンプル平均が7.13であるので、このサンプルにおける平均的な本人所得の階層は「250万円以上350万円未満」と「350万円以上450万円未満」の間である。学歴（最終学校）は、「新制中学校」（以下、新制を省略。以下も同じ。）から「高校」、「短大・高専」、「大学」、「大学院」と5つのカテゴリーとなる。中学校を1、大学院を5とするときの平均が2.48であるので、サンプルの平均的な学歴は「高校」と「短大・高専」の間である。

3.3 パチンコは、どのような人がプレーするのか

ここでは、サンプル内においてどのような人がどの程度パチンコをするのかについて確認する。表1では、過去1年間にどの程度パチンコをしたかと、その頻度に対応する人数、割合が示されている。ほとんどの人（8割弱の人）は、パチンコをしておらず、月1回以上プレーする人は、1割強（13.4%）程度である。表2では、男女別で、パチンコの利用頻度の割合を示している。女性の9割はパチンコをしておらず、一方、男性の3割強が過去1年間でパチンコをしたことがあると報告している。表3では年代ごとの、表4では学歴ごとの、パチンコの利用頻度の割合を記述している。年代ごとの比較からは、20代・30代は他の年代より相対的にパチンコをしていることが分かる。特に20代では、月に1回以上パチンコをしている人は、2割弱程度である。学歴別のパチンコの利用頻度は、短大・高専や大学院を最終学校にしている人は、相対的にパチンコを「やらなかった」と報告している割合は高いが、それ以外については、特段学歴間の違いは小さいように見える。後の分析では、この学歴とパチンコの利用頻度との相関が小さいことを利用して、学歴を操作変数として用いる分析を行う。このサンプルにおいて、大学院以外では、パチンコをプレーする人で学歴間の違いはあまりなさそうである。所得階層ごとに見たパチンコの利用頻度（表5）では、パチンコをやらなかった人の割合が高い層は、所得が低い層と高い層のように見える。パチンコをしたことがある人の割合は所得階層に関して、逆U字型の傾向があるのかもしれない。以上のパチンコの利用頻度に関する記述統計からパチンコをプレーする代表的な人は、20代男性で大学院を最終学校とせず、所得はほどほどある人という人物像が想像できる^{*6}。

^{*5} ただし、旧制学校が最終学校の人は排除した。

^{*6} JGSS-2002のデータセット内における、より詳細なパチンコ利用者の人物像については、谷岡（2005）を参照せよ。

表1 パチンコ利用頻度ごとのサンプル数と割合

パチンコの利用頻度（過去1年間）	サンプル数（人）	割合
やらなかった	1202	0.7877
年に数回	119	0.0780
月に1回程度	75	0.0491
週に1回程度	96	0.0629
週に2～3回以上	34	0.0223

表2 性別ごとのパチンコ利用頻度の割合

性別	やらなかった	年に数回	月に1回程度	週に1回程度	週に2～3回以上
女性	0.9032	0.0491	0.0188	0.0159	0.0130
男性	0.6918	0.1019	0.0743	0.1019	0.0300

表3 年代別に見たパチンコ利用頻度の割合

年代	やらなかった	年に数回	月に1回程度	週に1回程度	週に2～3回以上
20代	0.7114	0.1057	0.0894	0.0610	0.0325
30代	0.7466	0.1096	0.0445	0.0753	0.0240
40代	0.8038	0.0736	0.0354	0.0736	0.0136
50代	0.8075	0.0563	0.0469	0.0681	0.0211
60代	0.8649	0.0541	0.0378	0.0162	0.0270
70代以上	1.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000

3.4 仮説

本稿では、パチンコが劣等財であるかどうかの確認を行う。劣等財（inferior goods）は、下級財とも呼ばれることがあるが、所得が上昇したときに需要が減少する財・サービスの経済学の用語である。パチンコは、パチンコをプレーするというサービスであるので、「本稿では劣等サービスか否かを確認する」と記述するべきかもしれないが、パチンコのようなサービスを対象する場合も、簡便な記述のため本稿では単に劣等財と呼ぶことにする。なお、所得が上昇した際に需要が増加する財・サービスのことを正常財（normal goods）と呼ぶ^{*7}。ある財が正常財であるか、劣等財であるかは、その人の選好に従う。例えば、著者の1人（座主）はコーヒーを学生時代から好きであるが、学生時代はインスタントのコーヒーを飲む機会が多かったが、就職した後（すなわち、所得が上昇することで）、豆から挽くコーヒーを飲む機会が多くなった。これは、座主にとっては、インスタントのコーヒーは劣等財であり、豆から挽くコーヒーは正常財であることを示している。別の例として、ある人が職場まで（所得が低い）新入社員時代は自転車で通勤していたが、（所得が上昇した）入社数年後、オートバイで通勤するようになったとしよう。この人にとっては、通勤手段として、自転車の利用は劣等財であり、オートバイ利用は正常財であることを示している。

著者の1人（兼森）は、「パチンコ屋で高級車を見たことはほとんどない」という経験から、「お

^{*7} 正常財、劣等財については、標準的なミクロ経済学の教科書・テキストブックを参照せよ。

金持ちはパチンコをすることがなさそう」という感想を持ってきた。パチンコのような趣味やレジャーは、一般的に、お金に余裕がないとしないように考えられる。これは、多くのレジャーが正常財であると考えられることを意味しているが、パチンコは例外的なのだろうか。本稿では、兼森の素朴な仮説を、比較的大規模に調査されたアンケートのデータ（JGSS-2002）を用いて、計量経済学による分析を行い、パチンコが劣等財であるかを確認する。

表4 学歴階層別に見たパチンコ利用頻度の割合

学歴階層	やらなかった	年に数回	月に1回程度	週に1回程度	週に2～3回以上
中学校	0.7679	0.0670	0.0625	0.0625	0.0402
高校	0.7714	0.0884	0.0435	0.0721	0.0245
短大・高専	0.8418	0.0765	0.0510	0.0255	0.0051
大学	0.7982	0.0643	0.0497	0.0702	0.0175
大学院	0.8621	0.0690	0.0690	0.0000	0.0000

表5 所得帯別に見たパチンコ利用頻度の割合

所得帯	やらなかった	年に数回	月に1回程度	週に1回程度	週に2～3回以上
なし	0.8889	0.0000	0.0741	0.0370	0.0000
70万円未満	0.9134	0.0472	0.0157	0.0079	0.0157
70～100万円未満	0.9119	0.0377	0.0252	0.0126	0.0126
100～130万円未満	0.8431	0.0686	0.0294	0.0294	0.0294
130～150万円未満	0.8596	0.0351	0.0351	0.0351	0.0351
150～250万円未満	0.7927	0.0984	0.0570	0.0415	0.0104
250～350万円未満	0.7249	0.0794	0.0688	0.0899	0.0370
350～450万円未満	0.6786	0.1071	0.0714	0.1012	0.0417
450～550万円未満	0.6444	0.1481	0.0667	0.1185	0.0222
550～650万円未満	0.7745	0.0686	0.0490	0.0784	0.0294
650～750万円未満	0.7674	0.0698	0.0581	0.1047	0.0000
750～850万円未満	0.7544	0.1228	0.0351	0.0526	0.0351
850～1,000万円未満	0.8491	0.0755	0.0189	0.0566	0.0000
1,000～1,200万円未満	0.8205	0.0513	0.0513	0.0513	0.0256
1,200～1,400万円未満	0.8125	0.0000	0.0625	0.1250	0.0000
1,400～1,600万円未満	1.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
1,600～1,850万円未満	0.6000	0.0000	0.2000	0.2000	0.0000
1,850～2,300万円未満	0.5000	0.0000	0.0000	0.5000	0.0000
2,300万円以上	1.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000

4 分析

本節では、前節で説明したJGSS-2002の調査データを用いて、パチンコが劣等財であるかの検証を行う。まず回帰分析を行い、次に説明変数の内生性を考慮した操作変数法を用いる。パチンコの利用頻度の変数を被説明変数とし、説明変数として本人の所得（年収）を用いて、上記の仮説検証

表6 回帰分析結果

従属変数：パチンコの利用頻度	
income	0.0074 (0.0088)
male	0.5124*** (0.0583)
age	-0.0099*** (0.0020)
school	-0.1279*** (0.0261)
定数項	0.8806*** (0.1233)
観測数	1526
残差標準誤差	0.9551 (df = 1521)
決定係数 R^2	0.082
調整済み R^2	0.080
F 統計量	34.18 (df = 4, 1521), $p < 2.2 \times 10^{-16}$

注：標準誤差を括弧内に記載。

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

を行う。次の回帰分析では、コントロール変数として、本人の年齢、性別、学歴（最終学校）の変数を使用する（表6）。

この回帰分析より、所得（income）はパチンコの利用頻度に与える効果は正であるが、統計的に有意ではないことが分かる。女性と比べて、男性（male）の方が有意にパチンコの利用頻度を増やすことが分かる。実際、パチンコをしたことがある人の多くが男性であるという先の考察に一致している。年齢（age）や学歴（school）は、パチンコの利用頻度と有意に負の関係になっている。年齢が高いほど、学歴が高いほど、パチンコをプレーしない傾向にあることを示している。ただし、この分析には「内生性の問題」を考慮していない。

4.1 内生性の問題と操作変数法

先の回帰分析からは、所得とパチンコの利用頻度に統計的に有意な結果を得ることはできなかった。たとえパチンコの利用頻度と低い所得の関係に正の関係があるからといても、「パチンコをした結果、所得が低い」のか、あるいは、「所得が低い結果、パチンコをしている」のか、どちらがもっともらしいのかははっきりしない。理論的には、どちらの場合もあり得る。内生性の問題があり、説明変数（ここでは所得）と誤差項が相関している場合、「誤差項と説明変数の独立性」の仮定が満たされず、通常回帰分析では、推定された係数がバイアスを持ち、真の因果効果を正しく評価することはできない^{*8}。内生性の問題の解決のため、本稿では操作変数法を用いる。操作変数として、被説明変数とは相関しないが、説明変数とは相関する変数が望ましい。表7より、学歴（school）は、所得（income）との相関は大きいですが、パチンコの利用頻度（freq_pachi）との相関は小さい。

^{*8} 「内生性の問題」や次の「操作変数法」については、田中（2015）、Stock and Watson（2020）やWooldridge（2016）等の計量経済学のテキストを参照せよ。

表7 学歴 (school) 変数との相関係数

変数	推定値
freq_pachi	-0.0516
male	0.1564
age	-0.2743
income	0.3288

そこで学歴を操作変数として用い、所得がパチンコの利用頻度に与える影響を考察する。

表8では、回帰分析の結果 (OLS(1)) と操作変数法 (IV(2)) による分析結果を並列している*⁹。学歴 (school) をコントロール変数から除いた回帰分析では、所得 (income) は依然として有意ではないが、(先の回帰分析とは異なり) 負値となっている。これは、所得に内生性の問題があるだけでなく、所得と学歴に相関があるため、先の分析では多重共線性の問題があった可能性がある。内生性の問題を考慮し、操作変数法を用いた結果、所得はパチンコの利用頻度 (freq_pachi) に有意に負の効果を持っていることが観察できる。これは、所得が高いほど、パチンコの利用頻度が低下することを示しており、ここからはパチンコが劣等財であると言える。なお、操作変数法の決定係数 R^2 は負の値をとっているが、Wooldridge (2010) にあるように操作変数法の決定係数 R^2 が負値を取りうるということが記述されている。また、Angrist and Pischke (2009) は因果推定に R^2 は重要ではないことを指摘している。

表8 OLSと操作変数法 (IV) の比較

	従属変数：パチンコの利用頻度 (freq_pachi)	
	OLS (1)	IV (2)
income	-0.007 (0.008)	-0.121*** (0.026)
male	0.523*** (0.059)	0.951*** (0.112)
age	-0.007*** (0.002)	-0.004* (0.002)
定数項	0.514*** (0.099)	0.973*** (0.145)
観測数	1,526	1,526
R^2	0.068	-0.045
調整済み R^2	0.066	-0.047
残差標準誤差	0.962 (df = 1522)	1.019 (df = 1522)
F 統計量	36.99*** (df = 3, 1522)	-

注：標準誤差を括弧内に記載。

*** $p < 0.01$, ** $p < 0.05$, * $p < 0.1$

*⁹ この回帰分析では、操作変数法と変数と合わせるため、学歴の変数 (school) はコントロール変数から除外している。

4.1.1 操作変数法の妥当性

操作変数法による推定が正しく機能しているかについて、ここで使用した操作変数が適切かどうかと、そもそも内生性の問題があるかをここでは確認する。まず、先の分析で用いた学歴が操作変数として適切かどうかについて確認する。表9では、所得を被説明変数として、(操作変数として用いる)学歴を説明変数として、性別、年齢をコントロール変数とした回帰分析の結果が示されている。これより、学歴と所得の関係が有意であることが確認できる。加えて、F値が十分に大きいことから学歴、性別、年齢の係数すべてが同時にゼロである帰無仮説も棄却され、操作変数(学歴)が内生変数(所得)と強い相関を持っていることを確認できる。

表9 OLS 推定結果：被説明変数が所得の場合

変数	推定値	標準誤差	t 値	有意確率
(定数項)	0.7243	0.3588	2.019	0.0437*
school	0.9990	0.0715	13.970	<2e-16***
male	3.4246	0.1453	23.564	<2e-16***
age	0.0460	0.0058	7.895	5.51e-15***
観測数		1,526		
残差標準誤差		2.782 (自由度 = 1522)		
決定係数 R^2		0.3755		
調整済み決定係数		0.3743		
F 値		305.1 (df = 3, 1522), $p < 2.2 \times 10^{-16}$		

注：有意水準を示す記号は、*** $p < 0.01$, ** $p < 0.05$, * $p < 0.1$ 。

次に、説明変数の内生性の有無の確認のために、Durbin-Wu-Hausman 検定を行う^{*10}。その結果が表10である。この検定の帰無仮説は、説明変数に内生性はない、つまり、最小二乗推定量が一致推定量である。p値が十分に小さいことより、帰無仮説は棄却され、内生性が存在することを示している。確かに、操作変数法による推定が必要であることを確認できた。

表10 DWH 検定結果

検定名	自由度 1 (df1)	自由度 2 (df2)	統計量	p 値
Durbin-Wu-Hausman	1	1521	24.05	1.04e-06***

注：*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$ 。

5 頑健性の確認

分析で用いている被説明変数である「パチンコの利用頻度」の変数は、0 (やらなかった)、1 (1年に数回)、……、5 (週に2~3会程度) という、順序変数 (ordered categorical variable) である。したがって、これを連続変数として線形回帰に投入することは、カテゴリー間隔が等しいと

^{*10} 説明変数の内生性の確認のための検定、Durbin-Wu-Hausman 検定については、多くの計量経済学のテキスト、例えば、Wooldridge (2016)、Baum (2006) や Stock and Watson (2020) に加えて、Patrick (2021) も参照。

いう不要な仮定を暗黙に課す可能性があり、推定結果の解釈を誤らせるおそれがある。

この点に対し、順序ロジットモデル (Ordered Logit Model) は、観測されない潜在変数が複数の閾値 (cutpoints) によって区分され、その結果として観測される順序カテゴリーが決定されるといふ枠組みに基づき、順序情報を適切に利用しつつカテゴリー間隔についての強い仮定を置かない標準的手法である (Liu and Agresti (2005))。以上を踏まえ、本節では被説明変数の測定尺度に整合的な推定法として順序ロジットモデルを用いる。

前節と同様に、まず所得の内生性を考慮しないモデルを検討する。推定結果は、表11にある通りである。内生性を考慮しない順序ロジットモデルの推定結果によれば、所得 (income) の推定値は負であるものの、統計的に有意ではない。このことは、所得の変化が被説明変数の水準に体系的な影響を与えているとは言えないことを示している。一方で、性別ダミー (male) の推定値は正でかつ統計的に有意であり、男性は女性に比べてより高いカテゴリーに属する確率が有意に高いことが確認できる。また、年齢 (age) の係数は有意に負であり、年齢が高くなるほど高いカテゴリーに属する確率が低下する傾向にある。以上の結果から、性別および年齢といったコントロール変数については効果が確認される一方、所得については統計的に有意な影響は観察されなかった。したがって、内生性を考慮しない本モデルの推定結果からは、所得の上昇に伴って被説明変数の水準が低下するという関係、すなわちパチンコが劣等財であるとする仮説を支持する証拠は得られない。ただし、所得は観測されない嗜好や行動特性と相関している可能性があり、内生性の問題が存在する場合には、上記の推定結果が歪んでいる可能性を否定できない。次にこの点を考慮した推定を行う。

表11 Ordered Logit Model without Endogeneity Correction

	推定値	標準誤差
income	-0.011	(0.022)
male	1.516***	(0.169)
age	-0.022***	(0.005)

Notes: *** $p < 0.01$, ** $p < 0.05$, * $p < 0.1$.

Cutpoint (threshold) parameters are omitted for brevity.

次に、所得がパチンコの利用頻度と同時決定的に決まる可能性や、観測されない嗜好・行動特性と相関している可能性を考慮し、所得を内生変数として扱う。具体的には、非線形モデルにおける内生性への標準的な対応方法である二段階残差包含法 (two-stage residual inclusion: 以下、2SRI) を用い、所得とパチンコ利用頻度の関係を分析する。2SRI は、線形モデルにおける操作変数法の自然な拡張として位置づけられており、第一段階で内生変数を操作変数および外生的統制変数によって説明し、第二段階の非線形モデルにおいて内生変数と第一段階の残差を同時に説明変数として含める点に特徴がある (Terza et al., 2008)。

2SRI 法による順序ロジット推定の結果は、表12にある。第一段階の残差 (first-stage residual) の係数は正で統計的に有意であり、所得変数が内生的であることを確認できる。この結果は、内生性を考慮しないモデルにおいて所得の効果が適切に識別されていなかった可能性を示している。内生性を調整した上での所得の係数は負であり、かつ統計的に有意である。これは、所得が上昇するほど、パチンコの利用頻度が高いカテゴリーに属する確率が低下することを意味している。すなわち、内生性を考慮した順序ロジットモデルにおいても、所得の上昇がパチンコ利用を抑制する方向に作用することを確認した。パチンコが劣等財であるとする仮説を支持する結果が得られた。

他のコントロール変数については、前節で示した内生性を考慮しないモデルと同様の結果が得られている。具体的には、男性は女性に比べてパチンコの利用頻度が高いカテゴリーに属する確率が有意に高く、また年齢が高いほど、パチンコの利用頻度が高いカテゴリーに属する確率は低下する傾向が確認された。これらの結果は、性別および年齢がパチンコ利用行動に与える影響が、モデルの推定方法に依存せず安定していることを示している。

以上より、内生性を考慮した順序ロジットモデルにおいても、所得の推定値は負で統計的に有意であり、パチンコが劣等財であることが改めて確認された。

表12 Ordered Logit Model with Endogeneity Correction (2SRI)

	推定値	標準誤差
income	-0.297***	(0.065)
first-stage residual (\hat{v})	0.323***	(0.068)
male	2.596***	(0.285)
age	-0.015***	(0.005)

Notes: *** $p < 0.01$, ** $p < 0.05$, * $p < 0.1$.

Cutpoint (threshold) parameters are omitted for brevity.

The first-stage residual is obtained from a linear regression of income on the instrument and controls.

6 カジノや依存症の患者との関連での検討

以上、前節までに分析において、所得が低い人ほどパチンコの利用頻度が高い関係が明らかになった。すなわち、少なくともこのデータ (JGSS-2002) において、パチンコは劣等財であることを確認した。本節では、この本稿での結果を基に、大阪夢洲に開業予定であるカジノができることによって、ギャンブル依存症の患者が増加するかについて議論する。

本稿の分析から、所得が低い人は既にパチンコというギャンブルをしていることが分かった。そのためカジノができたとしても、この層が追加でギャンブルに「ハマる」可能性は小さいと言える。一方で、所得の低い人のなかには、パチンコ屋には行かないが、カジノには行く人もいるかもしれない。ギャンブルとして、パチンコには興味がないが、カジノには興味がある人も一定数いるかもしれない。ただし、「日本人等がカジノ施設に入るときには6,000円の入場料」(大阪府 HP^{*11}) であることも考慮すると、カジノでプレーするハードルは高い。加えて、所得が高い人で、かつ、ギャンブルが好きな人が、カジノに行きギャンブルを新たに始める可能性がある。本稿の分析からは、所得が高くかつギャンブルが好きな人は、パチンコではなく、他のギャンブル (例えば、競馬等) を利用している可能性が考えられる。そのような人は、カジノの利用を始めるかもしれないし、先のカジノの「6,000円の利用料」を考慮すると、カジノではなく変わらず競馬等を利用し続けるかもしれない。もちろん、カジノは、パチンコや競馬等とは異なる内容のギャンブルであり、固有の楽しみもあるだろう。そのため、その固有の楽しみのために、所得が高い人であれ低い人であれ、カジノ利用を始める人もいるかもしれない。以上のように考えると、ギャンブルが好きな人でカジノ

*11 大阪府ホームページ「大阪 IR について」<https://www.pref.osaka.lg.jp/o080010/ir/about.html> (2025年12月1日確認) を参照。

を利用する潜在的な需要は、限られているのではないか。そうであれば、カジノができて依存症の患者が増えることを不安視する必要は少ないのかもしれない。

むしろ日本の場合、既にパチンコや競馬等の巨大なギャンブル市場が存在しているため、カジノの利用によるギャンブル依存症患者の増加を心配するより、既に存在するギャンブル依存症患者への対策を検討しなければならないのではないだろうか。久里浜医療センターがランダムに選ばれた全国の住民を対象にしたアンケートによると、ギャンブル等依存が疑われる者（PGSI 8点以上、過去1年以内^{*12}）は、男性で2.8%、女性0.5%であることが報告されている（独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター（2024））。加えて、上記報告によると、ギャンブル等依存が疑われる者（PGSI 8点以上の者）における過去1年間で最もお金を使ったギャンブルの種類・内訳は、パチンコ（男性43.4%、女性60.9%）、パチスロ（男性24.5%、女性17.4%）、競馬（男性11.3%、女性0%）となっており、パチンコ・パチスロ^{*13}による問題が男女ともに大きいことを確認することができる。データセットが異なるため安易に分析を合わせることは適切ではないが、本稿の分析結果である、所得が低い人ほどパチンコをしている結果と合わせて考えると、所得が低い人ほど、ギャンブル依存症に苦しんでいるかもしれない。

カジノができた後の心配より、既に日本にはパチンコ等が存在し、それらが大きな問題を生み出していることを簡単に見た。スマートフォンが1人1台持つことが当たり前になった現在では、別のギャンブルの問題も生まれ始めている。それは、オンラインカジノである。大阪に開業の準備されているカジノであれば、移動に関わる時間や費用に加えて入場料金も必要になる。一方、オンラインカジノであれば、移動時間もなく、手元のスマートフォンがあれば、自宅のベッドの上からでも容易にカジノサイトにアクセスし、プレーすることができる^{*14}。この容易さ・気軽さは、ギャンブル依存症患者の増加等、ギャンブル関連の被害をもたらす可能性が高い。アルコールへのアクセスの容易さとその関連した被害については、(Sherk et al. (2018)) がメタ分析を行い、アルコールへのアクセスの容易さ（販売時間・販売日、物理的距離）が関連被害を増やすことを確認している。ギャンブルについても、利用の容易さ・店舗密度がギャンブルの参加とギャンブルの問題的利用と正の相関があることが報告されている（Vasiliadis et al. (2013)；Pearce et al. (2008)；Kristiansen and Lund (2022)）。このように考えると、ギャンブル依存症対策は、医療政策としてももちろん必要であることに異論はないが、所得格差やその他の問題を合わせて社会保障政策として包括的に検討・実施する必要があるだろう。

7 おわりに

本稿では、日本における代表的なギャンブルであるパチンコ・パチスロ（以下、パチンコ）に関する調査データを用い、所得とパチンコ需要との関係について実証的に検討した。所得とギャンブル行動の間に存在する内生性の問題を考慮し、操作変数法を用いた分析を行った結果、所得の低

*12 PGSI (Problem Gambling Severity Index) とはギャンブル問題の自記式スクリーニングテストであり、一般住民を対象とした疫学調査で使用するために開発されたテストである（独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター（2024））。

*13 本稿の分析では、まとめてパチンコと記述している。

*14 インターネットを通じたギャンブルへのアクセスに関して、(木戸 (2024)) は公営ギャンブルへのアクセスがオンラインでも可能になったことで、それらギャンブルへの利用が上昇していることを述べている。

い人ほどパチンコをプレーする傾向があることを確認した。この結果は、パチンコが需要面において、劣等財としての性質を有することが明らかになった。パチンコが劣等財であるとするれば、別の見方として、わが国において所得の高い人でかつギャンブル嗜好を有する者は、パチンコ以外のギャンブル、例えば競馬などを選択している可能性が高いと考えられる。さらに、大阪に開業予定のカジノは、パチンコと比べて物理的・金銭的なアクセスが容易ではないことを踏まえると、所得の低い人がパチンコからカジノ利用へと移行する可能性は低く、むしろ所得の高い人を中心に新たな利用が生じると考えられる。以上の点から、本稿の分析結果は、大阪に開業するカジノの国内利用者数は、一般に懸念されているほど大きくはならない可能性があることを示唆している。

もっとも、本稿の分析にはいくつかの限界が存在する。第一に、本稿で用いたデータは2002年時点の調査に基づくものであり、現在パチンコをプレーしている人々の属性やギャンブル行動の傾向とは異なっている可能性がある点には注意が必要である。とりわけ、その後の制度変更や遊技環境の変化、所得分布や嗜好の変化などを考慮すると、本稿の結果をそのまま現在の状況に適用することには慎重であるべきである。したがって、より現時点に近いサンプルデータを用いて同様の分析を行い、本稿と整合的な結果が得られるかを検証することが、今後の重要な課題として残されている。

参考文献

- Angrist, Joshua D. and Jörn-Steffen Pischke, *Mostly Harmless Econometrics: An Empiricist's Companion*, Princeton University Press, 2009.
- Baum, Christopher F, *An Introduction to Modern Econometrics Using Stata*, Stata press, 2006.
- Kovács, Kármén, "The Impact of Financial and Behavioural Sunk Costs on Consumers' Choices," *Journal of Consumer Marketing*, 2024, 41(2), 213-225. Publisher: Emerald Publishing Limited.
- Kristiansen, Søren and Rolf Lyneborg} Lund, "The Geography of Gambling: A Socio-Spatial Analysis of Gambling Machine Location and Area-Level Socio-Economic Status," *Journal of Gambling Issues*, 2022, 49(2), 44-67. Publisher: CDS Press.
- Liu, Ivy and Alan Agresti, "The Analysis of Ordered Categorical Data: An Overview and a Survey of Recent Developments," *Test*, June 2005, 14(1), 1-73.
- Mani, Anandi, Sendhil Mullainathan, Eldar Shafir, and Jiaying Zhao, "Poverty Impedes Cognitive Function," *Science*, August 2013, 341(6149), 976-980. Publisher: American Association for the Advancement of Science.
- Mullainathan, Sendhil and Eldar Shafir, *Scarcity: Why Having Too Little Means so Much*, Macmillan, 2013.
- Patrick, Robert H, "Durbin-Wu-Hausman Specification Tests," in "Handbook of financial econometrics, mathematics, statistics, and machine learning," World Scientific, 2021, pp.1075-1108.
- Pearce, J, K Mason, R Hiscock, and P Day, "A National Study of Neighbourhood Access to Gambling Opportunities and Individual Gambling Behaviour," *Journal of Epidemiology and Community Health*, October 2008, 62(10), 862.
- Sherk, Adam, Tim Stockwell, Tanya Chikritzhs, Sven Andréasson, Colin Angus, Johanna Gripenberg, Harold Holder, John Holmes, Pia Mäkelä, Megan Mills, Thor Norström, Mats Ramstedt, and Jonathan Woods, "Alcohol Consumption and the Physical Availability of Take-Away Alcohol: Systematic Reviews and Meta-Analyses of the Days and Hours of Sale and Outlet Density," *Journal of Studies on Alcohol and Drugs*, January 2018, 79(1), 58-67. Publisher: Alcohol Research Documentation, Inc.

- Stock, James H. and Mark W. Watson, *Introduction to Econometrics*, 4 ed., Pearson, 2020.
- Terza, Joseph V., Anirban Basu, and Paul J. Rathouz, “Two-Stage Residual Inclusion Estimation: Addressing Endogeneity in Health Econometric Modeling,” *Journal of Health Economics*, May 2008, 27(3), 531-543.
- Vasiliadis, Sophie D, Alun C Jackson, Darren Christensen, and Kate Francis, “Physical Accessibility of Gaming Opportunity and Its Relationship to Gaming Involvement and Problem Gambling: A Systematic Review,” *Journal of Gambling Issues*, 2013, (28), 1. Publisher: Concurrent Disorders Society Press.
- Wooldridge, Jeffrey M., *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT press, 2010.
- Wooldridge, Jeffrey M., *Introductory Econometrics a Modern Approach*, South-Western cengage learning, 2016.
- 三島徹也, “大阪 IR 事業と IR 関連法制,” なにわ大阪研究, March 2023, (第 5 号), 127-136.
- 井上澄江, “ギャンブル障害,” なにわ大阪研究, March 2023, (第 5 号), 135-150.
- 多治川卓朗, “浪費者と制限行為能力者制度による保護の可能性——ギャンブル依存症患者による借金を念頭に——,” なにわ大阪研究, March 2023, (第 5 号), 101-125.
- 座主祥伸, “上限金利規制と非合法市場,” なにわ大阪研究, March 2023, (第 5 号), 81-100.
- 日本経済新聞, “カジノの懸念払拭する IR に (社説),” 日本経済新聞 朝刊, April 2023, p.2.
- , “大阪 IR 未来図を問う (4) 住民不安解消へどう説明 直接対話の機会増やせ 市民団体前事務局長・山川義保氏,” 日本経済新聞, July 2023.
- , “IR、観光効果に期待 政府、大阪の計画認定へ カジノ依存・治安への懸念強く,” 日本経済新聞 朝刊, 2023, p.5.
- 朝日新聞, “カジノ解禁まで 7 年、依存症・地元対策は 大阪 IR,” 朝日新聞 朝刊, September 2023.
- 木戸盛年, “日本におけるオンラインギャンブルの現状と対策,” 瀬木学園紀要, 2024, (23), 41-46. Publisher: 名鉄局印刷株式会社.
- 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター, “令和 5 年度 依存症に関する調査研究事業「ギャンブル障害およびギャンブル関連問題の実態調査」報告書,” October 2024.
- 田中隆一, “計量経済学の第一歩,” 有斐閣ストゥディア, 有斐閣, 2015.
- 谷岡一郎, “パチンコ・パチスロをする人々——JGSS-2002によるプレイ比率、頻度、そして使用金額に関する研究——,” *JGSS* で見た日本人の意識と行動: 日本版 *General Social Surveys* 研究論文集, March 2005, 4, pp.93-109.

(ざす よしのぶ 関西大学経済学部准教授)

(かねもり こうた 村田製作所)

OSK と舞台装置家・山田伸吉

奥 本 未 世

要 旨：なにわ大阪研究センターが所蔵する資料には山田伸吉に関する資料がある。その中には OSK の舞台風景と思われる写真が含まれている。それらを現存する公演印刷物と比較考察し、OSK と山田との関係性を明らかにすることを試みた。

キーワード：OSK、松竹楽劇部、レビュー、山田伸吉、舞台装置、松竹

はじめに

令和4年(2022)に創立100周年を迎えた OSK 日本歌劇団(通称 OSK)は近代舞踊芸術の“レビュー”を中心に人々を魅了し続ける、女性のみで編成された大阪の歌劇団である。大正11年(1922)、産業化が進み、景観や人々の暮らしが変化していく大阪にて松竹楽劇部として産声をあげた。松竹合名社(現・松竹株式会社)社長の白井松次郎(1877-1951)が、建設中の洋式劇場である大阪松竹座に西洋風の音楽舞踊を取り入れ、大阪の劇場文化を発展させるために設立した⁽¹⁾。これは白井が大正10年(1921)に榎茂都陸平(1897-1985)演出による宝塚少女歌劇団の公演『春から秋へ』を観たことが影響している⁽²⁾。設立にあたり白井は小林一三(1873-1957)にも意見を求めており、白井と小林の両者が日本の劇場文化発展という視野のもと協力しあった点から鑑みても、近代化を“表象する”使命を帯びて生まれた劇団といえる⁽³⁾。

近代化の象徴となるべく創設された楽劇部の記念すべき公的な第1回公演は『アルルの女』で、劇団に関する文献では必ず特筆される演目である。これは道頓堀に開場した大阪松竹座で大正12年(1923)に上演された出し物⁽⁴⁾で、映画との併演だったことも要因であろう。楽劇部が単独公演で集客できるまでの施策として併演とした面もあるだろうが、映画と舞踊の混合というところに、現代の私たちは“モダニズム”を感じずにはいられない。このように極めて興行的なスタートを切った楽劇部は昭和9年(1934)に千日前の大阪劇場(以後、大劇)を活動の本拠地として、劇団名も松竹楽劇部から大阪松竹少女歌劇団(通称 OSSK)と改称。第二次世界大戦中も大阪松竹歌劇団(通称 OSK)と改称し、舞台公演を続けてきたが、空襲で本拠地であった大劇が焼失し⁽⁵⁾、更には幾度か運営母体が変わった⁽⁶⁾こともあり、戦前の舞台に関する文献資料の多くが失われている。

戦前に発行された印刷物は主に『大劇週報』だが、中には公演独自のパンフレットがある。公演毎にパンフレットが発行されていたわけではないようだが、大阪名物と称される『春のおどり』といったレビューのパンフレットは現存している。第一景、第二景というステージ演目とともに劇団員名が記載されており、また各景の概要や歌詞、舞台スタッフのクレジットも掲載されている。戦前の舞台情報を得るうえで貴重な媒体のひとつといえる。およそ A4二つ折りのサイズで4ページ程



【写真1】『第4回「春のおどり」
— 開国文化 —』
公演パンフレット

度のもが多いが、表紙に施されたデザインと文字からもOSKの確かな芸術性が伝わってくる素晴らしい装丁である【写真1】。

図案家として知られ、『春のおどり』のロゴデザインを手がけたとされる山田伸吉（1903-1981）⁽⁷⁾は「松竹株式会社大阪支店宣伝美術係長（O.S.K 専属）」という肩書きを持ち⁽⁸⁾、戦前のパンフレットのクレジットにも舞台装置担当として名前を見出すことができる。しかしOSKと山田との関係性に焦点を当てた資料は十分でない。その山田の遺品（以後、山田伸吉コレクション）が遺族によって関西大学に寄贈されており、パンフレットの原画等が見つかる可能性を期待して調査を行った。残念ながら該当する資料は見当たらなかったが、松竹宣伝部の社員時代の資料やアルバム及び1枚ものの大判写真を閲覧することができた。

本稿では調査した資料のうち①舞台意匠が特徴的な写真、②山田の妻・東條 薫の写真、③博覧会の写真、④山田自身に関わる写真について言及し、OSKと山田との関係を明らかにすることを試みる。なお本稿では便宜上、劇団名を現在のOSKという通称に統一して表記する。

1、絢爛豪華な舞台意匠

まずは舞台写真から見ていきたい。本調査で閲覧した写真（白黒、多くは四ツ切りサイズ）の舞台意匠は西洋諸国の景観から雅楽や歌舞伎まで幅広い題材を取り入れて展開しており、また衣裳も豪華な作りであることが見てとれる。「絢爛華麗な舞台構造と、千変万化する衣裳の美しさで、観客の陶酔を誘う⁽⁹⁾」という表現も大袈裟なものではなかった。しかしながら、ほとんどの写真には公演名や年代などの表記が見当たらなかった。そのため、各所の協力のもとに衣裳や舞台装置といった視覚情報から、現存するパンフレットと照合して検証する作業を行った。

1-1. モダンガールの具現化 — 『第1回 歌舞伎のをどり 春の花束』 —

燕尾姿の男役と帽子に半透明のような傘をさした洋装姿の娘役たちの写真から舞台を考察する【写真2】。後ろには小振りの帽子やショールを巻いたような娘役が大勢並び、壮観な様子である。これらの意匠は『OSK 日本歌劇団 90周年誌 桜咲く国で～OSK レビューの90年～』（OSK 日本歌劇団、2012年発行、p.9）の写真と一致するため、昭和8年（1933）『第1回 歌舞伎のをどり 春の花束』（於 大阪歌舞伎座）の舞台と特定する。舞台前方の華やかな衣裳の娘役たちは、中央の男役が手を広げる方向を見つめている。カーテンコールの瞬間を捉えたものであろうか。

この時のパンフレットには舞台装置に生田花朝（1889-1978）、大森正男（生没年不明）、山田伸吉の名前が記載されている。日本画家の生田、パリのレビューを研究してきた大森と組んだ舞台である。この二人を前に山田がどこまで創造性を発揮できたか不明であるが、大大阪時代の華やかな舞台意匠として写真を見ていきたい。

舞台前方にいる娘役の顔に注目すると長い引眉に色濃い口紅、シャドウがかかった頬という化粧が施されている。大正13年（1924）に出版された『化粧美学』には「最近眉を細く剃りつけて、^{まゆずみ}黛で殆ど真直ぐに、眉間狭くから初めて目尻の上へ長く引くことが若い人の中に流行つて居ります」



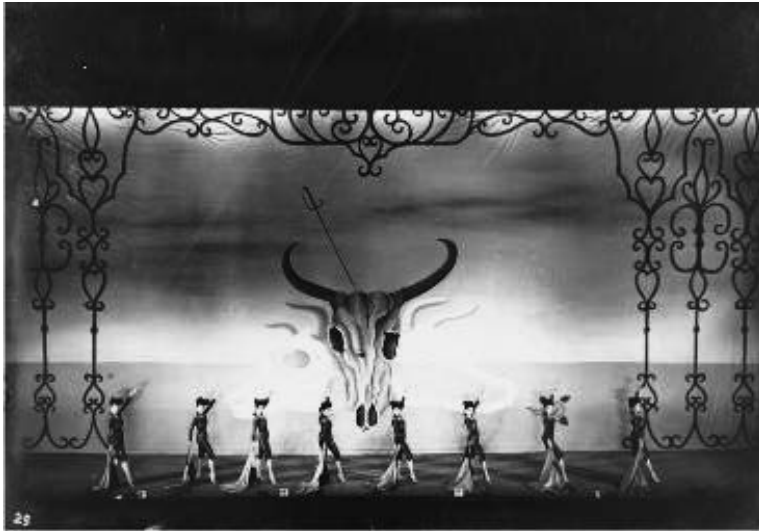
【写真2】『第1回 歌舞伎のをどり 春の花束』の舞台

という説明がある。明治時代になり、西洋化が進む中でも日本女性は結婚するまで眉は生え抜き、結婚後は抜くことが習性となっている風習があった⁽¹⁰⁾。大正時代に入り、国内の大手化粧品会社が化粧品を開発するようになり、女性の装いの洋風化が進んでいく。身だしなみとしての化粧から、楽しむ化粧という意識が変化していくようになる。このような時代背景から、引眉毛は近代的な日本女性を象徴する化粧と言えるだろう。

多くの劇団員が帽子をかぶっていることも注目したい。帽子もまた近代的なアイテムの一つである。明治から大正にかけては華族や政財界の夫人、令嬢がドレスにあう帽子を調達していた高級品であった⁽¹¹⁾が、大正12年（1923）の関東大震災以降は断髪・洋装が進み、小川治平「人気と恋と」（『時事漫画』大正13年4月）や八木原捷一「師走の街上」（『東京パック』昭和3年12月）といった近代漫画にも帽子をかぶる女性の描写が現れる。なお、漫画の中には華やかな装いをする女性を揶揄するような描き方をしているものもある。震災時は着るものにも困っていた女性が僅か数年で見違えるような格好をしている様子を指摘するものもあり、身の変わりの早さ、軽薄さを批判しているように見受けられる。モダンガールは新しい時代の女性像を作る、つまり自立した活動ができる女性を目指すという本質的な意義を理解していない女性たちの流行現象という指摘もあり⁽¹²⁾、当時は保守層からの心象が悪かった。モダンガールは近代化を都合よく翻訳した一面はある。しかしながら写真を見る限り、OSKは新しいアイテムを積極的に手法として取り入れ、舞台上での装いをもって最先端の近代化を提示している。そうして一般の女性たちにとって憧憬となる事象を作り上げていったのではないだろうか。

1-2. 戦後のレビュー

【写真3】はジョージア・オキーフ（1887-1986）の代表作の一つ《Cow's Skull: Red, White, and Blue》（1931, メトロポリタン美術館蔵）を想起させる、巨大な牛の骸骨画が印象的な舞台意匠である。質素な設えから、物資が乏しい戦後間もない時期の公演ではないかと考える。牛のモチーフ、闘牛士のような格好など、スペインを彷彿させる舞台意匠である。戦前に山田が手がけた松竹関係のデザインにも幅広いジャンルの表現方法が見受けられ⁽¹³⁾、独自で絵の勉強をしていた山田がアメ



【写真3】闘牛士のような衣装で踊る8人の劇団員



【写真4】『第22回「春のおどり」』公演パンフレット

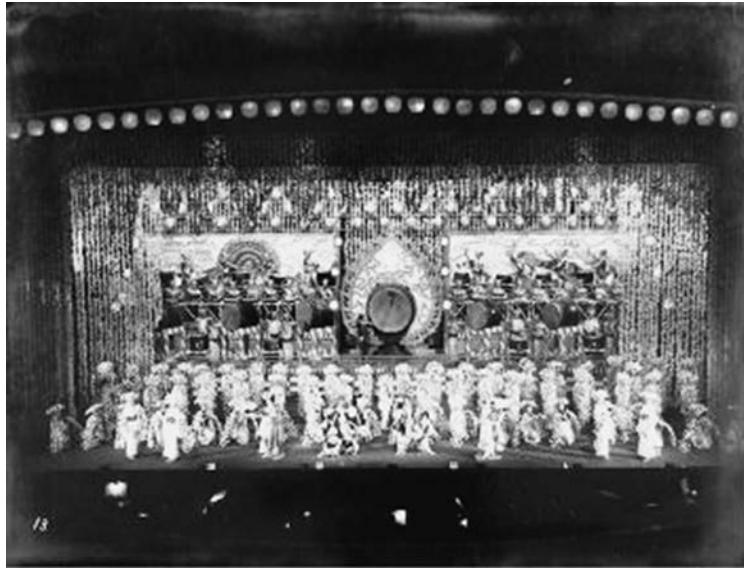
リカン・モダニズムから影響を受けていた可能性も十分にあるだろう⁽¹⁴⁾。しかし、この写真の公演を特定できる情報を集めることが出来なかった。よって山田が手がけた舞台美術という確証もない。

なお、戦後に山田は大劇で公演された『春のおどり』の舞台美術を手がけている【写真4】。このパンフレットに描かれた女性のタッチは山田が雑誌『1934』（昭和9年）に描いた西洋女性のそれと似通っている⁽¹⁵⁾。しかし大きく異なる点は表情と色彩である。『1934』の女性はどこか憂いを帯びた眼差しで口を固く閉じている。女性の背景は淡いパステルカラーのようにいくつかの色が重なって着色されている。対してこのパンフレットの女性は意思の強そうな眉と瞳、口を開けて笑う姿が特徴的である。制作予算の関係か、ほぼ赤・黒・白の三色で着色されている。戦後、雑誌などを通してアメリカの女性の生活や衣装、ハリウッド映画の女優が積極的に紹介されており⁽¹⁶⁾、一種のロールモデルとして日本女性の中で理想化させようという動きがあった。この公演パンフレットからも、当時の理想の女性像を読み取ることができる。

1-3. オーケストラピットの劇場

【写真5】では中央に連獅子と思われる2人が向き合い、2人を囲むようにおよそ40名の娘役が華やかに舞っている姿が確認できる。後方中央には火焰飾りの大太鼓が配置されており、モノクロ写真でも荘厳な様子が伝わってくる。これだけ特徴的な要素があるにも関わらず、舞台に関する印刷物などで同様の舞台意匠を確認することができなかった。ただ舞台にオーケストラピットが設置されていることから、公演場所は大劇か浅草国際劇場ということは推測できる。大劇は昭和9年（1934）に、浅草国際劇場は昭和12年（1937）に開業した⁽¹⁷⁾ことから少なくとも昭和9年以降の舞台写真であろう。アーチ状のプロセニウムと提灯の装飾は国際劇場の特徴であったようで、他のSKDの舞台写真にもよく見られることから、この舞台は国際劇場と特定する。

松竹七十年史の「松竹歌劇公演記録」によると、OSKは国際劇場でSKD（詳細は後述）との合同公演として次の公演を開催している。昭和13年（1938）9月に『秋のおどり』『ラッキー・ゴーズ・ラウンド』『世界に告ぐ』、昭和14年（1939）6月に『少年斥候兵』『ホテル・モコ』『国際おどり』、昭和23年（1948）5月に『緑のカーニバル』、昭和25年（1950）5月に『黒薔薇の騎士』、昭和29年



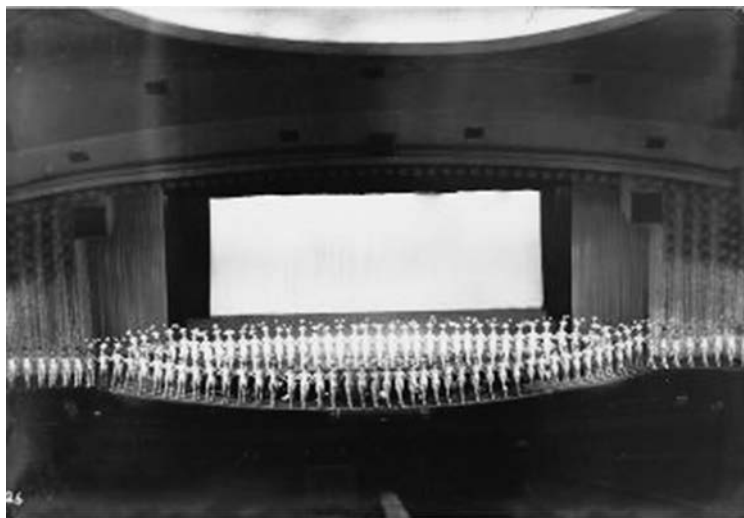
【写真5】連獅子、藤づくしの衣裳の娘たちと30名以上の太鼓叩き

(1954) 5月に『踊る祭典』。OSK並びに山田が全く関わっていないとは断言できない。

1-4. 圧巻のラインダンス

【写真6】の公演名、年代も特定できる資料が見当たらなかったが、アーチ状のプロセニウムから国際劇場と識別できる。提灯と造花が舞台を覆う中、およそ100人によるラインダンスが披露されており、全員のラインダンスの足開きの角度がピッタリと揃っていることにも注目したい。戦後のSKDによる「ミリオンレッグス」ではないかと思われる。

レビューといえばラインダンスである。日本でのレビューは昭和2年(1927)、フランスで遊学した岸田辰弥(1892-1944)演出による宝塚少女歌劇団の公演『モン・パリ』で本格的に導入され大流行した。この時、ラインダンスも初めて日本で披露された。レビューは筋書きよりも華やかな舞台



【写真6】約100人によるラインダンス

意匠、群舞やスピーディーな場面転換が重視される大衆演芸で、19世紀末にはキャバレーやカフェ・コンセールなどで流行し、やがて大規模なミュージック・ホールでの公演へと発展する⁽¹⁸⁾。エロティシズムを前面に押し出し、多数のダンサーが規則的に群舞を踊る⁽¹⁹⁾レビューは、機械的な美を生み出す近代的な舞台芸術といえるだろう。それゆえ宝塚の機関紙『歌劇』では批判的な意見も見られた⁽²⁰⁾。一方、OSKへの評価はどうであったか。例えば昭和15年（1940）発行の『松竹歌劇』では大谷博氏が「ダンシングチームはその澁刺さに於て、その統制美の上から實に良くなつてゐる」⁽²¹⁾と評価し、清水俊二氏が「スペクタクルとしての魅力がレビューの重要な構成要素である」と断言している⁽²²⁾。日本にレビューが輸入されてから少し時代がくだっての論評ではあるが、OSKのレビューでは「よりスペクタクルに、より身体的技術の向上」を求める声が多い。

演劇史研究家の垣沼絢子氏はレビューが輸入された当初、日本では西洋舞踊の技術が蓄積されていないためレビューは“宝塚情緒（お伽歌劇）”と結びつけられ、モダンガールとしてのダンサーのイメージは松竹歌劇団などが担っていたのではないかと指摘している⁽²³⁾。

OSKの振付を担った青山圭男（1901-1976）は少女劇団におけるレビューの論争に対して「よくお叱りを受けます」と謙虚に受け取りながらも、あくまで自身の考えであると断わりをいれたうえで「どこまでも外国の模倣を避けて、日本の有つてをる特徴、感情等を盛り上げ、日本は日本式のレビューを作ること、此處に主眼を置いて参りました。（中略）よしんば西洋の踊りを取り扱ふにしましても、形式はあちらのものでも心は日本式」⁽²⁴⁾としている。

OSKにおけるレビューは、没個性的で機械的な近代化という表象を日本人好みに“翻訳”しながら、“スペクタクル”をキーワードに独自に育まれていったと考える。

1-5. 東京の歌劇団 — SKD『秋のおどり』 —

【写真7】と【写真8】に映る舞台意匠は『松竹歌劇 第十五号』（松竹歌劇団、昭和27年発行）に掲載されている意匠と同様の造りであることから、昭和27年（1952）上演のSKD『秋のおどり』“第一景 錦秋”と“第十六景 フィナーレ”の舞台写真と特定できる。

記事を確認すると、舞台装置は第一景を三林亮太郎（1908-1987）、第十六景を国東 清（生没年不明）が手がけている。山田が関係した舞台ではない。なお、第一景に映り込んだ舞台後方の橋は背景画ではなく造形物である。このような妥協なき舞台意匠が人々の心を掴んで離さない理由の一つであろう。また“第一景 錦秋”で確認できるオーケストラピットの座席標識のデザインは国際劇場独自のものである。



【写真7】「秋のおどり」第一景



【写真8】「秋のおどり」第十六景

1-6. 舞台平面図

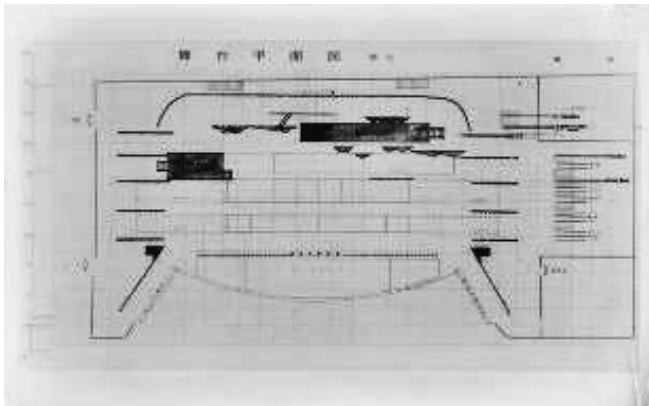
大劇は昭和42年（1967）に活動の幕を閉じ、平成3年（1991）に取り壊しとなっている。東京の浅草国際劇場も昭和57年（1982）の公演を最後に閉館、解体された。歌劇団のレビューが繰り広げられた劇場は、現在その全体像を把握することが難しい。

しかし今回の調査で劇場の舞台平面図を閲覧することができた【写真9】。オーケストラピットがあることから、大劇か国際劇場のどちらかであることは確実である。

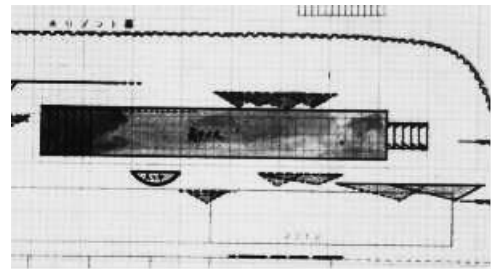
大劇の前身である東洋劇場の外観・内装・平面図や設備を詳細に記録した『東洋劇場 昭和8年8月竣工』（大阪千日前土地建物株式会社、昭和8年発行）を見ると、劇場には廻り舞台があり、照明室が2階、電気室が3階、放送室が4階に設置されていた。ところが【写真9】では電気室は1階舞台上手側に設置されている。

図面右上の階段付きと思われる装置には「高サ6尺」、左の装置には「高サ3尺」と書き込まれている【写真9・10】。OSK舞台の暖簾の図案と思われる資料【写真11・12】で書き込まれている「尺」の字の癖と似通っていることから山田が使用していた平面図と思われる。舞台奥に造形物を交互に設置することで奥行きを生み出しており、高さのある立体的な舞台装置を考案していたことを証明する。

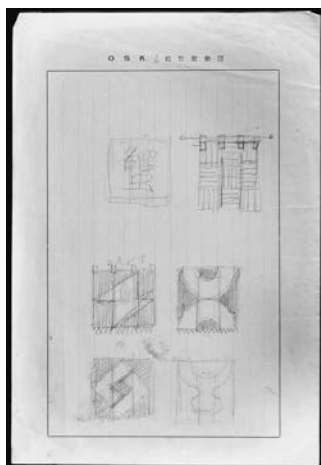
以上、舞台公演に関わる写真について公演名の特定を試みた。まとめると、山田が所有していた舞台写真と本人との関係性は不明なものが多かった。しかし、これらの写真は「近代嗜好の豊かな



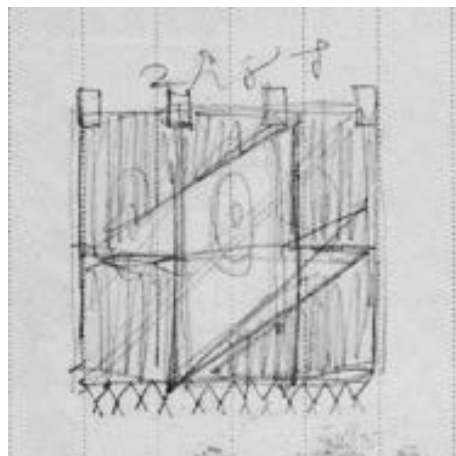
【写真9】 舞台平面図



【写真10】 平面図右上の拡大図



【写真11】 暖簾の図案



【写真12】 図案の拡大

あなたの眼を睜^{みは}らせる⁽²⁵⁾」と宣伝している通り、OSKの舞台がモダンスタイルを追求する層を喜ばせるものであったことを裏付ける。研究熱心な山田の性格から、会社から提供された写真群を舞台の参考資料として大切に保管していたのではないだろうか。

2、東條 薫



【写真13】東條 薫



【写真14】「歌舞伎のをどり」
での東條 薫

次に OSK の楽劇部員で日舞の名手として名を馳せた妻・東條 薫 (1909-没年不明) の写真について取り上げたい。山田伸吉コレクションには東條の手帳やブロマイド、舞台の合間に撮影されたと思われる写真が多く残っている。山田と東條の長女・加藤永子氏が山田について「ファッションに関心が高く、次から次へとウインドウを眺めては店に入って行く。⁽²⁶⁾」と回想するほど、山田は身だしなみに気を配る人物であったが、妻の東條も非常にモダンな女性であったと見受けられる【写真13】。

松本茂章氏がその加藤氏に聞き取りをした内容によると東條は16歳で松竹楽劇部に応募⁽²⁷⁾。数え年で計算すると大正13年(1924)頃と推測する⁽²⁸⁾。昭和4年(1929)に大阪松竹座で上演された『第4回「春のおどり」— 開国文化 —』のパンフレットを見ると、“第一景 長崎蘭館の櫻”で町娘、“第五景 日本の印象”でおかみ風の女として名前が掲載されている。公演は全六景まで、そのうち2演目で東條の名前が確認できる。この時、山田は緞帳意匠を担当している。大森正男が舞台指揮をとり⁽²⁹⁾、山田が舞台意匠を手がけた昭和6年(1931)の『第6回「春のおどり」— 八つの宝玉 —』(於大阪松竹座)で、東條は3演目に出演している。“第三景 珊瑚”の娘、“第七景 眞珠”、“第八景 金剛石”である。第三景と第七景の振付は花柳輔蔵(1891-1962)とあり、東條の名前も上位にあることから、日舞の名手としてその確かな実績を積みあげていた時期ではないだろうか。フィナーレである第八景でも名前は上位に掲載されている。コレクションには昭和8年(1933)『第1回 歌舞伎のをどり 春の花束』(於大阪歌舞伎座)の舞台と思われる写真が残っている【写真14】。

四本の剣が互いに交わり井筒のような文様となっている衣裳は『OSK日本歌劇団 100周年誌 桜咲く国～OSKレビューの100年～』(OSK日本歌劇団、2023年発行、p.23)に掲載されている衣裳と一致していることから同公演の舞台時期の写真で間違いはない。「大楠公」の意匠が施された中山太陽堂の商品を持って微笑むブロマイドのような写真もある【写真15】。中山太陽堂は昭和6年(1931)から「大楠公」意匠のチューブ入り練り歯磨を売り出しており⁽³⁰⁾、この写真は昭和6年以降に撮影された可能性がある。商品広告用に撮り下ろされたものか、プライベートの瞬間を撮影したものかは不明であるが、化粧品会社と歌劇団との関係性を考えるうえで興味深い資料である。昭和9年(1934)頃に東條は山田と職場結婚して舞台から離れる⁽³¹⁾。

今回閲覧したコレクションの手帳には東條が山田からの仕送り金額や日々の買い物の記録を書き

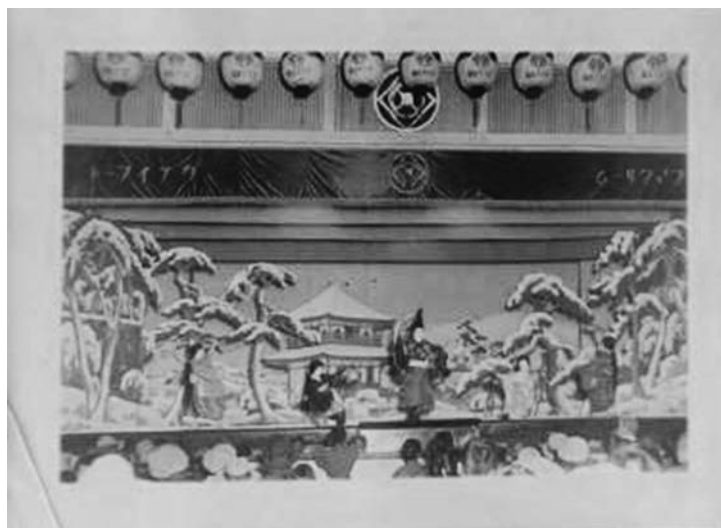
留めており、主婦として家庭を支えていたことがわかる。長女の加藤氏によると、戦後5年ほどはレビューなどの舞台装置の仕事が減り、単発の仕事が続き、苦しい時代にあったようである⁽³²⁾。昭和28年～29年頃の母親（東條）の日記帖には「たばこ四十円、靴下百二十円、パーマ代八百円、映画二百七十円、新聞二百八十円とある。そこに父が大阪より月に三～四回仕送りしていたのが記されていた。一回の送金額は五千元～八千元⁽³³⁾」と書いてあったと回顧している。戦後、一家は関東に居を構え、山田は大阪に単身赴任していた。最低でも月1万5千元、年18万円を家族に仕送りしていたのであろう。昭和29年の平均年収は約18万円⁽³⁴⁾であることから、昭和25年ごろの苦しい時代を乗り越え、平均的な暮らしを送ることができていたのではないだろうか。この時期、山田は映画『大仏開眼』（昭和27年）や『源氏物語・浮舟』（昭和32年）の美術を担当している。一家の生活は舞台装置家・山田の仕事にかかっていた。



【写真15】クラブ歯磨を手にする東條 薫

3、博覧会での公演 — 美容業界との関わり —

前章で東條がクラブ歯磨を手にしている写真と同じく、当時の美容業界と舞台との関わりを示す写真がある【写真16】。「カテイ石鹸」の提灯が並び、「クラブ美身クリーム」の一文字幕が吊り下げられている。これらは中山太陽堂の広告ということがわかる。舞台中央には「博」のロゴが施されており、昭和3年「交通電気博覧会」のロゴと一致する。「交通電気博覧会」は昭和天皇の御即位を祝し、また交通・電気の発展に貢献することを目的として同年10月～11月まで天王寺で開催され、約百万人を集客した大規模な博覧会⁽³⁵⁾である。「普通余興」の一環として松竹楽劇部の舞踊『電気照明舞臺舞踊四季の光』が連日公演された。この時期 OSK は松竹座にて“御大典記念”と冠して『奉祝行列』を開催している。市内の2拠点に分かれて舞台公演を行っていたことになり、劇団員の層の厚さ、組織力をアピールできる絶好の機会であったと思われる。残念ながら「交通電気博覧



【写真16】クラブ石鹸の提灯が装飾された舞台の様子



【写真17】『第7回「春のおどり」——ラッキーセブン——』公演パンフレット

会』、『奉祝行列』のどちらも制作クレジットに山田の名前はない。

舞台の内容をもう少し考察したい。『電気照明舞臺舞踊四季の光』の演目は「冬 雪の銀閣寺」「夏 伊勢二見ヶ浦」「秋 近江石山秋の月」「春 音羽山清水」であり、レビューではないが電気照明を応用した近代舞台であった。松林、中央の銀閣寺に雪が積もっている様子から「冬 雪の銀閣寺」の一場面に間違いない。余興館の設備は「舞臺正面にはクラブ本舗寄贈の縹子鶯地に鳳凰の刺繍したる大緞帳を吊り」⁽³⁶⁾とあり、単なる広告活動というより、創業者

である中山太一が取り組んでいた文化の啓蒙活動⁽³⁷⁾が舞台装置にまで発展したと考えてよいだろう。

中山太陽堂の化粧品は山田が手がけたと思われる公演パンフレットにも登場する【写真17】。昭和7年（1932）の公演パンフレットで、表紙に公演名、裏表紙に「クラブ白粉」の文字が大きく掲載されている。近代化を牽引する劇団の表紙に相応しく、洗練されたモダンガールが描かれている。裏表紙の下部には「春は花から女性うら輝くクラブの化粧から」というキャッチコピーが書かれている。OSKの公演パンフレットには、さまざまな化粧品や生活用品の広告が掲載されており、表紙と一体化するような広告デザインは同時期の他劇団などでも確認できる。このような粋な仕掛けは当時の流行であったかもしれないが、現時点で筆者は十分な検討資料を揃えていないため断定はできない。西村美香氏はキネマ文字の創案者を山田とするデザイン史における一般的な見解に対し、大正15年（1926）には既に矢島周一（1895-1982）が『図案文字大観』を出版し、キネマ文字考案者であることを主張していること、松竹のポスターには特定のサインがないことなどの理由から、松竹の広報物は山田単独での仕事ではなく、松竹宣伝美術部としての仕事と捉えるべきではあると指摘している⁽³⁸⁾。

【写真17】を含め松竹歌劇団の公演パンフレットもサインがなく、山田単独のデザインとは言い難い。舞台クレジットの一覧は後述するが、公演の舞台装置や衣裳を場合によっては複数人が担当していたことが判明した。したがってOSKの意匠は山田を中心とした宣伝美術部が手がけたと考えるべきではあるが、ともあれ、このデザインから彼らが新しい時代の女性像を表現しようとしていた気概を感じる。

4、舞台装置家としての山田伸吉

最後に山田自身に関わる写真をもとにOSKとの関係を考察してみたい。先に山田の舞台に関わる経歴を簡潔に述べたい。山田は大正11年（1922）頃に松竹合名社へ入社したとされている⁽³⁹⁾。絵の勉強をしたいと会社側に伝えるたびに給料が上がり、いわゆる居直りになってしまったと述懐している⁽⁴⁰⁾。事実、山田は画家を目指しながらも京都松竹座や大阪劇場等で舞台装置の仕事を次々と手掛けている。山田が携わった舞台のうち、OSKでの記録は昭和34年（1959）に新歌舞伎座で上演された『夏のおどり 花の凱旋門』が最後である⁽⁴¹⁾。

4-1. 実績

OSKの100周年誌や、個人コレクターから提供いただいた情報をもとに、昭和34年までのOSK公演における舞台スタッフのクレジットを一覧にまとめた。なお舞台は名物『春のおどり』パンフレットなど現存する印刷物や上述の100周年誌で内容を確認できたものだけに限り一覧にしており、OSK公演の全てを記すことができない点をご容赦いただきたい。担当名称などは印刷物に準拠した。

公演年	公演名	劇場	舞台意匠に関わる掲載情報
昭和2年 (1927)	第2回「春のおどり」—御空ごよみ—	大阪松竹座	舞臺意匠：大森正男
昭和3年 (1928)	奉祝行列	大阪松竹座	舞臺意匠：大森正男 舞臺背景：玉置 清
昭和4年 (1929)	第4回「春のおどり」—開国文化—	大阪松竹座	舞臺意匠：大森正男、森喜次郎 緞帳意匠：山田伸吉
昭和5年 (1930)	第5回「春のおどり」—さくら—	大阪松竹座	舞臺意匠：山田伸吉
昭和6年 (1931)	第6回「春のおどり」—八つの宝玉—	大阪松竹座	舞臺意匠：山田伸吉
昭和7年 (1932)	第7回「春のおどり」—ラッキーセブン—	大阪松竹座	舞臺意匠：山田伸吉、大森正男
昭和8年 (1933)	第8回「春のおどり 仏蘭西人形」 ⁽⁴²⁾	大阪松竹座	舞臺装置：山田伸吉 衣裳考案：山田伸吉
昭和8年 (1933)	第1回 歌舞伎のをどり 春の花束	大阪歌舞伎座	舞臺装置：生田花朝、大森正男、 山田伸吉
昭和9年 (1934)	カイエ・ダムール	大阪劇場	舞臺装置：山田伸吉
昭和10年 (1935)	ばれ・ど・らむうる	大阪劇場	舞臺装置：山田伸吉 衣裳考案：山田伸吉
昭和13年 (1938)	第13回「春のおどり」—日本むすめ—	大阪松竹座	装置：山田伸吉 衣裳（洋）：國東 清、山田伸吉 衣裳（邦）平井正一郎、山田伸吉
昭和14年 (1939)	第14回「春のおどり」—むすめ日本／興亜の春—	大阪劇場	第一部 装置：大塚克三 衣裳：食満南北 第二部 装置衣裳：宇佐美 一
昭和15年 (1940)	輝く日本	大阪劇場	舞臺装置：野島一郎、宇佐美 一、 大塚克三
昭和16年 (1941)	第16回「春のおどり」—御代のさくら／友邦の花束—	大阪劇場	第一部 装置：大塚克三 衣裳：平井正一郎 第二部 装置・衣裳：國東 清
昭和16年 (1941)	踊る色彩	大阪劇場	装置・衣裳：國東 清
昭和17年 (1942)	第17回「春のおどり」—皇国の礎／輝く大東亜—	大阪劇場	第一部 装置：大塚克三、玉置 清 衣裳：平井正一郎 第二部 装置：宇佐美一歩、吉村捨男、 平井房人 衣裳：宇佐美一歩
昭和17年 (1942)	南の曙	大阪劇場	装置：山田伸吉 衣裳：宇佐美一歩、山田伸吉

公演年	公演名	劇場	舞台意匠に関わる掲載情報
昭和18年 (1943)	第18回「春のおどり」	大阪劇場	装置：山田伸吉、大塚克三、平井房人、 宇佐美一歩、吉村捨男、玉置 清 衣裳：宇佐美一歩、吉村捨男、 山田伸吉、平井正一郎
昭和21年 (1946)	秋のおどり	大阪劇場	装置・衣裳：村上鐵太郎
昭和22年 (1947)	第22回「春のおどり」	大阪劇場	日舞衣裳：食満南北 日舞装置：大塚克三 洋舞衣裳・装置：山田伸吉
昭和22年 (1947)	夏のおどり	大阪劇場	装置衣裳：山田伸吉
昭和22年 (1947)	黒薔薇君が胸に	大阪劇場	装置衣裳：山田伸吉
昭和22年 (1947)	秋のおどり	大阪劇場	第一部 制置衣裳：大塚克三 第二部 制置衣裳：山田伸吉
昭和23年 (1948)	第23回「春のおどり」	大阪劇場	装置衣裳：山田伸吉 ⁽⁴³⁾
昭和24年 (1949)	秋のおどり	大阪劇場	舞台装置：小磯良平
昭和32年 (1957)	秋のおどり	大阪劇場	装置衣裳：吉原治良、大塚克三、 壺内弦、所治海、月山勝弘 装置：三輪祐輔
昭和33年 (1958)	春のおどり	御園座	装置衣裳：吉原治良、大塚克三、 壺内弦、所治海、月山勝弘 装置：三輪祐輔
昭和34年 (1959)	夏のおどり 花の凱旋門	新歌舞伎座	装置衣裳：山田伸吉、神取宏全 装置：築山 晃 衣裳：所 治海

この表から、OSK 舞台意匠の多くは山田と大塚克三（1896-1977）⁽⁴⁴⁾が手掛けていたことがわかる。中でも山田は大劇での初公演『カイエ・ダムール』（昭和9年）や大劇公演部第一回公演と銘打った『ばれ・ど・らむうる』（昭和10年）⁽⁴⁵⁾、新歌舞伎座に進出した『夏のおどり 花の凱旋門』（昭和34年）といった舞台装置を手掛けている。これらはOSKの活動において重要な局面を迎える公演である。松竹が山田の舞台装置家としての技術や表現力を信頼して、特別な舞台に山田を送り込んだのではないだろうか。

4-2. 舞台の裏側



【写真18】左から青山、三島、山田

山田が舞台上上がっている姿を捉えた写真がある【写真18】。写真にはメモが貼られており、それによると青山圭男、三島義雄（生没年不明）、山田伸吉とある。舞台の最終確認であろうか、3人の視線は娘役の衣裳に向いている。

青山はOSK創設時から振付に携わり⁽⁴⁶⁾、東京松竹楽劇部⁽⁴⁷⁾設立に伴い東京へ移行、昭和8年（1933）には松竹本部直轄となる松竹少女歌劇団の舞台部長を務めた人物である。三島は昭和10年（1935）の『キネマ週報』では大阪松

竹座事務員、朝日座を経て、歌舞伎座に就任した人物と記載されている⁽⁴⁸⁾。また、昭和27年（1952）の『経済人』ではOSK支配人として紹介されている⁽⁴⁹⁾。この写真が撮影された時期について考察したい。筆者が閲覧できたパンフレットのうち、青山と山田の名前が確認できる大阪での公演は以下の通りである。

- 昭和8年（1933）『第8回「春のおどり 仏蘭西人形」』（於 大阪松竹座）
- 昭和8年（1933）『第1回 歌舞伎のをどり 春の花束』（於 歌舞伎座）
- 昭和13年（1938）『第13回春のおどり 日本むすめ』（於 松竹座）
- 昭和17年（1942）『南の曙』（於 大阪劇場）
- 昭和22年（1947）『秋のおどり』（於 大阪劇場）
- 昭和34年（1959）『夏のおどり 花の凱旋門』（於 新歌舞伎座）

昭和8年の舞台から検証してみる。『第8回「春のおどり 仏蘭西人形」』は東京の松竹少女歌劇選抜メンバーと河合ダンスとの合同公演で、振付を青山と河合駒菊⁽⁵⁰⁾、舞台装置と衣裳考案を山田が担当している。東京の松竹少女歌劇部にとって初の関西公演となり、“大阪松竹座開場十周年記念”と銘打って大阪名物「春のおどり」を出し物に選んでいることから相当気合を入れて臨んだ舞台と思われる。関西各地を巡業し、その後東京帝国劇場に凱旋興行している⁽⁵¹⁾。『第1回 歌舞伎のをどり 春の花束』は1章の【写真2】で紹介した舞台である。娘役の衣裳は異なるが、別の舞台であると断言はできない。なお昭和8年（1933）は戸籍上、2人とも30代前半である。中央の三島に関しては、上述したように若いころは松竹座に在籍していたようである。

次に昭和10年代の舞台を検証する。『第13回春のおどり 日本むすめ』の第一景“春のそよ風”はスペイン風の衣裳とある⁽⁵²⁾。『南の曙』の物語をパンフレットから抜粋すると「過去数百年、我が東洋の一部は暴戾の飽くなき欧米の搾取の手に植民地と化してゐることは周知の事実だ又侵掠された祖國を奪回しようとして起る民族の争闘も數多く見てゐるはずだ。」とある。祖國を欧米の支配から奪回させるために日本軍へ加盟を希望する架空のアジアの王国が舞台となっている。王国の衣裳も当然欧米風ではないため、これら2つの舞台でないことは確かであろう。

戦後の舞台『秋のおどり』と『夏のおどり 花の凱旋門』の可能性を考えていきたい。『秋のおどり』のパンフレットにはスイング、ワルツ、ブギ、ルンバなどの文字があることから賑やかでリズムミカルな踊りの構成であったと推測する。しかしフランス風の衣裳が出てくる舞台かどうか定かではない。『夏のおどり 花の凱旋門』では青山は演出及び振付、山田が装置衣裳を務めている。この制作には三島もクレジットされており、管見の限りでは3人の名前が揃う唯一の舞台である。パンフレットに掲載されている舞台写真は健康的な黒髪、身体のラインが分かるイブニングドレスであったが、青山と山田の風貌が40代～50代にも見受けられ、昭和34年の『夏のおどり 花の凱旋門』時の写真の可能性が最も高い。

4-3. スターとの関係

山田と劇団員との関係を伺い知ることが出来る写真もある。ターキーという愛称で活躍した水の江瀧子（1915-2009）のサイン入りブロマイドである【写真19】。松竹は大阪の松竹楽劇部の成功を受け、昭和3年（1928）に東京松竹楽劇部を設立。楽劇部第1回の採用者は16名で、そのうちの1人が水の江である⁽⁵³⁾。昭和5年（1930）の浅草松竹座での公演『松竹パレード』でショートカットにして紳士に扮したことから人気上昇し、のちに男装の麗人と称されるようになった。

ブロマイドには「親愛なる山田伸吉様」と添えられており、舞台装置家としての山田を信頼して



【写真19】昭和11年東京劇場での公演
「忘れな草」のプロマイド

いたことが伝わってくる。「山」の字が象形文字になっており、大スター・ターキーの遊び心が垣間見えることも興味深い。なお、昭和5年（1930）に築地の東京劇場で開催された東西松竹楽劇部による合同公演では、山田が舞台装置を手がけていることから、山田が東京の楽劇部と交流があったと考える。

周東美材氏は水の江が確立した「男装の麗人」をハリウッド俳優の模倣と青山圭男の演出によって形成されたものであるとしている。さらに水の江は周囲から“天然無縫な男”として振る舞うことを期待されていたとも指摘する⁽⁵⁴⁾。ファンの求める姿を追求し、体現しようとする劇団と劇団員の意図が働いていたことは事実であろう。このようにレビューや化粧、装いなどの“近代化”を研究して咀嚼し、開花させていった歌劇団である。今までの

考察で僅かながら OSK 及び SKD と山田との関係性が浮かび上がってきたが、山田が彼女たちの姿勢をどのように捉えていたかは不明である。その検証は次の調査への課題としておきたい。

おわりに

今回の調査で、大阪にて公演された舞台意匠と確定することができた写真は『第1回 歌舞伎のをどり 春の花束』（【写真2】）と「交通電気博覧会」（【写真13】）のみであった。これらの舞台が山田独自の考案によるものかどうか、筆者の力量不足で特定することはできなかった。

しかし、調査を通して OSK レビュー史における山田の実績と人物像に迫ることができた。閲覧した資料の中には『夏のおどり 花の凱旋門』での業績を讃える感謝状があった。記録上 OSK の公演に携わった最後の舞台である。感謝状には「新歌舞伎座進出初公演に際しよくその趣旨を理解せられ多大のご協力を賜り公演に一層の光彩を添えられました。こゝに深く感謝の意を表します」とある。これは劇団による敬意の表れであるが、山田があくまで組織の一人であったことも示している。

筆者が閲覧した資料群は凶案家・画家ではなく、“O.S.K 専属”舞台装置家としての山田の業績の一端を見いだすことができた。山田は多様な人と事案が関わる環境の中で力を発揮できる人物だった。だからこそ宣伝美術係長という役職を得たのではないかと考える。大劇の舞台装置を務めた大塚克三は「道具帳の絵がいかに美しく、変化に富んだものでも、実際の舞台にするための寸法の割り出しがうまくいかず、時には支木（しぎ）を打つ間隔や余裕がつかれなくて、大道具の制作者から文句を言われ、素人呼ばわりされたことが度々ありました。⁽⁵⁵⁾」と振り返っている。当然ではあるが、舞台の出演者、大道具といった人々との擦り合わせにより、舞台装置が出来上がっていく。観た者に強烈なインパクトを残し、「天才的⁽⁵⁶⁾」と称されるほどの舞台意匠を生み出した山田には、平面から立体にする想像力と周囲との協調性が備わっていたのではないかと。

道頓堀の演劇、文化の中心人物という評価⁽⁵⁷⁾も、OSK にとって重要な舞台に山田が任命されてきた根拠となり得る。その期待に山田が見事応えたことも OSK を唯一無二の存在へと後押ししたと言及することは飛躍し過ぎであろうか。そのために今後も、舞台装置家としての山田の活躍を検証していく必要がある。何より OSK、SKD の舞台写真が発見できたことは喜ばしいことである。至ら

ぬ点が多いことは承知しているが、一連の資料が大正から昭和にわたる近代大阪の舞台の様相を明らかにする一助になると思い、ここに紹介した。

謝辞

本調査において数回にわたる資料閲覧と撮影を許可いただいた、なにわ大阪研究センターに御礼を申し上げる。舞台公演や年代を特定する作業においてはOSK 日本歌劇団創立100周年記念誌委員の岡本澄氏、株式会社クラブコスメチックス 黛 萌々子氏にご協力いただいた。OSK に関する記述は株式会社 OSK 日本歌劇団 取締役の中嶋健治氏にご確認いただいた。ここに深謝申し上げます。

なお本稿はJSPS 科学研究25K03795の助成を受けた研究成果の一部である。

【注釈】

- (1) 「第一節・松竹楽劇部 大阪に誕生」『松竹七十年史』松竹株式会社、1964年、p.384。「優秀外国映画の封切とともに、西洋風の音楽舞踊を上演し、居ながらにして海外の一流歓楽場に遊ぶの思いを得られるなら、若い人たちは必らずや心に快哉を叫ぶであろう」という旨を白井が社員に語っている。
- (2) 前掲同書 p.384。
- (3) 『上方芸能』九八号(上方芸能編集部、1988年、p.31)にて近畿日本鉄道株式会社の藤井賢三社長(当時)が白井はOSK 設立にあたり小林に相談していたと伝え聞いた内容を紹介している。「小林さんはいろいろアドバイスしてくださったり、快くスタッフを貸してくださったりして交流があったようです」と説明し、インタビュアーが両者はライバル同士だったのかと質問すると「日本の文化全体を高めたいというか、もっと大局的な考え方をお持ちだったようです」という見解を示している。
- (4) 昭和7年公演の映像が大阪歴史博物館の常設展示モニターで上映されており、煌びやかな舞台衣裳と劇団員の糸乱れぬ踊りを観ることができる。
- (5) 『OSK 日本歌劇団 100周年誌 桜咲く国～OSK レビューの100年～』(OSK 日本歌劇団、2023年3月、p.83)によると、昭和20年(1945)3月の大阪大空襲によって大劇が焼失。奇跡的に焼け残った大阪松竹座で終戦まで6回もの公演を実施している。また空襲を受けた大劇も応急処置を施し、同年7月に公演を行なっている。
- (6) 昭和16年(1941)に松竹から千日土地建物株式会社へ移管、昭和32年(1957)に株式会社大阪松竹歌劇団を設立して独立、昭和46年(1971)に近鉄グループの傘下となる。平成14年(2002)に近鉄からの支援が打ち切れ、平成15年(2003)に解散を余儀なくされたが、劇団員による「OSK 存続の会」が結成され、精力的に公演を行う。平成16年(2004)に「NewOSK 日本歌劇団」に改称、平成19年(2007)に株式会社ワズカンパニーの経営下となるが、平成21年(2009)に株式会社 OSK 日本歌劇団として独立する。戦禍や支援打ち切りなど、幾度となく危機を迎えた。このため資料があまり残存していないと思われるが、劇団員とファン、スタッフの熱意と地元企業などの協力を通して現在に至るまで劇団の技術や想いが受け継がれている。
- (7) 『道頓堀今昔 芝居画家山田伸吉の世界』(関西大学大阪都市遺産研究センター、2012年、p.3)では昭和20年(1945)4月に京都市上京区長より発行された転出認定証に記載された年齢が43歳となっていることから、山田が生まれた年は明治34年(1901)としている。しかし本調査で閲覧した資料のうち昭和21年(1946)10月21日付で発行された「千日土地建物株式会社 従業員証」の生年月日欄には明治36年6月13日生まれと記されていたため、本稿では明治36年を出生年とした。『春のおどり』のロゴに関して確証はないが、三田純市『道頓堀：川・橋・芝居』(白川書院、1975年、p.185)に「名物〈春のおどり〉が誕生したのは、大正十五年四月のことである。(中略)“をどり”でなく“おどり”と書

- いた。その発案者は、そのころ松竹座の宣伝部にいた山田伸吉さんである。このダンディな、モダンな青年は、なんのためらいもなく〈春のおどり〉と看板を書いた。」とある。〈おどり〉という表記の発案者は食満南北（1880-1957）が定説であるため、このエピソード自体の信憑性が問われるが、ロゴの考案は山田によるものと言及しているため紹介しておく。
- (8) 西村美香「1920年代日本の映画ポスター：松竹合名社山田伸吉の作品について」『デザイン理論』37号、意匠学会、1998年、p.20。
- (9) 前掲『松竹七十年史』、p.387。松竹楽劇部での成功は白井社長の理解ある投資があつてこそとしている。
- (10) 山村博美『化粧の日本史 美意識の移りかわり』（吉川弘文館、2016年、pp.92-96）では明治40年頃になつても地方の女性の間では依然としてお歯黒、そり眉の習慣は残っていたと分析している。
- (11) 『『明治・大正くらしの物語』上巻』（KKベストセラーズ、1978年、p.139）には「たまに大きな帽子屋が婦人物をおいていても、みんな夜会用の半分飾りのような帽子だった」とある。
- (12) 前田 愛「モボとモガ」『大正後期の漫画 [岡本一平・下川凹天] 近代漫画VI』株式会社筑摩書房、1986年、pp.50-51。
- (13) 前掲『道頓堀今昔 芝居画家山田伸吉の世界』（p.6）では大正13年（1924）から昭和5年（1930）にかけて山田が手がけた「SHOCHIKUZA NEWS」は浮世絵風、アール・ヌーヴォー調、アール・デコ調、ロシアの構成主義、耽美主義のオーブリー・ビアズレーなどを取り入れ、独自に再構築したタッチで描かれていると評している。
- (14) 昭和50年（1975）6月18日付『日本経済新聞』文化面に山田が「戦後、私はアルバイトしながら絵の勉強をした」と述べており、少なからず美術界の動向を把握していたと考える。
- (15) 前掲『道頓堀今昔 芝居画家山田伸吉の世界』p.14の図版参照。
- (16) 一例として、終戦翌年の昭和21年（1946）に創刊した『新婦人』（文化実業社）は女性の封建的生活からの解放を提唱し、創刊号の表紙にはアメリカの自由の女神像を描いた。また創刊号の巻頭では「紐育の衣裳だより」（文・伊東茂平、絵・横山とき）と題してアメリカの豊かな経済力とデザイナーが手がけた豪華なイブニングドレスを紹介している。
- (17) 大阪劇場の前身は昭和8年（1933）に竣工した東洋劇場。東洋劇場は大阪千日土地建物株式会社が持ち主であったが、経営不振から昭和9年（1934）に松竹の系列会社であった千日土地建物株式会社と松竹との提携興行に切り替わり、大阪劇場と改称された。同年、松竹楽劇部は大阪松竹少女歌劇団（通称 OSSK）と名称を変更し、大劇を本拠地とした。地下にスポーツヤード付きの食堂があり、客席は1階から4階席まで総計2,780席も備えていた。舞台には廻り舞台とオーケストラボックス、花道が設置されており、東洋一の映画殿堂と謳われた。浅草国際劇場は昭和12年（1937）に開館した、東京の松竹少女歌劇団の本拠地。オーケストラピットが設置されており、客席数は3,600席というマンモス劇場であった。
- (18) 早稲田大学演劇博物館 編『演劇百科大事典 第6巻』平凡社、1962年、p.12 参照。
- (19) 中村秋一は著書『レヴュー百科』（音楽世界社、1935年）でアメリカのレビューは美人団を組織し、エロの大量生産を心掛けていたと分析する（p.45）。また「振付」の章ではレビューの踊り子たちは「どこ迄も、美しい一聯で」あり、「その中の一人か、又は二人が飛び抜けて上手くても駄目」と説明している（pp.238-240）。
- (20) 例えば「高声低声」『歌劇（91）』（p.91）には「寶塚の精華は歌劇だ」とレビューを拒否するファンの投稿文がある。
- (21) 大谷博「歌劇叢」『松竹歌劇』松竹株式会社事業部、1940年、p.17。
- (22) 清水俊二「最近の感想」（前掲同書、p.19）。
- (23) 垣沼絢子『近代日本の身体統制——近代日本の身体統制——宝塚歌劇・東宝レビュー・ヌード』人文

- 書院、2024年、p.35。
- (24) 青山圭男「レビューと舞踊」『春泥』第46号、春泥社、1934年、p.36。
- (25) 昭和8年（1933）『春のおどり』のパンフレットで第一景を「春の誕生 驚奇なガツテイズムの多彩的な舞臺で、先づ近代嗜好の豊かなあなたの眼を睜らせる。そこに踊る春の登音は、超現實派舞踊の明徹なポーズで、あなたを眩惑させるだろう。」と解説している。
- (26) 『大阪都市遺産研究叢書 別集9 山田伸吉の生涯と画業』関西大学大阪都市遺産研究センター、2015年、p.8。
- (27) 松本茂章「OSK ストーリー 80年の夢 第16回「モダンガール・東條薫」『大阪人』大阪都市協会、2004年9月号、p.76。
- (28) 明治35年（1902）には「年齢計算ニ関スル法律」が施行され、現在のように出生日を起点として年齢を数える満年齢が取り入れられた。当時、太陰太陽暦を使用する習慣が残っていたことから、年齢計算方法も市民の間では旧習の数え方が身近にあった可能性もあり、本稿では数え年で算出した。
- (29) 前掲『松竹七十年史』p.388では本場パリでレビューの演出を研究した大森が昭和5年（1930）の『春のおどり』を演出したと記述している。また、大森は自著『舞台装置』（推古書院、1949年）で松竹歌劇団のプロデューサーを務めていると述べており、長きにわたり歌劇団の舞台を支えてきた人物であった。
- (30) 中野淳美・島津良子編「略年譜」『クラブコスメチックス80年史』株式会社クラブコスメチックス、1983年8月。
- (31) 前掲「OSK ストーリー 80年の夢 第16回「モダンガール・東條薫」p.77。
- (32) 前掲『大阪都市遺産研究叢書 別集9 山田伸吉の生涯と画業』p.6。
- (33) 前掲同書 p.7。
- (34) 国税庁「民間給与実態統計調査結果」昭和24年分～（最終閲覧日：2025年1月27日）。https://www.nta.go.jp/publication/statistics/kokuzeicho/jikeiretsu/01_02.htm
- (35) 山本光次 編『大札奉祝交通電気博覧会誌』（大札奉祝交通電気博覧会残務事務所、1929年）参照。
- (36) 前掲同書、p.362。
- (37) 中山太陽堂はプラトン社を設立し、文芸雑誌『女性』や娯楽誌『苦楽』を出版。大大阪時代のモダン文化に大きな影響を及ぼす。また大正13年（1924）に「中山文化研究所」を開設し、美容に関する講座や育児相談など幅広く女性を対象とした文化活動を行っていた。
- (38) 前掲「1920年代日本の映画ポスター：松竹合名社山田伸吉の作品について」『デザイン理論』p.29。
- (39) 前掲『道頓堀今昔』p.3。
- (40) 前掲『日本経済新聞』。
- (41) 前掲『道頓堀今昔』p.31の年譜参照。
- (42) 東京の松竹少女歌劇部選抜メンバーと河合ダンスとの合同公演となり、OSK によるレビューではないがOSK 本拠地での公演のため一覧に掲載する。
- (43) 現存する公演パンフレットには舞台装置に関する記載がない。ただし前掲の『道頓堀今昔』p.30には松竹歌劇団創立30周年記念公演の装置・衣裳が山田と記載されている。同じく『道頓堀今昔』p.8に“カプリー島物語”とクレジットされた舞台背景画が掲載されており、これは該当公演パンフレットの“第十一景 カプリー島物語”に一致することから、本公演の舞台装置は山田が手がけたと考えてよい。なお30周年記念とあるが、歌劇団の創立は大正11年（1922）4月、公演は昭和23年（1948）3月のため、この時点では25周年となる。30周年と銘打った理由は不明。
- (44) 大正から昭和にかけて活躍した舞台美術家。大正15年に松竹宣伝部に入社。歌舞伎、舞踊、喜劇、文楽、レビューと数々の舞台装置を手掛ける。舞台テレビ美術家協会関西支部顧問、演劇協会会員、国際演劇協会会員を務める。

- (45) 「ばれ・ど・らむうる」は大劇での初公演「カイエ・ダムール」から数えて13回目の公演となる。「大劇公演部」として第一回公演と銘打ったと思われる。松竹において重要視する公演であったと推測する。
- (46) 前掲『松竹七十年史』p.384によると松竹楽劇部生徒養成所開設に伴い、作曲家の原田 潤を招聘。その原田の推薦により青山圭男が邦舞、洋舞、音楽、理論、実習等を担当したとある。
- (47) 昭和3年(1928)に東京松竹楽劇部として発足、昭和7年(1932)に松竹少女歌劇部(通称SSK)に改称、昭和8年(1933)に松竹少女歌劇団、昭和20年(1945)に松竹歌劇団(通称SKD)と改称している。
- (48) 『キネマ週報』キネマ週報社、1935年、p.18。
- (49) 『経済人6(7)(58)』関西経済連合会、1952年、pp.69-76。
- (50) 大阪道頓堀・宗右衛門町のお茶屋「河合」を営んでいた河合幸七郎が大正10年(1921)に立ち上げた舞踊団のスター芸妓。駒菊は昭和7年(1932)に舞踊団を引退している。
- (51) 前掲『松竹七十年史』p.395。
- (52) 前掲『OSK日本歌劇団 100周年誌 桜咲く国～OSKレビューの100年～』p.50。
- (53) 前掲「第二節・東京松竹楽劇部の発足」『松竹七十年史』p.387。
- (54) 周東美材「水の江瀧子と石原裕次郎——「男であること」の捏造の系譜」東京音楽大学、2018年。
- (55) 大塚克三『大塚克三舞台美術大道具帳』浪速社、1976年、p.206。
- (56) 松本茂章「OSKストーリー 80年の夢 第17回「モダン・ボーイ 山田伸吉」『大阪人』大阪都市協会、2004年10月号、p.76。
- (57) 黒澤 暁「山田伸吉宛1001通の葉書にみる交流」『関西大学なにわ大阪研究 第7号』関西大学なにわ大阪研究センター、pp.49-50。

【写真】

1. 『第4回「春のおどり」——開国文化——』公演パンフレット、個人蔵
- 2～3、5～12、18. 「山田伸吉関連資料(第2次)クリアファイル①」なにわ大阪研究センター蔵
4. 『第22回「春のおどり」』公演パンフレット、個人蔵
- 13～15. 「東條かほるのアルバム②」なにわ大阪研究センター蔵
16. 「東條かほるのアルバム①」なにわ大阪研究センター蔵
17. 昭和7年(1932)『第7回「春のおどり」——ラッキーセブン——』公演パンフレット、個人蔵
19. 「山田伸吉関連資料(第2次)クリアファイル②」なにわ大阪研究センター蔵

(おくもと みよ 大阪歴史博物館学芸員 なにわ大阪研究センター非常勤研究員)

大正 12 年竣工 大阪松竹座設計図面資料目録

— 道頓堀 CG 復元研究の基礎資料として —

林 武 文 稲 森 穂乃香 李 信 雨

要 旨：大阪松竹座は、1923年の開業から平成6年（1994年）の解体工事開始まで、71年間にわたり興行を続けてきた。しかし、劇場内部は度重なる増改築が行われており、竣工当時の状況を具体的に示す資料はほとんど残されていない。このため、本図面資料は、CGによる復元のみならず、歴史建築や映画・舞台芸能史などの研究分野においても高い価値を有するものである。本目録は、当該資料の内容を記録し、今後の研究に資することを目的として公表するものである。

キーワード：大阪松竹座、大正12年竣工図面、大大阪時代、CG復元

1. はじめに

大阪松竹座は、日本最初期の鉄骨・鉄筋コンクリート造の実演劇場兼映画館として、1923年（大正12年）5月17日に大阪の芝居町・道頓堀に開場した。イタリア・ミラノのスカラ座をモデルとした、ネオルネッサンス様式の意匠を特徴とする近代建築である。1997年（平成9年）に正面ファサードのみを残して近代的な演劇専用劇場に建て替えられるまで、松竹をはじめとする邦画・洋画の封切館として数々の名画を上映するとともに、松竹楽劇部（のちのOSK）のレビューや海外舞踊団、俳優による実演も行われ、道頓堀の舞台芸能に新たな興行の形を提示し続けた。

関西大学なにわ大阪研究センターでは、大大阪時代（大正末期から昭和初期）における道頓堀のCG復元を進めているが、その資料として、2024年度に松竹株式会社および施工元である株式会社大林組より、大正12年竣工の大阪松竹座設計図面の提供を受けた。初代の大阪松竹座は、1923年の開業から平成6年（1994年）の解体工事開始まで71年間にわたり興行を続けてきたが、劇場内部は度重なる増改築が行われており、竣工当時の状況を示す資料はほとんど残されていない。そのため、今回新たに確認された本図面資料は、CG復元のみならず、歴史建築や映画・舞台芸能史などの研究分野においても高い価値を有する。本目録は、資料の内容を記録し、今後の研究に資することを目的として公表するものである。

2. 資料の全容

図面資料は、株式会社大林組においてデジタル化され保管されてきたものである。提供された図面資料データ6件および写真資料データ2件の計8件の概要を以下に記す。

- (1) 図面資料1：フォルダ [6782] に収納された35点の図面画像（TIFF ファイル）。建物全体の立面図、断面図、各フロアの平面図（5種類）が含まれる。図面タイトルの書式、横書きの表記方向の違い、内部構造や客席配置の違いなどから、検討段階からの図面が含まれている。
- (2) 図面資料2：フォルダ [6783] に収納された28点の図面画像（TIFF ファイル）。敷地図面、電気配線図、音響調整設備図、柱や表面アーチの形状の詳細図など含まれ、多くは実施図面と考えられる。なお、このうち18点（6783_0027～0044）は、米国のAtlantic Terra Cotta Company（現存せず）が作成した正面ファサードのレンガ張り部分に関する詳細設計図であり、いずれも英語により記載されている。
- (3) 図面資料3：PDF「1_Structure.pdf」に収納された63点の図面画像。建物全体と細部の造の詳細図面であり、実施図面と考えられる。
- (4) 図面資料4：PDF「2_ElectricalEq.pdf」に収納された6点の図面画像。実施図面。
- (5) 図面資料5：PDF「3_Sanitation.pdf」に収納された5点の図面画像。実施図面。
- (6) 図面資料6：PDF「4_Airconditionnar.pdf」に収納された4点の図面画像。実施図面。
- (7) 写真資料1：PDF「松竹座建築概要」（開場時の松竹座概要パンフレット）に収納された竣工時の松竹座外観と内観の写真7点の画像。
- (8) 写真資料2：松竹座外観、内観写真7点の画像（JPEG ファイル）

3. 資料の目録

それぞれの資料の目録を表1～8に示す。ファイル名等は、可能な限り提供元のものを用いている。

表1 図面資料1（6782フォルダのTIFFファイル）

（単位：尺）

ファイル名	図面タイトル	注記	縮尺	制作年
06782_0001	松竹キネマ座新築設計図 横断面図		1/100	
06782_0002	⑨松竹キネマ座新築設計図	横断面図 A-A	1/100	
06782_0003	⑩松竹キネマ座新築設計図	縦断面図	1/100	
06782_0004	松竹キネマ座新築設計図	横断面図 B B	1/100	
06782_0005	観覧席側面前方詳細図	No. 27	1/20	
06782_0006	無（客席部分の縦断面図）			
06782_0007	松竹キネマ座新築設計図	内部正面観覧席矩計其他詳細図		
06782_0008	松竹キネマ座新築設計図	地階平面図	1/100	
06782_0009	松竹キネマ座新築設計図	壹階平面図	1/100	
06782_0010	松竹キネマ座新築設計図	二階平面図	1/100	
06782_0011	松竹キネマ座新築設計図	壹階平面図	1/100	
06782_0012	松竹キネマ座新築設計図	第一階平面図	1/100	
06782_0013	松竹キネマ座新築設計図	地中階平面図	1/100	
06782_0014	松竹キネマ座新築設計図	地階平面図	1/100	
06782_0015	④松竹キネマ座新築設計図	壹階平面図	1/100	
06782_0016	④松竹キネマ座新築設計図	第貳階平面図	1/100	
06782_0017	⑤松竹キネマ座新築設計図	二階平面図	1/100	

06782_0018	⑤松竹キネマ座新築設計図	参階平面図	1/100	大正十年
06782_0019	⑥松竹キネマ座新築設計図	第四階屋上平面図	1/100	大正十年十一月四日
06782_0020	⑥松竹キネマ座新築設計図	参階平面図	1/100	
06782_0021	③松竹キネマ座新築設計図	地階平面図	1/100	
06782_0022	松竹キネマ座新築設計図	地階平面図	1/100	
06782_0023	松竹キネマ座新築設計図	三階平面図	1/100	
06782_0024	③松竹キネマ座新築設計図	第壹階平面図	1/100	
06782_0025	③松竹キネマ座新築設計図	第貳階平面図	1/100	
06782_0026	④松竹キネマ座新築設計図	第参階平面図	1/100	
06782_0027	④松竹キネマ座新築設計図	第四階平面図	1/100	
06782_0028	112 松竹キネマ座新築設計図	地階平面図	1/100	大正十一年十一月四日

表 2 図面資料 2 (6783フォルダの TIFF ファイル)

(単位: 尺)

ファイル名	図面タイトル	注記	縮尺	制作年
06783_0010	松竹キネマ座敷地平面図		1/100	
06783_0011	松竹キネマ座敷地局		1/100	
06783_0012	無 (敷地図、建増分)	赤線内 他人名義トスル分 青線 建増ノ分		
06783_0013	松竹キネマ座新築設計図	地階平面図	1/100	
06783_0014	松竹キネマ座新築設計図	第壹階平面図	1/100	
06783_0015	松竹キネマ座新築設計図	第貳階平面図	1/100	
06783_0016	松竹キネマ座新築設計図	第参階平面図	1/100	
06783_0017	無 (第四階平面図)	正面四階上屋根平面図	1/100	
06783_0018	金 [数不明] 図 (部品図)			
06783_0019	エクオリザー分岐図面			
06783_0020	エクオリザー接続図 其ノ壱			
06783_0021	エクオリザー接続図 其ノ弐			
06783_0022	防 [数不明] ヒューズボックス (部品図)			
06783_0023	金属管電線接続図			
06783_0024	無 (1 階配管図)			
06783_0025	松竹キネマ座 ? 階? 話及電鈴配置図			
06783_0026	無 (4 階間取り図、配線図)			
06783_0027	Kinema Theatre (建物正面柱の詳細図) *本図以降、タイトルと注記は全て英語表記	*本図以降、制作会社 ALTANTIC TERRA COTTA CO., 350 Madison Ave., New York の表記あり。		
06783_0028	Kinema Theatre (建物正面アーチ左右の壁装飾部分の詳細形状、断面形状)	SECTION ON CENTER LINE FULL SIZE DETAIL OF ANCHORS		
06783_0029	無 (正面アーチと壁装飾部分の詳細形状)	PLAN AT AA		
06783_0030	Kinema Theatre (柱、壁装飾部分の断面図)	1 1/2 SCALE SECT AT AA		

06783_0031	無（正面最上階屋根部分装飾の詳細形状）	ONE SET LIKE THIS. SIDE ELEVATION KEY PLAN. ONE OTHER SET OPP. HAND 4		
06783_0032	無（正面最上階屋根部分装飾の詳細と断面形状）	ONE SET LIKE THIS KEY PLAN 2 AND ?		
06783_0033	無（建物側面の矩形窓と断面形状）	ONE SET LIKE THIS MARKED 1 ON KEY PLAN SIDE ELEV.		
06783_0034	Kinema Theatre（建物側面の矩形窓と断面形状）	SECTION THR B,B.SAME SECTION FOR SHEET #4.B,B		
06783_0035	無（表面丸窓部分の詳細）	ONE LIKE THIS & ONE OPPOSITE? MARKED 2, 3, ON KEY PLAN		
06783_0036	OSAKA KINEMA THEATRE（外部表面アーチ形状）	SECTION THR OPENING AT A, A		
06783_0037	無（外部側面の矩形状窓）	ONE SET LIKE THIS MARKED 4 ON KEY PLAN. THIS SET OPPOSITE HAND TO SET MARKED FOR THIS WORK SEE DRAWING 6		
06783_0038	Kinema Theatre（外部側面の矩形状窓と断面形状）	FOR PLANS SECTIONS SEE DWG #Z		
06783_0039	Kinema Theatre（表面最上階の底部分の詳細と断面形状）	SECTION A-A SECTION AT D.D		
06783_0040	無（建物最上階の底部分の側面図）	(5) SETS LIKE THIS MARKED NO. 3, 4, 5, 6, 7 ON KEY PLAN. FRONT ELEVATION		
06783_0041	Kinema Theatre（建物最上階の底部分の正面図、上面図、断面図）	SECTION B-B, SECTION AT C.C.		
06783_0042	無（建物最上階の底部分右端と中央部の正面図）	(1) SET LIKE THIS. SIDE ELEVATION. No. 9 ON KEY PLAN. (1) SET LIKE THIS. SIDE REAR. No. 10 ON KEY PLAN. (1) SET LIKE THIS. SIDE REAR. No. 11 ON KEY PLAN.		
06783_0043	無（建物最上階の底部分左端の正面図）	(1) SET LIKE THIS. SIDE ELEVATION. No. 9 ON KEY PLAN.		
06783_0044	IRON SCHEDULE, OSAKA KINEMA THEATER（鉄筋、鉄骨など構造部材の図）	SKETCHES		

表3 図面資料3（PDFファイル：1_Structure.pdf）

（単位：尺）

ページ	図面タイトル	注記	縮尺	制作年
1	Frame Plans	地下室、第一階、第二階、第三階、第四階、屋上遊歩道？ PL1		
2	観覧席上部？屋詳細図, Beam Girder lior	PL2		
3	Frame Elevations	PL3		
4	Gallery Girder and Cantilevers	PL4		
5	Fruss Lletails	PL5		
6	基礎詳細図（其一）	基礎平面図、PL6		

7	基礎詳細図 (其二)	鉄柱長サ及断面図表、PL7		
8	Base plate 及び Anchor bolt.	鉄柱長サ及断面図表、PL8	1/100、 1/20	
9	外壁軸割図	正面骨組面 側面骨組面 背面骨組面 PL9	1/100	
10	柱配列並二柱ノ向キ, 及外壁軸割図	柱番号並据付方向? 示図、 PL10	1/100、 1/200	
11	Column List 補足, 壁梁取付詳細	柱詳細並壁梁取付図其他?、 PL11	1/2000	
12	Column List 中図示ノ始リ訂正?	鐵筋詳細図、PL12	1/2000	
13	式階觀覽席突出梁詳細	式階觀覽席突出梁及大梁詳細 図、PL13	1/2000	
14	參階觀覽席詳細	參階觀覽席突出梁及大梁詳細 図、PL14	1/2000	
15	舞台上部大梁 (甲乙) 詳細図	PL15	1/2000、 1/100	
16	松竹キネマ座 第式階及參階觀覽席鉄鋼構造 平面図? 蹴上部 踏面部 根? 堅筋違詳細 図	(構)三十四	1/20、 1/50	大正十一年 二月九日
17	松竹キネマ座新築設計図 各階床版床梁及 柱配置図		1/200	
18	松竹キネマ座新築工事設計図 基礎平面図 (基 礎詳細図参照)	(構)一	1/100	
19	基礎及鉄筋混凝土梁詳細図	(構)四		
20	松竹キネマ座設計図 鉄筋混凝土床版詳細 図	(構)六	1/20?	
21	松竹キネマ座設計図 鉄筋混凝土梁及床版 詳細図	(構)七	1/10?	
22	松竹キネマ座新築設計図 床梁床板及柱配 置図其壱	(構)八, (構)二十六ノ通り	1/200	
23	松竹キネマ座正面ドライエーリア構造詳細 図其ノ一	(構)二十二		
24	側壁及ドライエーリア詳細図 其ノ二	(構)二十三		
25	松竹キネマ座 鉄骨小屋組詳細図 其之壱	(構)二十四ノ (2)		
26	松竹キネマ座 式階觀覽席受梁トラス及詳 細図其一	(構)二十五	1/20	
27	松竹キネマ座新築設計図 変更済 床梁床 板及柱配置図其一	(構)二十六	1/200	
28	松竹キネマ座新築設計図 第式階觀覽席ト ラス詳細図 其式?	(構)二十八	1/20	
29	松竹キネマ座新築設計図 第參階觀覽席 A トラス詳細図 其參	(構)二十九	1/20	
30	松竹キネマ座第壱階、第式階東側 客用表 階段詳細図 (? 西側階段同断)	(構)三十	1/?	
31	松竹キネマ座第二階觀覽席トラス詳細図 其參 (E トラス及 F トラス)	(構)三十三	1/20	
32	松竹キネマ座第二階側觀覽席 (H) (I) ト ラス及根太, 垂直筋違詳細図	(構)三十六	1/20	
33	松竹キネマ座新築設計図 各階床板床梁 及柱配置図		1/200	

34	松竹キネマ座第二階側観覧席 (H) (I) トラス及根太, 垂直筋違詳細図	(構)三十六	1/20	
35	松竹キネマ座 第参階観覧席 A トラス, 第貳階観覧席 A トラス, 階段割変更詳細図	(構)三十七, (構)二十九及(構)二十五参照	1/20	
36	松竹キネマ座 第参階観覧席 B トラス及 C トラス詳細図	(構)三十八	1/20	
37	変更済, 第貳階観覧席鉄骨構造平面図, 第参階観覧席鉄骨構造平面図	(構)四〇, (構)三十四ヲ如斯変更ス	1/50、 1/20	
38	松竹キネマ座 第二階観覧席 B 及 C トラス階段割変更図	(構)四十一, (構)二十八ノ内階段ヲ如斯変更ス	1/20	
39	松竹キネマ座 第参階観覧席 D トラス詳細図	(構)四十八	1/20	
40	松竹キネマ座 第貳階観覧席 E トラス F トラス変更詳細図	(構)四十九	1/20	
41	松竹キネマ座 第貳階及第参階観覧席 側面壁際段受及後部鉄筋違詳細図?	(構)五拾壹	1/20	
42	松竹座 舞台両側鉄筋混凝土造俳優室詳細図	(構)五十三	1/20?	
43	松竹座 鉄筋混凝土造防火塀詳細図	(構)五十四	1/20	
44	舞台屋? 側鉄製階段詳細図	(構)五十五	1/20	
45	松竹座 鉄製非常階段詳細図 (西側面之?) 東側面分モ構造之?	(構)五十六	1/20?	
46	松竹座 第壹階玄関及化粧室? 釣金物 (第二階床版二埋込ム分) 配置及詳細図	(構)五十七	1/20、 1/50?	
47	松竹座 観覧席大天井釣金物詳細図	(構)五十八	1/20	
48	松竹座 舞台家西側鉄骨階段詳細図	(構)六十四, (構)五十五参照	1/20	
49	松竹座 正面, 三階ヨリ四階へ及四階ヨリ屋上~階段詳細図	(構)七十	1/20	
50	松竹座 第参階観覧席下 天井釣金物詳細図	(構)七十三	1/20	
51	松竹座 第貳階観覧席下 天井釣金物詳細図	(構)七十一?	1/20	
52	松竹座 背面物置設計図 (其貳)	(構)七十八	1/20	
53	松竹座 第参階観覧席 上床張詳細図	(構)七十九	1/20	
54	松竹座 第参階観覧席 上床束? 及土台配置図	(構)八十	1/50	
55	松竹座 廊下? 屋根両脇モーター室及? 出入口庇詳細図	(構)八十三	1/20	
56	松竹座 舞台家西側 第一階 第二階 鉄骨階段変更詳細図	(構)八十五	1/20	
57	松竹座 第三階? 床及柱配置図	(構)八十八	1/20	
58	松竹座 舞台家西側 第三階及第四階二至? 鉄骨階段 及 両側廊下階屋根ヨリ俳優室? 屋根二至ル鉄骨階段 詳細図	(構)八十一	1/20	
59	松竹キネマ座 梁及床桁及断面一覧表 トラス配置図 (四階及屋根)	(構)九	1/200	
60	松竹キネマ座 談話? 鉄筋混凝土梁詳細図		1/20	
61	松竹キネマ座 新築設計図 ドライエーリア側壁及基礎其他詳細図			
62	基礎詳細図 (其壹)			大正? 年 十一月四日
63	基礎詳? (其ノ二)	(構)三、PL1	1/?	

表 4 図面資料 4 (PDF ファイル : 2_ElectricalEq.pdf)

(単位 : 尺)

ページ	図面タイトル	注記	縮尺	制作年
1	各階各配電盤略図 (接続?)			
2	ブートライト及ボーダーライト配線図			
3	変電室?配電盤及同接続図	但し C ノ配電盤ハ見積外トス		
4	松竹キネマ座電燈分電盤及同接続図			
5	リフト配電図?			
6	松竹キネマ座第四階電話?電?配置図		1/100	

表 5 図面資料 5 (PDF ファイル : 3_Sanitation.pdf)

(単位 : 尺)

ページ	図面タイトル	注記	縮尺	制作年
1	松竹キネマ座配管図	地中階平面図	1/100	大正十一年二月
2	松竹キネマ座配管図	第壹階平面図	1/100	大正十一年二月
3	松竹キネマ座配管図	二階平面図	1/100	大正十一年二月
4	松竹キネマ座配管図	第参階平面図	1/100	大正十一年二月

表 6 図面資料 6 (PDF ファイル : 4_Airconditionar.pdf)

(単位 : 尺)

ページ	図面タイトル	注記	縮尺	制作年
1	松竹キネマ座暖房及換気装置図	地中階平面図	1/100	大正十一年二月
2	松竹キネマ座暖房及換気装置図	一階平面図	1/100	大正十一年二月
3	松竹キネマ座暖房及換気装置図	二階平面図	1/100	大正十一年二月
4	松竹キネマ座暖房及換気装置図	三階平面図	1/100	大正十一年二月

表 7 写真資料 1 (松竹座建築概要 .pdf)

ページ	写真タイトル
1	外観
2	表入口
3	玄関 大広間
4	舞台
5	観覧席
6	欧風食堂の一部
7	夜景

表8 写真資料2 (JPEG ファイル)

ファイル名	写真の内容
T0183-001	外観 (正面)
T0183-002	外観 (正面)
T0183-003	外観 (映画の看板あり)
T0183-004	玄関 (新春の松飾あり)
T0183-005	大広間
T0183-006	ミュージアムショップ
T0183-007	食堂
T0183-008	客席 (貴賓席、金屏風)

4. 図面資料の分析

4.1 資料の分類

今回はCG復元の資料として、建築構造の把握を目的に利用したため、建物の構造に関する図面の分析を行った。この対象となる平面図、立面図、断面図は、図面資料1と図面資料2の合計63点の図面にほぼ含まれており、この内訳は平面図21点、立面図4点、器具や装飾など細部の情報が描かれた図面20点、その他電気系統図など18点であった。ただし、これらの図面は設計途中の検討図面も含まれており、描かれた時期を同定する必要があるがあった。なお、図面資料3は、構造の詳細や電気配線あるいは個々の装飾部分について描かれた実施図面であると考えられ、分析結果の確認のための資料として用いた。

図面資料1および2に含まれる平面図と立面図のあわせて25点を建物の構造や記述された日付、図面の書式や文字、記述方法、建築構造などから分類した。また分類の際には写真資料1および2 (表4、5)も参考にし、実際の竣工時の構造を把握した^[1]。

図面を分類する際に利用した特徴や手がかりを、以下に列挙する。

(特徴1) 見出し文字

図面種別を表す見出し文字には、大きく分けて3種類の記述方法がある。それぞれを1-a、1-b、1-cとする。1-aは横書きで右から左に記述されたものを指す (図1)。1-bは横書きで左から右に記述されたものを指す (図2)。1-cは縦書きのものを指す (図3)。

松竹キマ座新築設計図

図1 1-aの一例

松竹キマ座新築設計図 第1階平面図 縮尺百分之五

図2 1-bの一例

松竹キマ座新築設計図 第1階平面図 縮尺百分之五

図3 1-cの一例

(特徴2) 図面内の文字

図面内に記載されている文字には、場所の説明などを目的としたものがあり、その記述方向には右から左と左から右の2種類が存在する。右から左に書かれているものを2-a(図4)、左から右に書かれているものを2-b(図5)とする。



図4 2-aの一例(出口)

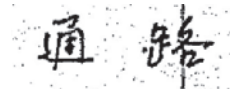


図5 2-bの一例(通路)

(特徴3) 建築構造

建築構造のうち、特に座席スペースの形状に着目する。1階座席側方スペースの仕切りの手すりの形状や、2階特別席の形状などについて、写真資料1および2と比較し、実際の施工時とは大きく異なる特徴を持つ図面を3-a、比較的建築時に近いと考えられる図面を3-bとする。

上記の3つの特徴に加え、図面内部に記載された日付、図面情報、見出しの形式を基準として、大きく7つのグループに分類した。以下に各グループの特徴と図面の点数を記述する。

グループ1 (7点) : 1-a、2-a、3-aに該当。図面種別が下部に四角で囲まれて記載されている。

グループ2 (4点) : 1-a、2-b、3-aに該当。右下に「大正十年十一月四日」の記載がある。

グループ3 (6点) : 1-c、2-b、3-aに該当。見出しが線で囲まれている。

グループ4 (1点) : 1-c、2-b、3-bに該当。見出しの数字が漢数字で表記されている。

グループ5 (1点) : 1-a、2-b、3-bに該当。

グループ6 (5点) : 1-b、2-b、3-bに該当。

グループ7 (1点) : 1-b、2-b、3-bに該当。「大正十一年十一月??日作製」の記載がある。

4.2 建築構造の変遷についての考察

上の図面グループについて、どのように建築構造の構想が変化したのか考察する。

まず、グループ6についてであるが、このグループに含まれる図面は、大阪松竹座図面内に含まれていた電気系統図と共に使用されていたことが確認されている。また、平面図で確認できる1階中央座席奥の映写室が図面に記載されていること、2階側方の構造の特徴が写真と図面で一致していることなどから、実施に近い段階で作成されたものであったと推測できる。

次に、グループ7については、このグループに含まれる図面には、「大正十一年十一月??日作製」という日付が記載されており、これは開場の約半年前にあたる。このことから、グループ7の図面も実施に近い段階で作成されたものであったと推測できる。

以上の点から、グループ6とグループ7の図面が、7つのグループの中で最も新しいものであると考えられる。

続いて、グループ1～5について考察する。グループ1については、分類時に特徴3で3-aに該当するとしたように、1階座席側方の形状が実施段階とは異なる矩形状であること、さらに2階、3階には実施段階で存在する側方特別席や通路スペースが確保されていない唯一の図面グループであることから、最も初期段階の図面であると考えられる。

グループ2、グループ3については、分類時に特徴3で3-aに該当し、1階座席側方の形状はグループ1と同じ矩形状であるが、2階と3階には側方にスペースが追加されている点で、実施図面に近づいたといえる。さらに、グループ2とグループ3を比較すると、グループ2では2階側方がグループ6と同様に「特別席」して記載されているのに対し、グループ3では側方に通常座席が追加されているのみとなっている。従って、グループ2のほうが比較的後の段階の図面であると推測できる。

また、グループ4については、分類時に特徴3で3-bに該当しており、1階側方の形状はグループ6と同じであるものの、1階に映写室が描かれていないことから、グループ6より前の段階の図面であると考えられる。

同じく3-bに分類されたグループ5については、舞台や天井の装飾が図1に近いことから、構想がある程度実施段階に近づいているものであると考えられる。

5. まとめ

本稿では、大正12年(1923年)に竣工した大阪松竹座に関する新出図面および写真資料の全体像を整理・紹介するとともに、それらをもとにCG復元を行うための建築的・歴史的な分析を加えた。大阪松竹座は、近代大阪を代表する劇場建築として長年にわたり芝居文化を支えてきたが、2026年5月をもって閉館することが決定している。こうした状況の中で、現在の大阪松竹座のみならず、その起源である大正12年当時の姿を正確に把握し、将来に向けて記録・継承していくことは、演劇・興行文化の保存という観点にとどまらず、地域の歴史的アイデンティティや文化的価値を再認識し、今後の地域振興につなげる上でも重要な意義を持つ。本研究で取り上げた図面・写真資料は、当時の空間構成や意匠、劇場機能を具体的に読み解く手がかりを提供するものであり、CGによる復元的な研究や展示、教育的活用への展開を可能にする基礎資料として、大きな役割を果たすと考えられる。

謝辞

大正12年大阪松竹座の図面資料および写真資料をご提供いただいた、松竹株式会社ならびに株式会社大林組の関係各位に、心より感謝の意を表します。

参考文献

- [1] 稲森穂乃香, 林武文, 3次元CGによる大正期大阪松竹座の復元, 電気学会研究会資料(知覚情報研究会), PI-25-021, pp.51-54, 2025-3.

(はやし たけふみ 関西大学総合情報学部教授)

(いなもり ほのか 関西大学総合情報学部 林武文研究室4年生)

(り しんう 松竹音楽出版株式会社取締役)

契沖歌軸 4 点

乾 善 彦

要 旨：近時、関西大学図書館に収蔵された契沖の歌軸 4 点の紹介。今まで知られていなかった和歌の詞書を含む資料として注意される資料である。

キーワード：契沖和歌、新出資料

関西大学図書館に所蔵される契沖関係の図書について、「関西大学蔵契沖関係書あれこれ」（関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー Vol.10、2015.3）にそのあらましを紹介し、さらに、その後収集された歌軸について、「関西大学図書館蔵契沖和歌資料二軸」（なにわ大阪研究 3 号、2021.3）、「契沖和歌資料拾遺（続）」（なにわ大阪研究 4 号、2022.3）に報告し、また、2024年 4 月 7 日から 5 月 31 日まで、関西大学博物館において開催された関西大学文学部創設 100 周年・関西大学博物館開設 30 周年記念連携企画展『花開く大阪の文化』の「第 2 章 大坂の古典学 契沖・宣長から岩崎美隆へ」に主だったものを展示し、図録において解説を加えた。本稿は、それらに続いて、近時、関西大学図書館に収蔵された、契沖歌軸 4 点について紹介し、浪華の学僧契沖研究の一助とするものである。

1、契沖和尚早梅歌 N8C2*911.15*6 資料 ID 212592670

【書誌情報】

契沖和尚早梅歌 / 契沖 [著] 1 軸 * 軸名は箱書きによる

軸長 32.0cm

紙幅 159.0×28.1cm

本紙 15.1×15.3cm

箱書

契沖和尚早梅歌（表）

契沖早梅歌 耘堂愛翫 「耘」⑩「堂」⑩（裏）

極札

表：圓珠庵契沖〈早梅／一 名何〉⑩（汲水）

裏：歌一首 名アリ〈己巳〉二 ⑩（恵） * 文化 6 年（1809）2 月

包：極

書付 1 枚 契沖早梅和歌（本紙の解説文）

【本文】

早梅

- 一 名何
- 一 色何
- 一 初開何月
- 一 持主誰

此梅につけて

契沖

きくはかり長月かけて花さかは

梅てふりに香をやそへまし

西山黄門自號梅里先生

故云

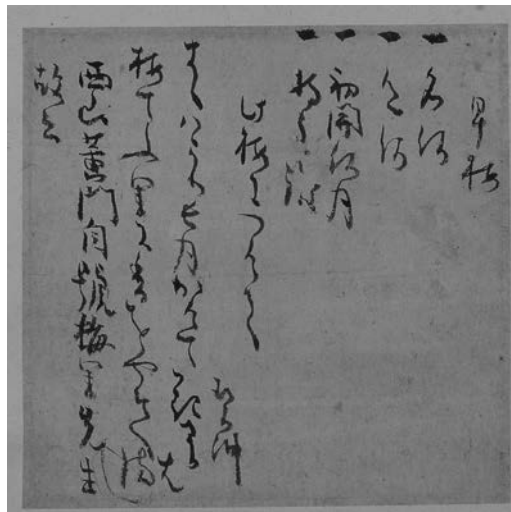
『漫吟集類題』（4751）

ある處に、む月より咲菊ありと聞て、人してその枝をこひて、西山の□□（黄門）の御もとにつくらさせたまふやとて奉るにつけて、つかふる人のもとにかく聞ゆ

きくはかり長月かけて花さかは梅てふりに香をやそへまし

みつから梅里先生となのらせたまふによれり

※『漫吟集類題』とでは、詞書の部分が大きく異なっており、『類題』では、「睦月より咲く菊」を奉ったとあるが、本軸では梅につけて奉っていることになる。「きくはかり長月かけて」という句からすると、当然、菊であるべきところ。『契沖全集』未収。



(図版1) 1. 契沖和尚早梅歌

2、契沖詠草 N8C2*911.15*4 資料ID 212526511

【書誌情報】

契沖詠草 / 契沖 [著] 一軸 箱入 * 軸名は箱書きによる

軸長 39.8cm

紙幅 90.8×35.2cm

本紙 16.6×24.1cm

四首目と五首目の間に紙継あり

箱書

契沖詠草 一軸 (表)

大倉了恵極札添 (裏)

極札

表：生玉契沖 法をもる [汲水] (印)

裏：詠草名アリ 甲子八 [恵] (印) * 甲子八 = 文化元年 (1804) 8 月

包

外包：契沖 / 了恵世了極

内包：極

書付 1 枚

契沖 (名冲字空心姓下川氏 / 元禄十四年正月廿五日寂六十二歳)

* 大倉汲水 (~ 文政 8 年) 鑑古筆家。姓は管原、字は実福、幼名政吉、俗称大倉治兵衛初め了恵、後に汲水と号した。尚古昔斎の別号がある。京都の人鑑古家で光琳風の画をよくした大倉是誰の男、西掘川綾小路南に住し父の業を継ぎ鑑古を業としかたわら光琳風の画を描がいた。天明七年落飾して了恵と号し、文化十四年聖護院に盈仁親王から汲水の号を賜わり示来汲水と称した。尚また一条准后忠良公から古昔斎の号を付興されている。文政八年二月廿九日没、年六十三。没後嘉永四年二月廿五回忌に際し聖護院雄仁法親王から法橋位を贈られた。(文化十 古筆 文政五 古筆)

(日文研平安人物志短冊帖データベース解説)

【本文】

* 翻刻にあたっては、() に『漫吟集類題』の歌番号を、また、右に漫吟集類題の本文との異同を示した。

社壇 契沖

法をもる我ならねともすてやらぬ

神のこゝろをものにしめすか (5995)

これをすうる所をさためつ (あるいは「門」カ) さか

木の一かたにしきみうゑんとおもひて * 詞書は類題にナシ

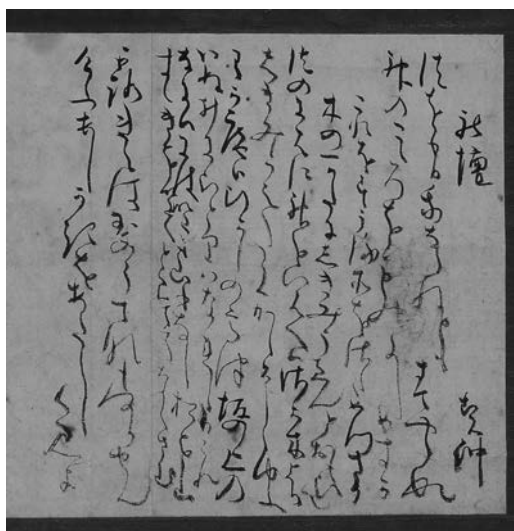
法のにはに神をいはへはさか木より

しきみかえたにかゝるしらゆふ (5997)

わか庵はひかしの高津坂の上の
いぬみにひとりはなれたるこれ (5990) *る = 「り」の上に筆を加えて「る」にする
なにはには野も山もなし松を山
すゝきを野へとみ (見) てそなくさむ (5991)
-----紙継-----
露きえは玉のうてなも何かせん
けふあしかきをあたらしくみ (見) よ (5998) *みよ — ゆふ (類題)

※冒頭に「社壇 契沖」とあるが、「社壇」の歌は、一首目二首目と末に継がれた五首目の三首で
あり、三首目四首目の歌は、その直前の「題しらず」に分類させる歌である。以前、紹介した
「立春七首 (N8C2*911.15*2 資料ID 212156624)」(「関西大学図書館蔵契沖和歌資料二軸」、な
にわ大阪研究 3号、2021.3)と「[契沖和歌稿] (N8C2*911.15*3 資料ID 212293796)」(「契沖
和歌資料拾遺 (続)」、なにわ大阪研究 4号、2022.3)にも、一行目題詞の下に「契沖」の署名
があり、『契沖全集十六』所収の、国会図書館蔵「円珠庵契沖詠草」解説の「自署していること
から想像すると、何びとかに書き与えたものであろう」という解釈を引用した。両者にも、『漫
吟集類題』にみられない歌や詞書が含まれており、貴重な資料であることは言を俟たない。本
軸においても、二首目の詞書(四、五行目)は『類題』にはみられないものである。ただし、
本軸で注意すべきは、末尾の一首が紙継によるものである点である。これを契沖が何者かに書
き与えたとするには難がある。軸に仕立てられたときに、継ぎ足されたものとするのが妥当
であろう。

ただし、これ以前の歌は、一首目の字の大きさに比べて、二首目以降、字が小さくなってお
り、この紙継の歌は一首目とほぼ同じ大きさになっている。この歌は、『類題』では、二首目の
次に位置するものであり、結句が異なってもいる。抜けたものを契沖が別紙にあらたに書き与
えた可能性もなしとはしない。『類題』の「ゆふ」だと契沖の動作になり、本軸の「見よ」だ
と、契沖が相手にあつらえたものとなり、誰かに与えるときに改作したことは十分に考えうる。



(図版 2) 2. 契沖詠草

3、契沖詠草八首 N8C2*911.15*7 資料ID 212608991

【書誌情報】

契沖詠草八首 / 契沖 [著] 1 軸 箱入 *軸名は外箱箱書きによる

軸長：46.1cm

紙幅：94.0×42.0cm

本紙：17.3×39.2cm

箱書（二重箱）

外箱：契沖詠草八首 〈紅葉〉（表）

辛卯初夏日 春洋観併記 ㊦[春]（朱印・陽刻）（裏）

内箱：圓珠庵契沖歌物（表）

小草庵春山玠玩 春山隱士友人 梅翁誌

同孫 梅園處士 眇生秘笈

圓珠庵契沖歌物芳蹟無疑者也（裏）

*相沢春洋（1896～1963）書家 梅翁・梅園については不明

極札

表：圓珠庵契沖 〈紅葉／もえしけり〉 ㊦[蘭齊]

裏：哥物名アリ 丙子十二 ㊦[意門] *丙子十二 = 文化13年（1816）12月

包

外包：圓珠庵契沖歌物 極

中包：極札

書付 2 枚

①契沖

名沖字空心下川氏生撰州尼崎十三歳 / 出家住生玉曼荼羅院泉州久井里及撰 / 池田川側今里妙法寺後退隱于高津 / 圓珠庵元禄十四年正月二十五日卒 [消] 寂 / 時于年六十 [三あるいは四を消] 二元禄辛巳年ヨリ / 文政十一 〈戊子〉 年迄百弍十八年 小草時芳

②圓珠庵契沖阿闍梨碑銘

*撰津名所図会 卷三 東生郡 圓珠庵契沖阿闍梨碑 を写したもの

【本文】

紅葉

契沖

もえしけり秋にうつろふもみち葉に

*もみち葉に——もみち葉を（漫）

さかりを見るそかつははかなき（漫2950）

*さかりを——盛と（漫）

からにしきたつたひめこそ身におはめ

たかためにおるちはたなるらん（漫2951）

山姫のもみちの錦たちぬは、

あらしのかたな瀧のしらいと（漫2889）

秋きりのたつたのおくの立田姫
もみちのにしきいつのしわさそ (漫2884)

鶉

いにしへのそれかあらぬか深草の
野をなつかしみ鶉なくなり (漫2785)

落葉浮水

ことのはのうくとやきかむ立田川
あらふにしきを人にかたらは (漫3054)

— 紙継 —

もちか因幡守にて下りて
むつきつたちの宴の歌なか
につきて

秋の田のいなはの山のはるかすみ
むかしの風になひけとそ思ふ (漫5348)

葉世也と注したれば万葉は
よろつよつたはれとなつけたる
かたにあらんやうの心に

浜千鳥ちとりもあかてうをの名の
よろつ世までとふめるあとやこれ (漫5350)

和名云 針魚〈はりを／よろつ〉

*河上落葉 (類題)

*うく — 上 (類題)

*人に — 人の (類題)

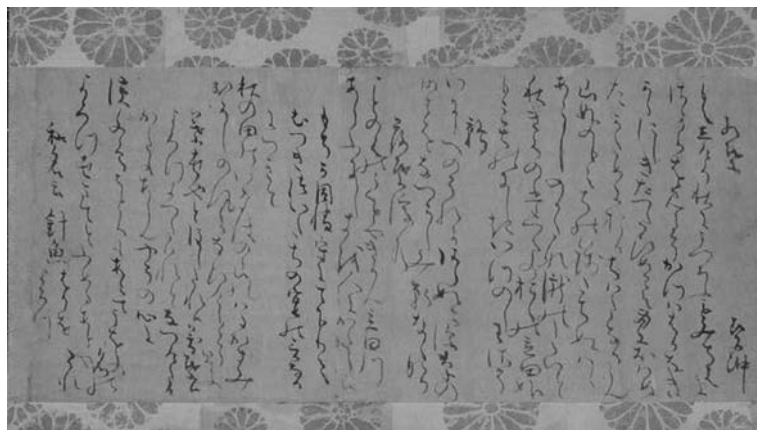
*前欠部「大伴やか」カ

*詞書、類題にはなし

*詞書、類題にはなし

*左注 (〈／〉 二行割書)、類題にはなし

※本軸にも、前軸と同様、契沖の自署と紙継とがあり、本紙の出所が気になるところ。前紙は秋部「紅葉」の四首、「うづら」の一首と冬部にある「河上落葉」の一首であるが、本紙には歌題が「落葉浮水」となっている。一首目と六首目とには、歌文に異同があり、それぞれ歌意が異なってしまう。後紙は詞書が不完全で、前に詞書の一部があったものと思われる。雑歌中の「名所をよめるうたども」の中の二首であるが、『類題』には詞書がなく、また、七首目の左注「和名云 針魚〈はりを／よろつ〉」も『類題』にはない。以前に紹介した[契沖和歌稿]（「契沖和歌資料拾遺（続）」（なにわ大阪研究4号、2022.3））にも『類題』にはない詞書がみとめられたが、このようなどころにも軸装の遺文の資料性が考えられよう。



(図版3) 3. 契沖詠草八首

4、契沖あさり詠草 N8C2*911.15*5 212592661

【書誌情報】

契沖あさり詠草 / 契沖 [著] 1 軸 箱入 *軸名は内箱箱書きによる

軸長 46.0cm

軸幅 89.0×41.2cm

本紙 14.7×39.5cm

箱書 (二重箱)

外箱

圓珠庵老師真蹟横物 歳暮立春

内箱

契沖あさり詠草 (表)

あさからぬ心の花のいろも香も 留めてにほふもじの関守 大平 (裏)

極札

契沖阿闍梨 あたらしき ㊦「汲水」 (表)

詠草立春歳暮哥四首有名 戊子夏 ㊦「好齋」 (裏) *戊子年 = 文政11年 (1828)

包

外包

契沖詠草 〈戊戌改正〉 (朱) *戊戌年 = 天保9年 (1838)

内包

極

*極札は、大倉好齋のもので、裏面には「好齋」印が用いられるが、表には、なお「汲水」印が用いられている。

大倉好齋 (~文久2年) 古筆鑑定家。姓は菅原。名は信古。古昔園と号した。京都の人、大倉汲水の長男、寛政七年八月生、幼名政吉、俗称五兵衛、文政八年二月落髪して好齋と改め古昔庵と号し天保元年八月古筆鑑定を以て紀州公に仕えた。嘉永二年十月学習院の徴に應じて院庫の古書籍類の鑑定を行い司四年八月には法橋に叙せられている。文久二年十二月二十日没、年六十八。西林寺に葬る。(文政十三 古筆 天保九 古筆 嘉永五 古筆)

(日文研平安人物志短冊帖データベース解説)

書付 1 枚

契沖・大平略伝

【本文】 () は『漫吟集類題』の歌番号 *は類題との異同

立春

あたらしきこよみと

うめの初花といつれかけさは
まつ披くらむ (32)

*けさは—さきに (類)

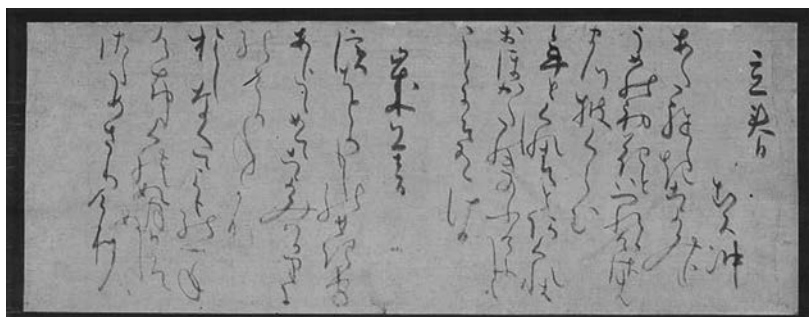
年とくれ春とあくれは
おほかたのきのふけふしも
ことにそ有ける (34)

歳暮

浜ちとりもしのせき守
あとゝめてこよみはかりに
のこる年かな (3455)
おしなへてよもの一年
けふくれぬ月日はぬしも
さためさりけり (3456)

*せき守—関路に (類)

※やはり、以前にも立春の歌七首と歳暮の歌三首を書いた[立春七首]の軸を紹介した(「関西大学図書館蔵契沖和歌資料二軸」(なにわ大阪研究3号、2021.3))が、本軸にはそこに収められた歌うたと重複する歌はない。『類題』との本文の異同は、やはり歌意にかかわり、単なる誤写ではない。どちらが初案かはにわかにはきめがたいが、これが契沖の所為にかかわるとすると、今までに紹介した『類題』との異同の多くと同じように、契沖自身が他の某人に書き与えた可能性は残る。立春と歳暮の歌を書き並べる要請があったものと考え、季節に応じた軸ということになり、それを欲したとある人々の層があったものと思われる。その点で本軸も考えさせることの多い軸といえよう。



(図版4) 4. 契沖あさり詠草

以上四点は、いずれもそれぞれに今までに知られなかった部分を含んでおり、契沖の歌業を考えるうえで、新たな知見をもたらすものと考えられよう。ここに図版を添えて紹介するゆえんである。

付記

図版の掲載にあたり、関西大学図書館の御許可をえた。なお、本稿は、科学研究費基盤研究(C)(代表:乾善彦)および、科学研究費基盤研究(B)(代表:田中大士)、同じく基盤研究費(C)(代表:尾山慎)、関西大学東西学術所東アジア言語資料研究班(主幹:奥村佳代子)の研究成果の一部を含む。

(いぬい よしひこ 関西大学文学部教授)

2024年度なにわ大阪研究センター基幹研究班

なにわ大阪研究センターにおける 研究成果の可視化

研究代表者	林	武	文			
研究分担者	乾	善	彦	藪	田	貫
	井	浦	崇	橋	寺	知
	丸	山	徹	北	川	博
	李		信	雨		

要 旨：基幹研究班では、なにわ大阪研究センターに蓄積されてきた研究成果の可視化と発信を横断的課題とし、それを基盤として歴史・文化・地域に関する実証的研究を行ってきた。2024年度は、演芸文化や伝統的な「モノ作り」をめぐる資料調査と実証研究を中心に、①道頓堀五座および芝居小屋大工・中村儀右衛門資料の調査と上方演芸研究、ならびにCGによる可視化の試み、②堺市との共同調査に基づく鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家研究を通じた鉄砲および「モノ作り」の歴史的検討、⑤浪花大坂図屏風に関する研究を進めた。
本稿では、これらの研究活動の内容と成果を整理し、その意義を示す。

キーワード：道頓堀、可視化、歌舞伎番付、堺鉄炮鍛冶屋敷、火縄銃、大阪松竹座、浪花名所図屏風

1. はじめに

基幹研究班は、なにわ大阪研究においてこれまでに蓄積されてきた研究成果の継承・整理・発信に重点を置き、長期的な展望に基づく継続的研究の推進を目的として設置された⁽¹⁾。この目的のもと、複数年にわたる研究テーマ4件が設定されており⁽²⁾、2024年度は以下の3テーマに取り組んだ。

- ① 道頓堀五座および芝居小屋大工・中村儀右衛門資料の調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信
- ② 鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく、鉄砲および「モノ作り」に関する研究
- ⑤ その他（浪花大坂図屏風に関連する研究）

研究テーマ①および②は2023年度からの継続研究であり、研究テーマ⑤は、2015年度に調査され

た「浪花名所図屏風」が本研究センターに寄贈されたことを契機として、センター所蔵資料に対する調査研究の展開と情報発信を目的に設定したものである。

2. 研究成果

(1) 研究テーマ①について

大大阪時代とは、大正末期から昭和初期、すなわち1925年から1930年代半ばにかけて、大阪が人口および産業規模において東京を凌ぎ、日本最大の都市として繁栄した時代を指す。この時代には、水都大阪を象徴する運河網とともにコンクリート造のモダン建築が立ち並び、商業・文化・芸術の各分野において国際都市としての発展を遂げた。

本研究では、大大阪時代を象徴する建築が集中していた昭和10年（1935年）当時の道頓堀芝居街を対象に、景観のCG復元を行った。道頓堀は江戸時代以来、歌舞伎や人形浄瑠璃の芝居小屋が立ち並ぶ芝居町として発展してきたが、大大阪時代には映画、バレエ、ミュージカル、ジャズ、カフェ、キャバレー、ダンスなどの西洋文化が流入し、新たな娯楽文化の中心地となった。

本年度は、道頓堀芝居街のうち、松竹座付近、戎橋周辺、角座付近を対象に景観資料を収集し、復元CGを制作した。完成したCGはセンターWebサイトを通じて公開した⁽³⁾。今後は、ここで制作したCGモデルを基に、XR (Extended Reality/Cross Reality) やメタバースを活用した体験型デジタルコンテンツを制作し、一般向けの情報発信を通じて地域振興に寄与する予定である。

一方、CG復元と並行して地域の芝居文化や舞台芸能に関する研究も進展した。センター所蔵の劇場大工・中村儀右衛門資料を対象とした研究⁽⁴⁾、当時の芝居役者絵・ポスター絵画で活躍した山田新吉資料に関する研究⁽⁵⁾を進めた。さらに、松竹株式会社所蔵の松竹座公演演目資料に基づき、大阪松竹座開場（1923年、大正12年）から1936年（昭和11年）までの上映作品・上演演目一覧を作成し、研究資料として公開した⁽⁶⁾。

大阪の歴史建築に関する研究は、センターが所蔵する赤松麟作の版画集「大阪三十六景」より毎号2点ずつをセンター紀要「なにわ大阪研究」の表紙絵として掲載するとともに解説を加えている。この画像集は、1947年（昭和22年）に発行されたものであるが、赤松が描いた大阪の情景は、戦前気の最も豊かで活気のあった頃の風景と考えられる⁽⁷⁾。

今年度の最大の成果として、大正12年竣工の大阪松竹座に関する設計・実施図面が新たに発見され、松竹株式会社より研究用として提供を受けた点が挙げられる。これらは施工元である株式会社大林組によりデジタル化・保管されてきた資料であり、CG復元のみならず、建築史および芝居文化史の研究においても極めて貴重なものである。提供された資料は、設計図面63点（TIFF形式）、建築実施図面77点（PDF形式）、画像資料15点である。

2024年度には、これらの資料分析を進め、大阪松竹座内部のCG復元作業を開始した⁽⁸⁾。併せて、資料目録を作成し、CG復元研究や建築史・芝居研究に資するため、公表を行うこととした⁽⁹⁾。

2025年度には、大正12年開場時の大阪松竹座の復元CG公開を目指すとともに、松竹株式会社との連携により、メタバースを活用した新たな芝居鑑賞方法について検討を進める予定である。

(2) 研究テーマ②について

2021年度より進めてきた火縄銃の製造工程に関する調査およびCGによる可視化研究は2023年度に完了し、制作したCG映像の一部は2024年3月に開館した堺市立町家歴史館「鉄炮鍛冶屋敷」に

において常設上映されている。2024年度は、CG制作過程で取得した井上関右衛門作火縄銃のCGデータを活用し、複合現実感（MR：Mixed Reality）技術を用いた体験型コンテンツ「MR火縄銃」を開発した^(10,11)。また、これらをオープンキャンパスや市民セミナーにおいて一般市民向け展示として公開した。さらに、鉄砲伝来の地である種子島・西之表市経済観光課より、デジタルコンテンツによる火縄銃情報発信への協力依頼を受け、2025年度の出展に向けた調整を進めた。

火縄銃製造技術に関する研究としては、2024年度より銃身の金属組織分析を通じた鍛造・加工技術の解明に着手した⁽¹²⁾。堺市より井上関右衛門作の火縄銃2丁の銃身提供を受け、切断面の金属組織分析を行い、堺における火縄銃の金属組成に関する新たな知見を得た⁽¹³⁾。

2015年度より継続している、井上家文書の調査研究に関しては、製造業者の鉄砲史に関する研究の進捗があり、天保十三年「金銀出入帳」の資料が公開された^(14,15)。

堺市との連携事業としては、2024年10月12日（土）に鉄砲鍛冶屋敷講演会「堺と国友 ― 受け継がれる鉄砲鍛冶の歴史 ―」を堺市立東文化会館5階メインホールにて開催した。本講演会では、井上関右家文書研究の成果、国友における火縄銃研究の現状と堺との比較、材料分析による科学的アプローチを通じた火縄銃製造史について報告を行った⁽¹⁶⁾。併せて、会場ロビーでは、複合現実感を用いた火縄銃体験コンテンツ「MR火縄銃」を展示し、来場者に体験の機会を提供した。

2025年度以降は、市民向けセミナーを堺鉄砲鍛冶屋敷におけるギャラリートークとして実施する予定であり、2025年度は藪田、丸山、林が担当する。

(3) 研究テーマ⑤に関して

「浪花名所図屏風」⁽¹⁷⁾が所蔵者の厚意により本センターに寄贈されたことを受け、学内での披露を兼ねた特別展示を実施した⁽¹⁸⁾。展示内容は、①寄贈記念特別展「浪花名所図屏風 ― 『天下の台所』大坂の名所と風景 ―」（2024年10月21日～31日、関西大学千里山キャンパス簡文館（博物館）別館1階セミナー室）、②ギャラリートーク「浪花名所図屏風 ― 『天下の台所』大坂の名所と風景 ―」（講師：藪田貫〔関西大学名誉教授・兵庫県立歴史博物館館長〕、2024年10月28日、同会場）である。

「浪花名所図屏風」は、2025年度に大阪市立住まいのミュージアム「大阪くらしの今昔館」においても展示された。また、屏風に描かれた景観と大阪の歴史地図および現代景観との対応関係を示す情報コンテンツをHTML5により制作し、センターWebサイトで公開した⁽¹⁹⁾。

3. 今後の方向

研究テーマ①については、新出の「大正12年松竹座図面」に基づく松竹座内部の復元およびメタバース技術を用いた情報発信を推進する。併せて、松竹株式会社および株式会社大林組との連携により、芝居研究・建築史・歴史研究を横断する研究の深化を図る。中村儀右衛門資料および山田新吉資料については、画像データを紐付けたWebデータベースでの公開を検討する。

研究テーマ②については、研究成果の継続的発信に加え、堺鉄砲鍛冶屋敷におけるギャラリートークやコンテンツ展示を実施する。また、井上家文書のデジタルアーカイブ化について、堺市との協働により検討を進める。

研究テーマ⑤については、「浪花名所図屏風」に関する調査研究およびWebコンテンツ制作・情報発信を継続する。今後は、センター所蔵資料の研究と発信の在り方について、基幹研究班のテーマ改編も視野に入れつつ検討を進める予定である。

参考文献

- (1) 乾善彦, 林武文, 藪田貫, 井浦崇, 橋寺知子, 丸山徹, 北川博子, なにわ大阪研究センターにおける基幹研究班の役割と意義について——2022年度の報告と今後の展望——, なにわ大阪研究, No.6, pp.33-38, 2024.
- (2) なにわ大阪研究センターホームページ, 研究活動について, <https://www.kansai-u.ac.jp/naniwa-osaka/research/> (2025.01.06参照).
- (3) なにわ大阪研究センターホームページ, デジタルコンテンツ「大大坂時代の道頓堀復元CG(昭和初期)」
<https://ku.naniwa.kansai-u.ac.jp/DC/index.html> (2025.01.06参照)
- (4) 北川博子, 中村儀右衛門の大道具帳, なにわ大阪研究, No7, pp.31-42, 2025.
- (5) 黒澤暁, 山田伸吉宛1001通の葉書にみる交流, なにわ大阪研究, No7, pp.43-50, 2025.
- (6) 李信雨, 大阪松竹座の開場(1923年、大正12年)から1936年(昭和11年)までの上映作品と上演演目一覧, なにわ大阪研究, No7, pp.51-60, 2025.
- (7) 橋寺知子, 大阪市庁(表紙にちなんで), なにわ大阪研究, No.7, pp.111-112.
- (8) 稲森穂乃香, 林武文, 3次元CGによる大正期大阪松竹座の復元, 電気学会研究会資料(知覚情報研究会), PI-25-021, pp.51-54, 2025-3.
- (9) 林武文, 稲森穂乃香, 李信雨, 大正12年竣工 大阪松竹座設計図面資料目録——道頓堀CG復元研究の基礎資料として——, なにわ大阪研究, No8, 2026(掲載予定).
- (10) 宋文澤, 林武文, 複合現実感を用いた火縄銃の動作原理の可視化, 電気学会研究会資料(知覚情報研究会), PI-24-064, pp.9-12, 2024-12.
- (11) 宋文澤, 林武文, 火縄銃への理解を深めるためのMRインタフェース, INTERACTION2025, 3B-25, pp.1115-1116, 2025-3.
- (12) 丸山徹, 現代科学からみた鉄炮用鉄の魅力, なにわ大阪研究, No.5, pp.67-71, 2023.
- (13) 丸山徹, 堺の鉄炮銃身の科学組成と金属組織, なにわ大阪研究, No7, pp.25-30, 2025.
- (14) 藪田貫, 堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家所蔵資料選「メーカーの鉄砲史」1 宝暦二年「鉄砲御断控」, なにわ大阪研究, No.6, pp.60-94, 2024.
- (15) 藪田貫, 堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家所蔵資料選「メーカーの銃砲史」2 天保十三年「金銀出入帳」, なにわ大阪研究, No.7, pp.123-142, 2025.
- (16) 関西大学Webサイト, 「堺市と関西大学との地域連携事業『鉄炮鍛冶屋敷講演会』を開催」 https://www.kansai-u.ac.jp/ja/about/pr/pressrelease/2024/08/post_79267.html (2025.01.06参照).
- (17) 乾善彦, 関西大学なにわ大阪研究センター蔵「浪花名所図屏風」左隻・右隻 図版解説, なにわ大阪研究, No.7, 口絵, pp.1-3, 2025.
- (18) 寄贈記念特別展「浪花名所図屏風」——「天下の台所」大坂の名所と風景——の開催について, なにわ大阪研究センターWebサイト, <https://www.kansai-u.ac.jp/naniwa-osaka/archives/2024-10-04-10-30.html> (2025.01.06参照).
- (19) なにわ大阪研究センターホームページ, デジタルコンテンツ「浪花名所図屏風 デジタルコンテンツ」
<https://ku.naniwa.kansai-u.ac.jp/DC/index.html> (2025.01.06参照).

(はやし たけふみ 関西大学総合情報学部教授 なにわ大阪研究センターセンター長)

(いぬい よしひこ 関西大学文学部教授)

(やぶた ゆたか 関西大学名誉教授)

(いうら たかし 関西大学総合情報学部教授)

(はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授)

(まるやま とおる 関西大学化学生命工学部教授)

(きたがわ ひろこ 関西大学非常勤講師)

(り しんう 松竹音楽出版株式会社取締役)

2023～2024年度なにわ大阪研究センター公募研究班 甘櫨丘遺跡群の変遷と土地利用に関する研究 ——発掘調査の成果を中心に——

研究代表者 井 上 主 税
研究分担者 西 本 昌 弘 長谷川 透

要 旨：甘櫨丘遺跡群の発掘調査を通じて実施した研究の成果として、飛鳥時代後半を中心とした大規模な造成跡と土地利用の状況が判明した。特に、掘立柱建物などの建物の配置や性格が明らかになりつつある。また、飛鳥時代前半～中頃の遺構・遺物も確認したことから、谷部での土地利用がこの時期まで遡ることも明らかとなった。

キーワード：甘櫨丘遺跡群、土地利用、建物跡、飛鳥時代

1. 研究概要

2023～2024年度なにわ大阪研究センター公募研究班として、標記の研究課題に取り組むこととなった。飛鳥地域（現在の奈良県高市郡明日香村）に所在する高松塚古墳は、本学名誉教授の網干善教氏（当時は助教授）により1972年に発掘調査が行われ、極彩色の壁画が発見されてから2022年で50年を迎えた。飛鳥は古代の都が置かれた地であり、律令国家形成期にさまざまな諸制度が発足したことが知られている。飛鳥時代の実像は、宮殿跡のほか、飛鳥寺や川原寺跡などの古代寺院、中尾山古墳や高松塚古墳といった終末期古墳の発掘調査を通じて明らかになってきた。文献史学では、『日本書紀』や『古事記』などの史料のほか、遺跡から出土した木簡を対象に研究が進められてきた。

このように、飛鳥には多くの歴史的遺産が所在することは周知の事実であるが、飛鳥川の西岸に位置する甘櫨丘あまかしのおかもまた歴史的遺産の一つであり、『日本書紀』皇極天皇3年条には蘇我蝦夷・入鹿の家（邸宅）が甘櫨丘に並びたっていたと記されている。この丘の東麓では、これまで奈良文化財研究所によって9次にわたる発掘調査（甘櫨丘東麓遺跡）が行われ^{註1}、7世紀中頃の焼土層や7世紀の掘立柱建物等の遺構が確認されており、これらの遺構が蘇我氏の邸宅の一部ではないかと推測された。

2020年度から明日香村教育委員会と本学考古学研究室の共同調査（甘櫨丘遺跡群）が実施されており^{註2}、2024年度までの5か年にわたる発掘調査では、建物などの関連施設の検出や整地の範囲の解明などが期待されている。飛鳥時代の邸宅の様子を知りうる資料は少なく、この遺跡の解明はその手がかりとなり得るものである。また発掘調査を通じて、飛鳥時代に朝廷の実権者として権勢を

ふるった蘇我氏一族に関する資料が確保されれば、飛鳥時代の研究においては非常に大きな意義をもつ。

そこで本研究では、この甘檜丘遺跡群を対象とし、発掘調査を通じて得られた資料のほか、『日本書紀』などの文献史料にみられる記録などをもとに、本遺跡の性格や歴史的な意義について考察することを目的とする。また、これらの資料をもとに、本学で考古学研究室を中心にこれまで進めてきた飛鳥研究をさらに発展させることが期待できる。そして、発掘技師や学芸員などの専門職への就職を希望する学部生や大学院生が今回の発掘調査に参加することで、現場経験を積むことができ、教育面における貢献も大きいと考える。

以上の研究課題に対して、ここでは2024年度下半期に実施した甘檜丘遺跡群の発掘調査の成果を述べ、そのうえで2023年度・2024年度に実施した発掘調査を通じた研究成果のまとめと今後の課題について述べる。

2. 2024年度甘檜丘遺跡群の発掘調査

2024年度の発掘調査は、2022年度調査区^{註3}の西側に調査区を設定した。本調査区は、東西10m、南北20mに設定したが、遺構が調査区外に展開することが予想されたため、西側を凸型に拡張した。調査総面積は235㎡である。

本調査区は、南向きの傾斜が緩い小さな谷に立地する。遺構の検出は、花崗岩風化土の地山上面および谷を埋め立てた造成土上面でおこなった。遺構検出の結果、本調査区では掘立柱建物、掘立柱塀、柱穴、大型方形土坑（井戸か）、土坑（墓壙か）、焼成遺構を検出した。以下、検出した各遺構、出土遺物について報告する^{註4}。

(1) 検出遺構

掘立柱建物 1

調査区の西側で検出した掘立柱建物である。建物の柱間規模は東西2間、南北3間以上である。柱掘形の平面形態は隅丸の方形ないし長方形で、断面形態は箱型を呈する。柱掘形の規模は、一辺が約110～125cmを測る。掘形の深さは深いもので約90cmあり、全体として残りが良い。柱間寸法は掘形芯々で南北約240cm等間、東西約270cm等間。柱の大半は抜き取られていた。柱抜き取り穴は断面形態がV字状を呈し、平面規模は柱掘形と同程度の大きさである。この建物の柱穴は後述する掘立柱塀の柱穴埋土の上面から掘り込まれており、掘立柱塀より掘立柱建物1が新しい。建物の方位は南北を基準に西に8度振れて建てられ、西側にある尾根を背にして立地することから、東向きの建物であったと考えられる。

掘立柱建物 2

調査区の東側で検出した総柱建物である。建物の柱間規模は南北2間、東西2間である。柱掘形の平面形態は隅丸の方形で、断面形態は箱型を呈する。柱掘形の規模は、一辺が約100～120cmを測る。掘形の深さは約80～90cm。柱間寸法は掘形芯々で南北約150cm等間、東西約150cm等間。柱の大半は抜き取られていた。柱抜き取り穴は断面形態がV字状を呈し、平面規模は柱掘形と同程度かそれより小さい。柱穴底面には根石や礎板などは認められない。この総柱建物は、2022（令和4）年度に確認された東西2間、南北3間の総柱建物から西側約4mに位置しており、2棟の総柱建物が東西に並び建っていたとみられる。さらに、この2棟の総柱建物はともに建物方位が西に約36～40度

振れており、一連の施工により建てられたと考えられる。

掘立柱塼

調査区の西側で検出した掘立柱塼である。柱掘形の平面形態は隅丸の方形で、規模は約115～135cmを測る。柱間寸法は南北に約225cm等間である。掘形の深さは約80～90cmある。柱は抜き取られているが、柱の抜き取りは柱掘形の真ん中を掘り込んで真上に引き抜いたものや柱筋に沿って長楕円形に掘り込んで抜いたものがある。この柱抜き取り穴から7世紀後半頃の土器が出土した。掘立柱塼と掘立柱建物1の柱掘形には重複関係があり、これにより掘立柱塼は掘立柱建物1より古い。掘立柱塼の方位は、南北を基準に西に約40度振れており、掘立柱建物2とおよそ近似する。

大型方形土坑

調査区の北側で検出した大型方形土坑である。平面形態は隅丸方形であるが、四辺にそれぞれ長短がありやや不整形を呈する。平面規模は南北長約260～300cm、東西長約270～300cmを測る。土坑は上下2段構造になっており、上段は平面形が約260～300cm四方で、遺構面からの深さは約150cmを測る。下段は平面形が約180cm四方で、深さ60cmを測る。上から見ると、下段の掘り込みは上段の中心よりやや南西方向に偏っている。土坑は地山を刳り貫くように垂直に掘り込まれており、四方の壁面は垂直に整っている。上段と下段の間には約20～50cmの幅でテラス状の平坦面があり、そのテラス面の下段縁には約20cm大の石が並べられていた。これらの石は部分的に2石積みになっているものの、雑な積み方であることから、上段掘形に使用された裏込め石と考えられる。土坑埋土は上から灰白色粘質土、茶褐色土混じり灰白色粘質土、明青灰色砂質土、にぶい赤褐色砂質土、青灰色シルト、青灰色砂質土、灰色粘質土の順で堆積する。明青灰色砂質土では高台付きの須恵器杯身が出土したが、時期は特定できなかった。また、明青灰色砂質土以下では木製品や木簡、削り屑、木片が出土した。この遺構の振れは、南北を基準にして西に約35～40度振れており、掘立柱塼や掘立柱建物2と同じ振れを持つことから、これらの遺構と同時期に開削された可能性が高い。

土坑

調査区中央付近で確認した長方形の土坑である。土坑は地山を掘り込んだもので、平面規模は南北175～187cm、東西93～99cmを測る。断面形態はコップ型を呈し、深さ72～79cmを測る。底面は平坦になっており、規模は南北約142cm、東西約75cmである。土坑の埋土は上から黄褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、褐色砂質土の順で堆積する。土坑埋土は人為的な攪乱などは認められず、中ほどが窪んだ自然な堆積状況であった。出土遺物には土器の小片が数点認められた。遺構の形状や堆積状況、周辺遺構との位置関係からみて、古代以降の墓壙と考えられる。

焼成遺構

調査区の北東側で確認した焼成遺構である。この焼成遺構は焼土ブロックと土器がまとまって廃棄された状態の遺構で、5箇所確認できた。遺構の一部には被熱により赤変した壁土も遺存しており、高熱を使った何らかの操業が認められる。この遺構は、一郭にまとまる傾向が見受けられ、南北方向に約150cm間隔で並んでおり、操業の単位を示していると考えられる。焼土の中には鉄滓や製塩土器などが数点出土したことから、いわゆる小鍛冶のような生活に伴う操業が行われていたとみられる。また、焼土とともに出土した土器類は7世紀前半～中頃に位置付けられ、この遺構が周辺遺構に比べ古いことがわかる。

(2) 出土遺物

調査区及び拡張区では、土師器、須恵器、瓦、鉄滓、製塩土器、焼土、木製品、木簡、削り屑、木材片、石材が出土した。木簡は大型方形土坑から1点出土した。甘檜丘遺跡群ではじめての出土であり、遺跡や遺構の性格を考えるうえで重要な資料である。

(3) 調査成果のまとめ

今回の調査によって、甘檜丘に取りつく南向きの小支谷において、飛鳥時代全般を通じた活発な土地利用を確認した。今回確認できた遺構の変遷は、谷の開削と埋め立て→焼成遺構（7世紀前半～中頃）→掘立柱塼・掘立柱建物2・大型方形土坑（7世紀後半頃）→掘立柱建物1（7世紀末頃～奈良時代前半頃か）→土坑（古代以降）の順で変遷していたことが明らかとなった。

これまで飛鳥時代後半を中心とした遺構・遺物が検出されていたが、今回はじめて、飛鳥時代前半～中頃の遺構・遺物を確認できたことから、谷部での土地利用が飛鳥時代前半～中頃まで遡ることも判明した。

3. 成果の公表

2023年度および2024年度の調査成果については、出土資料の整理・分析作業中であるが、概報、展示や図録、講演会（成果報告会等）で発表している。

【概報】

長谷川透 2024「2022-1次 甘檜丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和4年度』明日香村教育委員会

【展示図録】

長谷川透 2025「甘檜丘遺跡群」『大和を掘る40——2024年度発掘調査速報展——』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

【研究論文】

長谷川透 2024「最近の発掘から 奈良県明日香村甘檜丘遺跡群」『季刊考古学』第168号 雄山閣
西本昌弘 2025「蘇我本宗家の本拠地と甘檜岡家」『なにわ大阪研究』第7号

【講演会】

井上主税・西本昌弘・長谷川透 2025「甘檜丘遺跡群の変遷と土地利用に関する研究——発掘調査の成果を中心に——」『なにわ大阪研究センター研究成果報告会』、於関西大学

長谷川透 2025「甘檜丘遺跡群の調査」『明日香村発掘調査報告会』、於明日香村中央公民館

井上主税 2025「考古資料から考える蘇我氏——甘檜丘の遺跡を中心に——」『明日香村発掘調査報告会』、於明日香村中央公民館

4. まとめと今後の課題

以上、2024年度の甘檜丘遺跡群の発掘調査を通じて実施した研究成果を報告した。2024年度の調査では、前年度までの調査と同様、飛鳥時代後半を中心とした大規模な造成跡と土地利用の状況を確認した。特に、建物の配置や性格が明らかになりつつある。また、飛鳥時代前半～中頃の遺構・遺物も確認したことから、谷部での土地利用がこの時期まで遡ることが判明した。

2023（令和5）年度の調査は、2022（令和4）年度調査区に南接する畑地で実施したが、調査区を2箇所設定した。1区では柱穴、石群、土坑、素掘溝を、2区では柱穴、石列、小穴、素掘溝を検出した。このうち、石群は石を人為的に積み上げたものではなく、溝に投棄されたような状況であり、共伴土器から飛鳥時代後半から奈良時代前半頃に位置付けられる。2区の東壁付近では、2022年度に検出した北側石列の延長とみられる石列を確認した。この北側石列は、さらに西側にも延長するとみられる。さらに、2022年度に検出した掘立柱建物（総柱建物）が西側に展開しないことが明らかになり、この建物は南北3間、東西2間であることが確定した。

2か年にわたる調査の成果として、甘樫丘遺跡群の変遷と土地利用に関して以下の点が明らかになった。甘樫丘東麓の小さな谷部において、飛鳥時代前半から奈良時代前半頃まで活発な土地利用が行われていた。有力豪族の蘇我氏が活躍した飛鳥時代前半以前から谷の造成がはじまり、飛鳥時代後半頃から掘立柱建物や掘立柱塀、井戸などの公的な施設に建て替えられるなど、飛鳥時代全般を通じた土地利用の変遷と実態を明らかにできた。奈良時代以降の土地利用としては、木棺墓等が造営されたことも確認できた。

謝辞 本研究は、2023～2024年度関西大学なにわ大阪研究センター公募研究班において、研究課題「甘樫丘遺跡群の変遷と土地利用に関する研究——発掘調査の成果を中心に——」として研究費を受け、その成果を公表するものである。



写真1 調査区 全景（北から）



写真2 調査区 大型方形土坑（北東から）

註

- 1 大林潤・若杉智宏・清野孝之・和田一之輔2014「048 甘樫丘東麓遺跡の調査 第177次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所など
- 2 長谷川透2024「2022-1次 甘樫丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和4年度』明日香村教育委員会
- 3 註2と同じ
- 4 長谷川透2025「甘樫丘遺跡群」『大和を掘る40——2024年度発掘調査速報展——』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

（いのうえ ちから 関西大学文学部教授）
（にしもと まさひろ 関西大学文学部名誉教授）
（はせがわ とおる 明日香村教育委員会係長）

2025年度なにわ大阪研究センター基幹研究班

なにわ大阪研究センターにおける 研究成果の可視化と情報公開

研究代表者	林	武	文			
研究分担者	乾	善	彦	藪	田	貫
	井	浦	崇	橋	寺	知
	丸	山	徹	北	川	博
	李	信	雨	奥	本	未
						世

研究テーマ

2025年度は、以下の3テーマについて研究を進めた。

- ①道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信
- ②鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究
- ③その他（幕末から大大阪時代への変遷に関わる地域研究、所蔵資料のデジタルアーカイブ化と公開に関する研究）

研究テーマ①と②は2023年度からの継続研究テーマである。また研究テーマ③は、基幹研究班の今後の研究展開を検討するために設けたものであり、所蔵資料に対する調査研究や、これまでの研究成果の蓄積に基づく研究も含まれている。

進捗状況

(1) 研究テーマ①について

松竹座を含む大正末から昭和初期（いわゆる「大大阪時代」）の道頓堀の景観復元が終了し、昭和10年前後の松竹座外観、戎橋北詰・南詰、角座付近の静止画と動画をセンターWebサイトにて公開した。またXR技術を用いた体験型のデジタルコンテンツとして、複合現実感（MR）、360°パノラマVR、メタバースの各プラットフォームを用いたコンテンツ開発を進め、一般向けの展示発表を開始した。

2025年度からは、松竹株式会社より提供された新出の大正12年松竹座図面を用い、開業時の劇場内部のCG復元を開始した。また、これに並行して、センター保有資料を用いた演劇史および建築

史に関する研究を進めている。

大阪松竹座は、2026年5月に閉館が決定されており、これに関連したセンターへの問い合わせ件数も増加している。これまでの研究成果に基づく知見を、テレビや新聞等のメディアを通じて発信している。

(2) 研究テーマ②について

昨年度までに制作を終えた火縄銃の製造工程のCG映像をセンターWebサイトで公開するとともに、その仕組みを体感できるMRコンテンツを開発した。これらは、講演会会場、オープンキャンパス、ナレッジキャピタルTheLab、堺鉄炮鍛冶屋敷、種子島鉄砲まつり等において一般公開した。

井上家文書の調査研究により、江戸時代後期における社会と鉄砲産業の実態の解明を進めており、以下の講演会にて報告を行った。

- 堺市博物館企画展（2025年4月12日実施）
演題：鉄炮鍛冶の世界——砲術家と下職の間——
講師：藪田貫（関西大学名誉教授）
- 吹田市民文化祭「秋季歴史文化講座」（2025年10月25日実施）
演題：堺鉄炮の歴史——鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家
講師：藪田貫（関西大学名誉教授）

また、昨年度から継続して実施している火縄銃の金属組織分析の結果およびCGによる可視化研究の成果と併せて、堺市主催の連携講座において報告を行った。

- 連続講座「科学でひもとく鉄炮鍛冶屋敷」
 - 講座① 鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家に入出入りする人々（10月12日、午前、午後）
講師：藪田 貫（関西大学名誉教授）
 - 講座② CGでよみがえる火縄銃の世界——鉄炮鍛冶が伝えた技と発射の仕組みを映像でたどる——（11月9日、午前、午後）
講師：林 武文（なにわ大阪研究センター長・総合情報学部教授）
 - 講座③ 鉄炮銃身の金属組織からわかる鍛造技術（12月6日、午前、午後）
講師：丸山 徹（関西大学化学生命工学部教授）

これらの講演会の資料は、本報告末尾に添付している。今後は、これらの成果を歴史研究と関連づけながら研究を深化させる予定である。

さらに、文書に含まれる「鉄炮作法秘伝書」については、現代語訳を制作し、2025年度末に刊行することとなった。

(3) 研究テーマ③について

センター所蔵資料である「浪花名所図屏風」は、2025年度に大阪市立住まいのミュージアム「大阪くらしの今昔館」で開催された特別展「徳川大坂城400年——城のかたち・まちの姿——」（2025年2月11日～4月6日）において、江戸時代の城下町の景観を描いた作品として一般公開された。

一方、「豊臣期大坂図屏風」に関しては、井浦によるデジタルアート作品が、兵庫県立歴史博物館の特別展「描かれたお城と城下町——築かれた城・理想の城・古城——」（2025年07月12日～8月31

日)において上映された。さらに、2025年度に開催された関西・大阪万博オーストリア館では、日奥芸術交流において不可欠な貴重な歴史資産として取り上げられ、会期を通じて館内の大型ディスプレイで提示された。あわせて、政府の委嘱を受けたオーストリアの芸術家が新たなデジタルアート作品を制作した。6月20日には、来日した芸術家グループのメンバーによる講演会を千里山キャンパス以文館4階で開催した。

その後、オーストリア大使館の招請により、エッゲンベルク城開城400年記念行事に出席し、その際、これまでの本センターにおける歴史研究成果がテレビ放映された。現在、オーストリア大使館、エッゲンベルク城博物館を通じて交流を継続し、共同制作を目標に検討を進めている。

今後の方向

2026年度からは研究テーマを以下の2点とする。

- ① 大大阪時代のなにわ大阪に関する研究（大大阪と関西大学、道頓堀と松竹座のCG復元、芝居・文化研究、都市景観と建築史研究等）
- ② センター保有資料のデジタルアーカイブ化および研究成果の公開と情報発信に関連した研究

研究テーマ①に関しては、対象年代を大正末期から昭和初期の「大大阪時代」とその周辺期に焦点化し、地域連携型の研究を一層深化させることを目的とした。また、サブテーマとして、以下を挙げている。

- (1) 「大大阪」の形成・発展に関する研究、「大大阪時代」に活躍した本学所縁の人物研究
- (2) 大正12年大阪松竹座の新出図面に基づく復元研究（松竹株式会社との共同研究）
- (3) 道頓堀を中心とした上方演芸史の研究
- (4) なにわ大阪の歴史建築と景観変遷に関する研究

研究テーマ②は、蓄積資料を活用した新たな知的基盤の整備を図り、研究成果の国内外への発信と地域振興への貢献をめざす。サブテーマは以下の通りである。

- (5) 豊臣期大坂図屏風に関する研究（エッゲンベルク城博物館との連携協定に基づく研究）
- (6) 堺鉄炮鍛冶屋敷にみるモノづくりに関する研究（堺市との連携事業）
- (7) 浪花名所図屏風、中村儀右衛門資料、山田伸吉資料に基づく研究
- (8) 子ども食堂サイトの公開および地域と協働した評価研究

本研究の特色は、第一に、研究テーマ①において「大大阪時代」という都市史上の重要期を対象に、歴史・文化・都市空間・演芸・建築など多領域を横断して分析する学際的アプローチを採用している点にある。とりわけ第8代大阪商業会議所会頭で、第11代関西大学学長でもあった山岡順太郎をはじめとして、「大大阪時代」に各分野で活躍した本学所縁の人物と社会との関係性を明らかにし、関西大学の発展史を具体的に描き出すことが可能となる。これは地域史研究と大学史研究を統合する独自の成果をもたらし、従来の個別研究では捉えられなかった新たな歴史像の構築に寄与する。

第二に、研究テーマ②において、豊臣期大坂図屏風や浪花名所図屏風、中村儀右衛門資料、山田伸吉資料などセンターが長年蓄積してきた一次資料をデジタルアーカイブ化し、CG・3D復元・可視化技術などを活用する点である。これにより、歴史資料の新たな解釈可能性を拓くとともに、国内外の研究者や地域社会が利用可能な形で研究成果を公開する仕組みの構築をめざしている。

第三に、地域機関（堺市、松竹株式会社、道頓堀商店会など）および海外の関係機関（エッゲン

ベルグ城博物館、Studio ASYNCHROME)との協働を積極的に取り入れている点が挙げられる。こうした連携により、地域資源の再評価や文化資産の国際的発信につながる研究基盤を形成することが可能となる。これらの点において、本研究は学術的独創性と社会的有用性を兼ね備えた研究として位置づけられる。

(はやし たけふみ 関西大学総合情報学部教授 なにわ大阪研究センターセンター長)

(いぬい よしひこ 関西大学文学部教授)

(やぶた ゆたか 関西大学名誉教授)

(いうら たかし 関西大学総合情報学部教授)

(はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授)

(まるやま とおる 関西大学化学生命工学部教授)

(きたがわ ひろこ 関西大学非常勤講師)

(り しんう 松竹音楽出版株式会社取締役)

(おくもと みよ 大阪歴史博物館学芸員)

堺市博物館企画展「井上関右衛門家文書の世界——堺鉄炮の生産・販売・技術——」
令和7年（2025）4月12日

鉄炮鍛冶の世界——砲術家と下職の間——

藪田 貫（関西大学名誉教授）

はじめに

鉄炮との出会い・ワクワクする世界 平成27年（2015）7月 関西大学なにわ大阪研究センター
なぜか？ 鉄炮に関する問題関心と研究の広がり

- 1 鉄炮伝来史 1543年種子島への鉄炮伝来～天下統一へ ■井上さんと種子島家当主の出会い
 - 国立歴史博物館『歴史のなかの鉄炮伝来』2006（宇田川武久代表） *所コレクション
 - 宇田川武久『真説鉄炮伝来』（平凡社新書、2006）、第6章「国友鉄炮鍛冶と砲術師」
 - 宇田川編『鉄炮伝来の日本史』（吉川弘文館、2007） 圧倒的に国友中心
 - 藤田達生『戦国日本の軍事改革 鉄炮が一変させた戦場と統治』（中公新書、2022）
- 2 銃砲史 ➡ユーザー
 - 『銃砲史研究』銃砲史学会理事長所莊吉（1929生）『火縄銃』（雄山閣、1964/1989）
有馬成甫『火砲の起源とその伝流』（1962、1884～1973、海軍大佐）
安齋実（日本ライフル射撃協会理事長、1911～1997）
「古流砲術を探求している日本ライフル射撃界にとって好個の参考書」
『銃砲史研究』16（1970.2）所「堺鉄炮鍛冶雑感」「北旅籠町西一丁に井上関右衛門の子孫が」
「国友鍛冶については有馬先生の『一貫斎国友藤兵衛伝』があるが」
同35（1971.12）史料紹介「国友鉄炮鍛冶文書」を紹介 *1978放送TV「黄金の日々」
 - 堺鉄炮研究会澤田平（1935生）『櫻町鉄炮』1984、『日本の古銃 総論編』1995
『堺鉄炮研究』11（1983.7）「井上関右衛門鍛冶屋敷」を初めて紹介
 - 宇田川武久（1943生）『江戸の砲術師たち』（2010、平凡社新書）
- 3 技術史（モノづくり） ➡「科学の眼で見た鉄炮」2006へ
 - 長浜市長浜城歴史博物館『江戸時代の科学技術 国友一貫斎から広がる世界』
 - 高槻市立しろあと歴史館『江戸時代の科学と技術 鉄砲と和時計』澤田平コレクション
 - 澤田平氏『和時計 江戸のハイテク技術』1996、『鉄砲から見た和時計』2024
 - 斎藤努『金属が語る日本史 銭貨・日本刀・鉄炮』2012、鉄砲の製法をめぐる
- 4 鉄炮ビジネス ➡井上関右衛門家資料が持つ大きな特色 ●ユーザーからメーカーへ
 - (ア)武家からの注文 (イ)御鉄炮鍛冶と平鍛冶と職人仲間 (ウ)大量の商い記録
 - (エ)先祖代々の顕彰 (オ)鉄炮制作の記録 (カ)分業とそれを担う下職 (ク)砲術師との関係
 - (ケ)堺奉行との関係 (キ)七堂浜町打場、(ク)仲間行事としてのフイゴ祭りなど

1 井上関右衛門家資料の代々

- 1 八兵衛－2 八兵衛(初代関右衛門)－3 道讃(二代関右衛門)－4 半兵衛－5 正次(三代関右衛門)
6 為次(四代関右衛門)－7 吉次(五代関右衛門)－8 賢次(喜左衛門)－9 直次(六代関右衛門)
10宗次(七代関右衛門)－11壽次(八代関右衛門) * 堺最後の鉄炮鍛冶
- ① 大坂の陣後に堺に入り、鉄炮鍛冶を創業した 『井上関右衛門家住宅保存修理工事報告書』2024
⇒鉄炮伝来史には関係しない、遺品も少ない＝芝辻家との決定的な違い
* 初代八兵衛制作の鉄炮が岸和田に残る(1834願書)、二代目が制作した4匁筒の控え大洲にあり(幕末)
- ② 御鉄炮鍛冶と平鍛冶の格差 / 櫻町大道 VS 中浜筋
芝辻理右衛門・芝辻長左衛門・榎並勤左衛門らの御鉄炮鍛冶・御鉄炮年寄(旧勢力)
- ③ 武家出入りの把握
「鉄炮御断控」の創出(宝暦2年/1752、以降1872 正次(3代関右衛門)
一代ごとの武家注文記録の継承(明和2/1765) 為次(4代関右衛門)
鉄炮鍛冶全体の「出入帳」(得意帳)として仲間管理⇒「鉄炮鍛冶諸家様出入名前帳」1801の創出
➢鉄炮鍛冶をビジネスとして整備させた 地図に落とすと武家注文の趨勢が……
- ④ 新興鉄炮鍛冶から生まれた鉄炮年寄
藍谷与三右衛門(1770年代?)から5代関右衛門吉次(1801)
大坂城内の諸蔵の鉄炮の修理を請負い、「御鉄炮師」と呼ばれる ■鉄炮奉行河内佐太郎
大坂城出入りの加番大名という新顧客の獲得 ➔18世紀を通じて、新旧勢力の交替
- ⑤ 堺鉄炮鍛冶の個別のシェアが分かる 出入りは単独と相出入り 鍛冶19家中のトップ
鉄炮鍛冶としての躍進は、家屋敷の拡張に繋がる ➔町家歴史館鉄炮鍛冶屋敷の開館
井上家は中浜一丁目の町年寄を兼ね、「水帳」(土地台帳)を管理していた / 自治都市堺
家相図を重ねてみると、住宅兼工房であった井上関右衛門家の変遷が分かる
- ⑥ 炮術師との連携 とくに10代宗次(7代関右衛門)－11代壽次(8代関右衛門)

2 武家注文と炮術師

2-1 武家注文の実際(宝暦2年の場合)

- ✓ 月ごとの注文 規則性はなく、空白月あり、年ごとに不同
- ✓ 修理(仕立て直し)注文と誂え注文 修理は複数挺も、新規は一挺が基本
- ✓ 武家は領主名を付け、個人名で ➔「鉄炮鍛冶諸家様出入名前帳」は幕府の管理
- ✓ 百姓注文も武家(領主・代官所)ごとに
- ✓ 注文は挺数・玉目・長さが必須 * 修理注文には10挺など複数あり、新調は一挺
- ✓ 得意先の確認

ただし発砲のためには本来、火薬と弾玉とそれを作る玉鑄型が必要だが、その記載はない

2-2 注文から知れること

鉄炮注文の長期的な趨勢(1752～1871)

- ✓ 一部に、注文(誂え)の一ヵ月後ぐらいに「中(当たり)り御断」と添書きの記載がある
➔「中放・力様、その外、何事によらず、御番所へ御断り」(「鉄炮屋仲ケ間定書」)

「七堂浜鉄炮様場にて鉄炮星入り・力様仕来り候処、力様は西之方江打放ち、星入りは北之方へ向い放、玉越ては危険、堞の後ろに土手築」 ➡大和川付け替え後に新田開発

命中度と飛距離などの確認/その場所としての七堂浜 *寛保2年奉行所届

- ✓ 注文者として何度も顔を出す家中 ➡砲術師? 大名家家中の名簿との照合が不可欠
加藤左近将監(大洲藩) 家来口分田羽右衛門・伊達紀伊守(宇和島藩) 家来櫛木源之進
松平阿波守(徳島) 家来濱園右衛門・同芝辻与七郎など

2-3 砲術家と鉄炮鍛冶

- ✓ 砲術史の時期区分 宇田川『江戸の砲術師たち』(2010、平凡社新書)
I(16~17初)・II(大型筒17後半)・III(18世紀)IV(海防19世紀)V(西洋流19世紀後半)
Iには40前後、IV以降には400近い流派(宇田川)、技量の向上
- ✓ 砲術武芸者として家中に抱えられ、御先手組など番方に属し、秘伝書を通じて、流派を保持
- ✓ 抱えられた大名家の持つ町打場・星場が訓練場所となる「町打は一生に一度のハレ行事」
- ✓ 砲術師は、所属藩と関係なく、門弟をとることができる
 - ・ 閩流は5分玉から貫目の大筒までの仕様を細かく決めていた。寛政9年注文書の存在。
 - ・ 岡山藩の小筒を得意とする流派(藤岡流・安見流・荻野流)の「名所図」
 - ・ 玉目が同じでも流派によって明細が異なる
 - ・ 300目の大筒張り立ての場合 砲術師⇔仕様書・費用明細⇔鉄炮鍛冶

2-4 井上家文書に残る多数の注文書・仕立図の解説 37点

武衛流・不易流・荻野流などの注文図・仕様書・紙型 ⇔ 国立歴史博物館『歴史のなかの鉄炮伝来』

「不易流の雛形相伝」 宇和島藩中野信治から井上関右衛門壽次への注文書・手紙

注文者との間に立ち、雛形の提供、品質の検査、値引き交渉などをする

「10匁筒は小筒と違い制作料も高い」・「流儀の筒は自由にできない掟」

大洲家老大橋作右衛門手筒注文には「一代の楽筒、子々孫々まで残す」「関右衛門の銘別して高く」

➡鉄炮鍛冶の技量向上に欠かせないのが砲術師

2-5 七堂浜の管理者として定期的に大坂城定番付与力らが砲術師として実施する町打に協力

なかでも荻野流宗家荻野六兵衛安重の「荻野流鑄筒合金之書」

3 鉄炮製作——分業と下職——

3-1 鉄炮鍛冶仲間と下職

元禄9年(1696)「鉄炮細工人連判証文」

鉄炮鍛冶96・台師19・金具師19・象嵌師1・鑄型鍛冶2・鑄鍋鍛冶1・矢先鍛冶2・火蓋雨覆鑄師2

天保15年(1844)「鉄炮之儀ニ付御法度御請合証文帳」

鉄炮鍛冶19・台師13・金具師8・象嵌師3・火蓋雨覆師3・鑄型師3

桜町・中浜筋など12町に分布 ➡工場団地の様相 ➡出火と防災意識

天保13年「金銀出入帳」鍛冶仲間として下職の他所稼ぎに直面

3-2 井上関右衛門家と下職 ～残されていた通帳～

台師 9名41冊 金具師11名41冊 鋳型師 7名33冊 象嵌師 4名13冊 火蓋雨覆師 4名16冊
決算期が 3月・5月・7月・9月・11月（フイゴ前）・大晦日の6期

鉄砲鍛冶の前貸しを品物の納品で償却する形、資金は次年度に繰り越す 下職確保が課題
下職の営業規模は小さい、年間の制作挺数の手掛かり ⇒注文挺数との対比も可能

3-3 大筒祝いやフイゴ祭りでの接待・饗応

おわりに

井上関右衛門家資料・文書をもとにメーカーから見た砲術史を著します

参考文献

- 『堺鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家資料資料調査報告書』関西大学・堺市 2019
藪田 1 「銃砲史のなかの堺鉄砲鍛冶井上関右衛門家について」『ヒストリア』288、2021
同 2 「宝暦二年鉄砲御断控」『関西大学なにわ大阪研究』6、2024
同 3 「天保十三年金銀出入帳」『関西大学なにわ大阪研究』7、2025

堺鉄炮の歴史——鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家——

藪田 貫（やぶた・ゆたか 関西大学名誉教授）

はじめに

二つの奇跡・井上関右衛門家との出会い

1 鉄炮伝来と堺

- 1543（天文13）火縄銃が種子島に伝来。翌年、国産化され、紀州根来を經由して堺に伝播。
- 1575（天正3）織田・徳川連合軍、長篠の合戦で武田軍を鉄炮隊により撃破
- 1592（文禄元）文禄・慶長の役が始まり、堺鉄炮が大量生産される
- 1609（慶長14）徳川家康、芝辻理右衛門に大筒を注文（靖国神社遊就館と芝辻文書）
- 1614（慶長19）大坂冬の陣。豊臣・徳川から大量の鉄炮注文。翌年、堺町中全焼
- 1623（元和9）～94（元禄7）堺への鉄炮注文の動向（芝辻家文書と「堺手鑑」による）
- 1689（元禄2）「堺大絵図」が作成され、鉄炮年寄芝辻・榎並とともに井上関右衛門家が記される
- 1696（元禄9）堺が大坂町奉行に移管され、鉄炮鍛冶と下職ら100余名の名簿が作成される
- 1725（享保10）～1752（宝暦2）鉄炮鍛冶仲間の記録が作成される（堺市立中央図書館蔵）
- 1752（宝暦2）～1871（明治4）井上関右衛門家の鉄炮注文の動向
- 1758（宝暦8）井上関右衛門家の出入り先大名が明らかとなる（24家）
- 1801（享和元）井上関右衛門吉次、鉄砲年寄となる
- 1812（文化9）大坂城の鉄炮修理を他の鉄炮鍛冶二家とともに請け負う
- 1842（天保13）堺鉄炮鍛冶全体の出入帳「得意帳」が作成される
- 1853（嘉永6）井上関右衛門家ら鍛冶10名が、1貫目玉筒ほか3挺の大筒の献上を願い出る

2 井上関右衛門家代々の最初と最後

- 初代井上八兵衛 初代加藤光泰に仕え、二代貞泰の米子・大洲移封に従う。その際、兄弟の一人が堺に出て、鉄炮鍛冶となる（系図）
- 2代八兵衛 三代泰興（文武に通じる）に出入りし、関右衛門の名を賜る。修理注文が残る
以後、代々が鉄炮鍛冶業を継承、事業の拡大とともに家屋敷を改修、遺構として存在
- 4代関右衛門吉次 寛政9年（1797）嫡子久三郎を大洲で御目見え、大筒を献上し、狩りに参加
- 8代関右衛門壽次（1824～1908）堺鉄炮の最盛期に生きた最後の鉄炮鍛冶

- 5(2)歳で 母の語る「荒々しい業」の当主となる
- 14歳 参勤途上の11代藩主泰幹に大坂蔵屋敷にて御目見え
- 19歳 武家出入数61家となり、堺鉄砲鍛冶のトップ
- 24歳 250目玉筒を献上し、大洲藩から7人扶持を貰う
- 31歳 単身、備中・美作に出かけ、出入り大名家（松山・新見・成羽・勝山）の注文を受ける
- 48歳 火薬・鉄砲商として再出発する（1872「鉄砲取締規則」）
- 71歳 自作の火縄銃10匁筒を靖国神社遊就館に献納する
- 79歳 第五回内国勸業博覧会への出品に先立ち、勸業調査委員に書面で回答

おわりに

資料が明かす堺鉄砲鍛冶・「町工場」が語る鉄砲・遺物に秘められた技術

鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家に入出入りする人々

藪田 貫（関西大学名誉教授）

はじめに

テーマ 「科学でひもとく鉄炮鍛冶屋敷」の意味するもの

A 鉄炮の歴史 →歴史学（人文科学）〈人〉

B 文化財としての鉄炮 →情報工学・金属工学（文化財科）〈モノ〉

話の勘所

企画展「鉄炮鍛冶屋敷の建築」開催中

資料1 「鉄炮鍛冶屋敷たてものみどころマップ」

資料2 「元禄2年堺大絵図」の中浜1丁目と西6間筋

鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家の大きな特徴

➢規模が段階的に拡大してきた井上関右衛門家 ➢歴代当主の努力

➢「表」と「裏」は不変 ➢町組の規制

間口は税（役・地子銀）の単位+「通り土間」の存在

鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家資料の特徴

➢鍛冶（の業態）だけでなく家事も分かる

「出入り口」と「出入りする人」はセット 日本の伝統的家屋の特徴・文化遺産

1 「出入り口」とそれぞれの空間

(い) 式台 武家屋敷からの導入 駕籠に載った武家 その後座敷・茶室へ

(ろ) 店の間 客との応対・商品陳列・事務室 ➢「和泉名所図会」の鉄炮鍛冶

(は) 通り土間 仕上げ場と鍛冶場の交通路 ➢隠れている大戸と潜り戸

(に) 鍛冶場・土蔵・納屋・火薬貯蔵庫・井戸 ➢「奥」ほど家業の特色を示す

「荒々しい業」関右衛門壽次母の弁

2 出入りする人々

(い) 武家・武家格 大洲藩の御用人、堺奉行所与力・同心、鉄砲年寄、砲術師

(ろ) 鉄砲の購入者 注文生産なので事務室メイン 通帳「鉄砲御断控」「荷札」

(は) ^{したしよく}下職 ^{おおづついわい}「大筒祝」に顔を出す人々/通勤者 おもに裏口から

➤寛政13 (1801) 年5月 熨斗付のタテ帳面 関右衛門吉次代

同業者・金具師・台師・火細工人などに鯛と酒切手を贈る 図版 1

➤弘化3 (1846) 年3月 大洲藩注文の「二五〇目筒入用控」

「雑用控」から関係者が見えてくる

注文した武家、火細工人 (横座・先手)、台師・金具師・大工、下女など

多額の経費 米 (2.8石)・魚・青物・藁草履・油蠟燭・薪・炭・酒・みそ

(に) 町内外の人びと

井上家の年中行事 11月の「フィゴ祝」

フィゴは鍛冶屋のシンボル・稲荷社に参詣 (高須神社・生国魂神社)

表「年中定式吉礼控」(『報告書』175頁)

➤参会者

大洲藩大坂屋敷、親戚、店、台師・金具師・大工、来迎寺、清学院、町代、髪結

➤祝儀で配られるモノ 餅と赤飯?

米5斗・小豆1斗1升 (文化2年/1805.11月7日) 図版 2

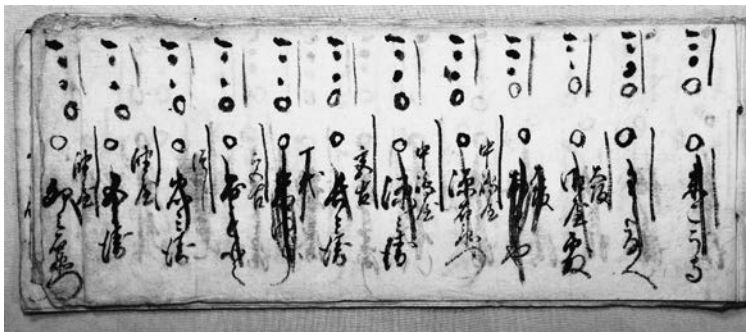
糯米4斗5升・粳米2斗・小豆1斗3升 (嘉永3年/1850)

おわりに

鉄炮鍛冶の世界と堺町人の暮らし



図版 1



図版 2

令和7年度堺市と関西大学との地域連携事業 連続講座
 「科学でひもとく鉄炮鍛冶屋敷」 講座2

CGでよみがえる火縄銃の世界 一鉄炮鍛冶が伝えた技と発射の仕組みを映像 でたどる一

関西大学総合情報学部教授
 関西大学なにわ大阪研究センター長

林 武文

1

鉄炮伝来からの歴史

- 「1543年種子島に漂着したポルトガル人により火縄式鉄砲が伝えられた」
- ・ 2丁の火縄銃を購入して複製を作成。
 - ・ 数年の内に国産化に成功。
 - ・ 薩摩（鹿児島）、根来（和歌山）、国友（滋賀）、堺で鉄砲生産
 - ・ 戦国大名や江戸幕府より大量発注を受ける
 - ・ 江戸中期以降は戦が減って注文が減少
 - ・ 明治維新以降は軍用銃の製造が禁止



火縄銃の製作技術は、鉄炮鍛冶の間で受け継がれた秘伝の技術であり、その詳細は、研究が進んだ今日でも未解明の点が多く残されている。

3

- ・ 2014年 堺市の環濠北部の鉄砲鍛冶・井上関右衛門住宅より20,000点を超える古文書が見つかる
- ・ 堺市と関大による歴史研究
- ・ 堺鉄炮鍛冶屋敷ミュージアム (2024.3.3オープン)



本研究の目的

研究成果の可視化、情報発信

- ・ 断片的な成果を統合して様々な視点から眺める
- ・ 一般に向けた情報発信による教育、啓発、地域振興

2

【1】3次元CGによる火縄銃製作過程の可視化

1. 資料収集

キックオフ集会 (2021年7月26日、高槻キャンパス)



- ・ 堺市より火縄銃の貸し出しと分解方法の指導を受ける。

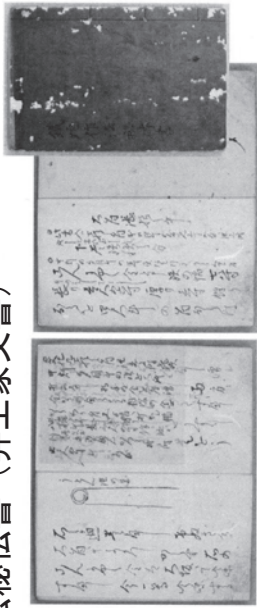
4

江戸後期に出版された火繩銃製造方法を記した書物

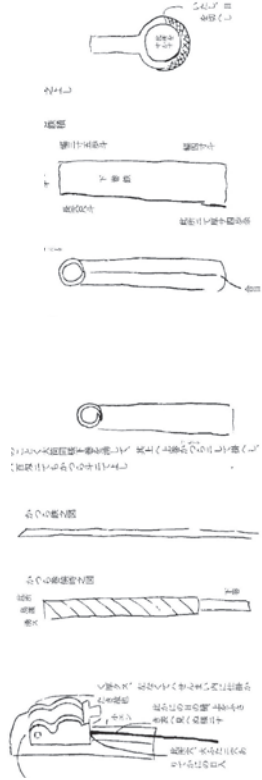
- (1) 棟居保春 (むねすえやすはる) 著
『中嶋流砲術管闡録 (かんきろく)』
*周防徳山藩 (現在の山口県周南市) の砲術家
*詳細な加工方法やノウハウに関しては未掲載の部分が多い
- (2) 一貫斎國友藤兵衛著
『大小御鉄砲張立製作 (おんてっぽう・はりたてせいきく)』



鉄砲作法秘伝書 (井上家文書)



口径65 鉄砲作法秘伝書 文化9年の注記あり



井上家・鉄砲作法秘伝書 (新市・関西大学なにわ大阪研究センター「堺鉄砲砲冶歴跡井上岡右衛門家資料調査報告書」(2019) 6

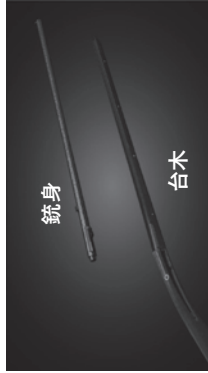
2. 火繩銃製作の工程の定義



和泉名所図会

基本工程

- I. 銃身の鍛造
- II. 台木 (銃床) の制作 → 台木師
- III. からくりの制作 → 金具師
- IV. 全体の組み立てと調整



井上家での作業

3. CG制作 (製造工程の重要なシーンの決定)

- 銃身の鍛造工程
 - a. 鍛造による銃身の成形 (うどん張り)
 - b. 葛巻 (かずらまき) による銃身の強化
 - c. 銃身内側の研磨
 - d. 銃身外部の仕上げ
 - e. 火皿や照準器の取り付け
 - f. 尾栓ねじ穴 (雌ねじ) の制作

組み立て

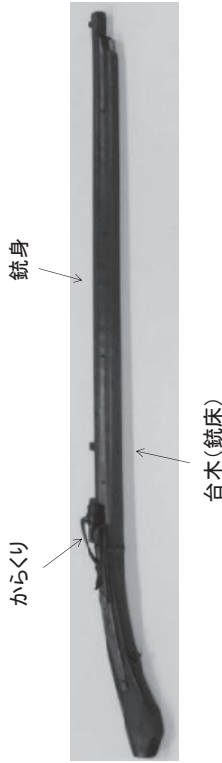
からくりのメカニズム
発射シーン



CG映像のオープニング画面

井上家で行われていた火繩銃の製造方法を正しく伝える。
重要な工程を3次元CGで分かり易く表現する。

4. 火縄銃のモデリング (3D計測とCGデータの制作)



CGモデルになった火縄銃 三刃筒 「摂砦住 井上関衛門作」
(全長123cm、銃身長90cm、総重量2.4kg、鉛弾径：12.284mm)

(堺市所蔵)

*摂砦住 (せっしゃうじゅう) 摂津国に住む

9

3D計測とCGデータの制作

からくりの三次元測定
3Dスキャナ：
EinScan-SE (SHINING3D)
スキャン精度：0.1mm
スキャン範囲：30~700mm



ターンテーブルで一回転しながら測定
からくりの向きを変えて測定を繰り返し

点群データの編集

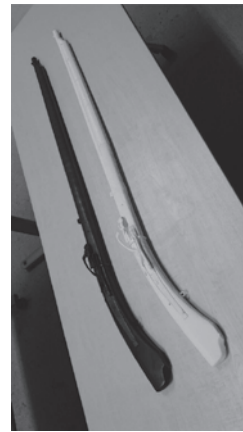


10

5. プリントによるレプリカ制作

3Dプリンタによる造形の目的

- ・実物大の模型を触って体験
- ・からくりの仕組みを理解
- ・VR/AR技術と組み合わせ、体感コンテンツを制作



*3Dプリンタの出力物は、火縄銃の外形とからくりの仕組みを表現したもので、発砲目的の造形物とは全くの別物です。

11

6. CGアニメーションの制作

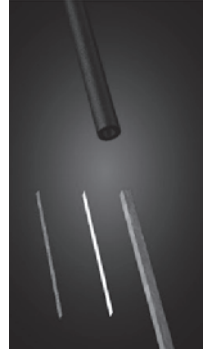
火縄銃の製造工程



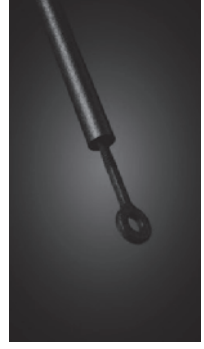
工程a. 鍛造による銃身の成形



工程b. 葛巻による銃身の強化




工程c. 銃身内側の研削




工程d. 尾栓ねじの制作

12


発射のメカニズム




からくりのメカニズム




口薬に着火



玉薬に着火



発射



13

【2】 展示用コンテンツの開発

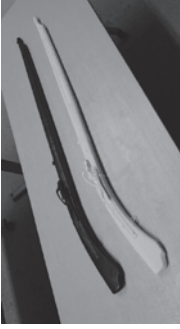
原寸大模型の制作と展示用コンテンツの開発

造形の目的

- ・実物大の模型に触れて大きさと重さを体感する
- ・XR (VR/AR/MR) 技術により詳細を体験できる展示用コンテンツを制作

加工方法

- ・CGデータから発砲スチロールの切削加工で銃身+台木の一体型の模型を作成し、形状と大きさを再現
- ・銃身部分に鉄芯を入れて重量とバランスを再現
- ・カラクリのような細部や質感はXR技術で表示する



*3DCGデータからの出力物は、火縄銃の外形を表現したもので、発砲目的の造形物とは全くの別物です。



14

XR技術を用いた展示用コンテンツの制作 (XR:VR/AR/MR)

VR (仮想現実感)
火縄銃のCGモデルをHMD内で表示して、模型の銃と連動させて動かす

AR (拡張現実感)
タブレットPCでマーカーを読み取ると火縄銃のCGモデルが表示される

MR (複合現実感)
火縄銃の模型をタブレットPCもしくはMR用のシースルーHMDで観察するとCGモデルが重畳されて表示される。

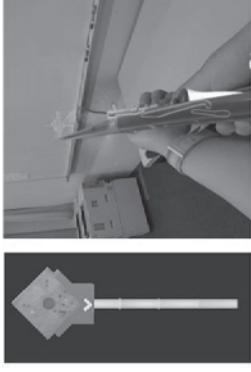

火縄銃の細部やからくりの動きの観察、火縄銃が製造された時代の環境での操作

15

展示用MRコンテンツの開発



インタフェース

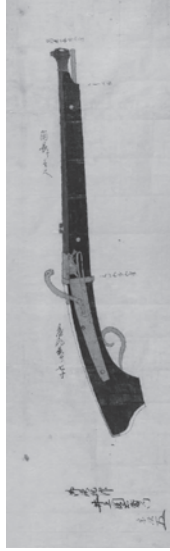
動作の様子

仮想空間の標的を用いた射的体験

16

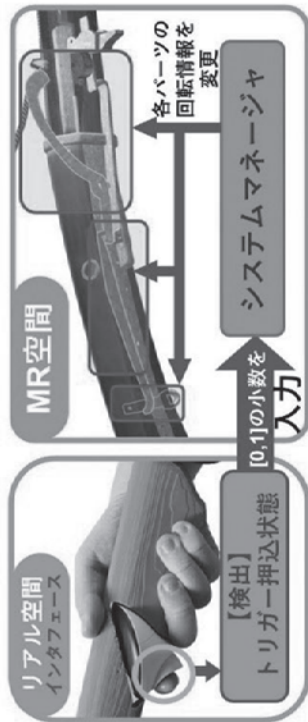
今後の展開

1. XRコンテンツの改良
ゲーミフィケーションを利用したコンテンツの開発
ミュージアムやイベントでの展示
2. 井上家文書のデジタルアーカイブ化と情報発信
「鉄炮作法秘伝書」現代語訳の作成
「鉄砲絵図資料」に基づくデジタルコンテンツの検討



鉄砲絵図資料

18



システムの概念図

本システムは、2025年度関西大学オープンキャンパス、ナレッジキャピタル関大ブース、情報処理学会、VR学会等で展示発表を行っている。

17

科学でひもとく鉄炮鍛冶屋敷

鉄炮銃身の金属組織からわかる 鍛造技術

関西大学 化学生命工学部
教授 丸山 徹

1

木には木目、鉄にも模様がある

- ・木目は強さや割れやすさを決める
- ・金属にも同じような“模様”がある
- ・この模様が鉄炮の性格を左右する



2

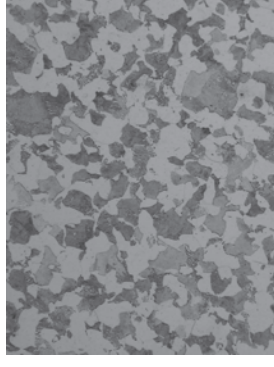
鉄にも“性格”がある

- ・硬いがもろい鉄（せんべい）
- ・柔らかく粘る鉄（パン）
- ・鉄炮には“強くしてしなる鉄”が必要

3

金属の模様（金属組織）

- ・鉄の中には結晶粒の集合
- ・結晶粒の大きさと並びが性能を決める
- ・硬質相の量が硬さを決める



炭素鋼 (S45C) の金属組織

4

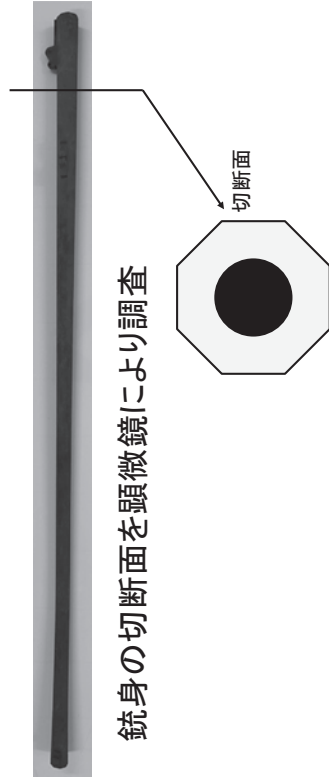
結晶粒と炭素量のバランスが大切

- ・ 結晶粒が小さい→強度向上
- ・ 炭素量が多い→硬くなるが脆くなる
- ・ ほどよい炭素量→鉄炮向き

5

職人は“模様”を整えていた？

- ・ 熱する：結晶粒が成長する(粗大化)する
- ・ 叩く：結晶粒が変形する
- ・ 鍛接：模様がつながる



銃身の切断面を顕微鏡により調査

6

鉄炮の鉄は純鉄

	鉄が99%以上										
	Si	Mn	P	Cr	Ni	Cu	As	Al	K	Ca	
瓦金	—	0.47	0.09	0.01	0.04	0.18	0.11	—	—	—	
銃身A	銃口付近	0.18	—	0.05	—	—	—	—	—	—	
	銃身中央	0.14	—	0.07	—	0.15	—	—	—	—	
	前目当て火皿間	0.11	—	0.05	—	0.14	—	—	—	—	
銃身B	銃口付近	0.50	—	0.09	—	0.17	—	0.21	0.07	0.08	
	銃身中央	0.48	—	0.06	—	0.13	—	0.28	0.07	0.07	
	前目当て火皿間	0.17	—	0.09	—	—	—	—	—	0.02	

鉄が99%以上

	C					S				
	最大	最小	平均	標準偏差		最大	最小	平均	標準偏差	
瓦金	0.055	0.041	0.048	0.004	0.102	0.058	0.082	0.016		
銃身A	銃口付近	0.095	0.017	0.037	0.029	0.008	0.002	0.004	0.002	
	銃身中央	0.079	0.010	0.026	0.027	0.006	0.003	0.004	0.001	
	前目当て火皿間	0.012	0.005	0.008	0.002	0.007	0.004	0.005	0.001	
銃身B	銃口付近	0.033	0.015	0.023	0.008	0.004	0.002	0.003	0.001	
	銃身中央	0.022	0.006	0.012	0.005	0.009	0.001	0.005	0.003	
	前目当て火皿間	0.034	0.022	0.027	0.004	0.007	0.003	0.005	0.001	

炭素は0.05%未満

日本刀のように硬くは無いが粘りのある鉄

7

鉄炮銃身の研究例

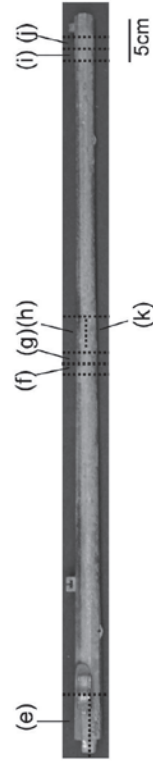


Fig. 2 Japanese matchlock gun fabricated in the Edo Genroku period. (The property of M. Kinada, one of the authors.) (a) Male screw and female screw, (b) muzzle, (c) rear sight, (d) front sight, and (e)-(j) parts of the specimen taken from the steel barrel.

田中眞奈子, 北川正弘:
「江戸元禄時代に国友鉄炮鍛冶により製造された火縄銃の金属組織」
日本金属学会誌 76 (2012), 489

国友の鉄炮鍛冶, 国友徳太夫によって製造された銃
元禄時代(1688年~1704年)

8

鉄炮断面の金属組織の例

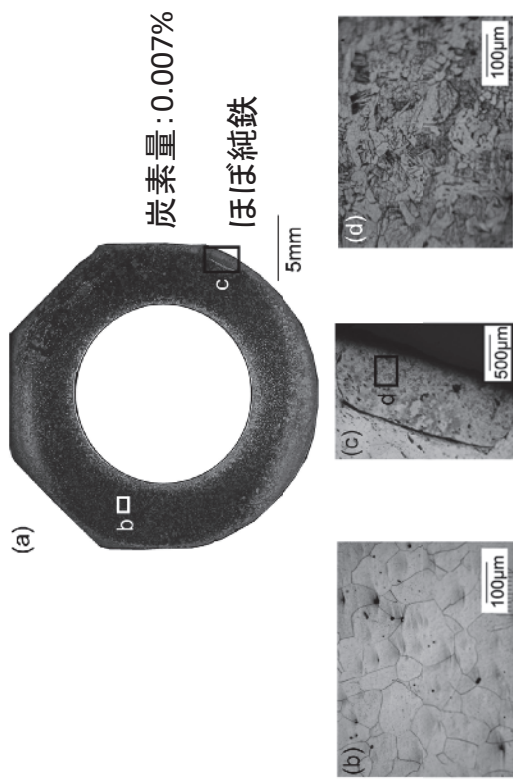
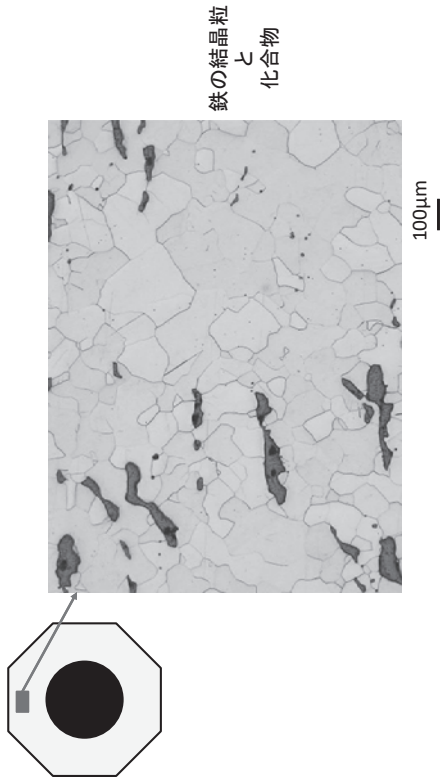


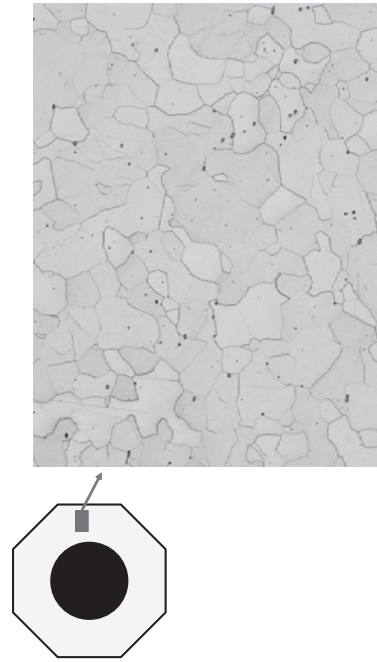
Fig. 3 (a) Cross-sectional optical micrograph of the steel barrel shown in Fig. 2 (g). (b) Enlarged image of area b. (c) Enlarged image of area c. (d) Enlarged image of area d.

9

金属組織の模式図

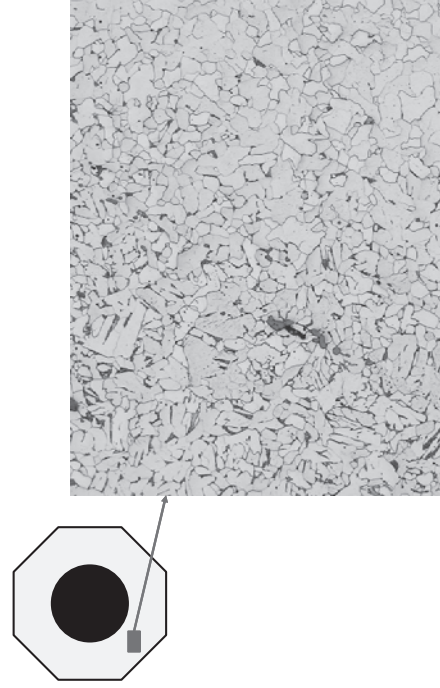


10



ほぼ純鉄の金属組織

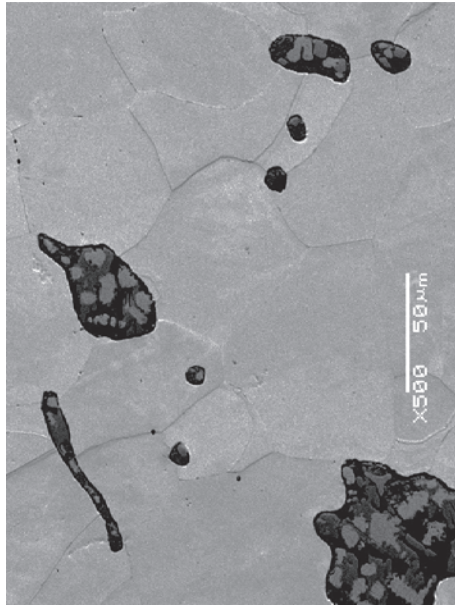
11



化合物が微細に分散した金属組織

12

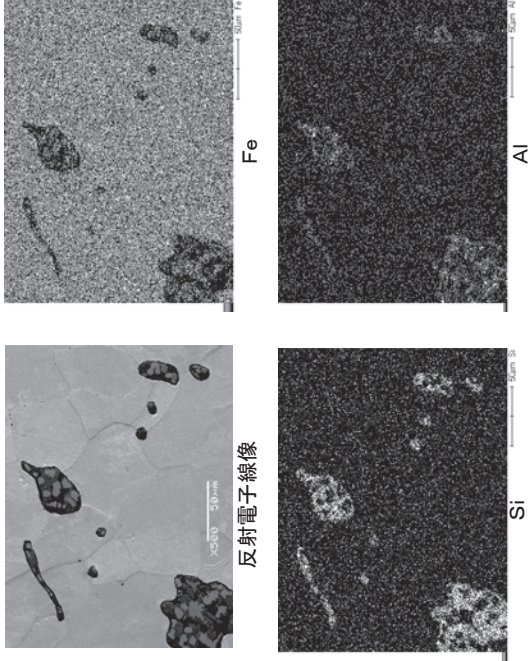
電子顕微鏡による金属組織



化合物から複雑な模様が見える

13

銃口近傍 (反射電子像, EDS元素マッピング)



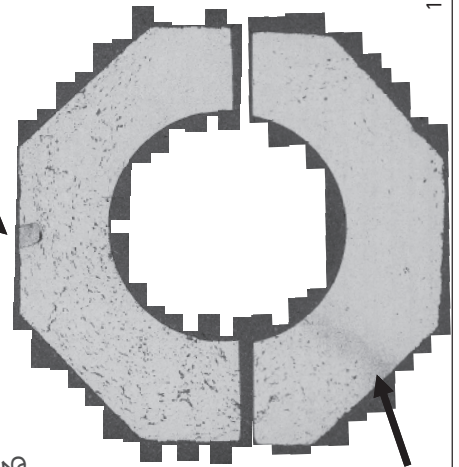
化合物はたたら製鉄由来の酸化物

14

光学顕微鏡の所見

鍛接の痕跡？

- ・バームクーヘンのような層構造
- ・巻いた記憶が内部に残る
- ・層状構造が強度に影響



接合部？

15

職人の工夫？ 異物を“安全な方向”へ整列？

- ・らせん方向に介在物を配置？
- ・縦割れのリスクを軽減？
- ・層が衝撃を横へ逃がす？

16

まとめ

- ・ 金属にも木目のような模様がある(金属組織)
- ・ 金属組織が鉄炮の性能を決める
- ・ 金属組織中には非金属介在物(異物)が存在するがそれらは層状に分布しており、鉄炮鍛冶職人が工夫した可能性がある

2024～2025年度なにわ大阪研究センター公募研究班

「大大阪」の形成・発展と山岡順太郎

— 山岡家文書の総合的研究 —

研究代表者 官 田 光 史

研究分担者 伊 藤 信 明

研究協力者 佐 藤 健太郎

1 本研究の目的

本研究は、なにわ大阪研究センターの公募研究として2022年度に採択された「『大大阪』の時代と関西大学—山岡家文書の調査・研究を中心に—」を発展的に継続しようとするものである。

山岡家文書は山岡順太郎とその家族（父・美章、長男・倭）の旧蔵資料である。山岡順太郎（1866～1928年）は石川県生まれ。逓信省を経て大阪商船に入社、やがて大阪財界で頭角を現した。大阪商業会議所会頭を務めたころから本学との関わりをもち、1922年には総理事として本学の大学昇格を成し遂げた。

本学年史編纂室は2021年4月に山岡家から山岡家文書を借用し、仮目録の作成に着手した。前述の公募研究が採択されたこともあり、目録の作成は順調に進み、2025年3月に『山岡家文書目録』が刊行された。これにより山岡家文書を構成する資料、すなわち本学の関係資料、山岡関わった会社の営業報告書・事業報告書、政官財界関係者が山岡に宛てた書簡など、約3700点の全貌が明らかになった。

この目録の完成は山岡家文書の利便性を飛躍的に高め、山岡家文書内の諸資料はもちろん、学内外で所蔵される同時代の諸資料と山岡家文書をリンクした研究を可能にした。こうした山岡家文書の総合的研究によって、山岡をはじめとする本学関係者が「大大阪」の形成と発展に貢献した姿を描き出すことが本研究の目的である。

2 本研究の概要

『山岡家文書目録』の完成を受けて、本研究では、まず山岡家文書内の諸資料の構造を把握することに努めた。さらに学内外で所蔵される同時代の諸資料と山岡家文書をリンクした研究として、日本電力社長としての山岡順太郎の活動や、大阪財界における山岡を中心とする石川県人脈の解明に取り組んだ。

その研究成果の報告会を2026年1月24日（土）になにわ大阪研究センター1階セミナー室で開催

した。各報告の要旨は次のとおりである。

伊藤信明「山岡家文書の構造と概要について」

山岡家文書は、関西大学総理事であり、日本電力株式会社や大阪住宅経営株式会社など数多くの企業の経営者でもあった山岡順太郎に関する資料である。このほか、若干ではあるが二人の権太左衛門（順太郎高祖父と曾祖父）、弥五郎美章（順太郎父）、倭（順太郎長子）、敷（順太郎三男）に関する資料も含んでいる。山岡家文書は、山岡家代々の活動により、やり取りされて残された資料群であり、その中から、山岡家文書の特徴をよく示す代表的な資料を紹介した。

佐藤健太郎「山岡家文書日本電力関係資料について」

第一次世界大戦を契機に関西方面では重工業が飛躍的に発展した結果、電力需要が急増し、電力不足が生じていた。関西方面の電力不足を解消するため、北陸地方の河川に水力発電所を設置し発生させた電力を高圧電線によって関西方面に送電し、宇治川電気を通じて供給する日本電力が1919（大正8）年に創設された。

山岡順太郎は同社初代社長に就任しており、山岡家文書には同社に関する書類や書簡などがある。報告では、それらを取りあげて紹介を行った。

官田光史「山岡順太郎と関西加越能同郷会」

1920年代前後の大阪財界では、山岡順太郎・中橋徳五郎ら石川県出身者の人脈「加賀閥」が一大勢力を築いていたとされる。そうした「加賀閥」に連なる有力な団体として、関西加越能同郷会があった。加越能とは加賀・越中・能登3ヵ国、すなわち旧金沢藩領（前田氏の旧領）を指し、現在の石川・富山県にあたる。

本報告では、雑誌『加越能時報』の記事や山岡家文書中の関係者の書簡から、関西加越能同郷会の性格と、同会における山岡の役割を検討した。

本報告会では、コメンテーターとして、京都大学大学院文学研究科特定研究員の望月みわ氏をお招きし、地域史や企業史の視点からコメントをいただいた。本報告会の参加者は27名であった。

なお、2026年3月に開催予定のなにわ大阪研究センター2025年度研究成果報告会では、官田が今後の山岡家文書研究の可能性について報告する予定である。

3 今後の展望

山岡家文書は、「大大阪」時代をカバーした個人文書として、大阪市史編纂所所蔵「関一文書」に匹敵する質・量を誇ると考えられる。その山岡家文書の目録の完成により、山岡家文書を総合的に研究できるようになったことの意義は大きい。このような山岡家文書の研究が継続されることで、関一の都市政策を中心に進んできた「大大阪」の政治・社会史研究の局面が転換する可能性もある。山岡家文書に関する今後の研究成果は、大阪・関西の地域史研究、日本近現代史研究に大きなインパクトを与えるはずである。

謝辞

本研究では、山岡家文書の所蔵者である山岡家から多大なるご理解とご協力を賜っています。ここに記して厚くお礼申し上げます。

(かんだ あきふみ 関西大学文学部教授)
(いとう のぶあき 関西大学博物館学芸員)
(さとう けんたろう 関西大学博物館学芸員)

2024～2025年度なにわ大阪研究センター公募研究班 大阪府内における「子ども支援」サービスの 調査とガイド作成

研究代表者 廣 川 空 美
研究分担者 菊 池 美奈子 植 田 紀美子
元 吉 忠 寛 近 藤 誠 司
高鳥毛 敏 雄
研究協力者 大 井 美 紀 真 弓 昂

1. 研究の目的

厚生労働省（2023）の「2022年国民生活基礎調査の概況」によると、我が国の子どもの貧困率は11.5%であり、所得ベースの相対貧困率は15.4%である。特に、子どもがいる現役世帯のうち大人が1人の世帯の貧困率は44.5%と高いことが示されており（厚生労働省，2023）、OECDの国際比較においても36カ国中2番目に高い（内閣府男女共同参画局，2022）。中でも、大阪府は貧困状態にある子どもの数が全国で最も多く、生活保護世帯の割合も多いことが示されている（三菱UFJリサーチ&コンサルティング，2016）。2023（令和5）年度の大阪府子どもの生活に関する実態調査の結果では、相対的貧困率は15.9%という調査結果が報告されており、経済的な困窮度によって食費を切り詰める家庭、塾や習い事に通うことができない子どもの割合が高いことが示されている（大阪府，2024）。経済的に困窮度が高い家庭の子どもに対して、学校以外の場でかかわることができる大人からの支援の必要性が指摘されている。

このような子どもの貧困の問題に対して、食事の提供を行うことを目的として、「子ども食堂」の活動が全国に広がっている。農林水産省（2018）の調査の結果では、80%以上の子ども食堂が地域との何らかの連携を行っている一方、課題として、「来てほしい家庭からの参加の確保」、運営費用やスタッフの負担、といった内容が上位を占め、学校・教育委員会からの協力や、行政からの協力も課題として挙げられている（農林水産省，2018）。

大阪府内の養護教諭や教職員127名を対象に、子どもに対する必要な地域資源に関する調査を実施した結果（廣川ら，2024）、「子ども食堂」のような地域の支援の必要性を感じている教職員は74.8%に対し、実際に「子ども食堂」を紹介したことがあるのは23.8%しかいなかった。全国こども食堂支援センター・むすびえ（2024）の2023年に行われた第2回全国こども食堂実態調査の結果では、小学校・中学校との連携は35.4%であり、学校との連携は進んでいない現状が伺える。支援サービ

スについて情報不足が大きな要因であると考えられる。子ども食堂への参加を促すことができるような情報を学校に提供し、学校と地域の子ども支援サービスとの連携を促進することが求められる。

本研究の目的は、大阪府内の子ども食堂を対象に、子どもへの支援活動の内容（例：食事の提供、学習支援、学外活動など）、支援活動提供の対象者（例：子どものみ、大人を含むなど）、支援活動の日時、有資格者（例：保育士、看護師、栄養士）の在籍の有無などの調査を実施することであった。さらに、子ども食堂のサービス提供情報について、「大阪府子ども食堂検索サイト」を立ち上げ、学校関係者に提供することである。

2. 方法

本調査は大阪府内の子ども食堂一覧に掲載されている施設約750件のうち、重複を除外し、住所が記載されている施設562件を対象として郵送調査を実施した。オンライン回答も可能とし、回答フォームのQRコードを同封した。書面にて調査の目的や方法を説明し、調査への回答に同意が得られた施設からのデータを収集した。尚、調査の結果をホームページにおいて子ども食堂検索サイトに掲載することを説明した。教育機関等の関連団体への情報提供に関して同意の得られた施設のサービス提供状況のみを、検索サイトに掲載することを説明した。

調査は2024年9月上旬から9月末までを期限として実施した。郵送およびオンラインによる回答が継続してあったため、12月末まで受け付けた。

宛先不明は40件（7.1%）、郵送回答は103件（18.3%）、オンライン回答は104件（18.5%）より回答を得た（回収率36.8%）。

関西大学社会安全学部倫理審査委員会による審査を受け、本調査の実施について承認を得た（審査番号：FY2024_003）。

3. 結果

子ども食堂の地域を大阪市、豊能・三島、河内（北河内・中河内・南河内）、泉北・泉南（堺市含む）の4つに区分したところ、大阪市は29%、豊能・三島28.5%、河内27.5%、泉北・泉南が15%となった。食堂形式による食事提供が85.5%と最も多く、次いで物資提供を行っている子ども食堂が58.9%、お弁当の配布は39.1%、その他のサービスは14.5%であった（その他のサービスについて表1参照）。開催頻度は月1回程度が57%と最も多かった。対象者全てに対して完全無料の子ども食堂は24.2%、一部の対象者に対して無料では70%であった。特に子ども、小学生、中学生までは無料である施設が多く、高校生以上から有料になる子ども食堂が多いことが分かった。全ての対象者に対して有料である子ども食堂も28.5%あった。対象者は小学生98.6%、中学生89.4%、乳幼児81.2%と多く、高校生では65.7%で、保護者77.8%よりも少ないことが示された。

参加者の地域限定は25.1%であり、地域限定をしていない（73.4%）子ども食堂の方が多かった。予約の必要性は45.4%、不要は54.6%であった。学習支援を併設して実施している子ども食堂は32.9%あった。その他のサービス提供として居場所が76.3%など、交流（67.1%）、遊び（62.3%）が多く、相談（42%）も行っている子ども食堂があった。一方、学童保育（3.4%）や放課後等デイサービス（2.4%）は少ない割合であった。学校の児童・生徒のボランティアの受け入れは50.7%が行っており、学校との協力体制を持っている子ども食堂も45.9%であった。地域機関との協力体制

表1 食事の提供形態その他の回答

	回答数	207件における割合 (%)
持ち帰り	5	2.4
フードバンク、フードパントリー	5	2.4
調理	4	1.9
物資提供	3	1.4
弁当配布	3	1.4
おにぎりの提供	3	1.4
カレーの提供	2	1.0
食事提供ではない活動	2	1.0
おやつ提供	1	0.5
軽食提供	1	0.5
手づくりの食事	1	0.5
家庭料理	1	0.5
宅食	1	0.5
夕食付き無料学習支援	1	0.5
食事の提供はしていない	1	0.5
合計	34	16.4

注) その他の回答は30件 (14.5%) あったが、自由記述に複数の内容の記載があり、34件 (16.4%) の内容を示している

は88.4%と高く、市役所/区役所/町村役場が70%と最も高かった。次いで社会福祉協議会 (26.1%)、児童相談所 (23.2%) であった。

スタッフの数の平均値は9.4人で、1人で行っている場合もあれば最大50名程度という回答もあった。有資格者の在籍がある子ども食堂は40.6%で、保育士が36.2%で最も多く、次いで栄養士 (21.7%)、看護師 (18.4%) であった。

障がいなどの特性を持つ者の受け入れについては、可能とする子ども食堂が89.4%と多かった。発達障がい者が75.8%と最も多く、不登校が64.3%、知的障がい者が51.7%であった。

イベントの実施は69.6%が行っており、具体的内容については表2に示している。

運営形態は任意団体が35.7%と最も多く、個人は20.8%、NPO法人が12.1%であった。

教育機関などへの情報提供について同意が得られた子ども食堂は181件 (87.4%) であった。これらの情報を「大阪府子ども食堂検索サイト」に掲載した。

4. 考察

農林水産省 (2018) の全国の子ども食堂274件の調査の結果では、月1回程度の実施が48.5%に対し、本調査の結果では57%であった。全国こども食堂支援センター・むすびえ (2024) の調査では、1,483件の子ども食堂は会食の場合、月に1回程度が53.8%、1ヶ月の活動日数についても3日未満が46.9%と最も多いことが示されている。運用形態としては食堂形式の食事提供の他に物資の配布なども行っていることが示された。完全無料よりも一部の対象者は有料とし、小学生や中学生を中

心に子どもは無料の場合が多いことが分かった。

参加対象者も小学生や中学生が中心となり、高校生受け入れが65.7%と減少することも示された。大阪府内の教職員を対象とした調査（廣川ら，2024）では、教職員にとって高校生の受け入れ可能な子ども食堂のニーズが高いことが示されていた。一方、高校生を対象とする子ども食堂が不足している可能性がある。子ども食堂の対象者を地域で限定している割合は25%と少ないが、限定している場合には小学校区や中学校区、市区町村単位であることが分かり、子ども食堂の対象者が小学生や中学生を中心としていることが示された。

子ども食堂の活動目的が「居場所づくり」であることが農林水産省（2018）や全国こども食堂支援センター・むすびえ（2024）の調査でも示されている通り、居場所、遊び、交流といったサービスを提供する子ども食堂が多く、学習支援を行っている子ども食堂も32.9%あった。

本調査は大阪府内の子ども食堂を対象として実施し、回答率は36.8%であった。その為、地域やサービス提供、スタッフの有資格者の在籍、学校や地域との連携について、偏りがある可能性があ

表2 イベントの内容

	回答数	207件における割合 (%)
クリスマス	57	27.5
季節の行事	43	20.8
祭り	29	14.0
ハロウィン	29	14.0
クッキング	20	9.7
ゲーム大会、遊びの場	18	8.7
工作、アート体験	15	7.2
音楽イベント	14	6.8
農業・収穫体験	12	5.8
地域イベント	12	5.8
スポーツ	11	5.3
誕生会、卒入祝	8	3.9
バーベキュー	8	3.9
映画・舞台鑑賞、観劇	7	3.4
ワークショップ	6	2.9
遠足	5	2.4
紙しばい、読み聞かせ	5	2.4
見学	3	1.4
キャンプ	3	1.4
スポーツ観戦	3	1.4
外出	3	1.4
学習	3	1.4
フリーマーケット	2	1.0
プログラミング	2	1.0
その他	34	16.4
合計	352	170.0

る。子どもの支援について、子ども食堂としてではなく、居場所づくりや、イベントなど他の支援を行っている地域もあると考える。大阪府内の児童・生徒が、どのような地域の子ども支援サービスを受けているのか、またどのようなニーズがあるのかを把握する必要がある。

今後は、本調査によって得られた子ども食堂のサービス提供の情報を、大阪府内の教育機関や関連団体などに提供することにより、学校と地域の連携を促進する方法を考案したい。

謝辞

本調査の実施にあたり、大阪府から多大なご協力をいただきました。

本調査は2024～2025年度なにわ大阪研究センターの研究費で行いました。

引用文献

廣川空美・菊池美奈子・大井美紀・馬場幸子・植田紀美子・元吉忠寛・近藤誠司（2024）大阪府内の学校教職員における「子ども食堂」などの子ども支援サービスのニーズに関する実態調査 厚生労働省の指標, 71 (14), 23-30.

厚生労働省（2023）「2022年国民生活基礎調査の概況」 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf>（2025年11月9日）

三菱UFJリサーチ & コンサルティング（2016）子どもの貧困の社会的損失推計 ― 都道府県別推計 ― レポート 日本財団 https://www.nippon-foundation.or.jp/wp-content/uploads/2019/01/wha_pro_end_04.pdf（2025年7月15日）

内閣府男女共同参画局（2022）男女共同参画白書令和4年版 ひとり親世帯の貧困率の国際比較 <https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/r04/zentai/html/zuhyo/zuhyo06-05.html>（2025年11月9日）

認定NPO法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえ（2024）第2回全国子ども食堂実態調査報告書 https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2024/06/Report_Jittai_Chousa.pdf（2025年7月16日）

農林水産省（2018）「子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集～地域との連携で食育の環が広がっています～」 <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kodomosyokudo-33.pdf>（2025年7月16日）

大阪府（2024）大阪府子どもの生活に関する実態調査 <https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/88177/houkokusho.pdf>（2025年11月9日）

（ひろかわ くうみ 関西大学社会安全学部教授）

（きくち みなこ 梅花女子大学看護保健学部教授）

（うえだ きみこ 関西大学人間健康学部教授）

（もとよし ただひろ 関西大学社会安全学部教授）

（こんどう せいじ 関西大学社会安全学部教授）

（たかとりげ としお 関西大学社会安全学部教授）

（おおい みき 高知学園短期大学幼児保育学科非常勤講師）

（まゆみ すばる 関西大学大学院社会安全研究科博士課程前期課程1年）

2025～2026年度なにわ大阪研究センター公募研究班

映像制作初学者におけるロケーション選択行動の分析 —近接性バイアスと行動圏の固定化に着目して—

長 谷 海 平 乾 善 彦

1. 研究背景と目的

本研究は、映像制作ワークショップを通して大阪の都市景観を再発見すること、そしてそのための教育的枠組みを構築することを目的として実施しているものである。今日、都市空間の理解や地域文化の再評価には従来の地理的・文化的調査だけでなく、芸術的・身体的アプローチが有効であるとされる。特に映像制作は都市の景観・動線・光環境・人の活動などを多層的に観察し、再解釈する手段として大きな可能性を持つ。

当初の研究計画では「特定の都市で映像制作を行うことにより参加者が自然と都市景観を再発見しうる」という仮説を置き、そのためのワークショップを設計する予定であった。しかし、実施準備の段階で映像制作の初学者が実際にどのようなロケーションを選択するのか、またその選択が都市景観への新たな気づきにつながるのかについて検証が必要ではないかという疑問が生じた。

そこで、本研究では、まず筆者が本学において過去3年間に行われた初学者向けの映像制作授業における学生作品55本（計231シーン）を対象として、撮影ロケーションの分布を分析した。その目的は、初学者がどのような基準・傾向でロケーションを選ぶのかを明らかにし、都市景観を再発見するためのワークショップを設計する際に克服すべき課題を抽出することである。本報告書はこの予備調査の結果と解釈、そして今後のワークショップ設計に向けた課題提示を目的とする。

2. 方法：過去授業におけるロケーション調査

2.1 対象とデータ収集

対象としたのは、筆者が担当する「制作実習（映像基礎）」において過去3年間に学生が制作した課題作品55本である。「制作実習（映像基礎）」は調査期間にわたり関西大学の総合情報学部にあるC棟で実施された。その授業内で課題とする作品のテーマは異なるが「遠い・近い」「高い・低い」等ロケーションを限定しない抽象的なものか、自由課題のいずれかである。作品は30秒～2分程度の短編で、ロケーションについて学内外の指定や強制は行っていない。

作品に対する分析単位は「シーン」である。シーンとは映像表現の1単位であり、ここでは時間と空間が継続する映像の状態を指す。そのため、編集されて複数カットで構成されていても1シーンとしてカウントを行った。今回対象とする55作品は231シーンに分解することができ、この各シー

ンについてそれぞれの撮影地点を特定した。撮影地点は大学キャンパスの空間を基準としている。主に建物を基準として、中庭や噴水など特徴的な拠点を空間の基準とした。これに学外の空間を加えてロケーションの頻度分布を算出した。

分析対象となった作品の大半は関西大学の総合情報学部の敷地をロケーションとして撮影されており、この校地は約45万㎡の広大な敷地を持つ。この広大な敷地に対して撮影地点の偏りが見られるかどうかを検討するため、ロケーション選択の多様性を中心に分析を行った。

2.2 ロケーションの分類

ロケーションは以下のカテゴリに分類した。

- C棟（授業棟）
- A棟、B棟、D棟周辺
- 中庭、噴水、グラウンド、馬場
- 食堂
- K棟前階段
- バス停
- A棟裏
- ジム棟周辺
- その他A（構内道路等バラバラで複数利用が無い学内ロケーション）
- その他B（自宅等と思われる学外ロケーション）

これらの分類をもとに、どの場所がどの程度使用されているかを定量的に把握した。

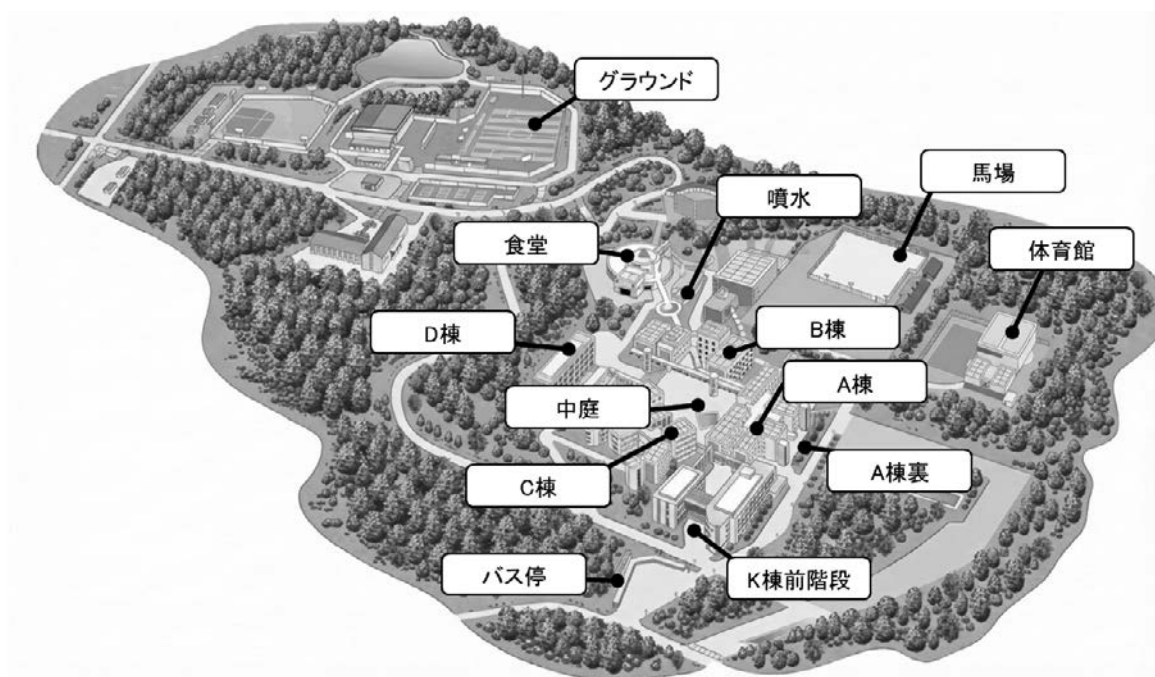


図1 関西大学総合情報学部俯瞰図（総合情報学部HPより改変）

3. 結果：ロケーションの偏りと利用傾向

分析の結果、以下のようなロケーション使用分布が明らかになった。(小数点第2位以下は切り捨て：図2)

- C棟：44シーン（19%）—— 最多
- 食堂：30シーン（12.9%）
- 中庭：27シーン（11.6%）
- B棟：19シーン（8.2%）
- A棟：14シーン（6%）
- グラウンド：14シーン（6%）
- 噴水：9シーン（3.8%）
- 馬場：9シーン（3.8%）
- D棟前：9シーン（3.8%）
- K棟前階段：9シーン（3.8%）
- 体育館周辺：8シーン（3.4%）
- バス停：5シーン（2.1%）
- A棟裏：5シーン（2.1%）
- その他A：19シーン（8.2%）
- その他B：10シーン（4.3%）

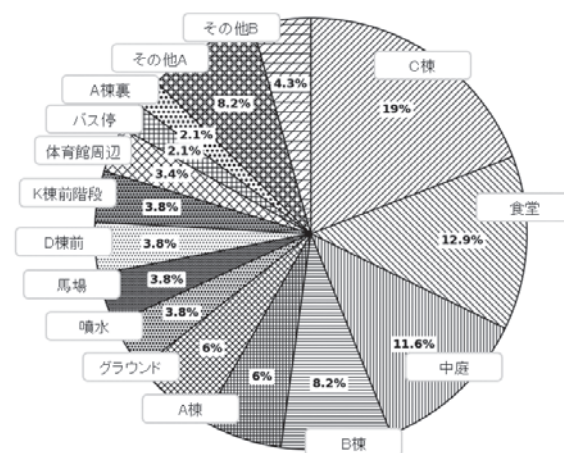


図2 選択されたロケーションの割合

3.1 最も顕著な傾向：C棟依存

本授業がC棟で実施されていることを踏まえると、授業直後に撮影しやすいという利便性が背景にあると考えられる。また、中庭・食堂・B棟・A棟など日常動線に近い場所が上位を占めており、行動圏の狭さがうかがえる。

3.2 多様なロケーションは選ばれていない

敷地は広大であるが、ほとんどの学生が撮影地点を「数棟の周辺」に限定している。また、学外ロケーションの利用も極めて少なく、景観そのものを探索しようとする行動はほとんど見られなかった。

この偏りは、単なる個人差や年度特性とは言い難い。複数年度にわたりテーマの差異にもかかわらず一貫して観察された傾向であることから、構造的な傾向と考えられる。

4. 考察：初学者のロケーション選択に見られる空間行動的バイアス

この結果は、映像制作初学者のロケーション選択に複数のバイアスが働いていることを示唆する。本研究では、物理的距離の近さに基づく選択傾向を「近接性バイアス」と定義する。こうした空間行動的傾向は、人間の空間行動に関する既存理論や研究とも合致しており、以下の3点に整理できる。

4.1 最小努力の原理 (Principle of Least Effort)

Zipfによる「最小努力の原理」では、人間は行動選択において労力を最小化する方向に向かうと

される (Zipf, 1949)。広大なキャンパス全域が選択可能であっても、学生は授業室に最も近い場所を選ぶ傾向を見せており、学生の行動傾向は Zipf の原理によって理論的に説明可能である。

4.2 距離減衰 (Distance Decay) と行動圏 (Activity Space)

空間相互作用や人口分布においては、距離の増加に伴って量が体系的に減少する「距離減衰」が想定される。都市人口密度が中心からの距離に対して指数関数的に減少するという Clark の古典的研究 (Clark, 1951) は、その代表的な例である。Tobler が提唱した「地理学の第一法則」“Everything is related to everything else, but near things are more related than distant things” (Tobler, 1970) は、空間相互作用が距離に応じて体系的に変化するという基本原理を示している。この視点からすると、初学者が授業拠点に近い場所を選択しやすいことは、人間一般に見られる距離依存性の行動特徴と一致する。

さらに、行動地理学や環境行動研究では人が日常的に移動し馴染みを持つ空間領域を「行動圏 (activity space)」と呼び、その範囲が個々人の行動や意思決定を強く規定することが知られている (Horton & Reynolds, 1971)。行動圏は生活動線、時間予算、心理的安全圏などから構成されるため、特に学生のように日常の多くをキャンパス内で過ごす集団では、既存の行動圏が空間選択の主たる枠組みとなる。

今回のロケーション分析では、授業の中心である C 棟周辺に圧倒的な集中が見られたが、これは「距離の近さ」が選択の主要因となる距離減衰の原理と、日常的な行動圏の内部で行動が完結しやすい activity space の特性の両方から説明可能である。すなわち、初学者にとっては「空間のどこでも選べる」という課題条件が実際には機能しておらず、「視界に入りやすい」「よく知っている」「行き慣れている」といった心理的要因がロケ地選択を強く方向づけていると考えられる。

このことは、都市景観の再発見を目的とするワークショップを設計する際に、単に新しい場所を“紹介する”だけでは不十分であり、学生の行動圏そのものを一時的に拡張する仕組みや、距離・移動負荷を越えて探索行動を促す教育的介入が必要であることを示唆している。

4.3 観察の不十分さ：景観の“見えなさ”

本来、都市景観を映像を通して再発見するためには、学生が景観を観察、その特徴や意味を理解する必要がある。しかし、今回のデータでは高岳館など候補に入りにくい広大なエリアが存在する。これは、

- 光環境や構図の違い
- 空間的奥行き
- 音環境
- 景観固有の意味

などの観察ポイントが十分に認識されていないことを示唆している。

ロケハンに必要な「見る力」すなわち表現における sight literacy (視覚的環境を読み解く力) が育っていない状態では、都市をはじめとする景観の再発見には至らないという前提が明確になった。

5. ワークショップ設計に向けて明らかになった課題

本予備調査により、都市景観の再発見を目的とした映像制作ワークショップを設計する上で、以下の課題が明確になった。

課題1：ロケーション探索への動機づけが弱い

学生は作品の内容よりも「撮りやすい場所」「すぐ撮れる場所」を優先する。

→ 探索行動を促す指導設計が必要。

課題2：行動圏が極端に狭い

広大なキャンパスにもかかわらず、利用されるのは一部の場所に限定されている。

→ 行動圏を広げる体験（都市歩き・探索）が不可欠。

課題3：制度的・時間的・心理的制約の大きさ

授業時間や移動負荷、撮影許可、チーム調整などの制約がロケ地選択を狭めている。

→ 都市景観を扱う際は、探索時間や移動環境の確保が必須。

6. 結語：都市景観再発見ワークショップへの橋渡しとして

当初の研究計画では、映像制作ワークショップを都市景観の再発見につなげることを想定していたが、今回の予備調査により、初学者はロケーション選択において“近くて便利な場所”に偏る構造的傾向があることが定量的に明らかとなった。これは、作品制作だけでは都市景観の再発見に十分に到達しない可能性を示しており、探索行動・観察行動・視野の拡張を目的としたロケハン特化型ワークショップが必要であるという結論が導ける。

今後は、本報告で抽出した課題をもとに、都市景観の理解と創造的視点の獲得を促すワークショップの具体的設計を進める予定である。本調査はその基礎的な知見として位置づけられる。

本調査は映像制作初学者が「どこで撮影するのか」をめぐる習慣的・身体的バイアスを明らかにした。これにより映像制作が都市景観を再発見する契機となるためには、その前段階として学生の視野や行動圏そのものを変化させる教育的働きかけが必要であることが示唆された。今後はこの調査で浮かび上がった課題（身近な場所への依存、視野の限定、探索・観察の欠如）をてこに、都市景観へのアクセスを体験的に学ぶロケハン特化型ワークショップを設計する予定である。ワークショップを通じて学生が都市を再び「見えるもの」として捉え直すための実践モデルの構築を目指す。

参考文献

- Zipf, G. K. (1949). *Human Behavior and the Principle of Least Effort: An Introduction to Human Ecology*. Addison-Wesley.
- Clark, C. (1951). *Urban population densities*. *Journal of the Royal Statistical Society: Series A*, 114(4), 490-496.
- Tobler, W. (1970). *A computer movie simulating urban growth in the Detroit region*. *Economic Geography*, 46(1), 234-240.
- Horton, F. & Reynolds, D. (1971). *Effects of urban spatial structure on individual behavior*. *Economic Geography*, 47(1), 36-48.

関西大学総合情報学部「キャンパスマップ 高槻キャンパス」 https://www.kansai-u.ac.jp/Fc_inf/ca/map/index.html（参照：2025年12月25日）

謝辞

本研究は、2025年度関西大学なにわ大阪研究センター公募研究班において、研究課題「大阪都市景観の映像表現による再解釈：ワークショップを通して創造する都市景観の芸術的可能性」として研究費を受け、その成果を公表するものである。

（はせ かいへい 関西大学総合情報学部准教授）

（いぬい よしひこ 関西大学文学部教授）

表紙にちなんで

橋 寺 知 子

なにわ大阪研究センター研究紀要の表紙は、本センターが所蔵する赤松麟作の版画集「大阪三十六景」を用いている。この版画集は1947（昭和22）年に発刊されたものだが、赤松が描いた大阪の情景は、戦前期の最も豊かで活気のあった頃の風景と推測される。ここでは、表紙にちなんで、風景に表れた大阪の近代をふりかえってみたい。

「天王寺公園」

今号の表紙に描かれているのは、天王寺公園に建つ大阪市立美術館である。美術館は西を正面として高台に建つ。天王寺界隈は聖徳太子ゆかりの四天王寺をはじめ歴史あるエリアで、一心寺から茶臼山にかけては大坂冬の陣、夏の陣の舞台であり、河底池は和氣清麻呂が開削した濠の名残とも伝えられる。1895年、住友家は茶臼山南側の敷地を購入し、本邸造営に向け、まず庭園の造営に取りかかった。今も大阪市立美術館の背面に広がる慶沢園で、小川治兵衛（植治）の手による大阪有数の林泉回遊式庭園である。

1903年、最後にして最大の内国博、第5回内国勸業博覧会が開催された。大阪市は跡地の東側約34,300坪を公園として整備し、1909年、中之島公園に次ぐ2番目の市営公園として天王寺公園が開園した。1915年には内本町にあった府立博物館から移されたゾウやライオンなどを中心に大阪市立動物園が開園、武徳殿や市民博物館、植物園なども設けられた。跡地西側は新世界と呼ばれる歓楽地として開発され、浮沈はあったものの通天閣を中心として大阪らしいスポットとして今もにぎわう。博覧会后、住友家は本格的に邸宅の建設を進め、1920年までに和館と洋館が完成したが、美術館を建設することを条件に、1922年3月に敷地は大阪市に寄付された。住友家の篤志だが、博覧会を契機に敷地の周辺環境が大きく変わったことも本邸移転の要因かもしれない。大阪市は1920年に基金を100万円準備し、大阪市立美術館建設を市会で議決したが、敷地の選定が難航していた。1922年に建築設計競技が開催されたが、関東大震災など諸般の事情で工事は遅れ、1927年に着工、1930年に躯体工事は完了したが、世界恐慌もあり工事中断、1936年にやっと竣工、開館した。実施設計は大阪市営繕課の手により、要所に瓦屋根を戴く「日本趣味を基調とせる近代式」の美術館で、地上3階地下1階、延面積約12,700㎡の規模を誇った。1階中央には東洋風デザインの2層吹抜のエントランスホールが、その左右にも天窗のある2層吹抜の大きな展示室があり、2階展示室も採光を工夫していた。慶沢園はそのまま残され、モダンな美術館に歴史的な風趣を添えている。

美術館建設と同時期、1932年に天王寺公園は大規模に改造された。南東部では西洋式花壇、南西部には日本式庭園が整えられた。新世界側から美術館正面に向けて「フロントアベニュー」が一直線にのびる。表紙の絵は、このアベニューから美術館を仰ぎ見ている。アベニューの両側に高木が

描かれているが、美術館竣工時の施設配置では、美術館前の階段に近い位置には、左（北）側に運動場、右（南）側には野外音楽堂が配されていた。天王寺公園は、緑や水に富み、スポーツ、美術、そして音楽も楽しめる大阪一充実した公園に整えられた。河底池付近も園地に加えられ、約68,000坪の大公園となった。

一時期、天王寺公園は有料化された時期もあったが、近年、再び大きく改修され、都市公園を柔軟に活用するパークマネジメントの手法を用いて、南東部は芝生広場に商業施設やカフェが設けられ、「てんしば」と呼ばれている。美術館も外観はあまり変わっていないが、内部は2年半かけて大改修され、2025年3月の再オープン後は話題の展覧会が続き、多くの人で賑わっている。

参考文献

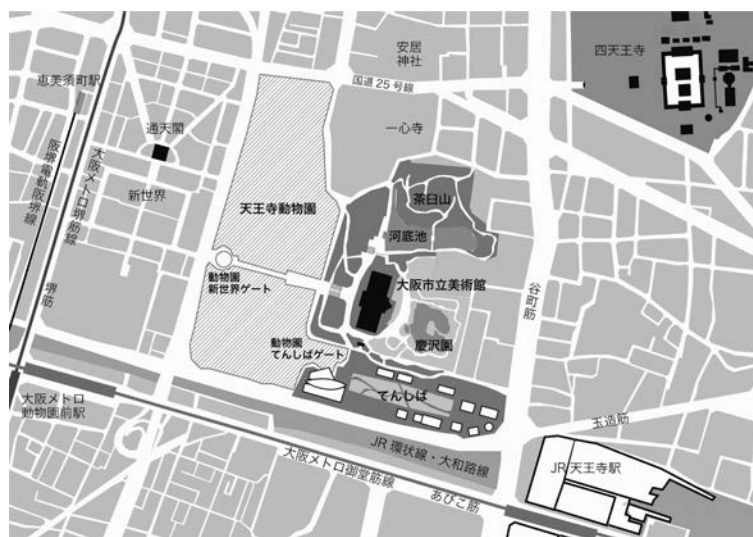
椎原兵市：天王寺公園の沿革と全貌、『建築と社会』1934年4月号、p.17-25。この号は公園の特集号で、天王寺公園に多くのページ数を割いている。
 波江悌夫：近代美術館に就いて、『建築と社会』1934年8月号、p.4-10
 富士岡重一：大阪市立美術館、『建築と社会』1936年6月号、p.14-17



「(大阪名所) 新装される大阪市立美術館」
 (大阪市立図書館デジタルアーカイブより)
 新世界側から美術館正面を望む。



大阪市立美術館 現況
 「アヴェニュー」は天王寺動物園上に架かる幅広の陸橋となり、美術館玄関前の階段は少し短くなった。



周辺地図

(はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授)

2025年度なにわ大阪研究センター事業紹介

関西大学なにわ大阪研究センターでは、センターがめざす「ネットワークとしての大阪研究の拠点づくり」を支援するために本センターの活動方針の中核ともいえるべき研究領域・テーマを設定しています。これらを足掛かりとして、本センターにおける地域研究と連携の活動が一層重層化されるとともに、今後の継続的な外部資金獲得の基盤が形成されることが期待されています。

2025年度 【基幹研究班】

研究領域・テーマ	<ul style="list-style-type: none"> 道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信 鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究 その他（幕末から大大阪時代への変遷に関わる地域研究、所蔵資料のデジタルアーカイブ化と公開に関する研究）
研究課題	なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化と情報公開
研究代表者	林 武文 総合情報学部・教授 なにわ大阪研究センター・センター長
研究概要	<p>2025年度の基幹研究のテーマとして、2024年度から引き続き取り組む①道頓堀五座の景観復元、②鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究、さらに⑤その他として、幕末から大大阪時代への変遷に関わる地域研究、センター保有資料に基づくデジタルアーカイブ構築とその公開に関する研究を展開する。</p> <p>①については、2024年度に松竹株式会社から提供された大正12年の大阪松竹座図面をもとに、道頓堀松竹座周辺と劇場内部の復元を行う。また、これに並行する形で歴史建築と芝居芸能分野の研究を進める。さらに、前年度までに撮影した大塚克三氏のデザイン画と、既存の山田伸吉資料を組み合わせ、昭和初期から戦後にかけての舞台芸能と可視化に向けた検討を進める。</p> <p>②については、鉄砲の材料の由来と製造工程の解明を目指し、銃身の金属組織と組成の分析研究を本格化させる。和鉄の鍛造加工性およびたたら製鉄原料に由来する化学成分に焦点を当てた調査を通じて、歴史研究の検証を試みる。この結果を、2023年度に完成した鉄砲制作過程のCG映像とデジタルコンテンツによる情報発信に反映させる。</p> <p>⑤については、①の研究に関連するが、道頓堀に留まらず、大大阪の他地域にも視野を広げ、2023年度に寄贈された浪花名所図屏風の調査とその活用方法を含め、地域に密着した研究とその成果の可視化を進める。また、2024年度には、これまでに蓄積された歴史資料のリストをWebサイト上のデータベースとして公開したが、2025年度は画像も含めたデジタルアーカイブ構築に向け、画像データの整理と公開にも取り組む。</p>
研究分担者	乾 善彦 文学部・教授 藪田 貫 関西大学名誉教授 井浦 崇 総合情報学部・教授 橋寺 知子 環境都市工学部・准教授 丸山 徹 化学生命工学部・教授 北川 博子 関西大学非常勤講師 李 信雨 非常勤研究員（松竹株式会社） 奥本 未世 非常勤研究員（大阪歴史博物館）
研究期間	2025年度（1年間）

2025年度 【公募研究班】

研究領域・ テーマ	・その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究
研究課題	交野市森古墳群の基礎的研究—鍋塚古墳の検討を中心に—
研究代表者	井上 主税 文学部・教授
研究概要	<p>大阪府交野市森に所在する森古墳群は、古墳時代前期（3・4世紀）を代表する古墳群として著名である。なかでも1号墳（雷塚古墳）や6号墳（鍋塚古墳）は、出現期の前方後円（方）墳として、この時代を研究するうえでも歴史的意義は大きい。</p> <p>古墳時代はその時代名称の通り、全国に古墳が数多く築造された時代であり、なかでも前方後円（方）墳という特殊な形態の古墳が、北は岩手県から南は鹿児島県まで汎列島的に分布している。3世紀中葉の箸墓古墳（奈良県桜井市）の築造を、定型化した前方後円墳の出現として、これを古墳時代の始まりとする見解に立つと、箸墓古墳以降の3世紀後半代に築造された古墳が出現期古墳にあたる。出現期の古墳は、瀬戸内海沿岸から近畿地方中央部にかけて主に分布するが、なかでも奈良県（大和地域）に分布の中心がある。このほか、近畿地方中央部では、淀川右岸（山城地域）に元稲荷古墳（向日市）、淀川左岸（北河内地域）に森1号墳および6号墳、大和川地域（南河内）に玉手山9号墳（柏原市）などが分布している。</p> <p>鍋塚古墳の既往の発掘調査（1996・2000年）では、墳丘のトレンチ（調査のための発掘溝）から葺石が一部検出され、前方後方墳の可能性が高いとされた。また、後方部中央の埋葬施設については、竪穴式石室の一部とみられる石材等が確認されたが、その規模や構造などの詳細は不明であった。</p> <p>このような状況のなか、鍋塚古墳について、墳丘形態や埋葬施設の構造を明らかにする調査計画が持ち上がり、それに先立ち古墳の立地や墳丘形態を把握できる詳細な測量図を作成する必要性が生じた。</p> <p>本研究は、大阪府（河内地域）に所在する森古墳群を対象とし、発掘調査に先立ち、古墳の立地や墳丘形態を把握するための測量調査を実施し、これを通じて得られた資料や既往調査の出土資料などをもとに、森古墳群の築造時期や性格、歴史的な意義について考察することを目的とする。</p>
研究分担者	徳田 誠志 文学部・客員教授 村元 健一 文学部・教授
研究期間	2025年度（1年間）

2025年度～2026年度 【公募研究班】

研究領域・ テーマ	・その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究
研究課題	大阪都市景観の映像表現による再解釈： ワークショップを通して創造する都市景観の芸術的可能性
研究代表者	長谷 海平 総合情報学部・准教授
研究概要	<p>本研究は大阪市内を舞台とした映像作品の制作を主軸とし、都市空間と映像芸術の相互作用を芸術実践学の観点から探究することを主たる目的とする。具体的には、大阪の都市景観が持つ『歴史的な建造物と現代建築の対比』『街の光と影の表現』『人々の生活様式が映し出す風景』といった視覚的・感性的特質について作品制作とそのプロセスを通じて明らかにし、それらが映像などの表現にもたらす芸術的可能性を実践的に追求する。</p> <p>大阪は近代化と伝統が共存する独特の都市景観を有している。その景観に備わっている芸術的価値と映像表現における潜在力を秘めているものの、その魅力は未だ十分に探求され尽くしておらず更なる発掘の余地が大きいと言える。本研究では都市空間を「生きたキャンバス」として捉え直し、作品制作を通じて大阪の景観が映画芸術にもたらす新たな表現の可能性を具体的に提示する。</p> <p>本研究では学生を対象としたワークショップ形式で映画など視覚芸術の作品を制作する機会を設ける。ワークショップでは、例えば参加者自身がカメラを持ち、大阪の街を自由に撮影し編集することで従来の認識を超えた新たな大阪像を創出することを目指す。ワークショップ形式で制作された映像作品群を通して大阪の都市景観が持つ芸術的価値を再提示し、その潜在力を最大限に引き出すための新たな可能性を探求する。これらの作品は、多様な視点から大阪の都市景観の魅力を浮き彫りにし新たな芸術表現の可能性を示唆するものになると考えられる。それは、映画には都市景観に備わった価値を客観的に示す機能を備えているためである。</p> <p>本研究では、ワークショップで制作された映像作品を、芸術実践学上のアーカイブとし位置付ける。そして、これらの映像作品を芸術実践学に取り組みむ上で新たな大阪像のデータベースとして貴重な情報源となることを目指す。</p>
研究分担者	乾 善彦 文学部・教授
研究期間	2025年度～2026年度（2年間）

2024年度～2025年度 【公募研究班】

研究領域・ テーマ	・その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究（近世大坂の研究）
研究課題	近世大坂の遊興文化と出版の研究 一名所・芝居・花街を中心に―
研究代表者	山本 卓 文学部・教授
研究概要	<p>近世の大坂では、士農工商といった枠組みを超えて、文化が享受されていた。本研究では、大坂で生まれた遊興文化について、以下の三つの大きな柱を設定し、調査・研究を進める。</p> <p>1. 名所 18世紀後半から「名所図会」刊行の流行があり、『摂津名所図会』（1796－98刊）の原本は、なにわ大阪研究センターにも所蔵されている。こうした名所図会を基本に、図書館に所蔵されている鬼洞文庫の一枚摺や大坂の名所を描いた浮世絵についても網羅的に調査・研究していく。さらに、『新出「浪花名所図屏風」の調査・研究』（2016年、関西大学なにわ大阪研究センター刊）で取り上げた屏風の原本が2023年度、センターに寄贈された。本屏風と浮世絵「浪花百景」や現在の風景などを関連づけたデジタル研究も考えていく。さらに、名所に関連づけた和歌も近世には広く知られている。古典文学と名所との関連づけも行う。</p> <p>2. 芝居 本センターの基幹研究の一つに「道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信」がある。これは近代道頓堀の景観復元に眼目があるが、道頓堀は近世に誕生した芝居街である。本研究では、近世大坂の芝居の様相を明らかにすることも目的とする。本学図書館には、近世芝居関係の図書や資料が数多く所蔵されている。さらに、KU-ORCASで公開されている図書館所蔵「長谷川貞信（初代・二代・三代）浮世絵版画コレクション」、中村幸彦文庫や鬼洞文庫などの特別文庫についても調査・研究を行う。</p> <p>3. 花街 官許の廓である新町やその他の花街に関する文献実証的な研究は進んでいるとはいえない。しかし、図書館には数多くの図書や資料類が所蔵されている。これらの悉皆調査を行うことで、本学図書館所蔵図書の意義を広く知らしめたい。</p> <p>以上、三つの遊興文化を、主に出版物を通して明らかにしていく。研究成果を広く問うためには、博物館と協力しながら展覧会開催を目指すこととする。展覧会は原物展示を基本としながら、映像作成など、デジタルを用いたものとしたい。</p>
研究分担者	北川 博子 関西大学非常勤講師 中尾 和昇 奈良大学・文学部・准教授 岸本 理恵 文学部・教授 長谷 海平 総合情報学部・准教授
研究期間	2024年度～2025年度（2年間）

2024年度～2025年度 【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> 大学昇格を果たした1922年以降、大大阪時代の各分野で活躍した本学所縁の人材の発掘と大学の足跡を探る研究
研究課題	「大大阪」の形成・発展と山岡順太郎 一山岡家文書の総合的研究一
研究代表者	官田 光史 文学部・教授
研究概要	<p>本研究は、なにわ大阪研究センターの公募研究として2022年度に採択された「「大大阪」の時代と関西大学一山岡家文書の調査・研究を中心に一」を発展的に継続しようとするものである。山岡家文書は山岡順太郎とその家族（父・美章、長男・倭）の旧蔵資料である。前述の公募研究が採択されたこともあり、目録の作成は順調に進んでおり、山岡家文書所収の本学関係書類、山岡関わった会社の書類・営業報告書、政官財界関係者が山岡に宛てた書簡など、約3700点の全貌が明らかになりつつある。</p> <p>この目録の完成は山岡家文書の利便性を飛躍的に高め、山岡家文書内の諸資料はもちろん、学内外で所蔵される同時代の諸資料と山岡家文書をリンクした研究を可能にする。こうした山岡家文書の総合的研究によって、山岡をはじめとする本学関係者が「大大阪」の形成と発展に貢献した姿を描き出すことが本研究の目的である。</p> <p>本研究の特色は、山岡家文書という質・量ともに充実した資料の総合的研究から、「大大阪」時代の政治や社会のあり方に光を当てることにあり、そのポイントは①「大大阪」における政官財界ネットワークの機能の解明、②「大大阪」における「加賀閥」の構造と実態の解明の2点である。</p> <p>これらの研究の集大成として、最終年度に開催する報告会については、1910～20年代の東京など、他の都市と大阪の比較も視野に入れて企画する。山岡家文書に関する本研究の成果は、今後の大阪・関西の地域史研究、日本近現代史研究に大きなインパクトを与えると期待している。</p> <p>(2024・2025年度)</p> <p>「大大阪」の政官財界ネットワーク研究では、山岡が重要な地位を占め、山岡家文書にも多数の資料が含まれる会社として、大阪商船、大阪鉄工所、大阪住宅経営、日本電力などの活動を検討する。「大大阪」の「加賀閥」研究では、山岡に宛てられた書簡から、石川県在住者や大阪在住の石川県出身者の書簡を抽出し、解読する。また、金沢市立玉川図書館、金沢市公文書館、石川県立図書館などでも資料調査を実施する。</p> <p>(2025年度)</p> <p>研究成果の報告会を開催する。可能であれば1910～20年代の都市史を専門とする研究者をコメンテーターとして招く。</p>
研究分担者	伊藤 信明 博物館・学芸員
研究期間	2024年度～2025年度（2年間）

2024年度～2025年度 【公募研究班】

研究領域・ テーマ	・その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究（大阪府下の子どもの健全な育成）
研究課題	大阪府下における「子ども支援」サービスの調査とガイド作成
研究代表者	廣川 空美 社会安全学部・教授
研究概要	<p>厚生労働省による「2019年国民生活基礎調査の概況」によると、我が国の子どもの貧困率は13.5%であり、所得ベースの相対貧困率は15.4%である。中でも、大阪府は貧困状態にある子どもの数が全国で最も多く、生活保護世帯の割合も多いことが示されている（三菱UFJリサーチ&コンサルティング, 2016）。大阪府下の子どもの相対的貧困率は14.9%という調査結果が報告されており、経済的な困窮度の違いにより、放課後にゲームセンターで過ごす割合や、一人で過ごす割合が多くなり、朝食だけでなく夕食も食べない割合も多いことが示されている（大阪府立大学, 2017）。経済的に困窮度が高い家庭の子どもに対しては、学校以外の場でかかわることができる大人からの支援の必要性が指摘されている。</p> <p>このような子どもの貧困の問題に対して、食事の提供を行うことを目的として、「子ども食堂」の活動が全国に広がっている。農林水産省（2018）の調査の結果では、80%以上の子ども食堂が地域との何らかの連携を行っている一方、課題として、「来てほしい家庭からの参加の確保」、運営費用やスタッフの負担、といった内容が上位を占め、学校・教育委員会からの協力や、行政からの協力も課題として挙げられている（農林水産省, 2018）。</p> <p>子どもの健康状態や家庭環境などは、学校においてある程度把握されているものと考えられる。子ども食堂への参加を促すことができるような情報を学校に提供し、学校と地域の子どもの支援サービスとの連携を促進することが求められるのではないかと考える。本研究の目的は、大阪府内における子どもへの支援について、学校と地域との連携を促進するためのツールを作成することである。そのために、本研究において、次の2点を行う。</p> <p>①大阪府下の子ども食堂を対象に、子どもへの支援活動の内容（例：食事の提供、学習支援、学外活動など）、支援活動提供の対象者（例：子どものみ、大人を含むなど）、支援活動の日時、運営者からのメッセージなどの調査を実施する。</p> <p>②情報検索サイト「大阪府版 子ども食堂ガイド」を立ち上げ、調査で得られたサービス情報を掲載し、学校関係者や保護者、地域の住民が広く検索可能なものとして、情報提供する。</p>
研究分担者	菊池美奈子 梅花女子大学・看護保健学部・准教授 植田紀美子 人間健康学部・教授 元吉 忠寛 社会安全学部・教授 近藤 誠司 社会安全学部・教授 高鳥毛敏雄 社会安全学部・教授
研究期間	2024年度～2025年度（2年間）

『関西大学なにわ大阪研究』投稿規程

26 July 2018

1 投稿資格

投稿資格を有する者は次の通りとし、所属機関において研究倫理研修を受講していることを条件とする。

- (1) 関西大学なにわ大阪研究センター（以下、本センターという）において研究活動に従事している者、および従事した経験がある者。
- (2) 関西大学の専任教育職員。
- (3) 上記以外の者で、関西大学専任教育職員の推薦を受けた者。

2 投稿の内容・種別

投稿を受け付ける原稿は「なにわ大阪についての研究」に関するもので、種別は次のとおりとする。

- (1) 審査員の査読を希望する論文
- (2) 査読を希望しない論文
- (3) 研究ノート
- (4) 資料
- (5) その他（事前に本センターに問い合わせること）

3 投稿の体裁・分量

投稿は日本語（横書きまたは縦書き）または英語とする（それ以外の言語での投稿を希望する場合は本センターまで問い合わせること）。原稿は WORD もしくは TeX で作成し、PDF 形式に転換したファイルも添付して提出する。分量は、本誌の体裁（A4判で1ページおよそ1400字）で図表等を含めて最大20ページ以内とする。

4 掲載の決定

掲載の採否は、査読付き論文については審査員の査読を経て編集委員会が、それ以外の投稿については編集委員会が決定する。

5 著作権等の帰属

掲載が決定した投稿の著作権は投稿者（著者）に帰属する。ただし、本センターのホームページや各種電子ポータルなどに掲載・配布する電子複製・配布権は本センターに属するものとする。

6 抜き刷りの作成

投稿者は、掲載が決定した投稿の抜き刷りを作成することができる。30部までは無料、それ以上は有償とする。

7 投稿手続等

投稿は、投稿フォーム（本センターのホームページに掲載）を必ず添えて、下記まで送付すること。投稿の締切日は毎年度12月末日、ただし査読を希望する場合は11月末日とする。

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3-35 関西大学なにわ大阪研究センター
naniwa-osaka@ml.kandai.jp

関西大学なにわ大阪研究センター設立の趣意

～センターの使命とめざすもの～

なにわ大阪研究センターは、2016年4月、関西大学創立130周年記念事業のひとつとして設立されました。

「大阪」に生まれ育まれてきた大学としての社会的な期待に応えるため、この地を中心に集積してきた研究と連携の実績をもとに、優れた研究成果を発信することを使命としています。

また、設立当初に定められた基本方針は、

- ① 本センターの沿革を代表する「大阪都市遺産研究センター」*をはじめ、国及び自治体等の付託を受けた大型の研究プロジェクトによる大阪の歴史、文化、芸能、景観等に関する研究と地域連携の実績を継承・発展させること。
- ② そこから生み出された学術的に価値の高い成果物及び本学が有する豊富な学術資産を検証・発掘・可視化し、広く社会に公開すること。

の2点です。この方針を基軸としつつ、総合大学である本学の特長を活かし、文理の各分野を統合した「総合科学」「総合知」によって、大阪および関西を中心とした地域研究のハブとして、大阪から全国に、さらには世界に向けて、知的な魅力にあふれた情報の発信につとめています。

2024年4月、本センターは関西大学博物館の研究組織として再編され、より盤石な研究基盤のもとに、地域研究の拠点をめざしています。

※このセンターの前身のひとつである「大阪都市遺産研究センター」は、文部科学省の大型補助金「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の選定を受け、大阪の都市遺産を史的に検証する研究拠点として、優れた成果をあげました。(2010年度～2015年度)

「なにわ大阪」について

「なにわ大阪」には大阪の歴史・文化遺産という過去のストックと、常に未来に向けて発信する現在のフローとが含意されています。大阪を冠する機構・団体、あるいは「なにわ」単独の呼称もありますが、「なにわ大阪」とした表現は希少性が高く、センター名称としてこの言葉を使用しています。

【編集後記】

『なにわ大阪研究』第8号を、ここに刊行する運びとなりました。本号には、なにわ・大阪をめぐる歴史、文化、社会、都市、そして現代的課題に至るまで、多角的な視点からの論考・資料・研究成果報告が収められています。いずれの成果も、地域に根ざした実証的研究と学際的な視野とを兼ね備えたものであり、本センターの研究活動の広がりや深化をあらためて示すものといえるでしょう。

論文・研究ノートにおいては、現代社会が直面する課題を大阪という具体的なフィールドから捉え直す試みがなされ、また資料紹介や研究成果報告においては、長年にわたる地道な調査・整理・検討の積み重ねが結実しています。とりわけ史資料の紹介や図面・文書の公開は、今後の研究の基盤をなすものであり、学内外の研究者にとって貴重な共有財となることが期待されます。

表紙・裏表紙には、赤松麟作「大阪三十六景」より、天王寺公園と動物園を配しました。本紀要では毎号、2点の作品を取り上げ、それぞれに解説文を付すこととしており、これらの解説は、建築歴史を専門とする橋寺知子先生が継続してご執筆くださっています。解説では、作品の制作背景や描写の特徴に加え、当時の都市空間や建築との関係が建築史的視点から読み解かれており、絵画資料を通じて大阪の都市景観を考察する手がかりが示されています。都市の変遷と人々の営みを静かに映し出すこれらの風景は、本紀要が目指す「なにわ・大阪」を多層的に捉える視座を象徴するものでもあります。過去と現在が交差する表象としての大阪の奥行きを、作品と解説の双方から感じ取っていただければ幸いです。

本号の編集にあたり、多忙の中で原稿をご執筆くださった執筆者の皆様、資料提供や調整にご協力いただいた関係各位に、心より御礼申し上げます。また、編集作業を支えてくださった事務局の尽力にも、この場を借りて感謝を表します。

本紀要が、なにわ・大阪研究のさらなる発展に資するとともに、学内外の研究者や市民の皆様にとって、新たな知的対話の契機となることを願って、編集後記といたします。

2026年3月

関西大学なにわ大阪研究センター長
林 武 文

「鉄炮作法秘伝書」について

中田佳子

はじめに

堺鉄炮鍛冶屋敷は、中世から栄えた旧環濠区域（現、堺市堺区内）の北端部に位置し、中浜筋に面して約二九〇坪の広い敷地を持つ。鉄炮鍛冶の工房と住宅が一体となった日本で唯一の遺構であり、鉄炮商いの店の間や、式台玄関を備えた豪華な接客空間も含まれる。現在は堺市立町家歴史館の一つとして公開され、モノ作り堺のシンボルの存在になっている^①。

鉄炮鍛冶屋敷の主、井上関右衛門家は、江戸時代前期から明治四〇年ころまで、一貫して火縄銃を中心とする銃炮の生産・修理に携わってきた。芝辻理右衛門・芝辻長左衛門・榎並屋勘左衛門といった堺鉄炮鍛冶の老舗である「五鍛冶（後に三鍛冶）」に比べ、後発の平鍛冶ではあったが、伊予国大洲藩加藤家に臣従しつつ、着実に大名・旗本の顧客を増やし、領内の百姓筒も請け負い、また大坂城に配備された銃炮の御用も務めた。

井上家当主は、堺の鉄炮産業を支える鉄炮鍛冶仲間の一員として、受注から銃身の鍛造、下職製作の台木・金属部品を合せた組立て、要請のある場合は七堂浜での試射、そして最後の納品まで、全てを請け負う「鉄炮師」として活動した。そのような絶え間ない営業努力と実績により、同家最後

の鉄炮鍛冶井上壽次の時代には、老舗を凌ぐ繁栄をみるに至った。現在の屋敷は、その最盛期の井上関右衛門家の姿である。

この鉄炮鍛冶屋敷に豊富な古文書の存在が明らかになったのは、本格的な資料調査が始まった二〇一五年度である。屋敷の主屋二階および敷地内に立つ道具蔵・俵倉から二万点を超える近世・近代の文書類が現れ、日本の鉄炮生産の歴史を書き換える大発見となった^②。

本稿で写真を紹介する「鉄炮作法秘伝書」もその一つで、鉄炮の製作法を記した貴重な史料である。写真のあとには、原本の形式に則った翻刻文と、現代語訳を添え、利用の便とした。また、最後に「鉄炮作法秘伝書」と関連する「鉄炮作伝巻」も、参考として原本形式の翻刻文を掲げた。

井上関右衛門家と鉄炮鍛冶技術の伝承

鉄炮鍛冶の技術習得は、親方である「鉄炮師」に弟子入りし、専門知識やノウハウを学び、経験を積んで勘を養うことである。鉄炮鍛冶を家職とする井上家でも同様で、親から息子へ代々その技術は継承されていた。それでは、堺で鉄炮鍛冶を始めた初代は、どこでどのように技術を習得し

たのだろうか。

家伝によると、先祖は井上八兵衛という砲術家であって、主家である大名の加藤家が太洲へ定着する前、伯耆国米子へ転封となったのを機に、堺へやって来たという。事実とすれば慶長一五年（一六一〇）のことになるが、当時、堺では五鍛冶が徳川家の鉄炮御用を務めており、家康の命で芝辻理右衛門が大筒（靖國神社遊就館所蔵「芝辻砲」）を製作中であった^③。

井上家所蔵「井上氏系図」では、末尾に掲げられた井上八兵衛（実名を「綱次」としている）に、「：撰州堺浪々ノ砲、鉄炮ヲ製スル事ヲ学フ、後為家業」との注記がある^④。堺にやって来た八兵衛が、五鍛冶を渡り歩いて彼らに師事し、修業していた可能性が考えられる。大坂夏の陣では豊臣方による堺の焼き討ちがあり、八兵衛は他の鉄炮鍛冶らと避難を余儀なくされたであろうが、その間も機会があれば鉄炮作りの腕を磨いていたことと想像される。ここでは、「堺浪々」の意味をそのように取りたい。

徳川の世になって堺は急速に復興を遂げる。「元和の町割」という基盤の目状の都市計画により町並が一新された後、八兵衛は鉄炮産業の職人が集住する北端地域の一角、中浜一丁目に居を構え、独立したと考えられる。

井上家では、二代当主の八兵衛が主君の大洲藩主から関右衛門の名を賜ったことで、以後、当主は井上関右衛門を名乗る。関右衛門の代数は、初代（実名不明）・二代（実名不明、法名道讚、おそらく初代の子）・三代正次（二代の孫）・四代為次（三代の子）・五代吉次（四代の甥で養子）・六代直次（五代の孫）・七代宗次（六代の弟）・八代壽次（七代の子）と、八名が確認されている。そのなかでも一八世紀に生きた三代～五代は、生没年の比較から親方と後継者が共に働いている期間が長く、鉄炮鍛冶技術がいちばん望ましい形で伝えられたと考えられる^⑤。

もっとも既存技術の伝承だけにとどまらず、かれらは創意工夫や改良を重ね、新たな技術の獲得を目指した。その一環として、鉄炮製作・冶金・

精錬・金属加工についての幅広い知識を外部に求めた。「鉄炮作法秘伝書」の入手もその一つで、六代関右衛門直次の直筆と思われる写本である。

直次は寛政五年（一七九三）生まれで、父は五代関右衛門吉次の息子、喜左衛門賢次である。賢次は次代関右衛門として嘱望されていたが、文化三年（一八〇六）に若くして亡くなったため、直次が祖父吉次の後継者となった。当時吉次は、鉄炮鍛冶仲間を統率する鉄炮年寄に就き、平鍛冶の家柄ながら老舗と肩を並べて活躍していた。文化八年、その吉次が亡くなり、直次が数え一八歳で六代関右衛門となった。しかし、病気がちだったこともあり、当主であった期間は一番短く、足掛け三年。文化一〇年二月、弟の宗次（壽次の父）に家督と関右衛門の名跡を譲った。直次は傳右衛門と改名して隠居し、文政二年（一八一九）に没した。

「鉄炮作法秘伝書」について

（一）内容と特徴

井上直次が書写した「鉄炮作法秘伝書^⑥」は、表裏の表紙と四三丁の本紙からなる四ツ目綴じの冊子で、縦一九・四cm×横一三・二cm。記載が見られるのは四一丁分である。見つかったのは道具蔵の一階北側中央であり、カマボコ型の総被せ蓋を持つ重厚な作りの木箱に収められていた。木箱の蓋は破損しているが墨書があり、八代関右衛門壽次の時代、天保一五年（一八四四）に鉄炮図面を収納するため作られたことが判明した。

その後壽次は、火縄銃や大砲などの図面だけでなく、鉄炮師にとって重要な書類を次々と同じ箱に納めた。「鉄炮鍛冶取締定書并諸家様方御出入先名前帳」（天保一三年六月）・「鉄炮之儀二付御法度御請合証文帳」（天保一五年一月）・「鉄炮師仲間名前帳」（慶応四年閏四月）など鉄炮鍛冶仲間の基本帳簿や、七堂浜鉄炮打ち場関係書類（幕末）などである。

そのほか、鉄炮鍛冶に関する技術系のものとしては、この「鉄炮作法秘伝書」および「鉄炮作伝巻」と「極奇流鉄炮作伝巻」がある。また、参考書類に「刀剣鍛錬法」や国友藤兵衛重恭（一貫齋）作「気炮記」の写しが含まれる。この箱に納められた文書の全容からして、壽次が家業にとつて最も重要な文書箱と認識していたことは明らかである。

「鉄炮作法秘伝書」は、口径の大きい（玉目の重い）大筒を中心とした鉄炮の張り立て（鍛造による製作）法を簡単な図入りで示したもので、銃身の製作だけでなく、鍛冶場の設営や玉鑄形の製作、鉄炮の色付け、新式のカラクリなどについても記す。巻末には「若林元敷」の記名がある。

本書の最も特徴的な点は、井上直次が、文化九年（一八一二）に自ら七〇匁玉筒（口径約三五・八mm）を製作したおりの経験に基づき、所見を記入していることである。行間や余白だけでなく、別紙を四か所に貼付して追記している。直次の書入れは冒頭に〇印を付けているが、中には書き忘れたのか、無いものもある。

いっぽう、本文自体にも、所どころ原注らしきものが見られる。おそらく、作者が注記したものであろう。直次が「この書入れ、宜しからず」などと、その内容を批判している箇所もあることから、七〇匁玉筒の製作時に本書を参考にしつつ、試行錯誤を繰り返しながら技術研究に取り組んでいた様子がうかがわれる。

壽次が、本書を最も重要な文書箱に納めていたのは、伯父の生のコメントが入っていることと併せて、幕末には諸外国からの脅威に備えるため、海防政策を推進するなかで大筒の需要が高まり、本書を利用する機会が多くなったことも理由として挙げられよう。

本書に直次の追記が入っていることで、最終的な成立時期は文化九年以降になるが、おそらく七〇匁玉筒製作に近い時期で、翌年の関右衛門引退の前であろう。直次は他にも、本書と同じ作者による「細工物諸事秘伝書」

や、鉄の鍛錬の参考に「刀剣鍛錬法」なども筆写しており、関右衛門であった期間は短いながら、研究熱心だったことが分かる。

（二）作者について

「鉄炮作法秘伝書」の作者は、裏表紙の内側に名が記された若林元敷と思われる。この人物について考察するにあたり、「鉄炮作法秘伝書」「鉄炮作伝巻」「極奇流鉄炮作伝巻」が、同じ箱の中にまとめて納められていたことに注目したい。

このうち「鉄炮作伝巻」は、正徳五年（一七一五）二月五日、「八田茂左衛門尉綱久」が「若林庄五郎」の懇望により、秘事三か条を伝えたもので、原本である。秘事の内容は、「筒作九ヶ条之事」「計鉄算法之事」「星極丈之事」とあり、銃身各部の寸法の決め方、使用する鉄の見積りの出し方、照準の位置の定め方など、主に数字と計算法で伝えていて、「鉄炮作法秘伝書」のように具体的な鉄炮の製作法ではない。文中では、尾栓のネジを表すのに「擧」という特殊な文字が使われ、秘事であることを印象付けている。差出人である八田綱久の記名の下には、花押と「宇都宮」と読める押印がある。宛先の若林庄五郎（実名不明）については、若林元敷と同姓であることが注目される。

ついで「極奇流鉄炮作伝巻」は、「鉄炮作伝巻」の秘事に「出合見様早算」（銃の照準線と弾道の交差点までの距離計算）を加えて一書にしたものである。これによって八田茂左衛門尉綱久は、砲術流派「極奇流」の師であるらしいことが判明した。『武芸流派大辞典』によると、極奇流の祖は肥後熊本の人山下吉章で、元和年中に諸流を鍛錬して異風筒および発射法を工夫し、開創したという。二代目の立田繁供が寛永年中、印可を受けて越前福井に移り、三代目が宇都宮支流の八田綱久で、棒火矢を工夫して加えた。その子の八田綱完が相伝して元文年中、宇都宮姓に復し、代々世襲し

て福井藩の師範を務めた。また、加賀国大聖寺藩にも伝承したとする^⑫。

宇都宮氏は綱完の代から福井藩士の履歴に登場し、百石の知行を得て大番に入り、「相伝之家芸」を指南している^⑬。いっぽう宛先の若林庄五郎その人は、福井藩の「鉄砲屋」（鉄砲鍛冶）で「新番格以下」という卒身分であり、切米二五石五人扶持を賜り、元文元年（一七三六）一二月に死亡している^⑭。子孫は代々庄五郎の名を継ぎ、藩の鉄砲御用を務めた。

以上を踏まえたくて「鉄炮作法秘伝書」を見直すと、以下の諸点から若林元敷の人物像に迫る手掛かりが得られる。

* 鉄の種類について述べた個所に「此表三国」という表現がある（六丁裏）。これは作者から見て「当地の三国」という意味で、越前国三国（現、福井県坂井市三国町）と考えられる。福井藩支配の三国湊は、山陰地方から北陸へ鉄を輸入する主要港であり、鍛冶業も盛んであった^⑮。

* 「異風下巻鉄積」の項目がある（二五丁裏）。これは極奇流開創に見えらる異風筒（南蛮風の鉄炮）で、当流が得意とした鉄炮であろう。

* 「鉄炮色付の事」に九谷焼の陶土と思われる「大聖寺土」が見え、入手先として「大聖寺家中坂井庄兵衛」の名が記されている（三八・四〇丁表裏）。大聖寺藩も極奇流の地盤であり、若林元敷と坂井庄兵衛とは知己の間柄のようである。

これらの三点から、若林元敷は若林庄五郎同様、極奇流の相伝を受けた人物で、福井藩の鉄砲鍛冶である可能性が高く、庄五郎の子孫と思われる。元敷の通称もおそらく庄五郎であろう。

日本の砲術流派は最終的に二百とも六百とも言われるが、操作法は大同小異ながら、流派によっては銃身・銃床に工夫が凝らされ、鉄炮の仕様がそれぞれ異なる。福井藩の主な砲術流派には、極奇流（宇都宮家）の他に長谷川流（長谷川家）・自由斎流（津田家）があり、鉄炮を製作するうえで、各流派の仕様を理解しなければならない。砲術流派と鉄砲鍛冶が結びつく

理由の一つがそこにある。

堺の鉄砲鍛冶は福井藩に出入りしていないが、井上関右衛門直次は、福井藩の鉄砲鍛冶と誼みを通じ、極奇流の知識を得ていたと考えられる。本来、若林家から外部に流出しないはずの「鉄炮作伝巻」が井上家に残されていたのも、若林家との特別な関係がうかがわれるのである。

(三) 作成時期について

「鉄炮作法秘伝書」には作成時期を示す記載はないが、井上関右衛門家文書中には、若林元敷の手になるもう一つの記録、「細工物諸事秘伝書」が残されている。主屋二階押し入れ内の木箱から見つかり、縦一九・七cm×横一三・五cmで、表裏の表紙と五五丁の本紙よりなる。「鉄炮作法秘伝書」の場合と同様、本書も天保ころから明治初年にかけての鉄砲鍛冶仲間関係の書類とともに収められていた。

この文書には表紙の下にもとの表紙があり、それには「享和壬戌年／雑録／若林元敷」と三行で記されている。上表紙の体裁が「鉄炮作法秘伝書」とよく似ているので、井上直次が「秘伝書」二冊揃えのつもりで調整したのかもしれない。

その内容は、各種の鉄の説明から始まり、白銅・唐金・真鍮・水銀・硝子・七宝や焼物の釉薬、金物の色付けなど、金属の種類から加工技術まで、多岐にわたっている。「秘伝書」というより「雑録」のほうが、題としてふさわしいようである。

作成時期を表す「享和壬戌年」は、享和二年（一八〇二）である。すると、井上直次の生没年は寛政五〜文政二年（一七九三〜一八一九）なので、若林元敷は直次よりかなり年長になるだろうが、ほぼ同世代の人物と言える。「鉄炮作法秘伝書」の作成時期は、直次が追記した文化九年より前で、「雑録」とあまり変わらないころ、一九世紀初頭ではないだろうか。

福井藩鉄炮鍛冶の若林家は、八田綱久から極奇流の相伝を受けた庄五郎を初代としており、「雑録」が書かれた享和二年には、四代庄五郎が三月に病気で引退し、五代目に代わる。五代庄五郎は文政四年（一八二一）まで鉄炮鍛冶を続けた。したがって、「雑録」および「鉄炮作法秘伝書」の作者若林元敷は、四代・五代のどちらかになるが、福井藩士の履歴には実名が記されていないので、特定できない。可能性が高いのは五代目であろう。

鉄炮製作法史料の比較

（一）「大小御鉄炮張立製作」と「中島流砲術管闕録」

今日、鉄炮の製作法について記した近世史料としては、「大小御鉄炮張立製作」と「中島流砲術管闕録」の二点が知られている。このうち「大小御鉄炮張立製作」は、近江国国友の鉄炮鍛冶で年寄脇を務めた国友藤兵衛重恭（一貫齋）が文政元年（一八一八）、奥州白河先代藩主松平定信の求めに応じて、秘事であった鉄炮製作法を書面で上呈したものの写しである。

その意図するところは、各所で作られる鉄炮の製作法を標準マニュアル化して、作業の効率化、品質の安定を図り、かつ一般の鍛冶職にも大小の鉄炮作りを可能にさせることである。そのため、二匁五分玉・長さ三尺三寸の並筒をモデルに、その製作工程を図入りで詳述し、加えて一分玉筒から一〇貫目玉筒まで、玉目に応じて段階的にそれぞれの製作法を記す。鉄炮鍛冶や一般の鍛冶を対象とするので、銃身の沸かし方、鍛え方、歪みの直し方などの説明がとくに詳しい。

もう一つの「中島流砲術管闕録」は、中島流の砲術家、棟居小弥太長孝（のち保春と改名）の手になる草稿本であり、巻数は二〇ほど確認されている。射術より火術に重点が置かれた中島流砲術について詳しく解説しており、その中で「鉄炮は専門の職人が作るが、砲術を志す者はその製作法

を知るべきである」との観点から、鉄炮製作法が加えられている。それは、「手前筒製作之部」(A)・「中島流張筒製法卷」(B)・「鑄筒製作之卷」の三部があるが、ここでは鍛造のA・Bを取り上げる。

「中島流砲術管闕録」の成立年代は、巻之五「抱打之事」に見える嘉永元年（一八四八）一〇月以後とされるが、長期間にわたって書き続けられたようで、Bには天保一四年（一八四三）五月七日の奥付と棟居長孝の記名がある。Aのほうは、作成時期は不明であるが、記名が改名後の棟居保春となっているので、Bより後に書かれたものと考えられる。

A・Bともに、定規を使って描いたらしい美しい挿図が目を引く。Aは、図を多用して小筒・中筒クラスの銃身製作、出合・見当の定め方、台木の製作、カラクリなどについて説明し、最後に鉄炮注文時の心得を述べる。

いっぽうBは大筒の製作が中心で、網羅的である。地金は勿論、諸道具、炭、鍛冶場の設営、職工にかかる諸経費の粗見積りから始まり、下地の様々な製法（丸樋作・うどん作・巻張作・角樋作）、その上に貼る付金の製法（段々巻付・瓦付・蓑付）、沸かし方と藁灰・タレ土の掛け方、キリ入れ（荒キリ・本キリ）、尾栓の製作（仮ネジ・本ネジ）と続く。最後に「砲火術は戦略上強力であるが、多量の硝石の確保と良質の鉄炮が必要」と結ぶ。

それに加えてBの末尾には、一〇〇目玉筒キリ入れの実録、および子年一二月六〜八日に、肥後国同田貫で刀工の同田貫大和守延寿正勝が指図頭取となり、求玄流砲術の祖、大草庄兵衛政義が図面を描き、総勢五二人の職工を使って三〇〇目玉石火矢筒を製作したことを記載する²³。

（二）「鉄炮作法秘伝書」の位置付け

つぎに、堺鉄炮鍛冶の井上関右衛門家に伝わる〔I〕「鉄炮作法秘伝書」と前記二点の鉄炮製作法、〔II〕「大小御鉄炮張立製作」と〔III〕「中島流砲術管闕録」のA・Bを比較してみよう。

〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕は鉄炮製造業者の視点、〔Ⅲ〕はA・Bともに、鉄炮を使う立場の砲術家としての視点で書かれたものである。もともと〔Ⅲ〕のA・Bも、鉄炮製造業者からの情報をもとにしていることは明らかで、適切な表現の挿図にしても、鉄炮鍛冶の手になる原因を写したか、もしくは棟居長孝（保春）本人が鉄炮作りを実見、あるいは鉄炮鍛冶の教示の下に描いたか、と思われる。

分量的には〔Ⅰ〕が最も少ないが、作成時期では先行する。〔Ⅱ〕が文政元年（一八一八）、〔Ⅲ〕Bは天保一四年（一八四三）、同Aはそれ以降であるのに対し、〔Ⅰ〕は文化九年（一八一二）以前で一九世紀初頭ころと考えられるからである。

挿図については、〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕によく似たものが見られるものの、概して〔Ⅰ〕のそれは簡単な略図であり、正確さを欠く。また、本文にも脱字や原注が見られるので、本来は外部に出すものではなく、若林元敷の手持のようなものであったかもしれない。

ついで、〔Ⅰ〕の内容について、見出しごとに〔Ⅱ〕と〔Ⅲ〕A・Bの記述と比較し、一覧表（左頁）にしてみた。

これによると、〔Ⅰ〕は〔Ⅲ〕のBに比較的似ていることがわかる。大筒についての製作法が中心になっているという共通点はあるが、それ以外にも、〔Ⅲ〕Bの次の記述に注目することにより、両者の関係が見えてくる。

一、仮捻ノ掛リ三厘増、三百目以上ハ二厘増、掛リ深ケレハ廻ス骨折ルト、若林ノ説也

尾栓の「道立て」（雌ネジの製作）には、あらかじめ用意した雄ネジを白熱させた銃身の尾部に差し込み、鍛打して銃腔（巢中という）にネジ山を形成する「熱間鍛造法」と、把手の付いたネジキリ（タップ）を、油を付けたがらずに少しづつねじ込み、回転・反転を繰り返して、徐々に大きなものに替えて雄ネジの形を切る「手切り切削法」が知られている。²⁴〔Ⅱ〕は、尾栓

の製作に触れていないが、〔Ⅰ〕と〔Ⅲ〕A・Bには記述があり、三者ともに「手切り切削法」を採っている。

〔Ⅲ〕Bでは、「仮捻」（ネジキリ）をねじ込む際の注意点を、上記のように「若林ノ説」を引いて記している。この部分に対応する〔Ⅰ〕の記述は、「ねしの事」に見える（二〇丁裏）。

ねし道立ハ、大筒も小筒も大体二厘の所至極よし、夫より大くかくれハ折申者也、必忒厘より過スへからず

両者の内容は難解である。〔Ⅲ〕Bにはよく似た表現として、キリ入れにつき、銃腔が一〇〇目玉の径では「一厘五毛位ツ、カ、ル也」、巻末の一〇〇目玉筒キリ入れの実録には「一扁二一厘迄カ、ル」とある。銃腔をまっすぐ滑らかに仕上げるには、荒キリを通した後に、磨き用のキリに当て木をして紙や竹皮を挟み、少しずつ太くしてねじ込む必要があるため、このような表現になるのではないだろうか。

だが、銃身と同じ「揉み台」に架けて作業を行うとしても、キリ入れとネジ切りでは訳が違う。研磨された銃腔に、雌ネジを新たに切削するのであるから、〔Ⅲ〕Bの「三厘増」「二厘増」は、ネジ山のことを指しているのではないかと考える。この点につき、これらの数字を雌雄のネジの隙間に関連付けて解釈する説があるが、疑問である。²⁵この文意は、雄のネジキリの山を少しづつ高くしていき、雌ネジをだんだん深く切つてゆくが、最初から大きく切ろうとすると、ネジキリの山が欠けてしまつて失敗する、ということではないか。いずれにしても表現が言葉足らずであり、それを理解し確証を得るのは困難である。

〔Ⅰ〕では、大筒・小筒ともに二厘が最適としているが、こちらも二厘増しのことであろう。〔Ⅲ〕Bでは、一般的には三厘増しだが、三〇〇目以上の大筒になると二厘増しとしている。両者の数値が少々異なるが、文意は一致しているので、〔Ⅲ〕Bに見える「若林」は、〔Ⅰ〕と同じ福井藩の

鉄炮製作法史料の比較

「鉄炮作法秘伝書」		「大小御鉄炮張立製作」	「中島流砲術管闕録」	
原文見出し	内容注記		A：「手前筒製作之部」 B：「中島流張筒製法卷」	
大筒張様之事	下巻鉄積之分	下巻の鉄の準備、うどん張りの方法、持ち手を付ける	2匁5分玉並筒・鍛筒での下巻（真という）の鉄の準備、大筒は玉目別で記述、うどん張り・持ち手については図中に見える	A：真金・瓦金・うどん張りを図示 B：地金は芸州鉄が良く、下巻の製作で丸樋作り・うどん作り・巻張作り・角樋作りを図示
	下巻湧数之事	下巻の沸しは3遍ほど、はね上げ沸しの方法	記載なし	A：荒巻は、なま沸しから本沸しで鍛える B：「金湧肝要之事」で沸しについて説明。下地は合せ目の沸き合せを念入りにする
	上巻鉄積り之事	上巻の鉄の準備、葛巻1、2遍と瓦金	並筒での上巻の鉄の準備、葛金の作り方を詳述。大筒は葛2、3重の上に瓦金を付ける	B：「金地作り」に、付金の種類として段々巻付け・瓦付け・裏付けを図示。下地の作り方で付金の方法が変わる
	上巻湧様之事	上巻の沸し方、葛巻の上に瓦金の張り方	並筒・鍛筒・大筒ともに上巻の沸し方は詳しい。200目玉以上の仕掛筒の瓦付け方法を図入りで記述	B：「附金附様」で、下地に付金を沸し付ける時の心得、「金湧肝要之事」に、沸しの種類、付金の沸し付け方法について詳述
	持扱仕様之事	銃身の持ち扱い方（シノ・転ばし枕・カギを使用）	火壺から大筒を出し入れするとき、抱え筒は生木の丸太を車に用い、仕掛筒はカギで天秤に掛けて操作し、丸太も使う。図あり	B：「最初荒積之事」に、14、5貫目の大筒は金棒を差して出し入れし、焰床（火床）上に車を付け、鉄カギで上下させると記述
	しの数之事	下巻・上巻で使うシノの数と種類	2匁5分玉並筒下巻用のマゲシノ、上巻は荒当・中当・留沸しで、シノが段々細くなる。大筒はマゲシノ・真メシノ・上シノ・すらしシノ等	A：真金（下巻用のマゲシノ）の図あり B：「最初荒積之事」に、大筒の真金と口径の関係を記述
	中もミ様之事	巢中（銃腔）キリ入れ方法、揉み台使用、尾栓ネジも同様	記載なし	A：荒キリ・磨キリと揉み方を図示 B：「荒錐ノ事并入様之事」に、大筒の揉み方を図示、本キリの入れ方もあり
	内直シ様之事	巢中の調整、歪み直し、カニマタ使用	「巢中狂ひ直様」に歪み直し・つらし方法を詳述。小筒・大筒内直し方を図示、巢中の疵・地荒についても解説	B：「附金附様」に、巢中の歪み直し方法を記述
	場所拵様之事	鉄炮鍛冶場の設置方法（火袋・フイゴ・火壺について）	鉄炮の玉目による火壺の拵え、刃口（羽口）の広さを記す	B：焰床・焰所場（鍛冶場）の拵え、フイゴ吹きの手代り、金敷（鉄床）、大玄能（大ツチ）、炭についても記述
	上仕立	セン・ヤスリ・タガネによる銃身表面の仕上げ	記載なし	B：「附金附様」に、ツチ目仕上げ・並磨き仕上げを記述
	ねしの事	尾栓の製作法、雄ネジ作り、雌ネジの切り方	記載なし	A：雌ネジの製作法、ネジキリの図あり B：「捻之事并入様」に、雌ネジは仮ネジ3段で切ること、雄ネジ摺り立ての記述あり
	火皿之事	火皿の沸し付け、入れ火皿	大筒の火皿については記載なし	大筒の火皿については記載なし
	出合之事	出合は6間くらいに設定	「出合之事」に、長さ2尺余の小筒は通例6間、10匁玉～1貫目玉は玉径で出合を定めると記述	A：「出合之事并図」あり。間数についての記載はなし
	大鑄形之事	大型の玉鑄形の製作	記載なし	記載なし
異風下巻鉄積／長筒鉄積	南蛮風鉄炮下巻・うどん張り・葛巻、長筒も同様	異風筒という分類での記載なし。玉目別であり、長筒含む	異風筒という分類での記載なし。Aに一般論あり、長筒含む	
火皿湧し様事	火皿沸し付け（含：内揉み・上仕立・巢中直し・タガネ削ぎ）	火皿の沸し付け（2匁5分玉並筒）を記述	A：工程図中に、火皿の拵え、埋め込み、沸し付けの注記あり	
鋼鉄巻之事	ハガネ巻、ハガネ・地金の葛2筋を並べて巻く	「釧巻張立方」に、地鉄・ハガネの葛を交互に4筋並べて巻く方法を記述。図あり	記載なし	
小玉張様之事	5分・3分玉筒の製作法	3分玉～1匁玉筒・1分玉筒の張立て方法を記述	記載なし	
鋼鉄筒	ハガネ製鉄炮、上巻だけハガネ巻、下巻からのハガネ巻	ハガネ真張立ての上に刀の古身のハガネで葛巻にする方法を記す。上下ともハガネを用いる	A：「鉄色々有ル事」に、瓦金を下地にし、上にハガネを用いた「刃金巻」、上下ともにハガネを張った「刃金筒」の記述あり	
生鉄きたい筒	ズクを鍛錬し製作した鉄炮、西国筋で流行、別書で記す	記載なし	A：「鉄色々有ル事」に、たたら製鉄のズク押し法で得たズクを鍛え、上鉄のおろし金にして、薄張りの鉄炮を製作した記述あり	
鉄炮色付之事	雄黄・硫黄・大聖寺土等を用いた鉄炮の色付け（黒・赤）	記載なし	B：具体的な色味の記述はないが、銃身の錆付法を記述	
火蓋己ト開からくり	火挟みが落ちると火蓋が自動で開くカラクリ	記載なし	記載なし	

鉄炮鍛冶若林氏のことであろう。ただし、筆者が直接若林氏に面会して説明を受けたのか、「Ⅰ」と同類の書き物を見たのかは分からない。ここでは、「Ⅰ」と「Ⅲ」Bは内容の一部に関連が見られ、後者が前者の影響を受けた可能性があることを、指摘しておきたい。

(三) 秘事・秘伝と鉄炮鍛冶

近世の諸芸や手工業の分野では、その流派や家によって秘事を持ち、それを秘伝書や口伝のかたちで後継者や弟子に伝えることで独自性を保持しようとした。鉄炮の製作法についても然りであったが、若林庄五郎が八田綱久から極奇流の秘事である「鉄炮作伝巻」の相伝を受けたように、懇願すれば伝授されることもあったようだ。もちろん、相応の対価を払ったことであろう。^⑤

一九世紀に入ると、堺鉄炮鍛冶の井上関右衛門家では文化・文政以降、鉄炮の受注数が飛躍的に増加する。六代関右衛門直次・七代宗次・八代壽次の時代である。堺では株仲間を結成する約二〇人の鉄炮鍛冶が、数多くの鍛冶職人を配下に抱え、台師・金具師・象眼師・火蓋雨覆師・鋳形師といった下職を囲い、分業体制で量産化を図ることにより、地域の鉄炮産業を繁栄に導いた。その過程で鉄炮鍛冶仲間は、井上直次に見られるように、様々な秘事・秘伝を求め、それらを試して取捨選択しつつ鉄炮製造技術を進化させ、品質の向上・安定化によって堺ブランドの発展に努めたであろう。そこには、鉄炮産業における近代化の波が感じられるのである。

国友藤兵衛重恭が「大小御鉄炮張立製作」で、製作法のマニュアル化を目指したのも同様の動きと考えられる。尾栓については触れていないが、銃身の鍛造では秘事から脱却し、標準的な製作法を書面で元幕閣に提示したことは、注目すべきであろう。

ところで、井上直次はどのような経緯で、越前福井藩の鉄炮鍛冶の秘伝

書を書することになったのだろうか。どこに彼らの接点があるのだろうか。

「鉄炮作法秘伝書」には、堺・国友への言及がある。中採みについて、国友では荒キリを小筒にも用いること（一二丁裏）、タガネ削ぎについて、堺では行わず、国友でもしない人がいること（三三丁表）、ズク鍛え筒について、国友・堺では聞かないこと（三七丁表）の三か所である。これは、「鉄炮作法秘伝書」の作者若林元敷が、堺・国友の鉄炮鍛冶らと何らかのつながりを持って、情報を得ていたことを示している。

福井藩士の履歴によると、嘉永四年（一八五一）に家業を継いだ九代若林庄五郎の養父（八代周四郎）は、細筒の御用で嘉永元年に鉄類の購入と下職召し抱えのために大坂・堺へ出向いたが、藩へ願い出た出国日数を超えてしまい、謹慎処分となった。さらに代替わり後は、出国禁止にもかかわらず堺へ行ったことで入牢となり、牢死してしまう。^⑥

彼の例から推測すると、それ以前にも藩の御用で堺・国友へ行く機会があったと考えられる。越前へは山陰から直接廻船で鉄が運ばれていたが、上質の鉄炮用下鉄は、大坂の古鉄吹屋で調達することが推奨されており（鉄炮作法秘伝書「二丁裏」）、若林元敷もそのおりに井上関右衛門家を訪問し、自身の書き物を見せたのではないか。封建社会の制約の中でも遠方の鉄炮鍛冶どうしが交流し、秘事・秘伝の情報を交換することは、その後の鉄炮生産のあり方に少なからず影響を与えたであろう。

おわりに

堺鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家文書の「鉄炮作法秘伝書」について、明らかになった諸点を列挙しておこう。

* 本書は、大筒を中心とした鍛造による鉄炮製作法についての写本で、六代関右衛門直次の直筆と思われ、直次が文化九年（一八一二）に七

○ 匁玉筒を製作したおりの所見を記入していて、史料価値が高い。

* 本書の作者である若林元敷は、越前国福井藩の鉄炮鍛冶であり、通称を庄五郎といい、藩の鉄炮御用を務めていた。また、若林家の初代庄五郎は、砲術流派極奇流の秘事「鉄炮作伝巻」を相伝しており、本書にも異風筒に関する項目を設けるなど、その影響が見られる。

* 本書の作成時期は、同じ作者が享和二年（一八〇二）に「細工物諸事秘伝書（雑録）」を書いているので、同時期の一九世紀初頭ころと思われる。

* 鉄炮製作法を記した他の史料、「大小御鉄炮張立製作」および「中島流砲術管闕録」と比較すると、作成時期は「鉄炮作法秘伝書」が最も古く、分量的には一番少ないが、大筒の記述が中心となっていると、は、「中島流砲術管闕録」中の「中島流張筒製法巻」に近い。

* 「中島流張筒製法巻」には、尾栓の雌ネジの切り方について若林氏の説を引用している。鉄炮製作に関心を持つ砲術家が、鉄炮鍛冶から何らかの方法で情報を得ていたことがうかがわれる。

* 若林元敷は大坂・堺に鉄の買付けなどで出向くことがあり、そのおりに井上関右衛門直次と会い、本書の原本を見せた可能性がある。このような鉄炮鍛冶どうしの交流によって秘事・秘伝が明かされ、それを選択的に取り入れることで鉄炮製作技術が進化を遂げ、鉄炮産業の近代化につながっていったと考えられる。

「鉄炮作法秘伝書」に関する要点は以上であるが、本書も「鉄炮作伝巻」も、内容を把握するのに困難な箇所が少なくない。技術的な専門用語だけでなく、鉄炮鍛冶の当事者だけが理解できる省略した言い回し、秘事・秘伝特有の排他的な表現による分かりにくさもある。

また、本書中には、分（歩）の字を当てている（厘という単位が頻出する。分は、本来は全体の一〇分の一を示すが、尺貫法の長さでは一寸の一〇分

の一（曲尺で三・〇三mm）、重さでは一匁の一〇分の一（〇・三七五g）であり、厘はさらにその一〇分の一の値を示す。史料を読み解くときには、どの意味で使われているのか、特定する必要がある。さらに、その数値が科学的に見て妥当であるかどうか、検証しなければならない。

今後は、「鉄炮作法秘伝書」をはじめとする鉄炮製作法の史料的研究を進めるとともに、歴史研究者だけでなく、金属工学分野の方々にも大いにご参加・ご協力いただくことで、近世の鉄炮鍛冶らが心血を注いだ鉄炮製作技術の解明に繋がることを期待したい。

注

- ① 堺市歴史遺産活用部文化財課『堺市指定有形文化財 井上関右衛門家住宅（鉄炮鍛冶屋敷）保存修理工事報告書』（二〇二四年）参照。
- ② 堺市・関西大学なにわ大阪研究センター『堺鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家資料調査報告書』改訂版（二〇二五年）参照。
- ③ 堺市博物館『堺市有形文化財指定記念 芝辻理右衛門家文書と堺の鉄炮鍛冶』（二〇二四年）所収 2 『芝辻理右衛門由緒書上』・16 「日本鉄炮御由緒大筒絵図」および解説。
- ④ 拙稿「井上関右衛門家の人々」注②文献所収、一七・三七頁。
- ⑤ 同右、二五・四二頁。
- ⑥ 史料番号 箱一一三。
- ⑦ 同 箱一一一。
- ⑧ 同 箱一一二。
- ⑨ 鉄炮のサイズについて厳密な分類はないが、常人の立打ちが可能なのは玉目三〇匁（一一・五g）くらいまでであり（所註吉『火繩銃』普及版、雄山閣、二〇二〇年）、三〇匁玉筒（口径約二七mm）以上を大筒と称した（宇田川武久編『日本銃砲の歴史と技術』第二版、雄山閣、二〇二二年）。重量のある大筒は抱え打ち・膝台打ち

となる。さらに大型の石火矢などの大砲は、砲架に載せて運用する。

⑩ 「鉄炮作法秘伝書」六丁表、鉄板のはぎ方の図について、上部に二本の弧線が見られるが、「此書入宜からず」に続く注記を勘案すると、上のほうの線は誤って引かれたようである。

⑪ 綿谷雪『武芸流派大辞典』増補大改訂版（東京コピー出版部、一九七八年）二二九頁。

⑫ 牧野隆信編「大聖寺藩士由緒帳②」「加賀市史料（三）」（加賀市立図書館、一九八三年）一五二頁。寛政七年（一七九五）、大聖寺藩士黒田九右衛門が越前福井の極舌流砲術家宇都宮又左衛門（綱信）に入門し、皆伝を得た。文政八年（一八二五）砲術世話役拝命。その後各地の台場掛りを勤め、安政六年（一八五九）砲術師役を拝命、文久三年（一八六三）には藩主の砲術上覧に供した。

⑬ 福井県文書館編「福井藩士履歴 一卷（あゝえ）」『福井県文書館資料叢書』九号（二〇一三年）二四六～四八頁。本資料は、松平文庫の人事記録である「剥札」と「士族」を合せて家別に編集し、あいうえお順に並べたものである。

⑭ 福井県文書館編「福井藩士履歴 九卷（新番格以下2 ヲヨヨ）」『福井県文書館資料叢書』一七号（二〇二一年）八八頁。履歴には他に鉄炮鍛冶の家は現れず、扶持を賜っている若林家が、福井藩鉄炮鍛冶の中心的存在であったと思われる。

⑮ 三国町史編纂委員会編『修訂三国町史』（国書刊行会、一九八三年）二六九～七〇頁。山陰からの鉄は、打刃物の原料として府中（現、越前市府中）へ送られたという。

佐伯徳哉「近世後期の北陸方面における山陰鉄流通・製品化の拡がり」『山陰におけるたたら製鉄の比較研究』（島根県古代文化センター、二〇一一年）三九頁。江戸後期（化政期以降）、地方での鉄加工業の発展により山陰から北陸へ鉄流通が盛んになったとする。

⑯ 安永二年（一七七三）には鍛冶屋が二六軒あって職人のうちで最も多く、鋳・碇がその地の「名物」であった（高橋好視家文書「村鏡 下」、福井県文書館所蔵複製本による）。元治元年（一八六四）の「三国鑑」では鍛冶が四〇軒となっている（福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編『小浜・敦賀・三国湊史料』福井県郷土誌懇談

会、一九五九年、七七五頁）。

⑰ 注⑫文献二四七～五〇頁に、坂井魏という藩士の由緒書が見えるが、父祖に通称庄兵衛はいない。坂井家当主ではなく、傍系の可能性がある。

⑱ 所荘吉『火繩銃』普及版では、幕末近くになると二〇〇家に及ぶといい、澤田平「日本の古銃 総論編」（堺鉄砲研究会、一九九五年）は、綿谷雪『武芸流派大辞典』に見える計五八三流に洩れている流派名があるとして、六〇〇流を越えるとする。同じ系統であっても継承者ごとに新流名となったり、合併で新流派を創始するなど、複雑になったという。

⑲ 福井市役所編『稿本福井市史 下巻』（歴史図書社、一九七三年）一五五～五六頁（国立国会図書館デジタルコレクション）、<https://dl.ndl.go.jp/pid/9536555/1/138>（二〇二五年一月六日閲覧）。

⑳ 史料番号 箱二一―一。

㉑ 影印本として、所荘吉解説『大小御鉄砲張立製作・他』（江戸科学古典叢書42、恒和出版、一九八二年）。翻刻として、所荘吉『火繩銃』（雄山閣、一九六四年）所収「附録 大小御鉄砲張立製作方法」。

㉒ 影印本として、所荘吉解説『中島流砲術管闈録』（江戸科学古典叢書43、恒和出版、一九八二年）。

㉓ 子年について、奥付の天保一四年（卯年）の直近は天保一一年である。だが、同田貫大和守延寿正（政）勝は天保一一年八月一四日に死去（熊本県玉名市、歴史博物館ころピアのご教示）、大草庄兵衛政義の没年は天保七年二月と同一二年二月の二説あるという（佐賀県立図書館レファレンスサービスによる）。したがって子年は、もう一巡迴って文化一三年（一八一六）の可能性が高い。

㉔ 佐々木稔編『火繩銃の伝来と技術』（吉川弘文館、二〇〇三年）Ⅱ部。

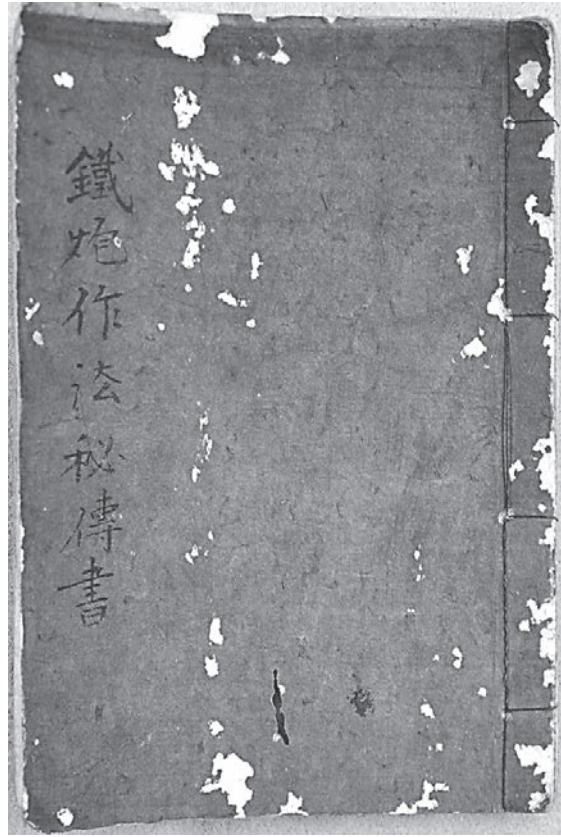
㉕ 同右文献、一五四～五五頁。

㉖ 所荘吉『火繩銃』普及版では、砲術秘伝書の発行は、砲術師範にとって貴重な収入源であったとみる。

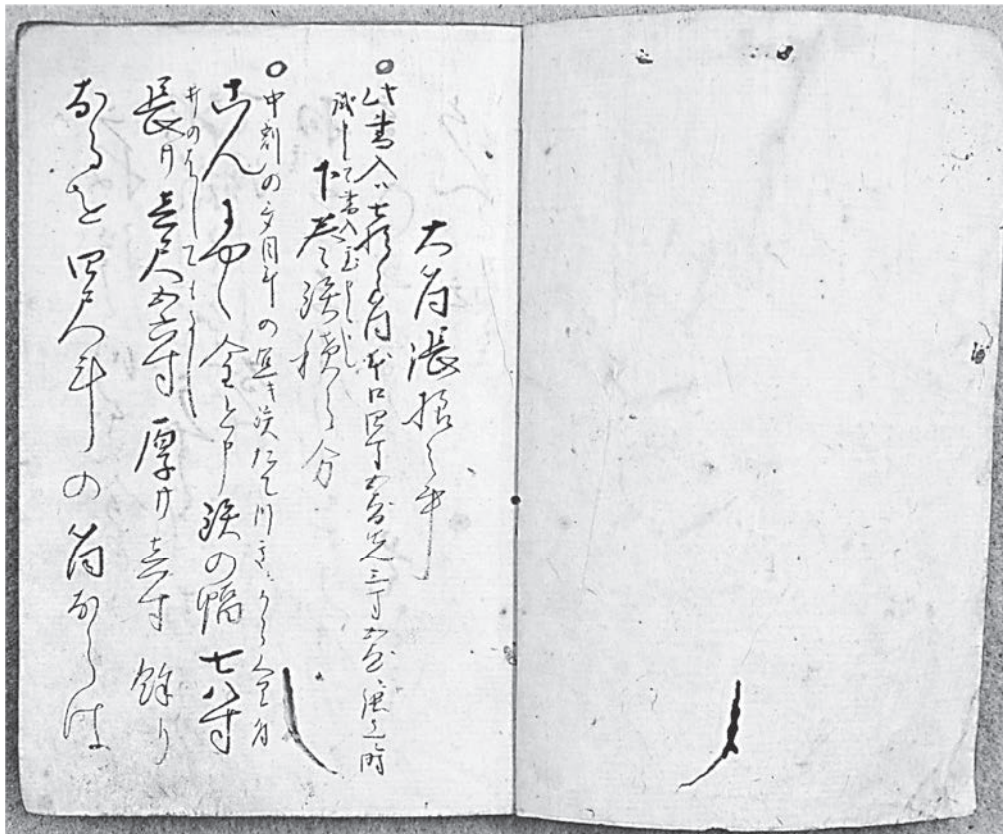
㉗ 注⑭文献、八九～九〇頁。

（なかた よしこ 関西大学図書館 非常勤嘱託）

「鉄炮作法秘伝書」写真

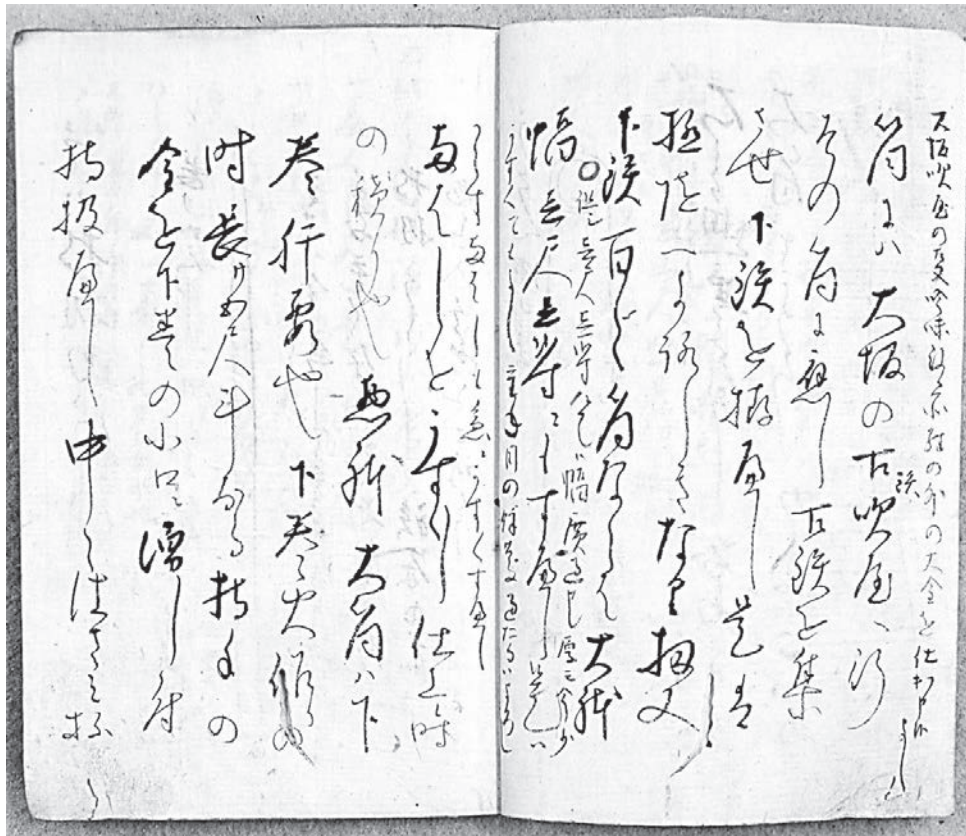


表紙



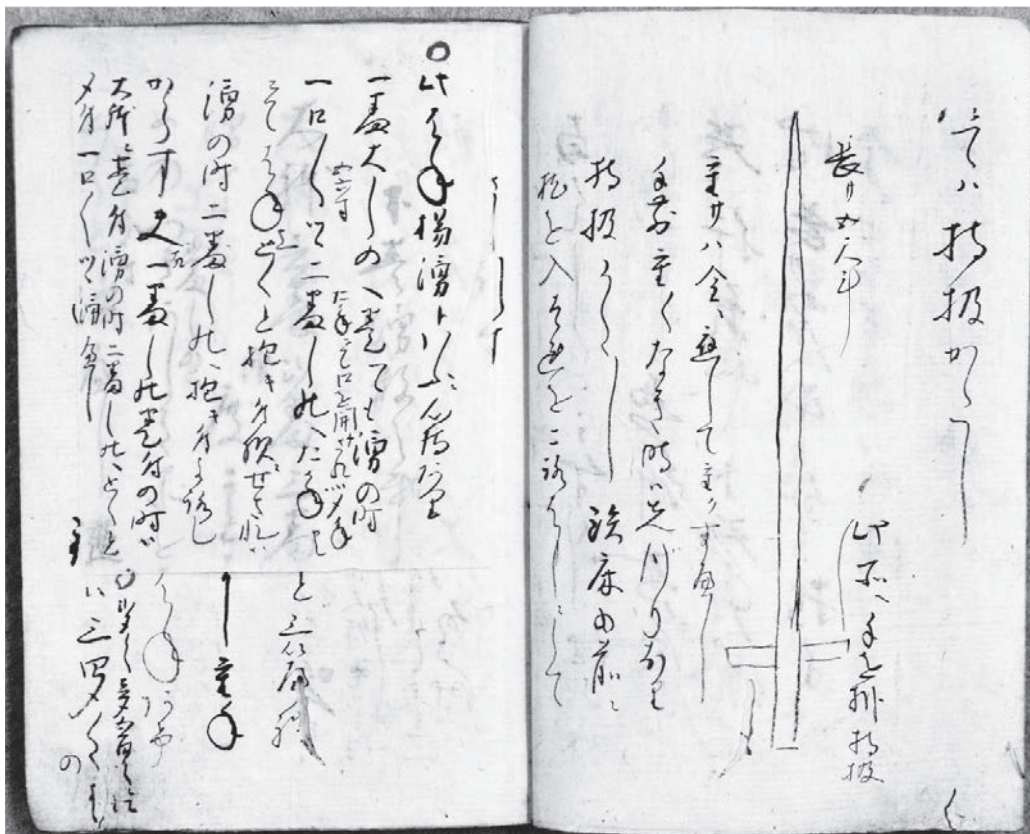
1丁表

表紙裏



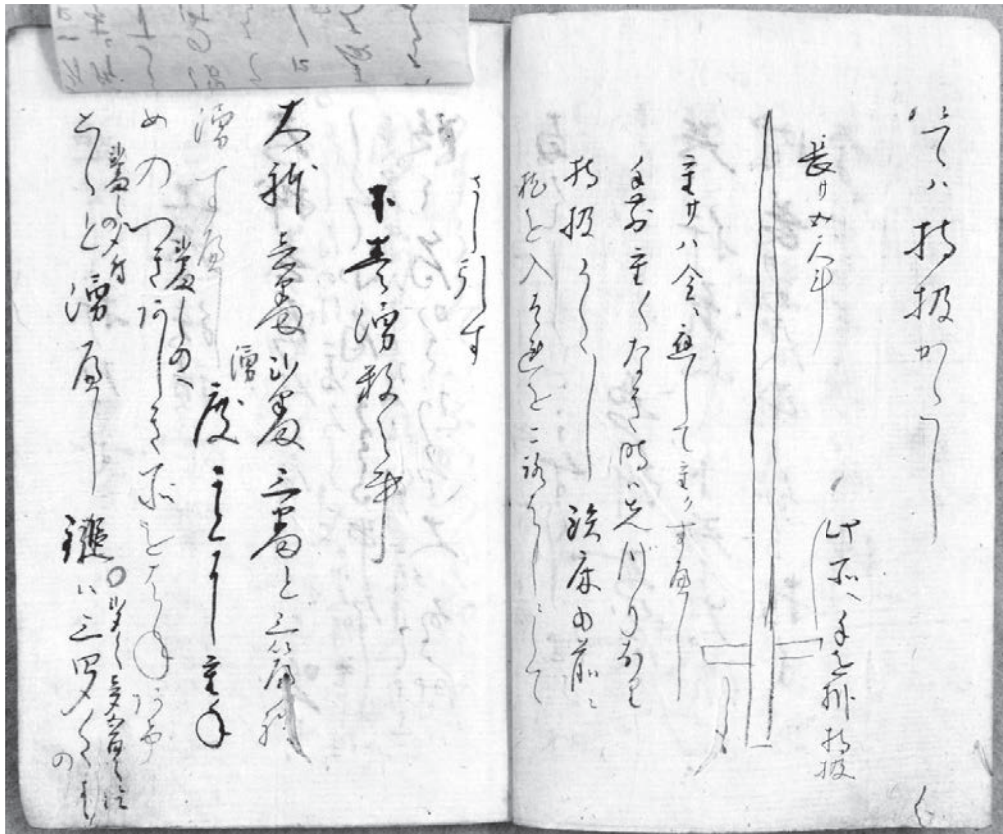
3丁表

2丁裏



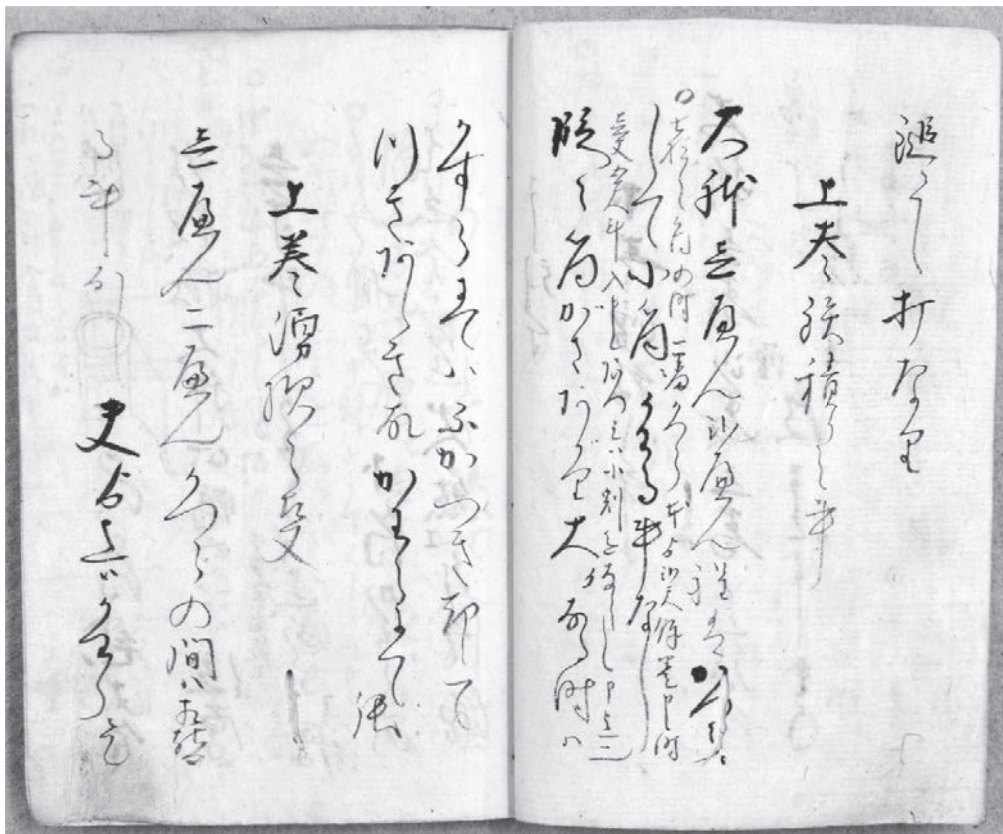
4丁表 (付紙を下げたところ)

3丁裏



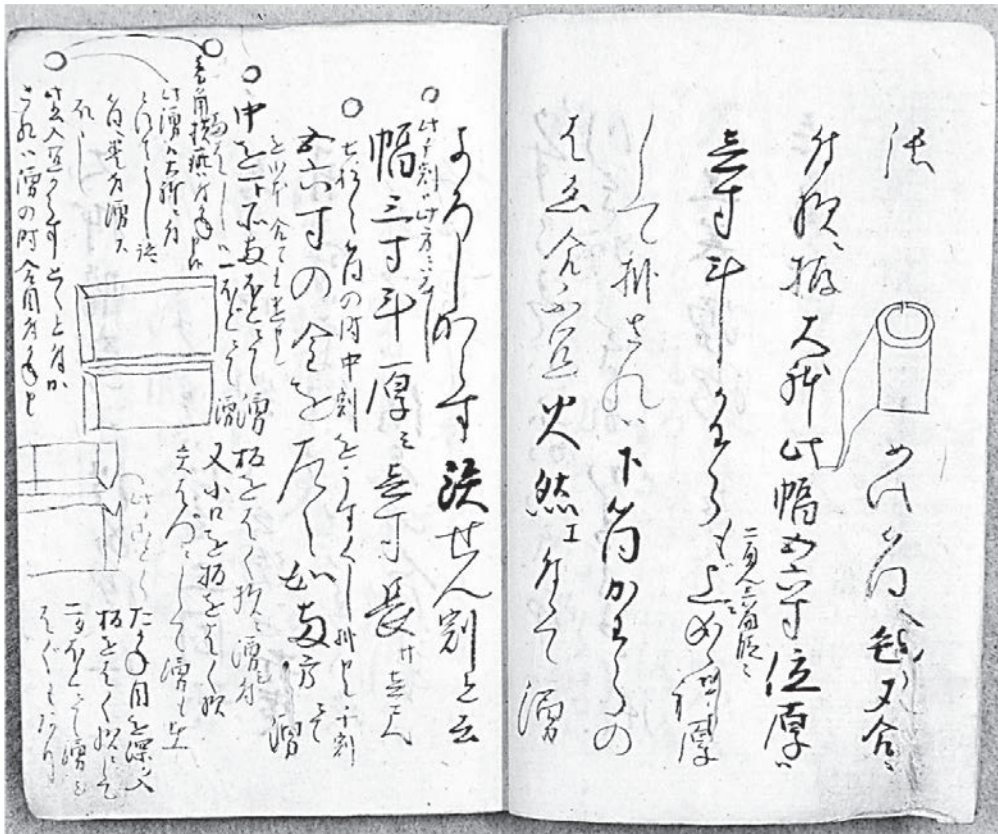
4丁表 (付紙を上げたところ)

3丁裏



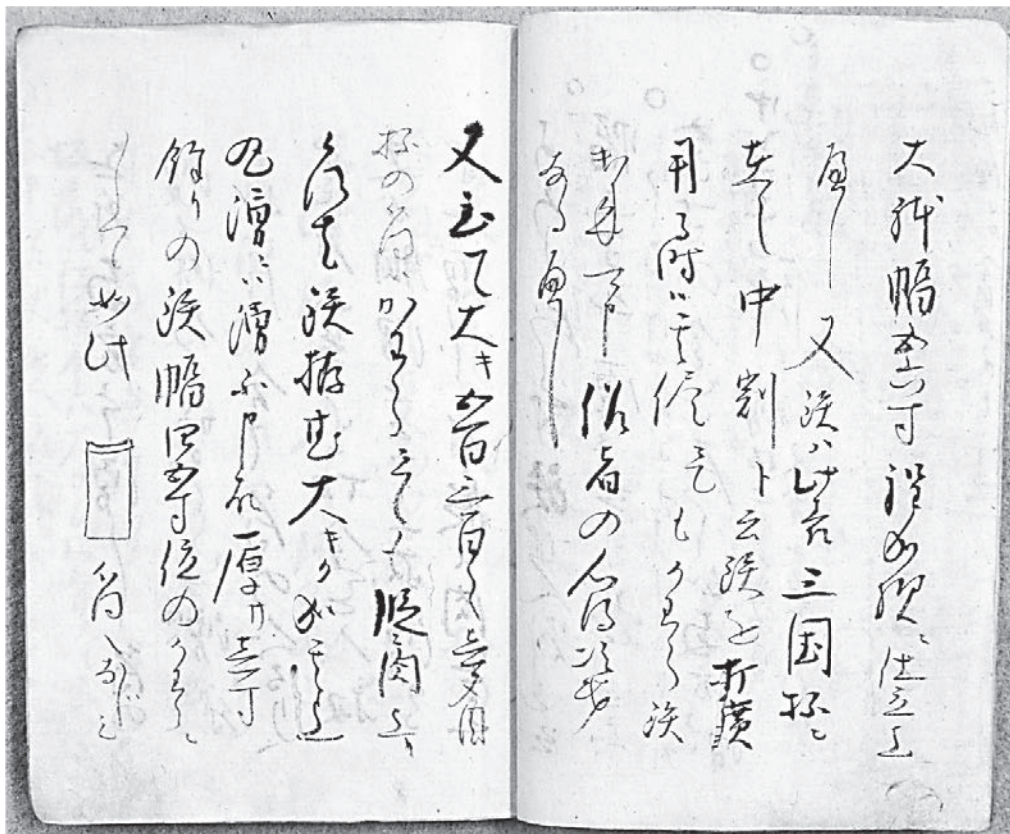
5丁表

4丁裏



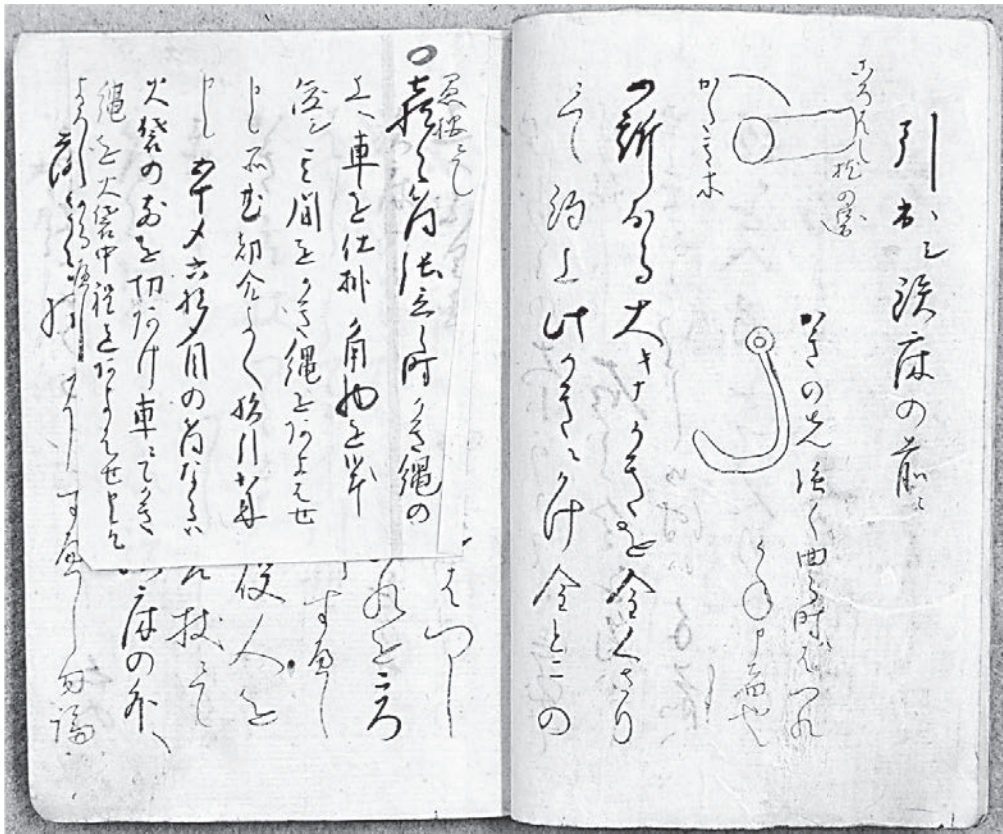
6丁表

5丁裏



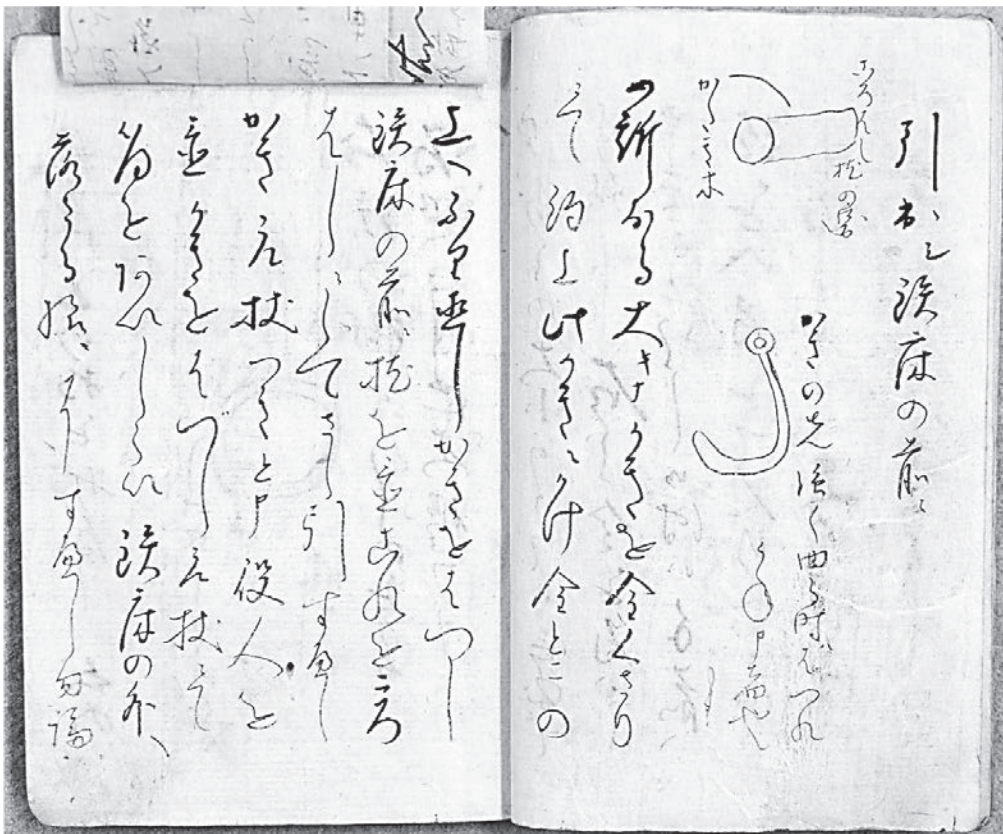
7丁表

6丁裏



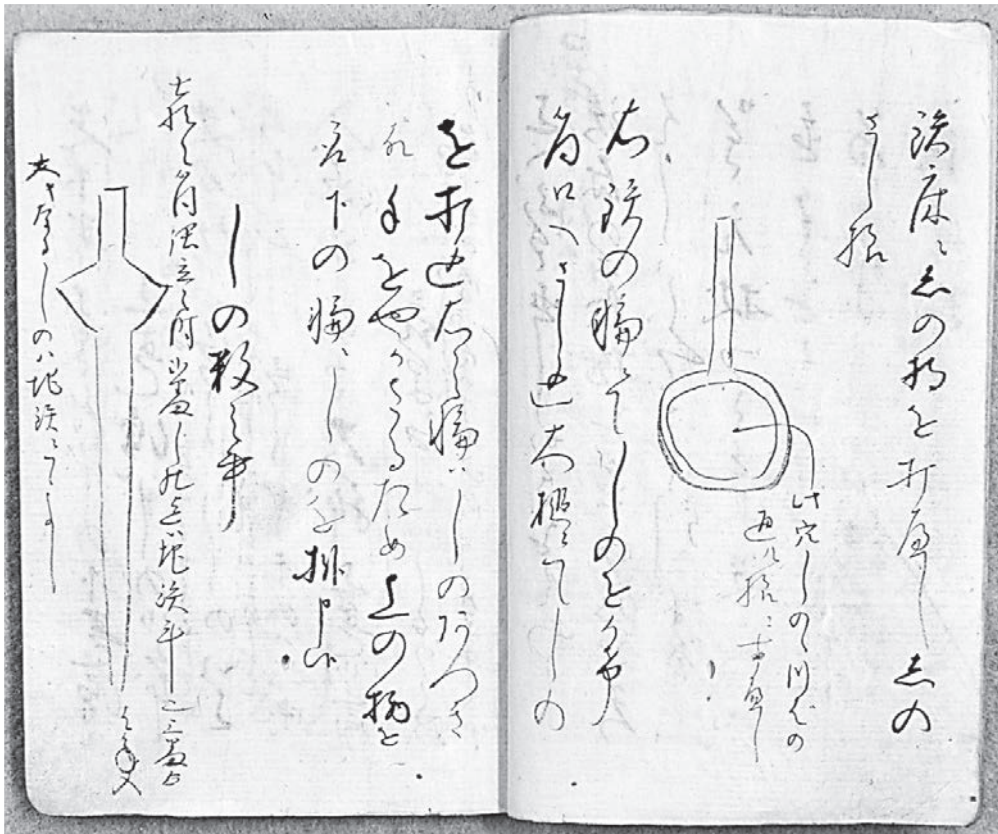
10丁表 (付紙を下げたところ)

9丁裏



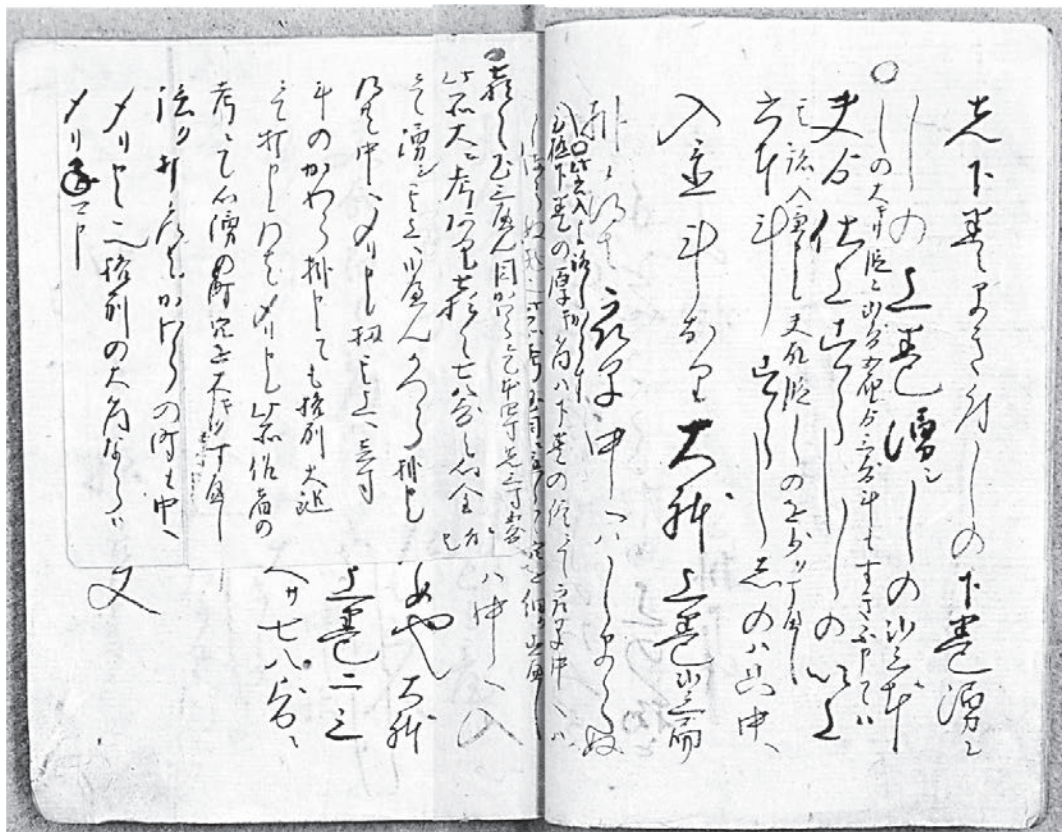
10丁表 (付紙を上げたところ)

9丁裏



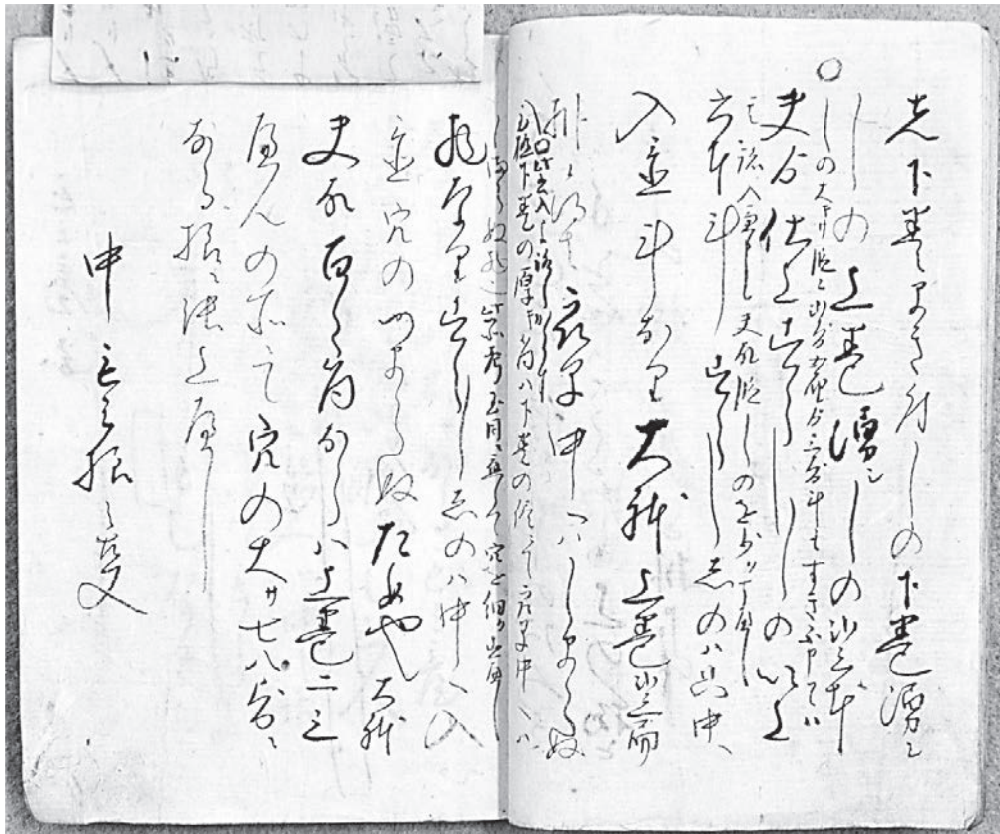
11丁表

10丁裏



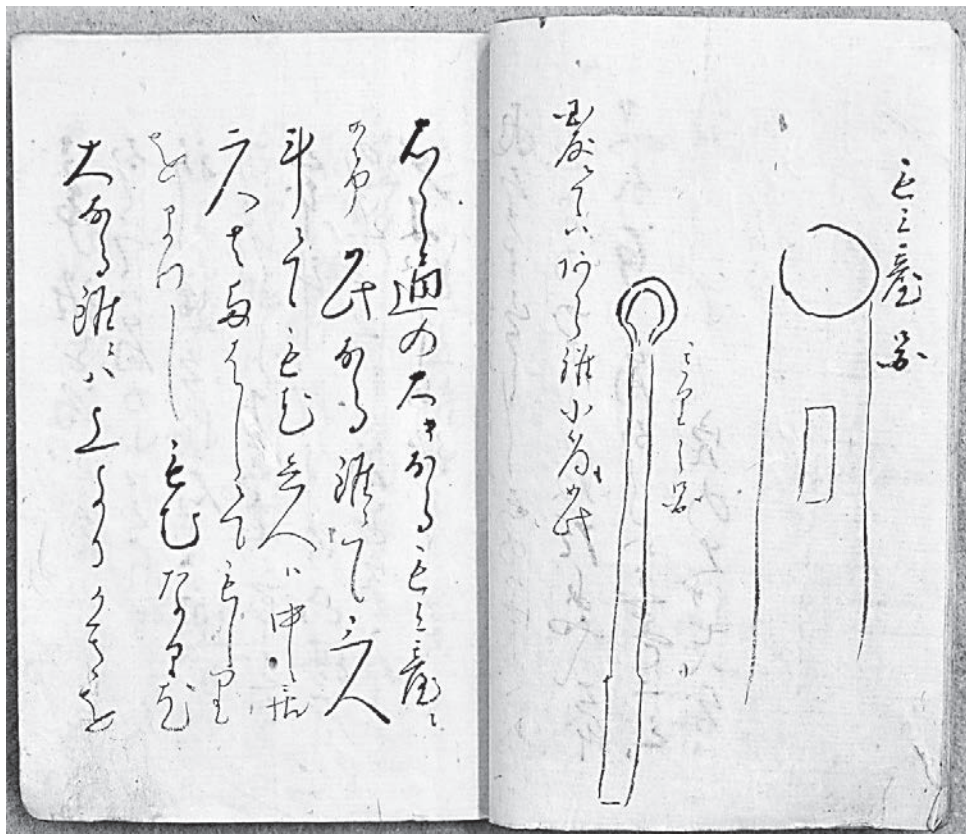
12丁表 (付紙を下げたところ)

11丁裏



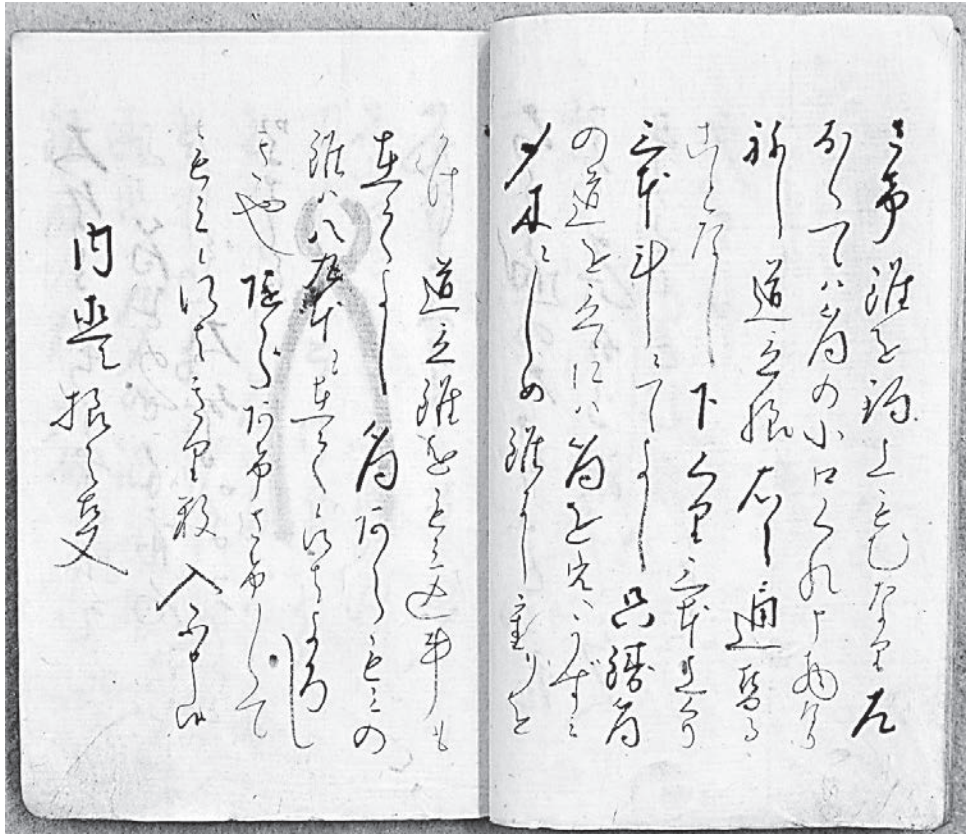
12丁表 (付紙を上げたところ)

11丁裏



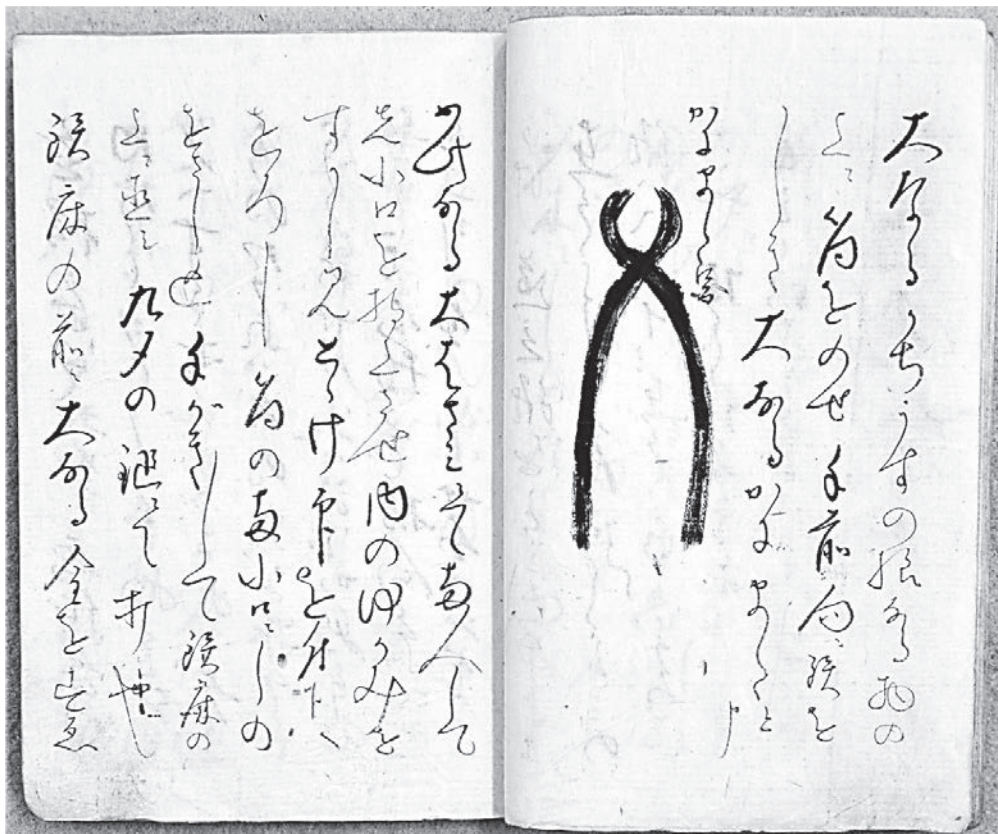
13丁表

12丁裏



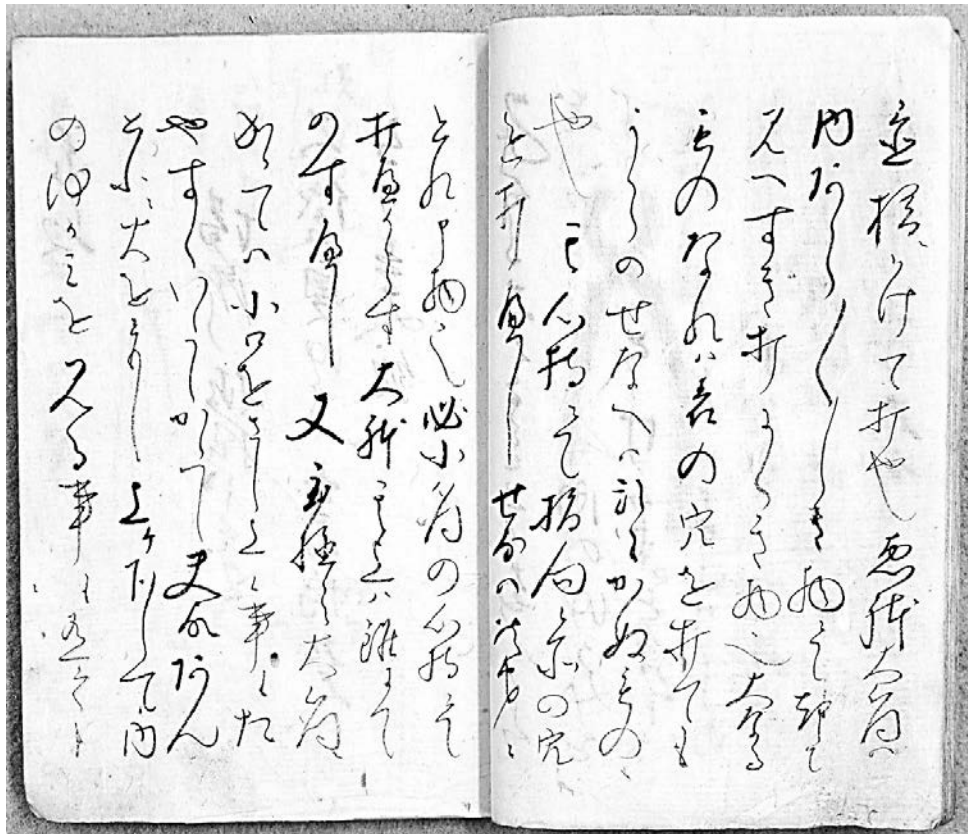
14丁表

13丁裏



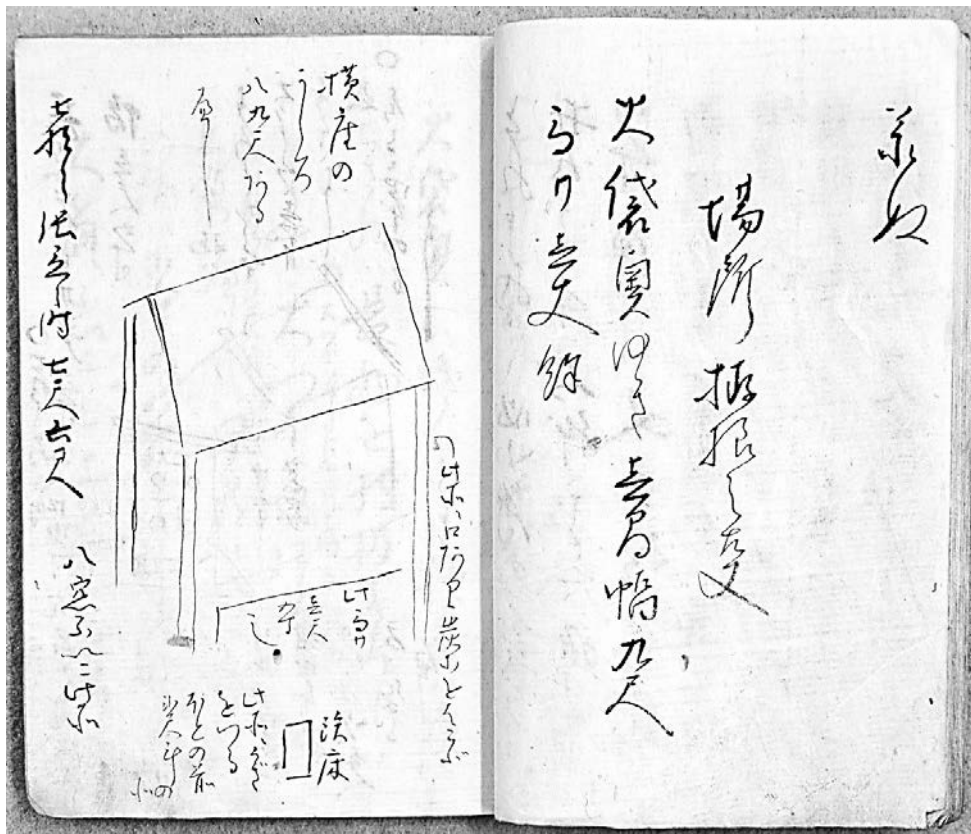
15丁表

14丁裏



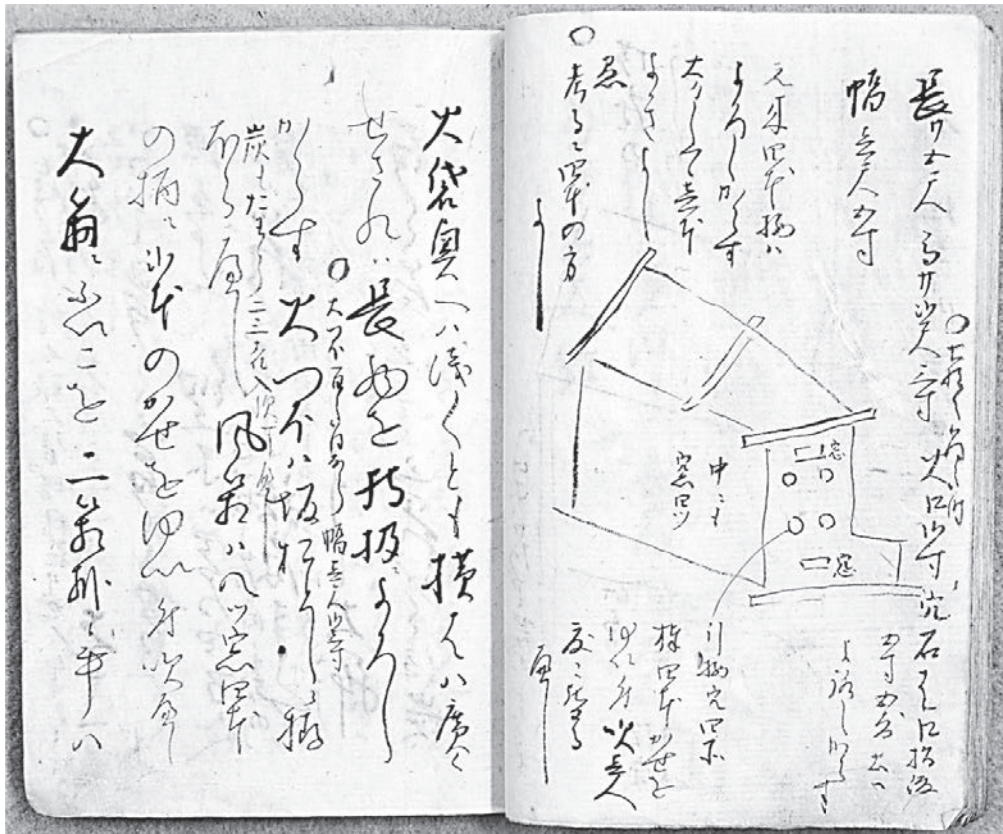
16丁表

15丁裏



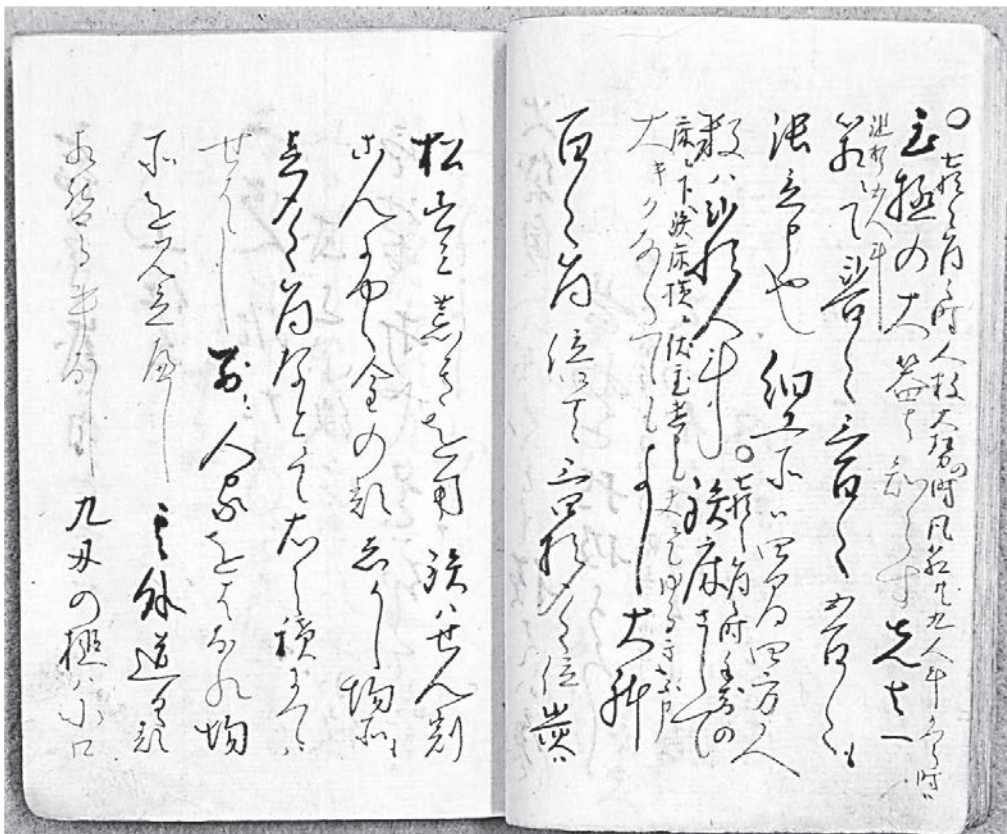
17丁表

16丁裏



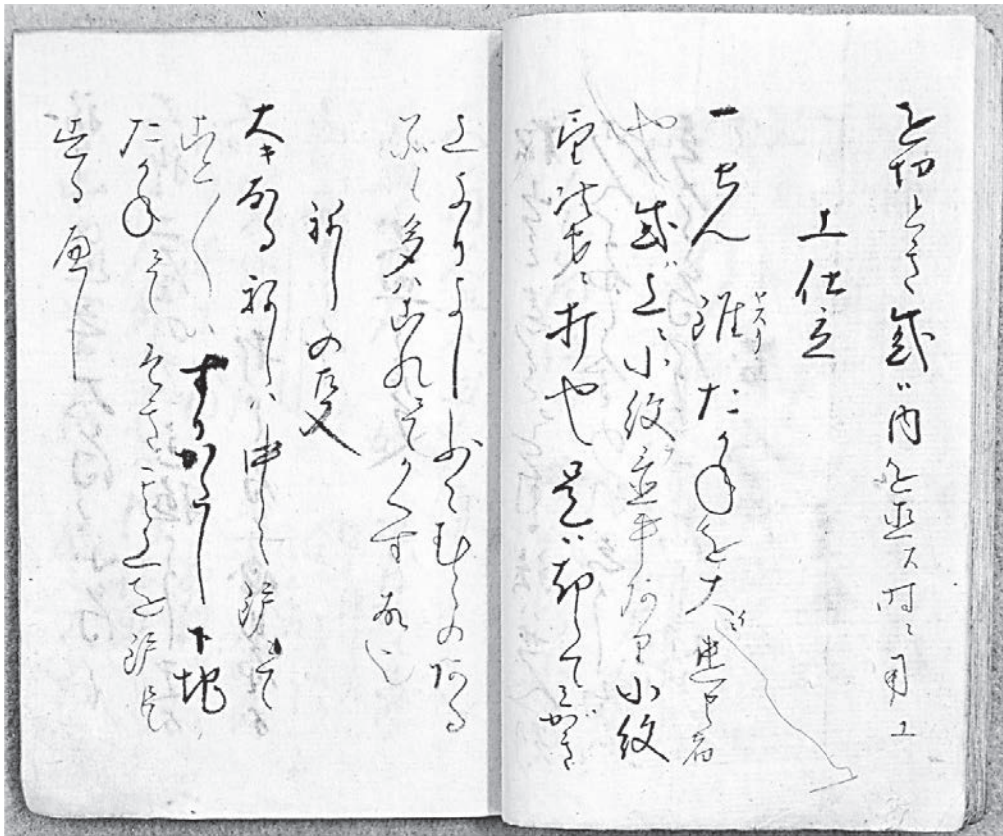
18丁表

17丁裏



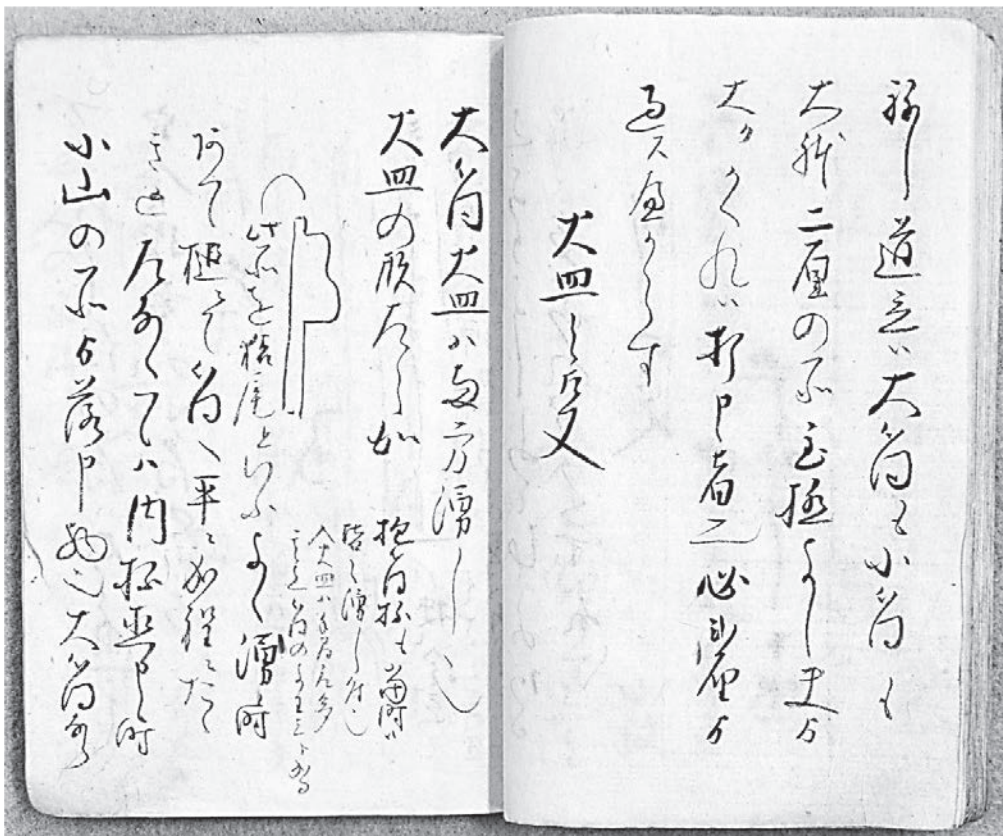
19丁表

18丁裏



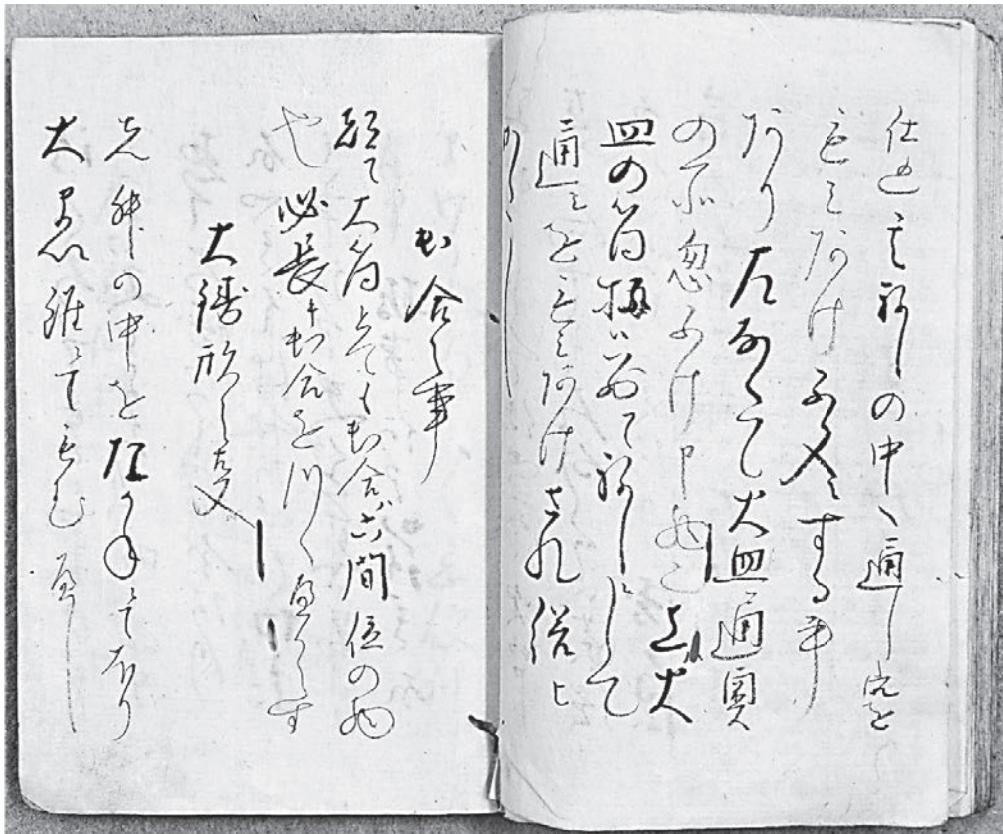
20丁表

19丁裏



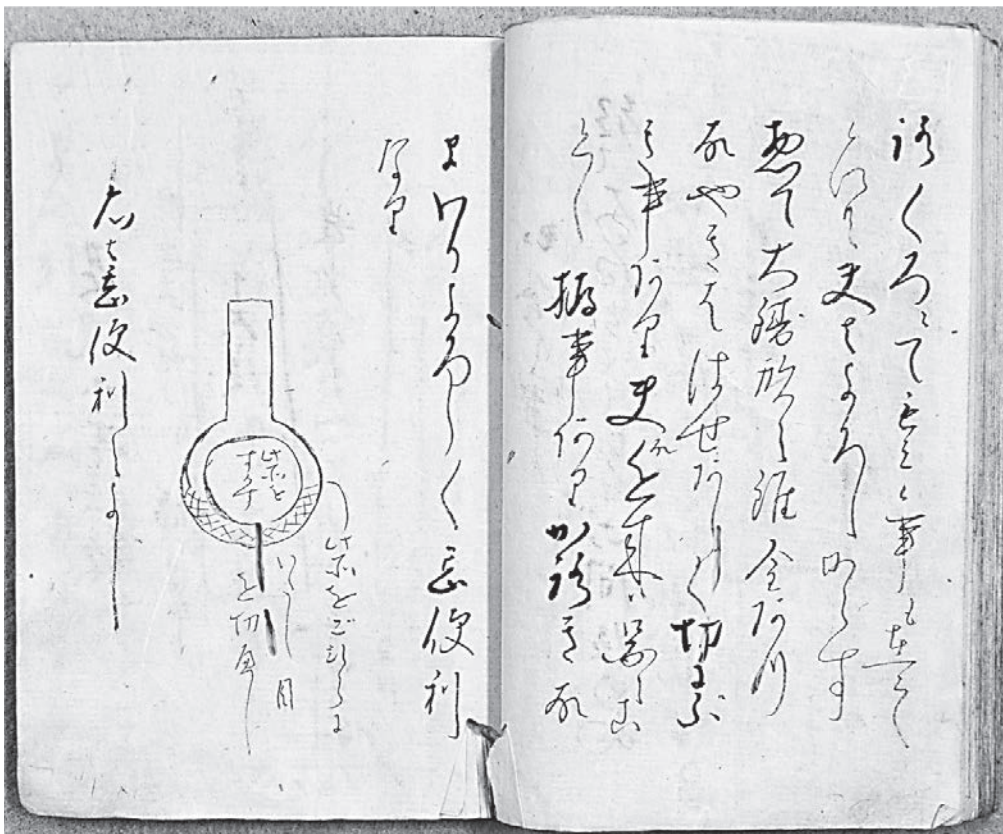
21丁表

20丁裏



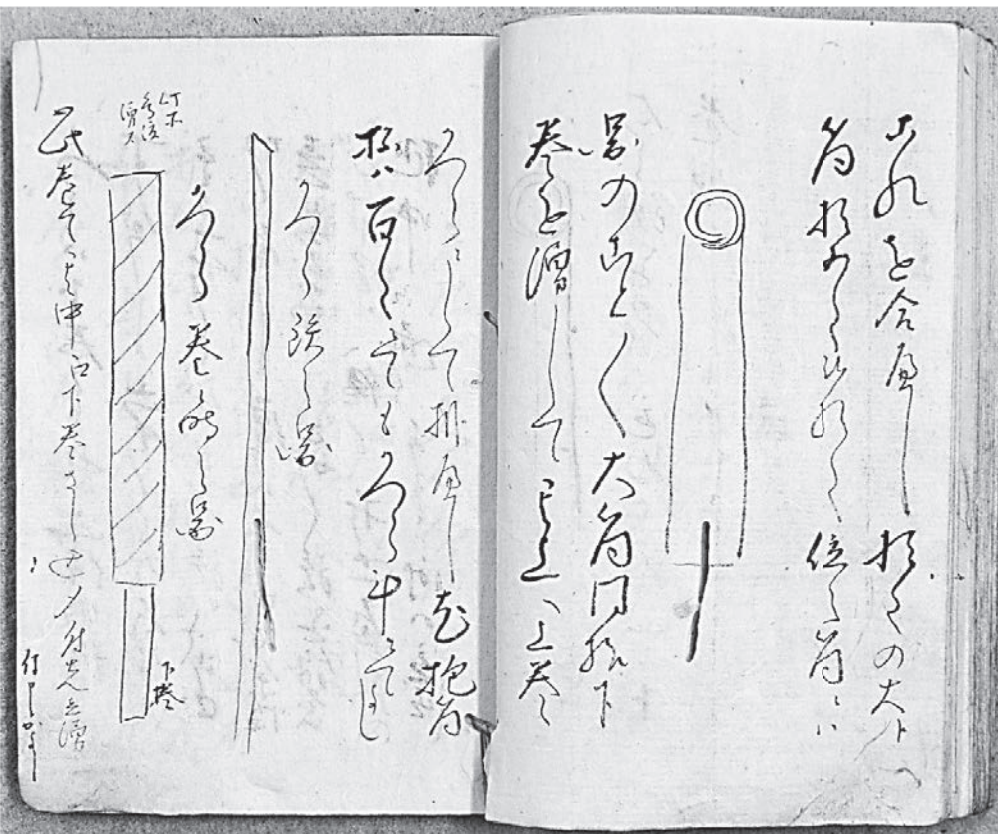
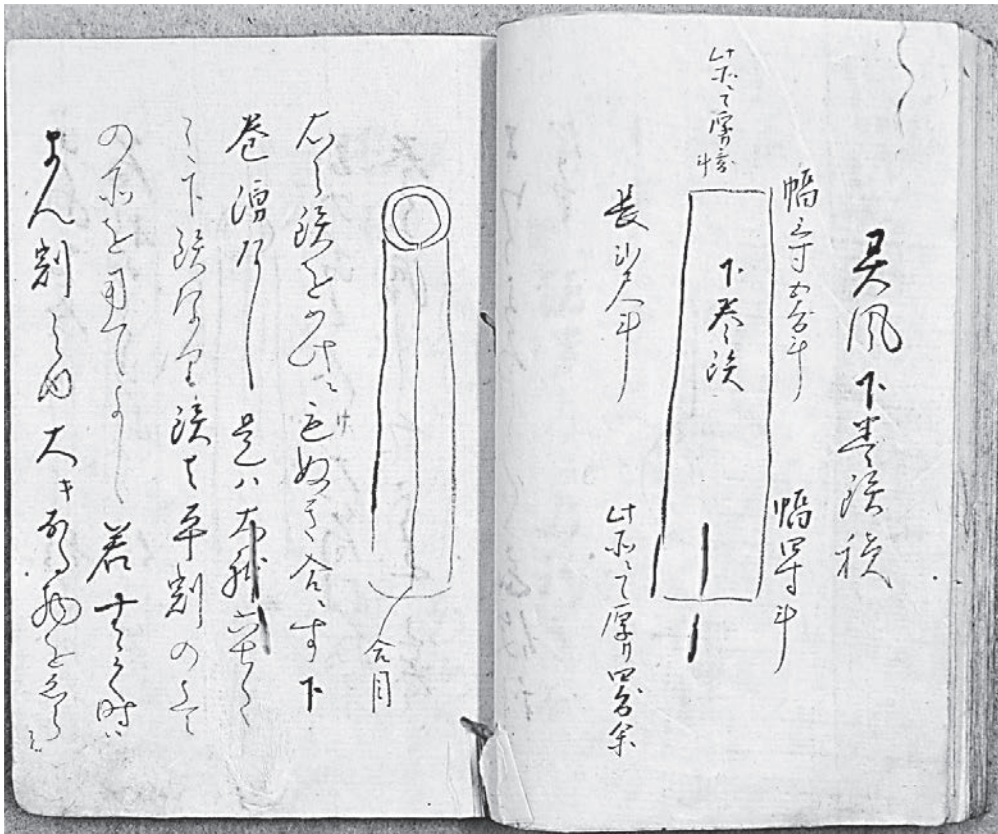
24丁表

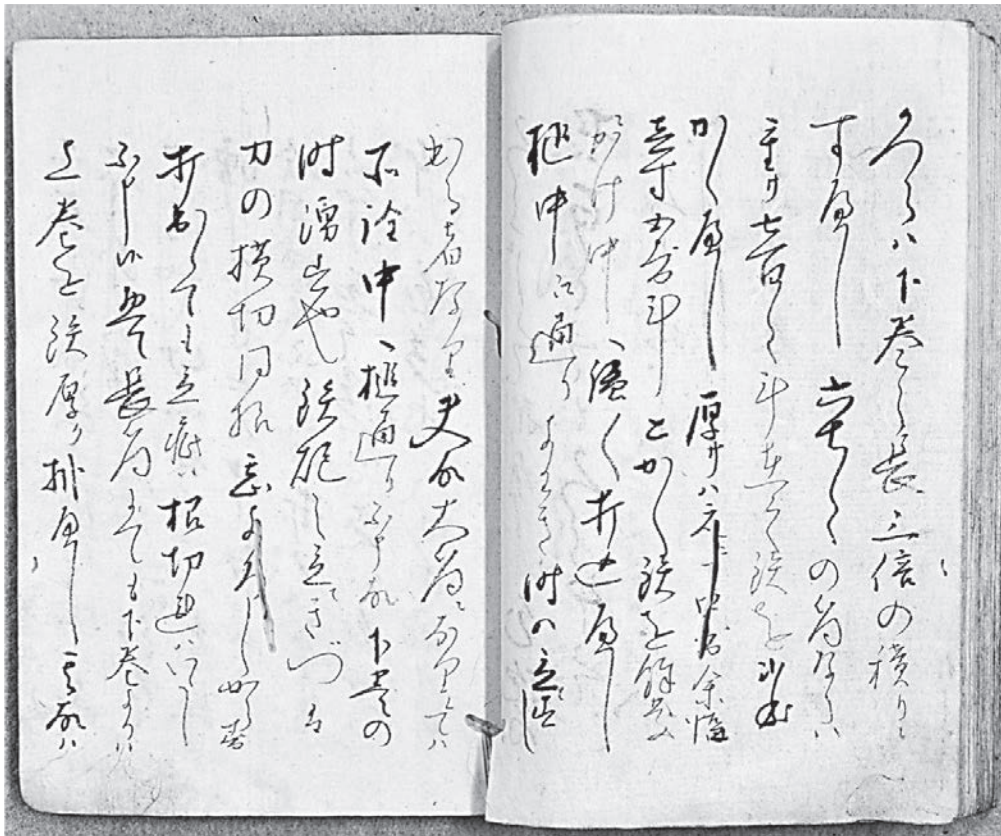
23丁裏



25丁表

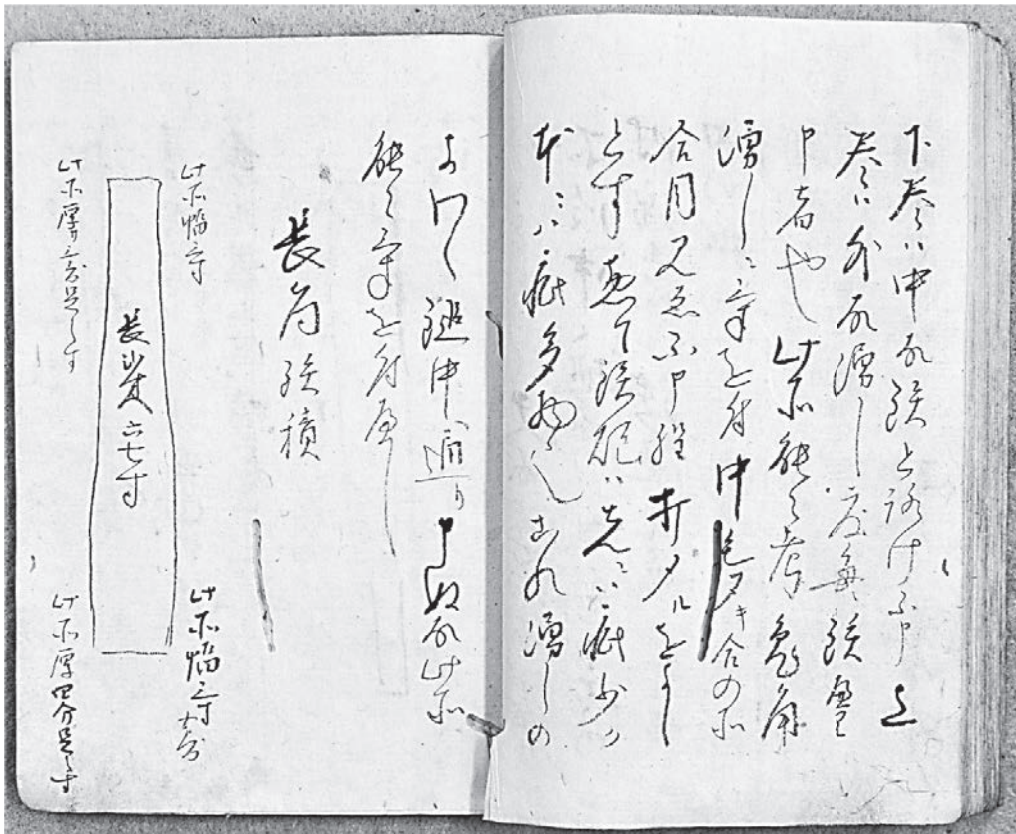
24丁裏





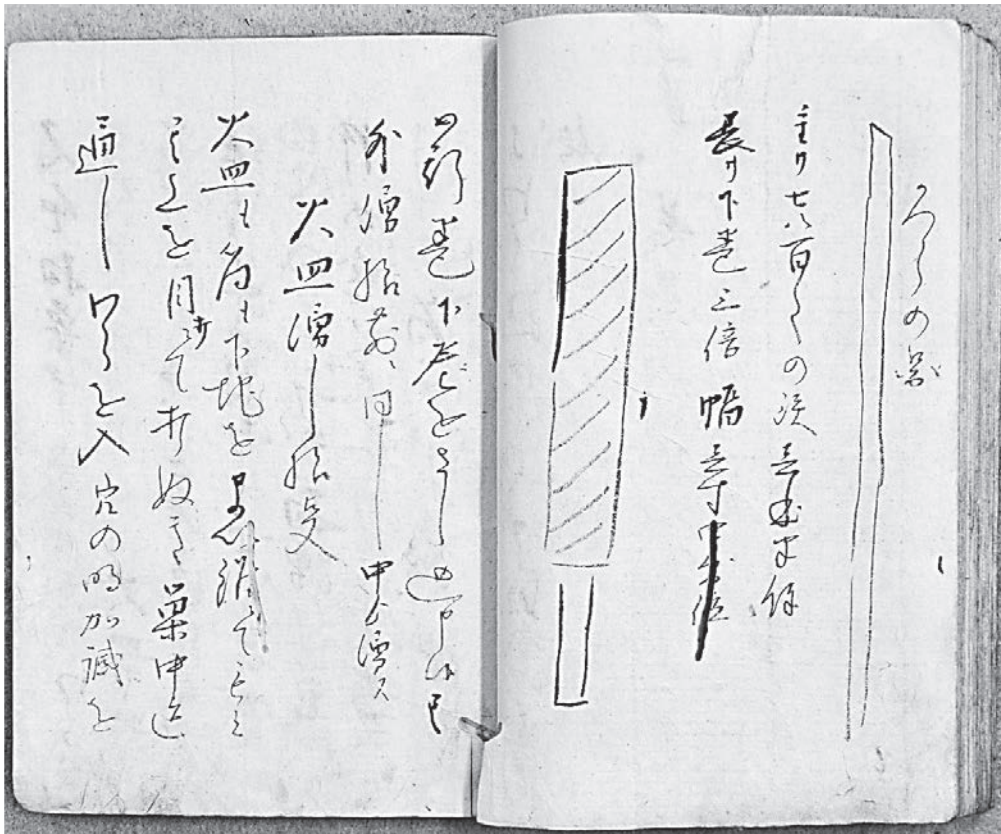
28丁表

27丁裏



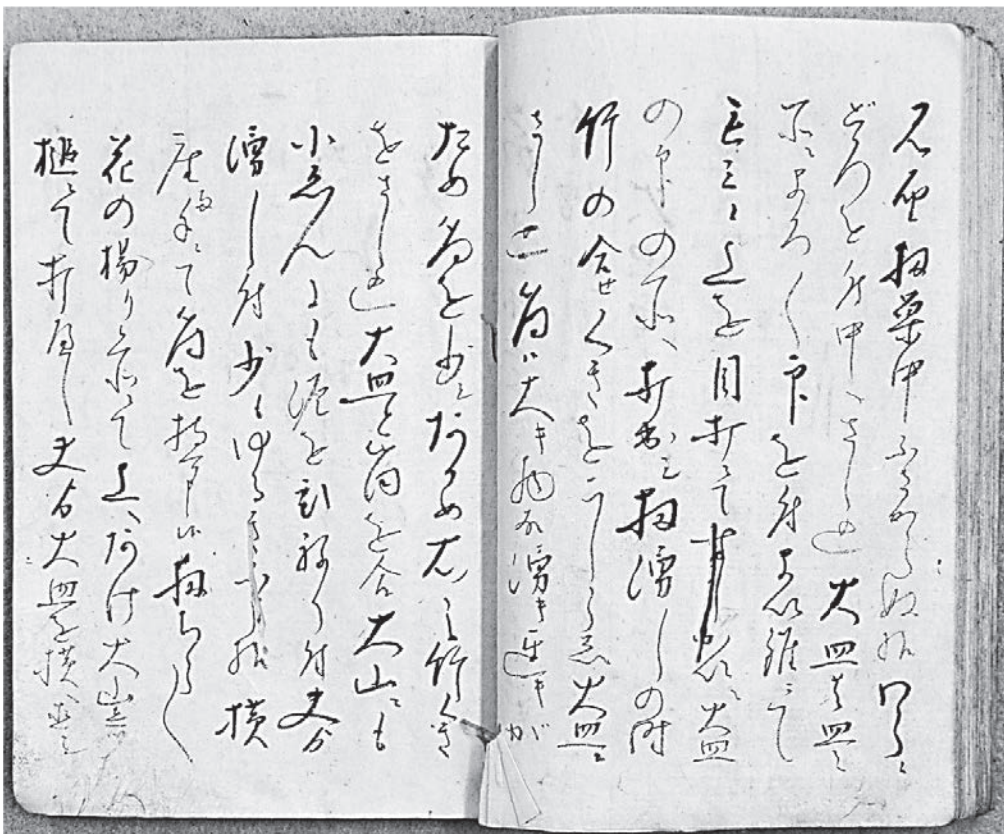
29丁表

28丁裏



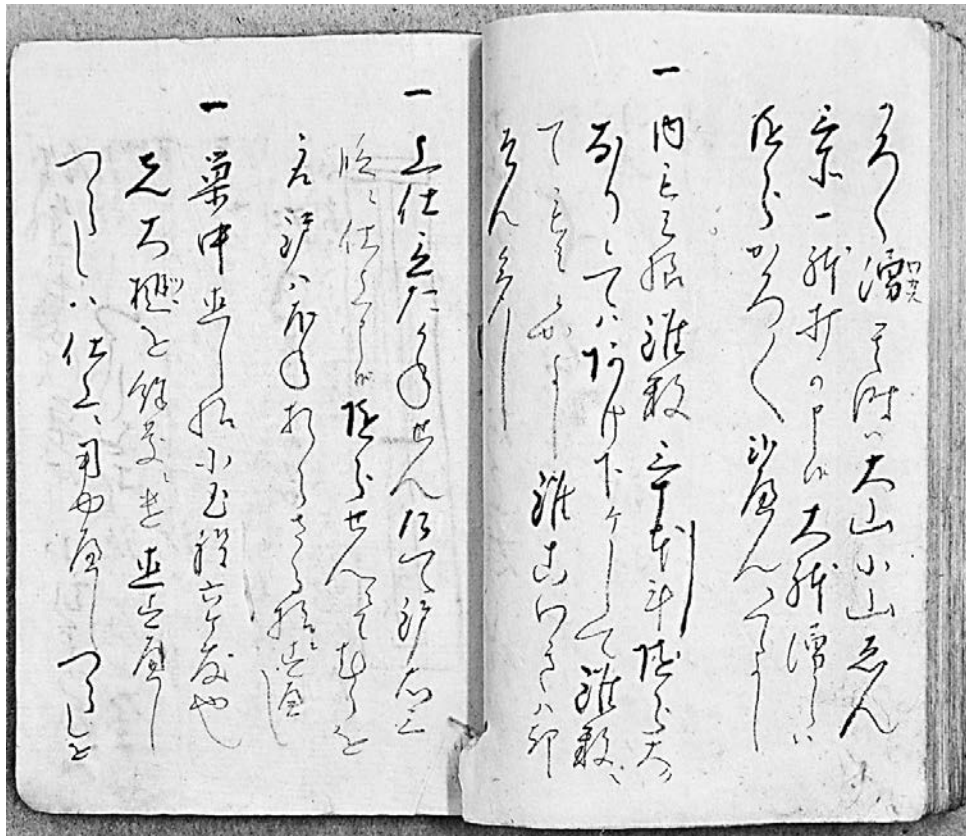
30丁表

29丁裏



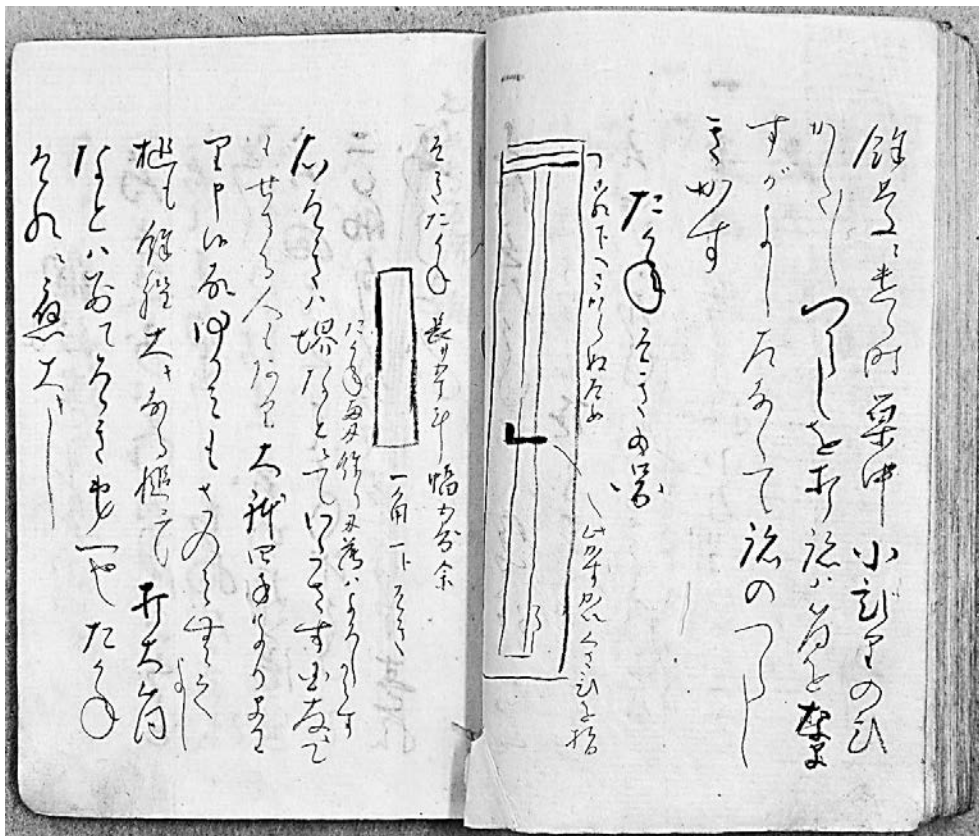
31丁表

30丁裏



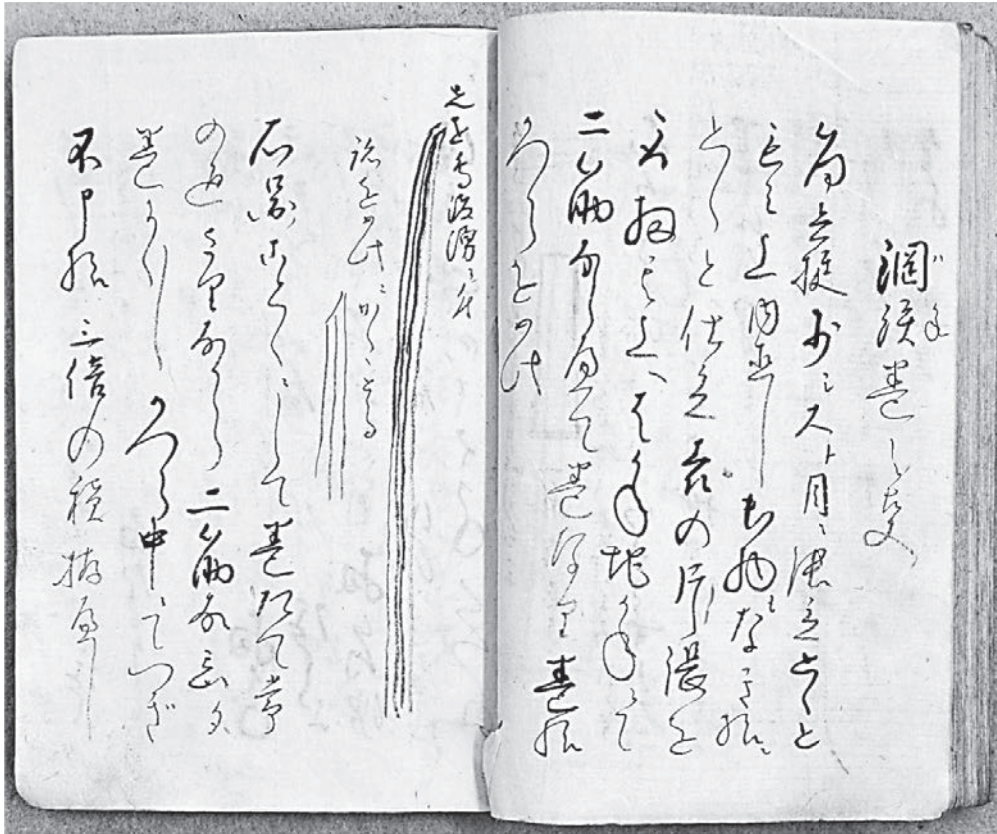
32丁表

31丁裏



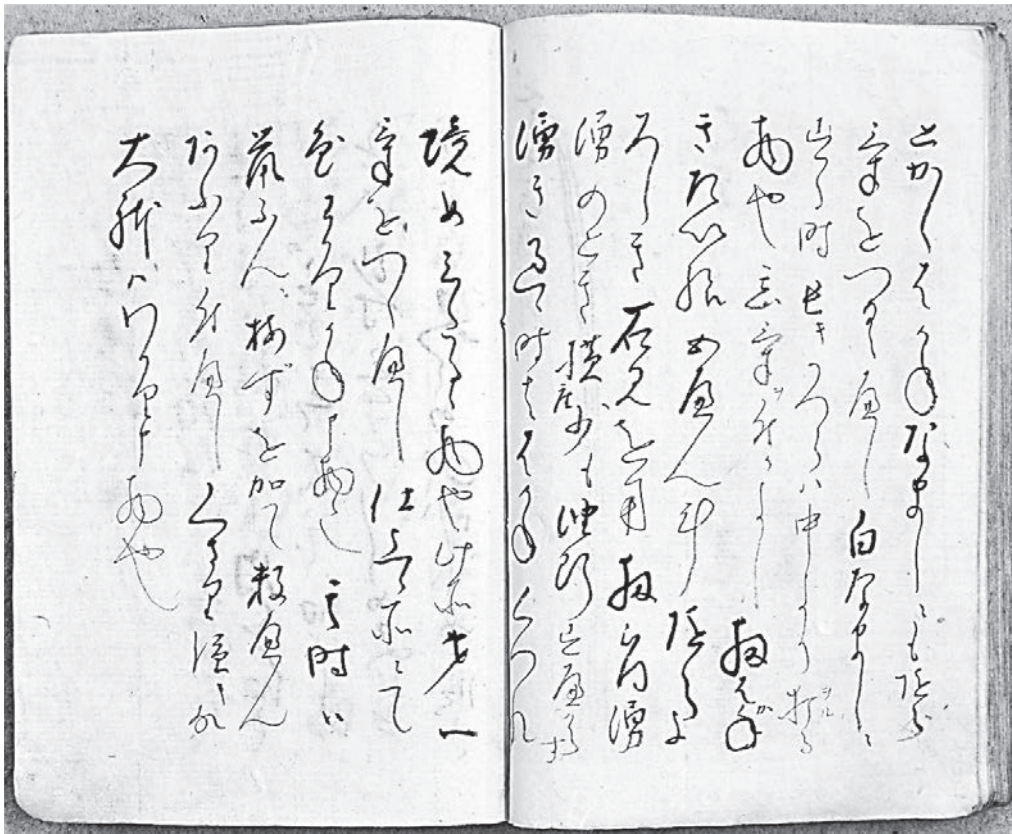
33丁表

32丁裏



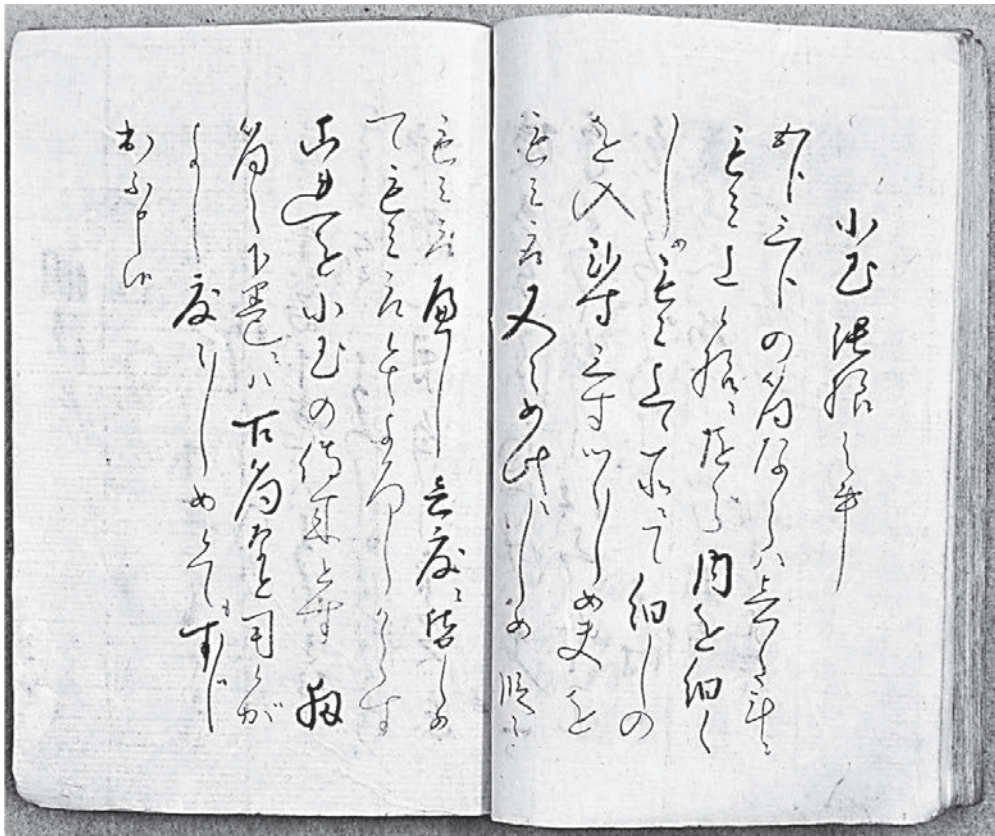
34丁表

33丁裏



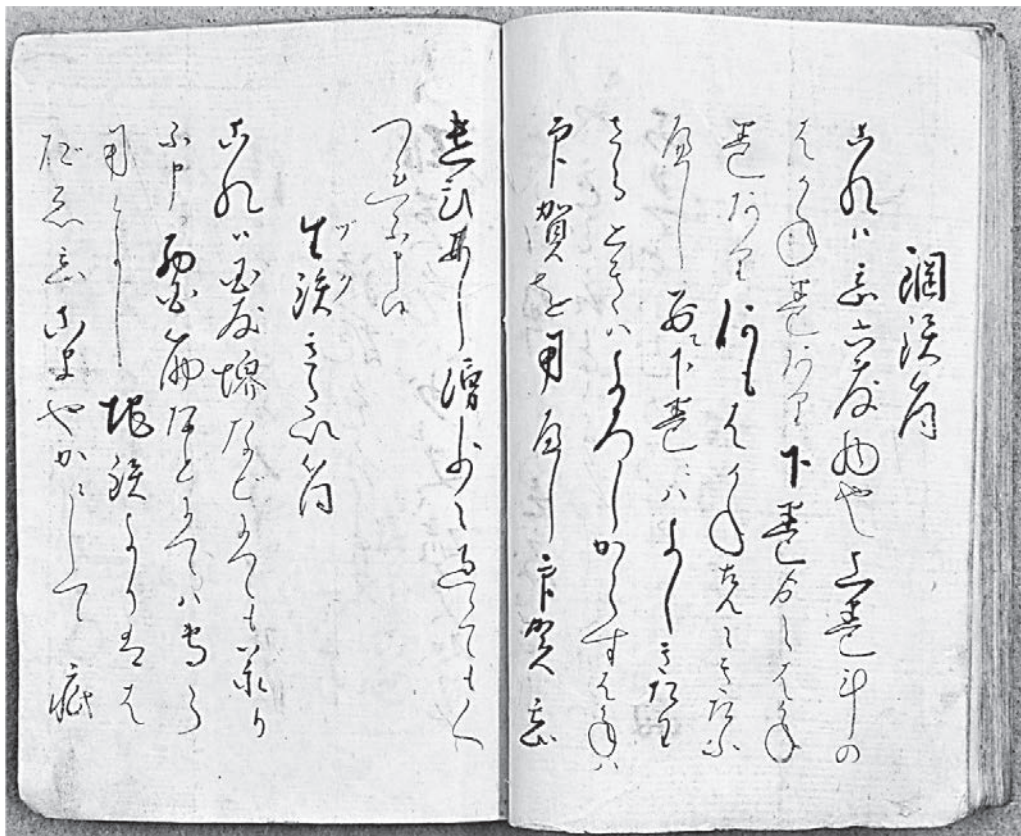
35丁表

34丁裏



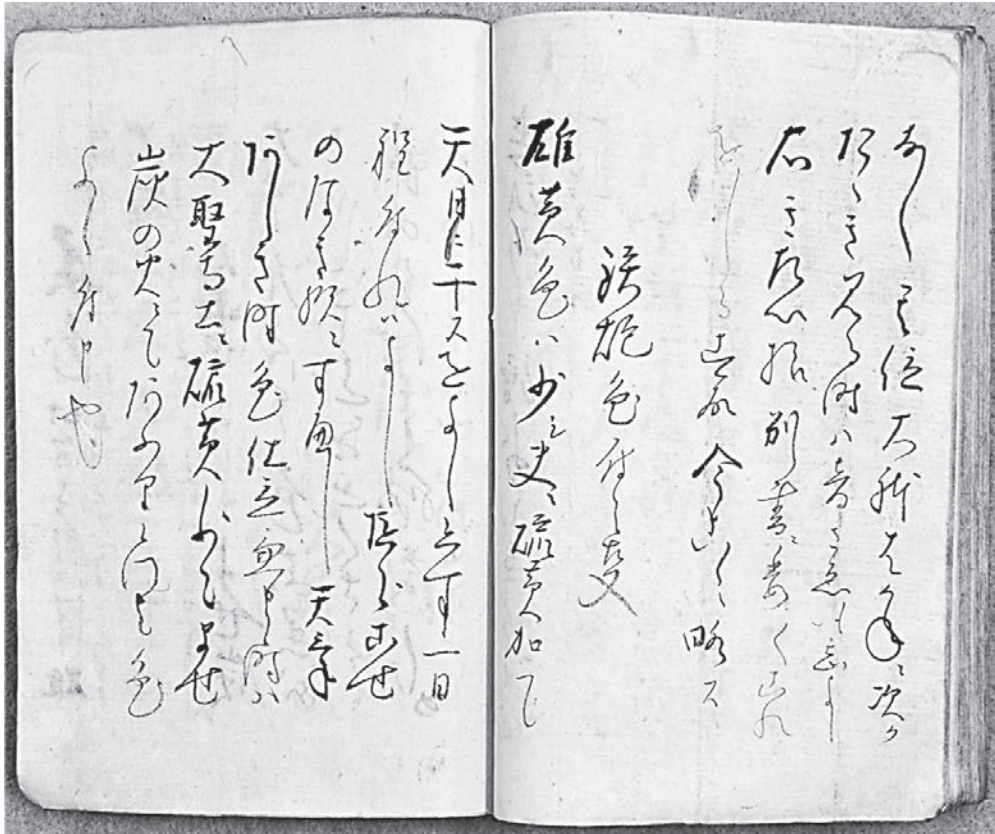
36丁表

35丁裏



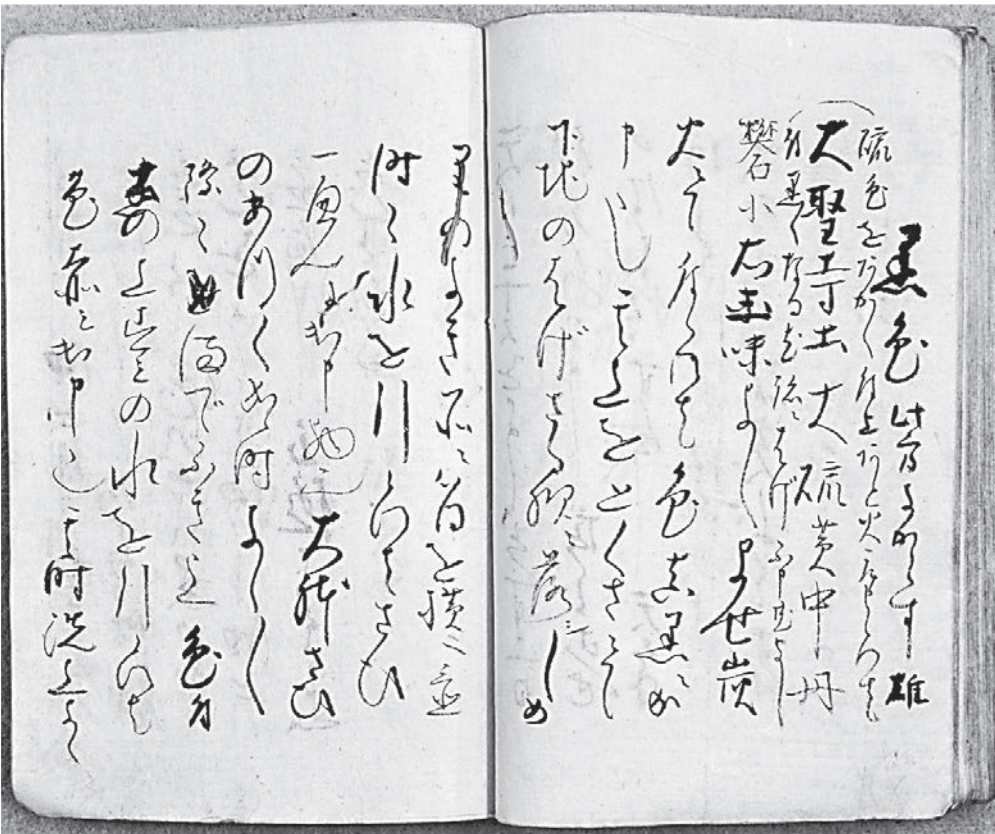
37丁表

36丁裏



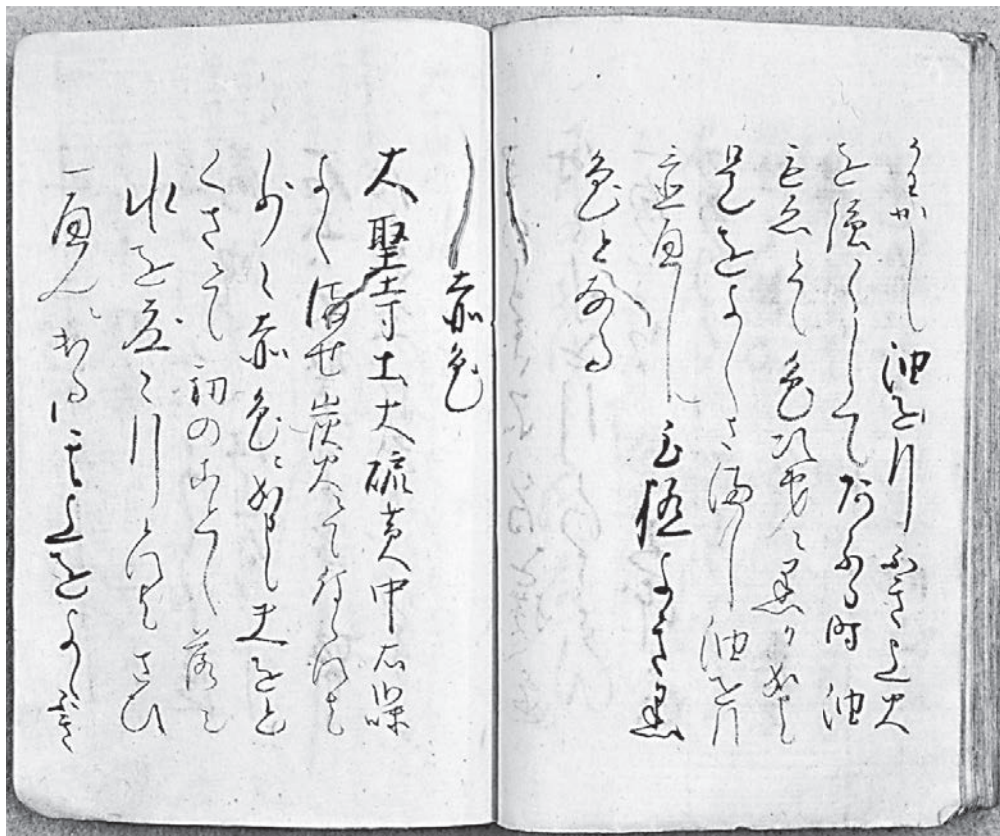
38丁表

37丁裏



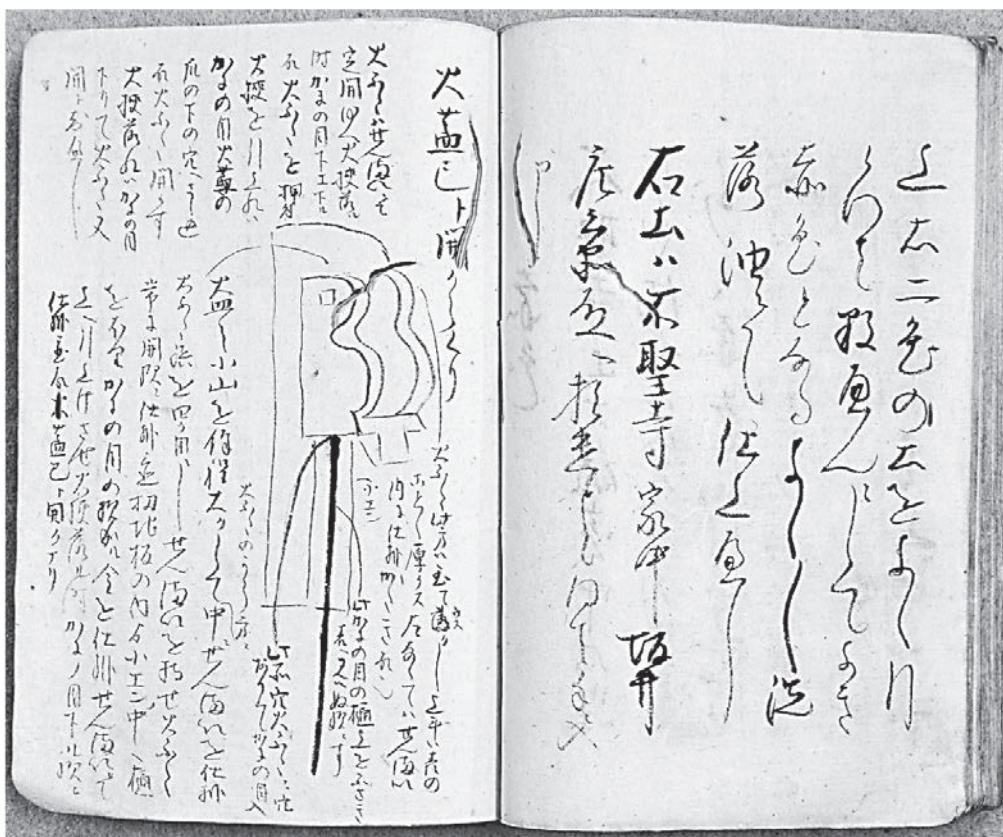
39丁表

38丁裏



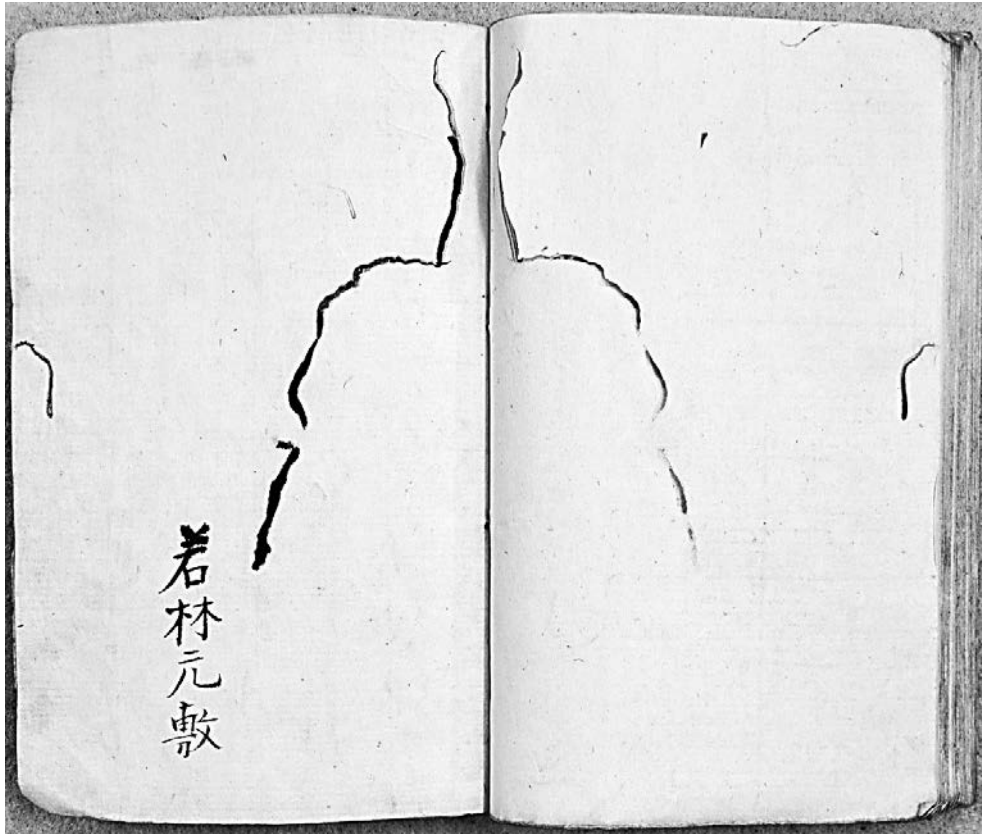
40丁表

39丁裏



41丁表

40丁裏



裏表紙の内側



裏表紙

「鉄炮作法秘伝書」翻刻

〔翻刻にあたって〕

*本文の体裁・改行位置、文字の大小や行間への書き込み、図の配置などは、できるだけ原本に忠実に従った。

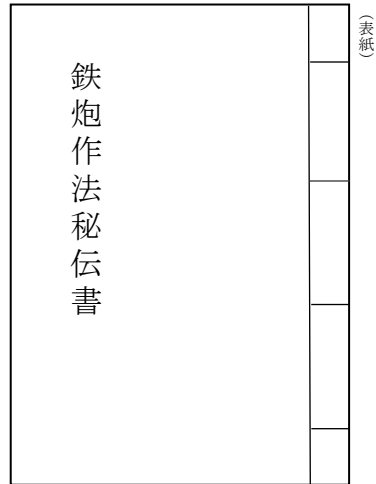
*用字については、旧字体・異体字・変体仮名は新字体・正字・平仮名に改めた。ただし、頻出する次の異体字はそのまま使用した。

- 亘〔宜〕 躰〔体〕 鉦〔鑢（やすり）〕
- 俛〔儘〕 迄〔迄〕 斗〔くばかり〕
- ゞ〔しめ・しま（る）〕 方〔より〕

*本文を読みやすくするため、読点を加えた。
*本書には四か所に付紙がある。文中の貼付位置を「線で示して（付紙）」と注記し、その後付後に付紙の文面を線で囲って掲げた。

*本文中、誤字・脱字・衍字などは、その文字の右傍に（正字）（く脱）（衍）で示した。疑義が残る場合は、（くカ）とし、意味の通らない所は、（ママ）と注記した。

*金属を溶かす意味の「わかす」の用字は「沸」が正しいが、本文ではすべて「湧」である。
*本文の記載位置を示すため、頁にあたる全四一丁の表・裏を、各一行目の下に……を付けて算用数字とオ・ウで表した。



大筒張様之事

○此書入ハ七拾匁筒本口四寸五歩、先三寸五歩ニ張立之時、試申候て書入置申候也

下巻鉄積之分

○中割の三貫目斗の亘キ鉄たてつきニからくり付、こんにやく金と申鉄の幅七八寸、打のはしてもよし

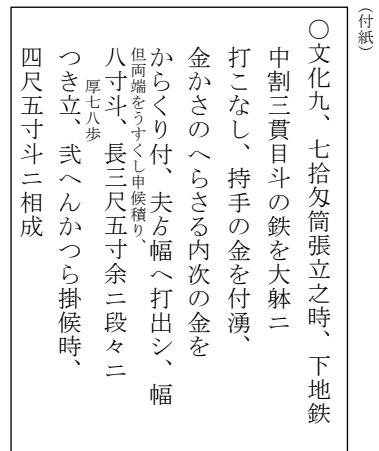
長サ壹尺五六寸、厚サ壹寸余りなるを、四尺斗の筒ならば

三枚程とつき合へし、湧シ

様、はしをうすくし、両方ニ
紙) 又中ラート所、からくり一ほどにて湧スも可然か
紙) て湧し、なけつきニすへし、
付 扱上を両はしをうすくし
其

重ね巻ニすへし、是をう
どんと云

……1オ



うとん張の図

……2オ

○文化丸、七拾匁筒張立之時、下地鉄中割三貫目斗の鉄を大躰ニ打こなし、持手の金を付湧、金かさのへらさる内次の金をからくり付、夫方幅へ打出シ、幅但両端をうすくし申候積り八寸斗、長三尺五寸余二段々ニ厚七八歩つき立、弐へんかつら掛候時、四尺五寸斗ニ相成



右之通巻の図

大筒ニはよろしからず、右のこんにやく金は大坂にて吟味すへし、今一等吟味する

大坂吹屋の事吟味致候所、殊の外の大金を仕出申候よし筒にハ、大坂の古鉄吹屋へ行、

その筒に応し古鉄を集させ下鉄を拵へし、是は極随へよろしきなり、扱又

下鉄百匁筒ならば大躰

○但シ壹尺壹寸にてハ幅広過申候、厚ミ今少しうすくてもよし、重ね目の余慶過たるハよろしからず、両はしも急ニうすくすへし

……3オ

又至て大キ五百・三百匁、壹貫目 ……7才

杯の筒ハ、かわらニても段々肉上り

候得ハ、鉄拵甚大キク成、其上

丸湧ニハ湧不申故、厚サ壹寸

余りの鉄、幅四五寸位のかわらニ

して、如此  筒へなじミ

を付、両方ニて湧し、筒の

…7ウ

湧候時右之かわらを湧し付、

五枚・六枚も合て筒のぐるりへ

巻付、不足所ハ切金を入、扱

夫方洞湧と云て一所ニ湧力さる

所を湧し付、段々肉を上

…8才

候事之、是ハ百匁杯の

大筒ニハ無之事なり、抱筒杯ハ

大躰始終かつら張の物也、

置筒ハ格別肉を上候故かわら

張也、八窓風箱ニてハ、さし渡五

寸斗ノ筒ハ湧過候程湧申候也、火口ハ

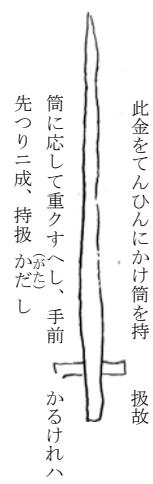
坂落ニ仕掛、金ハ火口方四五寸も上ニ置

不申てハ、火もへ付申候

持扱仕様之事

…8ウ

○七拾匁筒張立之時ハ、始終しのを指込遣申候



右之金を筒へさし込、随分右之金

筒ニ応じて重ク拵へし、先を

ゆかめて筒へ差込候時は、筒の

穴ニ少々の大キありても老本ニて

…9才

よろし、右之金を筒へさし

込、灰なといたし候時ハ手前へ

枕を入、筒をてんびんニかけ

灰場へあけ申也、夫方湧候時ハ

手前へ枕を入、ころはしニて

引出シ、鉄床の前ニ

…9ウ

ころはし枕の図

かきの先強く曲る時へ、はつれかね申者也



かたき木



かね申者也

如斯なる大キナかきを金くさり

ニて釣上、此かきニかけ、金とこの

上へふり直し、かきをはつし、

鉄床の前ニ枕を置、これをころ

はしニしてさし引すへし、

かき取杖つきと申役人を

置、かきをはづし取、杖ニて

筒をあいしらい、鉄床の外へ

落さる様ニにすへし、勿論

…10才

(付紙)

愚按ニて

○七拾匁筒張立之時、かき繩の

上へ車を仕掛、角物を忒本

渡シ、其間をかき繩をあよはせ

申候所、甚都合よく指引出来

申候、五十貫・六拾貫目の筒ならハ

火袋の前を切あけ、車ニてかき

繩を火袋中程迄あよはせ申候ハ、

よろしかるへし

鉄床ニしの持を打へし、しの

さし様、

…10ウ



此穴、しの、つばの通ル様ニすへし

右鉄の輪ニてしのをかけ、筒口へさし込、大槌ニてしのを打込、右之輪ハしのあつき故、手をやかさるため上の柄を取、下の輪ニしのを掛申候

……11才

しの数之事

七拾刃筒張立之時、式番しの迄ハ地鉄斗也、三番方



はかね入

大きなるしのハ地鉄ニてよし

先下巻まき付しの、下巻湧シ

……11ウ

しの、上巻湧シしの式二本、
○しの大きサ段々、式歩五厘方三歩斗もすき不申てハ
夫方仕上すらししの、以上

其跡入兼申候、夫故段しのを少クすへし
六本斗、すらししのハ只中へ

入置斗なり、大躰上巻式三篇

掛候得は、最早中へハしまらぬ

○此書入よろしからず
至極下巻の厚キ筒ハ、下巻の俵ニて最早中へハ
しまらぬ物也、此所考、玉目ニ応して穴を細クすへし

……12才

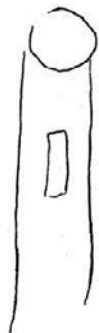
物なり、すらししのハ中へ入置、穴のつまらぬため也、大躰夫故、百刃筒ならハ上巻二三へんの所ニて、穴の大サ七八歩二なる様ニ張上へし

(付紙)

○七拾刃玉三へん目、かわらニて本四寸、先三寸五歩此所大ニ考あり、七拾刃七八歩之心金 二付申候ニて湧シ、其上へ式へんかつら掛申候得共、中へベリ申候、扱其上へ壹寸斗のかわら掛申候ても、格別大鍔ニて打申候得はベリ申候、此所作者の考ニて、心湧の時穴を大キクすへし、強ク打候得はかわらの時も中へベリ申候也、格別の大筒ならハベリかね可申

中もミ様之事

もミ台図



……12ウ

きり之図



国友ニてハあら錐、小筒も如此

右之通の大きなるもミ台ニ

……13才

かけ、如此なる錐ニて三人

斗ニてもむ、壹人ハ中二居、

二人は両はしニてもしり

をまワしもむなり、尤

大なる錐ニハ上よりかきを

さけ、錐を釣上もむなり、左

……13ウ

なくてハ筒の小口くれ申物なり、

ねし道立様、右之通替る

ことなし、下くり三本、上くり

三本斗ニてよし、只鑄筒

の道を立候にハ、筒を穴へうずミ、

木ニしめ、錐に重りを

かけ、道立錐をもミ込事も

……14才

在之よし、筒あらもミの

錐ハ、八九本も在之候得はよろし

き也、随分あけさけして

もミ候得は、きり数入不申候

内直シ様之事

大なるかちうすの様なる物の

……14ウ

上二筒をのせ、手前向ニ鉄を
しき、大なるかにまたと申、

かにまた図



如此なる大はさミニニて、兩人して
先小口を持上させ、内のゆかみを
すかし見とゞけ、印を付、下へ
をろし、筒の両小口ニしの
をさし込、手がきして鉄床の
上ニ直シ、九貫の鎚ニて打也、
鉄床の前ニ大なる金をすゑ

……15才

置、橋ニかけて打也、惣体大筒ハ
内あらくしき物ニて、却て
見へすぎ打にくき物也、大なる
ものなれハ、表の穴を打ても
うらのせなへハひゝかぬもの
也、其心持ニて指向候所の穴
を打へし、せなハ次第ニ
とれ申物也、必小筒の心持ニて

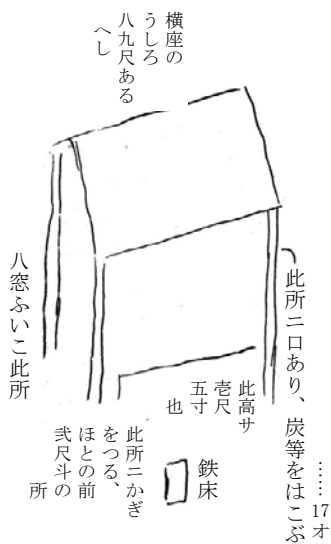
……16才

打へからず、大躰其上ハ錐にて
のすへし、又至極之大筒ニ
成候てハ、小口をさし上候事もた
やすくいたしかたし、夫故あん
とふニ火をともし、上ケ下して内
のゆかミを見る事も有之ト
承ぬ

……16ウ

場所拵様之事

火袋奥ゆき壱間、幅九尺、
高サ壱丈余



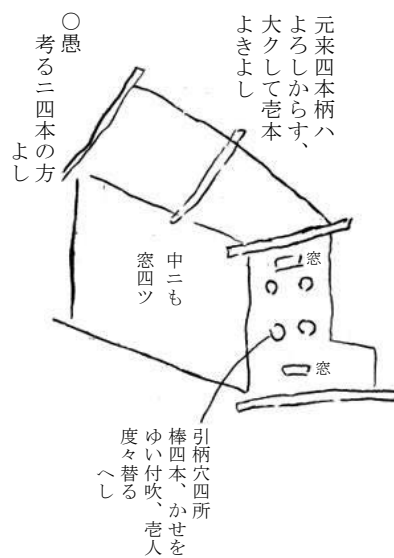
……17才

七拾匁張立之時七尺・六尺

○七拾匁筒之時、火口式寸、穴石にて口指渡

……17ウ
五寸五歩、土ハよろしからず

長サ五尺、高サ式尺三寸
幅壱尺五寸



……18才

火袋奥へハ浅くとも、横はハ広く
せされハ、長物を持扱ニよろし
○火つほ百匁筒なら幅壱尺三寸、
からず、火つほハ坂おとしニ拵
炭もたわらニ三俵入様ニすへし
ほるへし、風箱ハ八ツ窓、四本
の柄ニ式本のかせをゆい付吹へし、
大筒ニふいこを二箱掛候事ハ、
○七拾匁筒之時、人数大勢の時、風箱共九人斗、かつら時ハ
至極の大器は知らず、先は一
箱ニて式百匁・三百匁・五百匁も
張立申也、細工所ハ四間四方、人
数ハ式拾人斗、鉄床さして
○七拾匁筒之時、手前の
床ニ下へ鉄床横ニ伏置遣申候、夫ニてゆるき不申
大キクなくてもよし、大躰

……18ウ

百匁筒位ニテ三四拾貫匁位、炭ハ

松すミ荒きを用、鉄ハせん割

……19オ

こんにやく金の類、しかし場所も

壱貫匁筒などニテ、右之積にてハ

せはし、別ニ人家をはなれ、場

所を見立へし、其外道具類

相替る事なし、九刃(貫カ)の槌ハ小口

を切とき、或ハ内を直ス時ニ用ユ

……19ウ

上仕立

一、セン・錐ヤスリ・たかねを大イニ遣申者

也、或ハ上ニ小紋ヲ置事あり、小紋

望次第ニ打也、是ハ却てミがき

上よりよし、少々むらのある

所も、多ハこれにてかくす故也

……20オ

ねしの事

大きなるねしハ、中々釘にて

ことくハすりかたし、下地

たかねにてそき、其上を釘にて

するへし

ねし道立ハ、大筒も小筒も

……20ウ

大躰二厘の所至極よし、夫方

大クかくれハ折申者也、必弍厘方

過スへからず

火皿之事

大筒火皿ハ両方湧し也

……21オ

火皿之形左之如

抱筒杯も当時ハ
皆々湧し付也、

入火皿ハ手間取多、
其上筒のよわミト成る



此所を猿尾といふ、よく湧候時、

あて槌にて筒へ平ニ成程ニたゝ

き込、左なくてハ内杯直申候時、

小山の所方落申物也、大筒なら

ても拾匁位の筒ハ右之通よし、

……21ウ

穴合様、常の小筒のことく穴を

あけ、如此



此所くきを差、穴をよく合

挟ニ金ヲ添て
はさミ、穴の宜

処へ向ヒ候様ニ挟、両方湧加減よき時筒へ付申也

火皿穴上下の所、挟ニテ金を持

……22オ

添定むへし、左右ハ何角

角ニ合、定木様成物を拵、付候時

右之定木を当、火皿の左右

をも定むへし、扱又入火

皿の時ハ、小山先猿尾の所、小

ゑんの所ねし留ニすへし、

火皿ふり入の時、大キ成筒ハ赤メ

……22ウ

候て火皿へたゝき付申事、小筒

の様ニハ成かたし、夫故如此



此所を下へもミぬき

穴をよく丸くし、拾匁玉位

のねし道立ニテ道を立、ふ(る)金

をねしニして仕込候時ハ、吹出申

……23オ

事一向無之、左なくてハ、菓強

けれハ吹出ス事あり、鑄筒杯

通のふけ安者也、左様之時ハ

火皿のてん方筒の中迄大ク

もミぬき、ねし道を立、ねしを

仕込、其ねしの中へ通し穴を
もミあけ、ふり入ニする事
あり、左なくて火皿通奥
の所忽ふけ申物也、上ハ火
皿の筒杯ハ別てねしニして、
通シをもミあけされ繕(ハ脱カ)ヒ
かたし

…… 23ウ

出合之事

都て大筒とても出合ハ六間位の物
也、必長キ出合をつくへからす

…… 24オ

大鑄形之事

先升の中をたかねニてほり、
大まい錐ニてもむへし、
ろくろニてもミ候事も在之
候得共、夫はよろしからず、
惣て大鑄形之錐金あつ
故、やきははせ、あしく切にぶ
き事あり、夫故近來ハ図之こ
とく拵事あり、かろき故

…… 24ウ

まわりよろしく、甚便利
なり

…… 25オ



此所をこひらに
いたし、目
を切へし

右は甚便利之よし

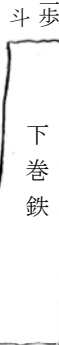
異風下巻鉄積

…… 25ウ

幅三寸五歩斗

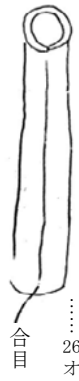
幅四寸斗

此所ニて厚サ三歩斗



長式尺斗

此所ニて厚サ四歩余



…… 26オ

右之鉄を如此ニ毛ぬき合ニす、下
巻湧なし、是ハ大躰六七匁

之下鉄なり、鉄は平割の上々

の所を用てよし、若無之時ハ、

まん割之内大キなる物をえらみ、

これを合へし、拾匁の大ト

…… 26ウ

筒、拾五匁・式拾匁位之筒ニハ、



図のことく大筒同様下

巻を湧して、其上へ上巻

かつらニして掛へし、尤抱筒

杯ハ百匁ニてもかつら斗ニてよし

…… 27オ

かつら鉄之図

かつら巻候時之図

此所



下巻

如此巻て、其中え下巻さし込付、先壺湧

付申候かよし

かつらハ下巻之長三倍の積りニ

すへし、六七匁の筒ならハ、

重サ七百匁斗在之鉄を式本

かくへし、厚サ八元ニて四歩余、幅

壺寸五歩斗、とかく鉄を余慶

ニかけ、中へ強く打込へし、

槌中え通りよわき時ハ、立てすし

…… 27ウ

出る者なり、夫故大筒ニなり候てハ …… 28 オ

所詮中へ槌通り不申故、下巻の

時湧す也、鉄炮之立てきづは

刀の横切同様甚よろしからず、

打出候ても、立疵ハ根切れハいたし

不申候、惣て長筒にても、下巻よりハ

上巻を鉄厚ク掛へし、其故ハ、

下巻ハ中故鉄とろけ不申、上 …… 28 ウ

巻ハ外故湧し度毎ニ鉄へり

申者也、此所能々考、兎角

湧しニ気を付、中毛又キ合の所、

合目見多不申程打ベルをよし

とす、惣て鉄炮ハ、先ニハ疵少ク、

本ニハ疵多物也、これ湧しの

よワク、鎚中へ通り申ぬ故、此所 …… 29 オ

能々気を付へし

長筒鉄積

此所幅三寸



此所厚サ三歩足らず

此所幅三寸五歩

此所厚四分足らず

かつらの図 …… 29 ウ



重サ七八百匁の鉄老本半余

長サ下巻三倍、幅老寸四歩位



如斯巻、下巻をさし込申候、其 …… 30 オ

外湧様前ニ同し、中々湧ス

火皿湧し様事

火皿も筒も下地をまい錐ニてもミ、

其上を目^打ニて打ぬき巢中込

通し、ワらを入、穴の明加減を

見届、扱巢中ふさからぬ様ワラニ …… 30 ウ

どろを付、中へさし込、火皿は皿之

所ニまろく印を付、まい錐ニて

もミ候上を、目打ニてすしikaiニ火皿

の印の所へ打出シ、扱湧しの時、

竹の合せくきをこしらぬ火皿ニ

さし込、筒ハ大キ物故湧キ遅キが

ため、筒を少しあかめ、右之竹くき …… 31 オ

をさし込、火皿と筒を合、大山ニも

小多んにも泥をひねり付、夫方

湧し付、少もゆるき不申様、横

座手^両ニて筒を持可申候、扱ちらく

花の揚り候所ニて上へあけ、大山老ツ

槌ニて打へし、夫方火皿を横へ直シ

かるく湧^{ワカス}、其時ハ大山・小山・多ん …… 31 ウ

三所一躰打可申候、大躰湧しハ

随分かるく忒へんニてよし

一、内もミ様、錐数三十本斗、随分大ク

なり候てハ、あけ下ケして錐数ニ

てもミ候かよし、錐こワキハ却

そん多し

一、上仕立、たかね・せんたて・鉦、右ニ …… 32 オ

段ニ仕上申候、随分せんニてむらを

取、鉦ハほね折らざる様ニすへし

一、巢中直し様、小玉程六ヶ敷也、

先大槌^ツを余慶ニ遣、直すへし、

つらしハ仕上ニ用ゆへし、つらしを

余慶ニ遣候時、巢中小びりのひ …… 32 ウ

かたし、つらしを打跡ハ筒をなま

すがよし、左なくて跡のつらし
きかす

たかねそきの図



そきたかね 長サ五寸斗 幅五歩余 …… 33 オ

たかね両刃、余り刃薄ハよろしからず
一角一トそき

右そきハ塚などにていたさず、国友にて
もせざる人もあり、大躰四方よりまわ
り申候故、ゆかミもさのミ無之よし、
槌も余程大キなる槌にて打大筒
などハ別て、そき第一也、たかね
それニ応大キし

鋼鉄巻之事

…… 33 ウ

筒耆挺少シ大ト目ニ張立、とくと
もミ上、内直し出物もなき様ニ
とくと仕立、表の片張を
取、扱其上へはかね・地かねにて

二筋ならへて巻なり、巻様
かつらを如此

先を鳥渡湧シ付



…… 34 オ

右図ノことくニして巻たて常
の通、さりながら二筋故甚タ
巻にくし、かつら中にてつぎ
不申様三倍の積拵へし、

…… 34 ウ

とかくはかねなましニも随分
気をつくへし、白なましニ
する時、長キかつらハ中より折る
物也、甚氣ヲ付かよし、扱はね
きたい様、五へん斗、随分よ
ろしき石見を用、扱筒湧

湧のとき横少も油断すへからず、

…… 35 オ

湧き過候時は、はかねくつれ、
境めミたるゝ物也、此所第一
気をつくへし、仕上候所にて
色わかりかね申物也、其時ハ

鼠ふんニ梅ずを加て数へん
あふり付へし、くさり強キ故
大躰ハワかり申物也

小玉張様之事

…… 35 ウ

五分・三分の筒ならハ、耆勿斗ニ
もミ上候様ニ随分内を細く
しめ、もミ上候所にて細しの
を入、式寸・三寸ツ、しめ、夫を
もミ取、又々如此ニしめ、段々
もミ取へし、耆度ニ皆しめ
てもミ取候はよろしからず、
これを小玉の伝来とす、扱
筒之下卷ニハ古筒など用候が
よし、度々しめ候てもすじ
出不申候

…… 36 オ

鋼鉄筒

…… 36 ウ

これハ甚六敷物也、上巻斗の
はかね巻あり、下巻方之はかね
巻あり、何もはかね克々きたふ

へし、別て下巻ニハ、よくきたわ
さるときハよろしからず、はかねハ
印賀を用へし、印賀甚
遣ひ安し、湧少々過候てもく
つれ不申候

生鉄ツクきたい筒

これハ国友・堺などにも承り
不申、西国筋などにてハ専ら
用候よし、地鉄よりはは
だ多甚こまやかニして疵
なく、其位大躰はかねニ次ク、
たゞき見る時ハ音さゝも甚よし、
右きたい様別書ニ委くこれ
をしるす故、今こゝニ略ス

鉄炮色付之事

雄黄色ハ少シ、夫ニ硫黄加て
天日ニ干スをよしとす、一日
程付れハよし、随分こせ

のなき様ニすへし、天氣
あしき時、色仕立兼申候時ハ、
大聖寺土ニ硫黄少々ませ、
炭の火ニてあふり候得は色
よく付申也

黒色

此方よからず、雄
硫色をあかく付上、あと火取申候得は
大聖寺土大・硫黄中・丹
付黒くなる、尤跡ニはげ不申、甚よし
礬小、右三味よくませ炭

火ニて付候得は、色真黒ニ成
申也、其上をとくさにて
下地のはげさる様ニ落シ、しめ
りのよき所ニ筒を横へ置、
時々水を引候得は、さひ
一へんに申物也、大躰さひ
のあつく成候時、よくく
際々■までふき上、色付

土の上すミの水を引候得は、
色赤ミ出申也、其時洗上、よく
かわかし、油を引、ふき上、火

を強くしてあふる時、油
も多候て色次第二黒ク成申候、
是をよくさまし、油を引
置へし、至極よき黒
色となる

赤色

大聖寺土大・硫黄中、右三味
よくませ炭火ニて付候得は、
少々赤色ニ成申候、夫をと
くさにて初のことく落シ、
水を度々引候得は、さひ

一へんニ出る、其上をよくふき
上、右二色の土をよく引
候得は、数へんニしてよき
赤色となる、よくく洗
落、油ニて仕上へし、
右土ハ大聖寺家中坂井
庄兵衛殿へ頼遣申候得は、手ニ入
申候

……38ウ

火ふたハせんまいにて
定開ゆへ、火挾落ル
時かにの目下エ下ル
故、火ふたを押付、
火挾を引上れハ
かにの目火蓋の
爪の下の穴へさし込
故、火ふた開かず、
火挾落れハかにの目
下りて、火ふた又
開ト知へし



火ふた此方ハ至て薄クし、上斗ハ表の
ことく厚クス、左なくてハせんまい
内に仕掛かたき故也

此所穴、火ふたニ穴ありて、かにの目入

火皿之小山を余程大クして、中ニせんまいを仕掛、
火ふた鉈を四角ニし、せんまいを持せ、火ふた
常に開様ニ仕掛置、扱地板の内方小エンノ中へ極
をほり、かにの目の様成ル金を仕掛、せんまいにて
上へ引上げさせ、火挾落ル時かにノ目下ル様ニ
仕掛置故、火蓋己ト開クナリ

火ふたのうら方ニ

(裏表紙の内側に記載)
若林元敷

「鉄炮作法秘伝書」現代語訳

〔現代語訳にあたって〕

*本文の理解を助けるために、適宜「」で言葉を補い、()
で簡単な注記を加えた。

*追記と思われる箇所は、「」に入れて表示した。冒頭に付け
られた○印は、漢数字の○と区別するため◎で表した。

*行間に見られる追記については、短いものは本文中に「」
で補い、長文のものは、書き出し位置に(追記①)などと一
連番号を付け、適宜本文の後に記した。

*図の周囲に配された原注と思われる記載は、「」に入れず、
そのまま表示する。

*原文中には、鉄の種類や鍛冶道具など、専門用語が多い。漢
字に直すと読みにくいものや、複数の漢字を当てるもの、同
じ漢字で読みが異なるものなどは、カタカナ書きにした。

- ハガネ(鋼・刃金・鋳) ズク(銑・生鉄) キリ(錐)
- ツチ(槌・鎚) ヤスリ(鑢・鉦) タガネ(鑿)
- セン(銑) フイゴ(鞴) ロクロ(轆轤) カギ(鉤)
- ネジ(螺子・捩子・捻子) カスガイ(鍍) クサビ(楔)

*原文中に見える「金」(かね)は全て「鉄」(くろがね)のこ
とであり、その中には鉄素材や鉄製品も含む。

*原文中には、職工である当事者しか理解できないような難解
な語句が含まれる。その箇所には傍線を引いてあえて訳さず、
可能性のある訳が考えられる場合は、その下に()で提示
するに止めた。

大筒の張り方の事

①(通記)この書き入れは、七〇匁玉筒で元口「の直径」四寸五分、先三寸五分に張り立てたときに試したことを、書き入れておくものである」

下巻にする鉄の見積りの分

①(通記)こんにやく金という鉄で、幅七、八寸、長さ一尺五、六寸、厚さ一寸余りのものを、四尺くらいの筒ならば三枚ほど継ぎ合わせる。沸かし方は「継ぐ方の」端を薄くし、両方で沸かし、なげ継ぎにする。そして、そのうえで「縦方向の」両端を薄くして重ね巻きにする。これをうどんという。

①「◎中割の三貫目くらいの良質な鉄を縦継ぎにカラクリ付けし、打ちのばしてもよい」

②「また、中を一か所カラクリ付け、一回ほど沸かしてもよいかもしれない」

①(付紙にて通記)「◎文化九年に七〇匁玉筒を張り立てたとき、下地にする鉄(下鉄)は、中割の三貫目くらいの鉄を大体よく打って、持ち手の金を沸かし付け、金嵩かさの減らないうちに次の金をカラクリ付けにし、それから幅へ打ち出した。ただし、両端を薄くするつもりで、「幅八寸くらい、長さ三尺五寸余りに段々と継ぎ足した。」「厚さ七、八分で」「うどん張りの上に」「二遍葛かすちを掛けたとき、「長さ」四尺五寸くらいになった」

うどん張りの図



右の通りに巻くようにする。毛抜き合せは大筒にはよくない。右のこんにやく金は大坂で選定すべきである。さらにいっそう検討が必要な筒には、大坂の古鉄吹屋へ行き、その筒に応じて古鉄を集めさせ、下鉄を拵えるべきだ。これは極めて柔軟性があって、よいものである。さてまた、下鉄は一〇〇匁玉筒なら、大体幅一尺一、二寸にすべきだ。(通記)これは両端を薄くした仕上げ時の見積りである。総じて大筒は下巻が重要である。下巻を火作りするとき、長さ五尺くらいの持ち手の金を下巻の小口に沸かし付け、それを持って操作すべきだ。なかなかハサミ等では持ち扱いにくい。

③「大坂の吹屋について調べたところ、案外大量に鉄を作り出しているようだ」

④「◎ただし、一尺一、二寸では幅が広すぎる。厚みをもう少し薄くしてもよい。重ね目が多すぎるのはよくない。両端も急に薄くすべきである」

長さ五尺くらい



この所へ手を掛けて持ち扱う

重さは、金に応じて重くすべきである。手前が重くなければ、先がずり下がり、持ち扱いにくい。鉄床の前に「円筒形の」枕を入れ、それを転ばして差し引きする。

下巻の沸かし数の事

大体一番・二番・三番と、三遍ほど沸かすべきである。そのたびに、重ね目の「二番シノへ」付きが悪い所を跳ね上げて、「二番シノへ締め付け、」よく沸かすようにする。ツチは、三、四貫目のツチで打つ。

⑤ 「◎二貫目・一貫五〇〇目「のツチ」でもよい」

(付紙にて追記)

「◎この跳ね上げ沸かしの技法にはコツがある。一番大シノへ巻く場合も、沸かしのとき、一口一口「五、六寸ずつ」、二番シノへタガネで

(追記⑥)

跳ね上げ、よく抱き付くようにしなければ、沸かしのとき二番シノへ抱き付き具合がよくない。それゆえ、一番シノへ巻き付けるとき

は大体に巻き付け、沸かしのとき二番シノへしっかりと締め付け、

一口一口ずつ沸かすべきである」

⑥ 「タガネで口を開けないと締めることができない」

上巻の鉄の見積りの事

(追記⑦)

大体一遍・二遍ほど葛金を巻く点は、小筒「の工程」と変わらない。段々と筒の高が増えて大きくなるときは、葛では「緩んで」ぶかつき、却って付きが悪くなるので、「瓦金で張る。」

⑦ 「◎七〇匆玉筒のとき、一番葛を元より二尺余り巻いたときは、一丈五尺くらい必要だった。厚みは小割を均した程度である」

上巻の沸かし方の事

一遍・二遍葛を巻く間は、「沸かし方について」とくに変わることはない。それより上は瓦で張る。



このように、筒へ毛抜き合せに付くように拵え、大体この幅は五、六寸くらい、厚さは一寸くらい。瓦も「二遍、三遍と、段々」上になるほど厚くして掛けなければ、下筒へ瓦の落ち着き具合がよくない。火が燃え付いて、沸かしがうまくいかない。鉄千割という幅三寸ほど、厚さ一寸、長さ一尺五、六寸の金を左のように両方で沸かし、

⑧ 「◎この千割はこの方(大坂・堺)にはない」

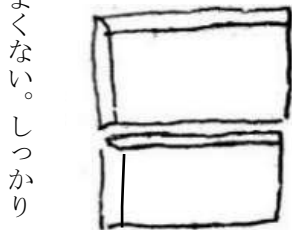
⑨ 「◎七〇匆玉筒のとき、中割を薄くして掛けた。千割を二本合せても使える」

(追記)

「◎中を二か所二回ほど沸かし、板をはぐように沸かし付け、両端は一回ほど沸かす。また小口を、板をはぐように矢筈「の形」にして沸かすこともある」

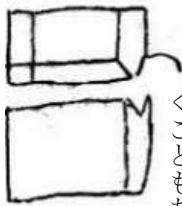
(追記)
「◎何にせよ、横疵は付かない」

この沸かしは、
大体付ければよい。
後で筒へ巻き付けて沸かすからだ。



このように、タガネ目を深く入れて、板をはぐようにして、二回ほど沸かしはぐこともある。

(追記)
「◎この書き入れはよくない。しっかりと付かなければ、沸かしのとき合わせ目が付きにくい」



大体、幅五、六寸ほどになるように仕立てあげる。また鉄は、当地の三国（越前国坂井郡、現在の福井県坂井市三国町）などにある中割という鉄を打ち広げて使うときは、そのままでも瓦金ができる。作者の意向しだいであろう。

また、至つて太い五〇〇・三〇〇匁、一貫目玉などの筒は、瓦でも段々と肉厚になれば、鉄の拵えが甚だ大きくなり、そのうえ丸沸かしには沸かないため、厚さ一寸余りの鉄を幅四、五寸ぐらいの瓦にして、このように



筒へなじむように成形し、「筒と瓦の」両方を沸かし、筒が沸いたときに右の瓦を「筒へ」沸かし付け、五枚、六枚も合せて筒の周囲へ巻き付け、不足の所は切金を入れる。さて、それから

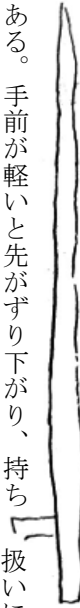
胴沸かしと云って、一所に沸かない所を沸かし付け、段々肉厚にすることがある。これは、一〇〇匁玉などの大筒には行わない。抱え筒などは大体、通常は葛張りである。置き筒はとくに肉厚にするため、瓦張りである。八窓風箱（フイゴ）では、差し渡し（直径）五寸ぐらいの筒は、沸き過ぎるほど沸いてしまう。火口は逆落とし（急勾配）に仕掛け、金（製作中の筒）は火口より四、五寸も上に置かないと、火が燃え付いてしまう。

持ち扱い方法の事

（通記）
「◎七〇匁玉筒張り立てのときは、始終シノを差し込んで行った」

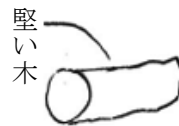
この金を天秤に掛け、筒を持ち扱うので、筒に
応じて重くすべ

きである。手前が軽いと先がずり下がり、持ち
扱いにくい



右の金（シノ）を筒へ差し込む。十分に右の金を筒に應じて重く拵えるべきだ。先をゆがめて筒へ差し込むときは、筒の穴に少々的大小があつても、一本でよい。右の金を筒へ差し込み、灰「付け作業」などを行うときは、手前へ枕を入れ、筒を天秤に掛けて灰場へ上げる。そして沸かすときは手前へ枕を入れ、転ばして引き出し、鉄床の前に

転ばし枕の図



外れ
にくいものだ

このような大きなカギを金鎖で釣り上げ、このカギに「シノ」を差し込んだ筒を」掛けて鉄床の上へ振り向け、カギを外して鉄床の前に枕を置き、これを転ばして「筒を」差し引きすべきである。カギ取・杖突きという役人（担当の職工）を置き、カギを外し取つて杖で筒を動かす、鉄床の外へ落ちないようにしなければならない。もちろん、鉄床にはシノ持ちを打つべきである。シノの差し方、

（付紙にて追記）
「私の考えでは、

◎七〇匁玉筒張り立てのとき、カギ繩の上へ車を仕掛け、角材を二本渡し、その間をカギ繩が動くようにしたところ、甚だ都合よく差し引きすることができた。「重さ」五〇貫、六〇貫目の筒ならば、火袋（火床を覆う設備）の前を切り開け、車でカギ繩を火袋の中ほどまで動かすようにすれば、よいだろう」



この穴は、シノの鑿つばが通る
ようにすべきである

右の鉄の輪でシノを掛け、筒口へ差し込み、大ツチでシノを打ち込む。
右の輪は、シノが熱いので手を火傷しないため、上の柄を持って下の
輪にシノを掛ける。

シノ数の事

(追記)
「◎七〇刃玉筒張り立てのとき、二番シノまでは地鉄製であった。三番
よりハガネを加えた」



大きなシノは地鉄でよい

まず下巻の巻き付けシノ、下巻沸かしシノ、上巻沸かしシノ二、三本、
(追記)
それから仕上げ用のすらしシノ、以上六本くらい「必要である」。すら
しシノはただ中へ入れておくだけだ。概して上巻を二、三遍掛けたら、
もはや中へは縮まらないものである。(追記)すらしシノを中へ入れておくの
は、穴が詰らないようにするためだ。大体それゆえ、一〇〇刃玉筒な
らば上巻二、三遍のところ、穴の大きさが七、八分になるように張
り上げるべきだ（大筒は銃腔を細めに作り、キリ入れて広げる）。

⑩「◎シノの大きさには段々あり、二分五厘から三分くらいの開きが

なければ、その後「筒に」入れることができない。それゆえ、段
シノを少なくすべきである」

⑪「◎この書き入れはよくない。

とくに下巻が厚い筒は、下巻のまま、もはや中へは縮まらない
ものである。この所を考え、玉目に応じて穴を細くすべきである」

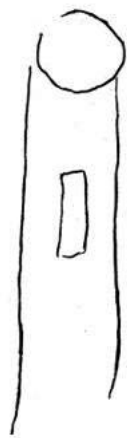
(付紙で追記)

「◎七〇刃玉筒「上巻」三遍目、瓦で元口四寸、先三寸五分に付けた。

この所には、大いに考えがある。七〇刃「玉筒を太さ」七、八分の心金
で沸かし、その上へ二遍葛を掛けたが、中へ縮まった。そして、その上
へ「厚さ」一寸くらいの瓦を掛けても、格別の大ツチで打つと縮まっ
た。この所については作者の考えで、心沸かしのときに穴を大きくす
べきである。強く打てば、瓦のときも中へ縮まるものだ。格別の大筒
になれば縮まらないだろう」

中揉み方の事

揉み台の図



キリの図



国友では荒キリ「を用い」、小筒でも同様である

右の通りの大きな揉み台に「筒を」設置し、このようなキリを用いて

三人くらいで揉む。一人は中央に居て、二人は両端でモジリ（把手）を回して揉むのである。尤も、大きなキリを使うときは上からカギを下げ、キリを釣り上げて揉む。そうしなければ、筒の小口が挟れてしまう。「尾栓」ネジの道を立てる（雌ネジを切る）方法は、右と変わらない。下割り三本、上割り三本くらいでよい。ただ、鑄造の筒の道立てには、筒を穴へ埋め、締め木で締め、キリに重りを付けて、道立てキリを揉み込むこともあるそうだ。筒の荒揉みのキリは、八、九本もあればよい。十分上げ下げして揉めば、キリの数はさほどいらぬ。

内直し方の事

大きな「ちうす」（臼の一種か）のようなものの上に筒を載せ、手前の方に鉄を敷き、大きなカニマタという、

カニマタの図

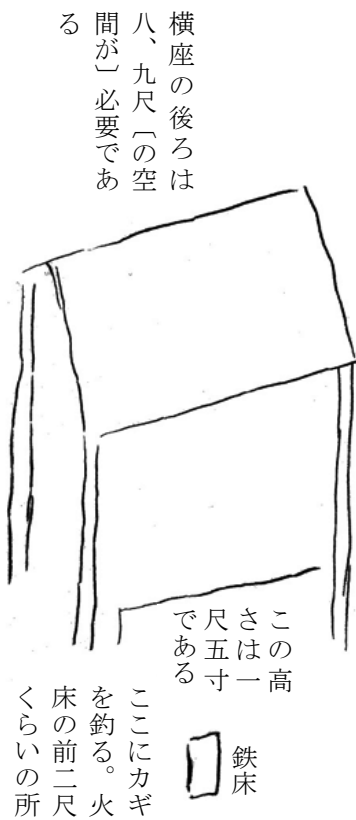


このような大型のハサミで、二人に先小口を持ち上げさせ、「筒の」内部の歪みを透かし見届けて印を付け、下へ降ろして、筒の両小口にシノを差し込み、手で持ち上げて鉄床の上に置き、九貫目のツチで打つ。鉄床の前に大きな金を据え置き、橋に架けるようにして打つのである。全般的に大筒は内部が荒々しい状態で、却って見え過ぎて打ちにくいものである。大きなものなので、表の窪みを打つても、裏のせな（出

っ張りの意味か）へは響かないものだ。そのつもりで、差し向かいの窪みを打つべきである。せなは次第に取れるものだ。決して小筒のつもりで打つてはいけない。総じて、その上はキリでまっすぐに伸ばすべきである。また特大の大筒になれば、小口を差し上げることが容易ではない。それゆえ、行灯あんどんに火を点して上げ下げして、「陰影によって」内部の歪みを見ることもあると聞いた。

場所の拵え方の事

火袋の奥行一間、幅九尺、高さ一丈余り



この所に口があり、炭などを運ぶ

この高さは一尺五寸である

鉄床

ここにカギを釣る。火床の前二尺くらいの所

横座の後ろは八、九尺「の空間が」必要である

八窓フイゴはこゝ

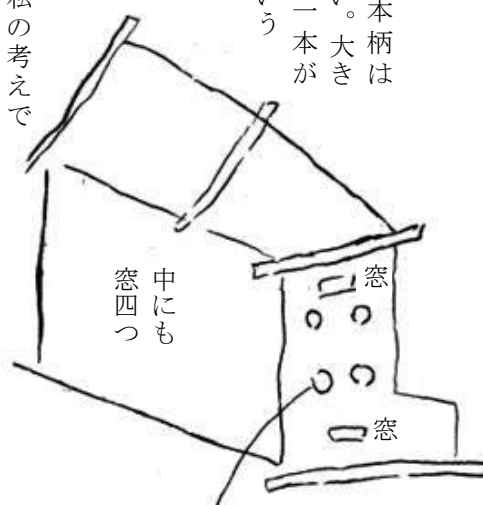
「七〇匆玉筒張り立てのとき、七尺・六尺（奥行・幅か）」

「七〇匆玉筒のとき、火口（フイゴの羽口）二寸、穴は石製で、

口の差し渡し五寸五分、土製はよくない」

長さ五尺、高さ二尺三寸、幅一尺五寸

元来四本柄は
よくない。大き
くして一本が
よいという



「◎私の考えで
は、四本のほ
うがよい」

柄を引く穴四か
所で棒四本、カ
セを結いつけて
吹く。〔操作は〕
一人で、たびた
び替るようにす
べきだ

火袋は、奥行が浅くても横幅は広くしないと、長い物を持ち扱うのによくない。火壺は逆落しに拵えて掘るべきだ。風箱は八つ窓、四本の柄に二本のカセ(把手)を結び付けて吹く。大筒にフイゴを二箱掛けることは、よほどの大器の場合には分らないが、まずは一箱で二〇〇匁・三〇〇匁・五〇〇匁〔玉筒〕も張り立てる。細工所は四間四方、人数は二〇人くらい、鉄床はそれほど大きくなくてもよい。大体一〇〇匁玉筒ぐらいで〔重さ〕三、四〇貫目ぐらい。炭は松炭の荒い物を用いる。鉄は千割こんにやく金の類。しかし、この場所は一貫目玉筒など〔の製作〕において、右の見積りでは狭い。別に人家から離れた

場所を探して設営すべきである。その外の道具類については変わることはない。九貫目のツチは〔筒の〕小口を切るとき、あるいは内部を直すときに用いる。

⑫「◎火壺は、一〇〇匁玉筒なら幅一尺二、三寸、炭も俵で二、三俵が入るようにすべきである」

⑬「◎七〇匁玉筒のとき、人数が大勢のときは風箱〔を操作する者〕共で九人くらい、葛を巻くときはツチ打ち五人くらい」

⑭「◎七〇匁玉筒のとき、手前の床に、鉄床を下へ横に伏せて置いた。それで揺るがなかった」

上仕立て

一、セン・ヤスリ・タガネを大いに使用する。あるいは、〔筒の〕上に小紋(家紋などの象眼細工)を入れることがある。小紋は〔注文主の〕希望通りに打つ。これは却って磨き上げることよりもよい。少々ムラのある所も、多くはこれで隠せるからだ。

ネジの事

大きなネジは、なかなかヤスリですべてを磨くことは難しい。下地はタガネで削ぎ、その上をヤスリで磨るべきである。ネジの道立ては、大筒も小筒も大体二厘とするのが最もよい。それより大きく削ろうとすると、〔ネジキリが〕折れてしまうものだ。必ず二厘を越えてはならない。

火皿の事

大筒の火皿は、「筒と火皿の」両方沸かしにする。

火皿の形は左の通り



抱え筒なども、当時はみな沸かし付けである。入れ火皿（嵌め込み式）は多く手間取り、そのうえ筒の弱点となる

この所を猿尾という。よく沸いたとき、当てツチで筒へ平らになるほど叩き込む。そうしなければ、「筒の」内部などを直すとき、小山の所から落ちてしまうものだ。大筒でなくても、一〇匆玉くらいの筒は右の通りでよい。穴の合せ方は、通常の小筒のように穴をあけ、このようにする。



この所に釘を刺し、穴をよく合わせる

火皿穴の上下の位置決めは、ハサミで金を持ち添えて定めるようにする。左右はどこか「筒の」角に合わせ、定規のような物を作り、「火皿を」付けるときには右の定規を当て、火皿の左右を定める。さてまた入れ火皿のときは、小山の先の猿尾の所、小縁の所をネジ留めにすべ

きである。火皿を「鍛接で」装着するとき、大きな筒は「熱して」赤めて火皿へ叩き付けること、小筒のようにはやりにくい。それゆえこのように、



穴をよく丸くし、一〇匆玉くらいのネジキリで道を立て、古鉄をネジにして仕込むときは、「爆風が」吹き出すことがまったくない。そうでなければ、火薬が強ければ吹き出すことがある。鑄造の筒など、「穴の」通りが劣化しやすい。そのようなときは、火皿の天より筒の中まで大きく揉み抜き、ネジ道を立ててネジを仕込み、そのネジの中へ通し穴を揉み上げ、装着することがある。そうしなければ、火皿の通し穴の奥の所がたちまち劣化するのである。上火皿（上部に付いた火皿か）の筒などは格別ネジにして、通し穴を揉み上げなければ、調整しにくい。

出合の事

すべて大筒であっても、出合（銃の照準線と弾道との交点の銃口からの距離）は六間くらいのものである。決して長い出合を設定してはいけない。

大鑄形の事

まず、升の中をタガネで掘り、大マイギリで揉む。ロクロで揉むこともあるが、それはよくない。すべて大鑄形のキリは、「鑄形の」金に分

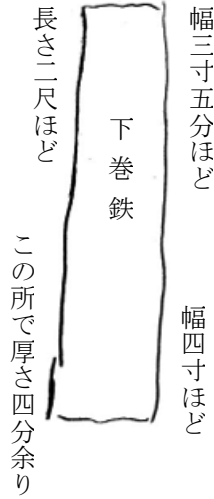
厚いため、焼き刃が爆ぜ、ひどく切り鈍くなることがある。それゆえ、近ごろは図のような工夫の品がある。軽いので回転がよく、とても便利である。



右はとても便利だという

異風〔筒〕下巻鉄の見積り

この所で厚さ三分ほど



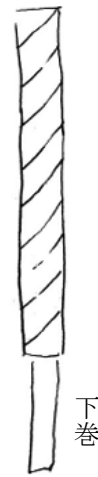
右の鉄をこのように毛抜き合せにする。下巻は沸かさない。これは大体六、七匁〔玉筒〕の下鉄である。鉄は平（千の誤りか）割の上々の品を用いるのがよい。もし、これがないときは、万割の内で大きな物を選び、これを合わせるべきだ。一〇匁玉の太めの筒、一五匁・二〇匁玉くらいの筒には、

図のように大筒同様に下巻を沸かして、その上へ上巻を葛にして掛けるべきだ。尤も抱え筒などは、一〇〇匁〔玉筒〕でも葛だけでよい。

葛鉄の図

葛を巻いたときの図

ここをちよつと沸かす



このように巻いて、その中へ下巻を差し込み、締め付けて、先をちよつと沸かし付けにするのがよい。

葛は、下巻の長さの三倍を見積もるべきだ。六、七匁玉の筒ならば、重さ七〇〇匁くらいある鉄を二本掛けるようにする。厚さは元で四分余り、幅一寸五分くらい、とにかく鉄を余計に掛けて中へ強く打ち込むべきである。中へのツチの通り（衝撃）が弱いときは、縦筋が出るものである。それゆえ大筒になれば、しよせん中へツチが通らないので、下巻のときに沸かすのである。鉄炮の縦疵は、刀の横切れと同様に甚だよくない。「ツチで」打ち出しても、縦疵は根絶できない。全体に長筒でも、下巻よりは上巻に鉄を厚く掛けるべきだ。その理由は、下巻は中にあるので鉄が熔けない。上巻は外なので、沸かすたびごと

に鉄が目減りするのである。この所をじっくり考え、とにかく沸かしには注意し、中の毛抜き合せの所は、合わせ目が見えなくなるほど打ち締めるのがよい。すべて鉄炮は、先の方には疵が少なく、元の方には疵が多いものである。これは沸かしが弱く、ツチが中まで通らないためであり、この所をじゅうぶん注意すべきである。

長筒の鉄の見積り

この所幅三寸

この所幅三寸五分

長さ二尺六、七寸

この所厚さ三分足らず

この所厚さ四分足らず

葛の図



重さ七、八〇〇匁の鉄、一本半余り

長さは下巻の三倍、幅一寸四分くらい



このように巻き、下巻を差し込む。その外、沸かし方は前に同じ。中(下巻)より沸かす

火皿の沸かし方の事

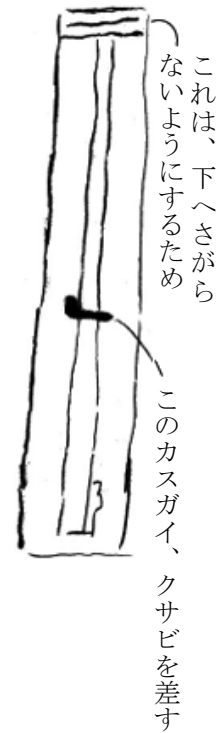
火皿も筒も下地をマイギリで揉み、その上を目打で打ち抜いて巢中まで通し、藁を入れ、穴の開き加減を見届ける。なお巢中がふさがらないうよう、藁に泥を付けて中へ差し込み、火皿は皿の所に丸く印を付け、マイギリで揉んだ上を目打で斜めに火皿の印の所へ打ち出す。さて沸かしのとき、竹の合わせ釘を作つて火皿に差し込む。筒は大きい物なので沸きが遅いため、筒を少し赤め、右の竹釘を差し込み、火皿と筒を合わせ、「火皿の」大山にも小縁にも泥を塗り付ける。それから沸かし付け、少しも動かないように横座が両手で筒を持つ。そして、ちらちらと火花が上がったところで上へあげ、大山を一度ツチで打つ。それから火皿を横向きにして軽く沸かす。そのときは大山・小山・縁の三か所を一度に打つようにする。大体沸かしは随分軽く二遍でよい。

一、内揉みについては、キリの数三〇本ぐらい。随分大きなキリは「カギで釣つて」上げ下げし、キリを数多く使つて揉むのがよい。キリがこわい(堅いの意味か)のは却つて失敗することが多い。

一、上仕立については、タガネ・セン立て・ヤスリ、右三段階に仕上げ。十分にセンでムラを取り、ヤスリは骨(筒の角の部分か)を折らないようにすべきである。

一、巢中の直し方について、玉目が小さい「筒」ほど難しい。まず、大ツチを余計に使つて直す。つらし(小ツチの一種か)は仕上げに用いるべきだ。つらしを余計に使つたら、巢中の小びり(シワのような状態か)が伸びにくい。つらしを打つた後は、筒をなます(ゆつくり冷やす)のがよい。そうしなければ、後のつらしが効かない。

タガネ削ぎの図



削ぎタガネ 長さ五寸くらい 幅五分余り

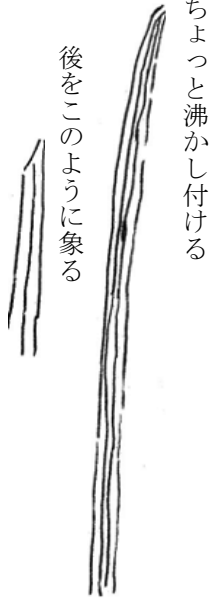


タガネは両刃、あまり刃が薄いのはよくない

右の削ぎは、堺などでは行わず、国友でもない人もある。概して四方より回るので、歪みもそれほどないという。ツチも、よほど大きなツチで打つ大筒などは格別で、削ぎが第一である。タガネはそれに応じた大きさにする。

ハガネ巻きの事

筒一挺を少し太めに張り立て、十分に揉み上げ、内直しで出っ張った所がないようにじっくり仕立て、表面の片張り(余分な出っ張りか)を取る。そして、その上へハガネと地金を二筋並べて巻く。巻き方は金をこのように、



先をちよつと沸かし付ける

後をこのように象る

右の図のようにして、巻き立てるのは常のとおりである。しかし、二筋なのでとても巻きにくい。葛は途中で継がないように、「下巻筒の長さの」三倍の見積りで拵えるべきである。何といつても、ハガネなましにも、十分注意しなければならぬ。白なましにすると、長い葛は途中で折れるものだ。とくに注意しないとけない。さて、ハガネの鍛錬は五遍くらいで、随分良質の石見「鉄」を用いる。そして筒を沸かすとき、横座は少しも油断してはならない。沸き過ぎたときは、ハガネがくずれ、「地鉄との」境目が乱れてしまう。この点を第一に注意すべきである。仕上げのところで、「ハガネの」色が分からなくなるものだ。そのときは、鼠の糞に梅酢を加えて「筒に塗り」、数遍炙り付けるとよい。腐食作用が強いので、大体は判別できるようになる。

小玉〔筒〕の張り方の事

五分・三分玉の筒ならば、一匁玉筒くらいに「ギリ入れて」揉み上げるように、十分筒内を細く締める。揉み上げのところで細シノを入れ、二寸・三寸ずつ締め、それを揉み取り、さらに同様に締め、段階を追って揉み取るべきである。一度にみな締めて、揉み取るのはよくない。これを小玉「筒張り立て方法」の伝えごととする。ところで、筒の下巻には古筒などを用いるのがよい。たびたび締めても、筋が出ない。

ハガネ筒

これは、とても難しいものである。上巻だけのハガネ巻きがあり、下巻からのハガネ巻きもある。いずれにしてもハガネを十分鍛えなければ

ばならない。とくに下巻においては、よく鍛錬されていないとよくない。ハガネは印賀（石見国のブランド鋼）を用いるべきである。印賀〔鋼〕はとても使いやすい。少々沸かし過ぎてても崩れない。

ズク鍛えの筒

これは、国友・堺などでも聞かないが、西国筋などでは一般に用いるという。地鉄より肌合いがとて繊細で疵がなく、その品位は大体ハガネに次ぐ。叩いてみるときは、音さえもとてもよい。右の鍛え方は別書に詳しく記述するので、今ここでは省略する。

鉄炮の色付けの事

雄黄色は少し、それに硫黄を加えて〔筒に塗り〕、天日で干すのがよい。一日ほど付ければよい。できるだけ、二色のないようにすべきである。天氣が悪くて色仕立てができないときは、大聖寺土（加賀国の陶土か）に硫黄を少々混ぜて〔塗り〕、炭火で炙れば、色よく付く。

黒色

（追記）「この方法はよくない。雄黄色を〔用いて〕赤く色付け、その後火で炙れば黒くなる。しかも後で剥げず、とてもよい」

大聖寺土大・硫黄中・丹礬小、右の三味をよく混ぜ、炭火で〔筒に〕付ければ、色が真つ黒になる。その上を木賊とくまで下地が剥げないように〔擦り〕落し、湿り気のある所に筒を横にして置き、時々水を引けば、錆が一度に出るものである。全体に錆が厚くなったとき、よくよく

隅々まで拭き上げ、色付け土の上澄み液を引けば、色に赤みが出る。そのときに洗い上げ、よく乾かして油を引いて拭き上げ、火を強くして炙ると、油が燃えて色が次第に黒くなる。これをよく冷まして、油を引いておく。とてもよい黒色となる。

赤色

大聖寺土大・硫黄中、右の二味をよく混ぜ、炭火で〔筒に〕付ければ、少々赤色になる。それを木賊で初めのように落とし、水をたびたび引けば、錆が一度に出る。その上をよく拭き上げ、右二色の土をよく引けば、数遍でよい赤色となる。じゅうぶん洗い落とし、油で仕上げる。

右の土は、大聖寺家中（加賀藩の支藩、大聖寺藩）の坂井庄兵衛殿へ依頼すれば入手できる。

火蓋が自動で開くカラクリ

火蓋はゼンマイで正確に開くため、火挟みが落ちるとき、蟹の目が下へさがるので火蓋を押さえ付ける（「火蓋が開く」の誤りか）。火挟みを引き上げれば、蟹の目は火蓋の爪の下へ差し込まれるので、火蓋は開かない。火挟みが落ちれば、蟹の目が下がって火蓋がまた開く、と理解すること。

火蓋について、こちらの方はとくに薄くし、上だけは表のように厚くする。そうでなければ、ゼンマイを内部に仕掛けにくいからである



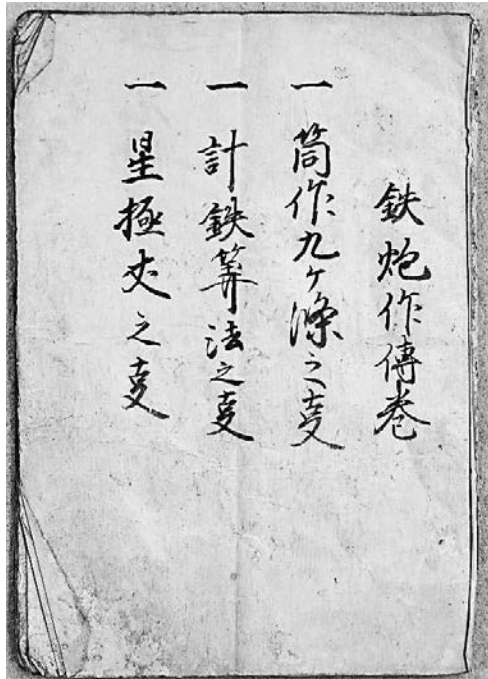
この蟹の目の樋は、上を塞いで表へ見えないようにする

この所に穴、火蓋に穴があって、蟹の目が入る

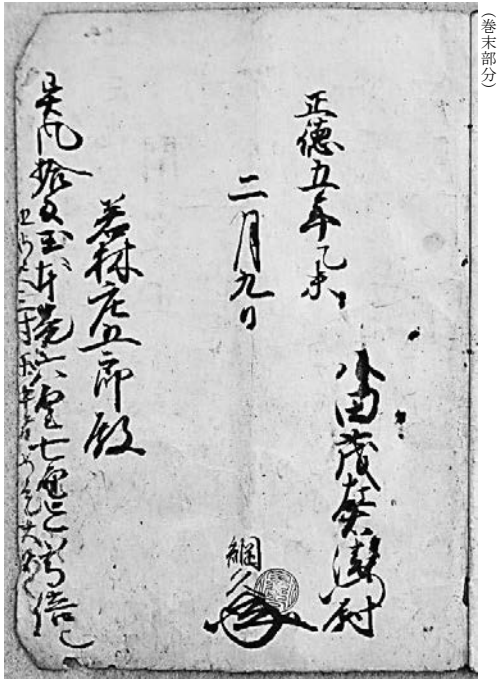
火皿の小山をかなり大きくして、「火蓋の裏の方に、「内部にゼンマイを仕掛け、火蓋の鉋を四角にし、ゼンマイを持たせ、火蓋が常に開くように仕掛けておく。そして、地板の内から小縁の中へ樋を彫り、蟹の目のような金を仕掛け、ゼンマイで上へ引き上げさせ、火挟みが落ちるとき、蟹の目が下がるように仕掛けておくので、火蓋は自動で開くのである

(裏表紙の内側に記載)
若林元敷

【参考】「鉄炮作伝巻」



(冒頭部分)



(巻末部分)

〔翻刻にあたって〕

*本文の体裁・改行位置、文字の大小や行間への書き込みは、できるだけ原本に忠実に従った。

*用字については、旧字体・異体字は新字体・正字に改めた。ただし、頻出する異体字の「迨」(迄)はそのまゝ使用した。

*本書では、鉄炮の尾栓ネジを表すのに、「擯」(手偏に責)という特殊な文字が使われているので、注意を要する。

*本書は、縦一八・六cm×横一三・〇cmで、紙の折りが地(下端)にある折紙綴じの冊子である。所どころ折りが切れて紙背文書(「さき御手筒出合」など)が現れている。表紙に当たる部分が欠損しているようなので、冒頭を一丁とし、紙背文書は無視して、丁の表・裏を……で示す。

鉄炮作伝巻

……1オ

一、筒作九ヶ条之事

一、計鉄算法之事

一、星極丈之事

筒作九ヶ条

……1ウ

一、尺究事

玉径二拾倍トス、然トモ手前筒ハ

可有用捨事

一、重究事

玉目二百倍トス、然トモ手前筒ハ
可有用捨事

……2オ

一、末口指渡究事

五拾目以下ハ玉径二倍ス
五拾目以上ハ玉径三倍ス

一、擯長究事

……2ウ

二匁玉ヨリ拾匁玉迄 正二八

二拾匁玉ヨリ百目玉迄 正二令五

二百匁玉ヨリ五百匁玉迄 正一三一

六百匁玉ヨリ五貫匁玉迄 正二一

右之通ナリ、擯キサ深ヲ用

……3オ

一、擯カブ究事

玉径二一分マシ、四方六面、但六百匁
ヨリ二分マシ

一、右之筒丸張、目当通平ミニス

一、前目当付所之事

……3ウ

大方本口ヨリ五六寸末ナリ、高モ
恰好次第ナリ、櫓立ノ穴アルヘシ

一、先目当高ハ、星極丈ヲ以究ヘシ

一、火皿之事

大サ恰好次第、但擯エ三分掛テ
通シ穴明、擯先之真中エ通ス

……4オ

計鉄算法

一、筒本口之指渡エ末口之指渡ヲ
 加エテ二ツニ割、左右ニ置、掛合、是ニ
 長ヲ掛、是ニ円方之法ヲ掛、是ニ
 鉄目ノ法ヲ掛レハ重サ知ル、右之内
 玉走アキスノ重目ヲ計リテ、惣
 重目之内ヲ引キ減（減）ンスレハ、残ル重
 目知ルナリ
 或ハ、本口四寸五分七厘ニ先口三寸
 九分一厘加エテ、八寸四分八厘与成、
 是ヲ二ツニ割ハ、四寸二分四厘ト成、
 是ヲ左右ニ置、掛合スレハ一七九七七
 六歩トナル、是ニ長サ二尺ヲ掛レハ、
（通記）
 「八角ノ筒ナラハ、八角法八ニヲ掛ヘシ」
 三五九五五二歩トナル、是ニ円法七九
 掛レハ、二八四一トナル、是ニ鉄目六拾又ヲ
 カクレハ、拾七貫四拾六又ト出ル、是ヲ或ハ
 玉径二寸三分ヲ掛合スレハ、五二九ノ歩トナル、
 是ニ一尺七寸ヲ掛レハ、八九九三ノ歩トナル、
 是ニ円法七九ヲ掛レハ、七一令五歩トナル、
 コレニ鉄目六拾又ヲ掛レハ、四貫二百六拾
 三又ト出ル、右拾七貫四拾六又ノ内、此
 玉走ヌケハ、残テ拾二貫七百八拾三又ト

……4ウ

……5オ

……5ウ

……6オ

知ルナリ、外ニ目当二ツ、火皿、積カブ、筒
 先ノ玉ブチ、台金具トモニ二貫又余、
 加エテ拾五貫目等ト有之積リ也、右之
 火皿・目当・積カフモ、右之通ノ歩詰ヲ以
 ヲモサ知ルナリ

……6ウ

星極丈之方 六間之仕込

一、拾又玉 惣尺二尺三寸 ……7オ
 一、玉走之尺 二尺一寸二分五厘
 一、本口目当下 一寸二分四厘五毛
 一、前目当高 三分
 二口 β 一寸五分四厘五毛
 一、末口目当下 一寸令六厘四毛 ……7ウ
 一、先目当高 三分四厘九毛五糸
 二口 β 一寸四分一厘三毛五糸
 一、目間尺 一尺六寸
（通記）
 右、本口下 ■玉半下筒皮ノ分引残ヲ、
（目当高ヲ加エ）
 六間之丈三丈六尺ニテ割ハ、二五六二ノ高倍ト
 出ル、是ヲ目間之尺ニ掛レハ、四厘一毛地櫓ト
 イツル、先口玉半ヨリ上、目当スリ割込ノ
 分合ヲ知ハ、玉半ヨリ上ノ本口ノ分合ノ内、地
 櫓四厘一毛ヒキ、残り先口ノ分合也、仕込ハ

……7オ

……7ウ

……8オ

- 前目当ノ高ヲ以自由ニ可究、仕込之
…… 8ウ
- 間ハ星ヨリ前目当見拵込ナリ、右
玉目筒尺筒皮ノ分合、間合何ホト
ニテモ仕出シ、右同事也、此星ハ三四分計
小キホト吉、正中目付アレトモ目違多シ、
仕込ハ二間余ヨリ七八間迄ノ内ナリ、此
割委ク返丈ノ方ニアリ、角ノ大サ六寸計、
大筒ハ七八寸成カ吉、スミヨリスミヘ十
文字ニ細ク墨ヲヒキ、正中ニ星アルヘシ
- 返丈之方 拾匁玉
- 一、目間之尺 一尺六寸五分 …… 9ウ
- 一、本口指渡 一寸四歩四厘六毛
- 右寸分之内 三分目当高サ
一寸一分四厘六毛目当指渡
- 一、先口指渡 一寸三分三厘六毛
- 右寸分之内 三分三厘目当高サ
一寸令六毛目当指渡
- 一、右本口下皮玉半二目当高加テ、八分七厘三毛 …… 10オ
- 一、右先口下皮玉半二目当高加テ、八分三厘三毛
右之本口ヲ先口ホト曳残テ、四厘ノ地櫓
ナリ、此地櫓ヲ目間之尺ニ而割ハ、二四
二五ノ高倍ト出ル、此高倍ヲ以本口之
八分七厘三毛ヲ割ハ、延三丈六尺ト出ル、
是ヲ六ニテ割ハ、六間之星極丈ト知ル
…… 10ウ

〔以下異筆〕
「右三ヶ条、雖秘事、依深切之

御懇望難黙止、令相伝畢、
努々他見在之間鋪者也

正徳五年乙未 八田茂左右衛門尉 …… 11オ
二月九日 (印「宇都宮」)
綱久(花押)

若林庄五郎殿

異風拾匁玉本先、六厘七厘迄ノ高倍也

但、式尺三寸玉中ニ付、如是大□也〔不明〕

【付記】

本稿の作成にあたり、井上関右衛門家当主 井上俊二氏、および堺市文化観光局 歴史遺産活用部 文化財課には、貴重な史料の閲覧・掲載に御許可・御協力を賜りました。また、福井県立図書館、福井県文書館、佐賀県立図書館、熊本県玉名市歴史博物館ころろピアの方々にも資料調査につき、お世話になりました。あわせて深謝申し上げます。

大筒張立記録

藪田 貫

要旨

堺市となにわ大阪研究センターとの共同調査によって明らかとなった二万点を超える堺鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家所蔵資料。日本の銃砲史研究ならびに堺のモノづくり史の解明に大きく貢献する資料のなから、良質の史料を紹介するシリーズの第三弾。

キーワード・堺鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家、銃砲史、大筒、鍛造

はしがき

初回に紹介した「鉄炮御断控」は、諸藩の武家・農民からの鉄炮注文を堺奉行所に定期的届けた、いわば鉄炮鍛冶の店方の史料と言えるものである。鉄炮鍛冶としてモノづくりに専念する職人のもとに、有力な文字資料が大量に残されていたことの発見が、鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家の特筆すべき価値であることから、イの一番に取り上げた。

二回目には「金銀出入帳」という、堺鉄炮鍛冶二〇軒余で構成される仲

間（組合）の年間の経費の詳細が分かる史料を取り上げた。天保十三年（一八四二）から十五年の三ヶ年に及ぶもので、当主井上関右衛門壽次が当時、会計担当者であったことから残されたモノである。

武具職人である鉄炮鍛冶が、刀匠のように家元制度に置かれたのではなく、商人と同様、組合を結成し、その一員として存在したことを示す貴重な資料である。とくに支出の項には、専任の筆者を雇い、各鉄炮鍛冶の大名家への出入り関係を記した「得意帳」を作成していたこと、堺奉行の交替に際して鉄炮年寄が、惣年寄とともに送迎をしていたこと、組合の行事として十一月にふいじ鞆祭りを執り行っていたことなどが記され、「公儀の町」堺に住む鉄炮鍛冶全体の姿が垣間見ることができて貴重である。

その一つに、春秋、七堂浜（鉄炮鍛冶の集住する堺環濠北部の海手の浜の名称）で行われる町打まちうちの記事がある。そこには当時、幕府の西日本支配の最高責任者である大坂城代の下、大坂城守衛を担当する大名が就く大坂城（定番一京橋口と玉造口に駐在一配下の与力・同心が、それぞれの砲術流派に従って砲術演習を定期的に行う、という政治・軍事的な背景があった（この点、小著『武士の町大坂』二〇二〇参照）。

そこでの演習の実際は、通常言われる火縄銃など玉目一〇匁（約三八_ミグラム）

以下の小さな弾丸を放つものでなく、その十倍の一〇〇目程度の弾丸を打つ大砲（鍛冶仲間の表現では大筒）による長距離発射、砲術家の用語でいう「町打」であった（詳しくは宇田川武久『江戸の砲術師たち』二〇一〇参照）。その大筒は堺でも作られていたが、それに関する史料紹介が今回の主眼である。

二万点を超えるにもかかわらず、通常の火縄銃がどういう工程で、どう作られていたのか、という日常的な業務については、資料が限られている。それは職人にとってフツターの作業であって、身体が覚えていることから敢えて口述するに及ばない、という意識が共有されていたからであろう。わずかに「最後の鉄炮鍛冶」第八代井上関右衛門壽次は、その自覚から、明治維新後、政府や府県が進める勸業を趣旨とする博覧会にしばしば出品し、明治三十六年（一九〇三）開催の第五回内国勸業博覧会に際し、事務方である大阪府勸業委員への報告の中で、製造法について言及している。『井上関右衛門家資料調査報告書』（二〇一九年三月刊行）に翻刻史料として掲載されているが、並張・地鉄巻張・刃金巻張などの銃身の張立工程の基本を記したもので、「製造法」二付キ委シキ事ハ遷筆及ハス、面会ノ上ニ譲ル」としている。

職人として文字で技術を記すことの難しさであるが、そこには鉄炮鍛冶として技術を「秘伝」として扱う、という意識があったと思われる。その一例が井上家に残された「鉄炮作法秘伝書」と題する冊子である（これも『井上関右衛門家資料調査報告書』に所収）。

この秘伝書、冒頭に「大筒張様之事」とあり、大筒の制作を記したものであるが、随所にある注記に「文化九年、七〇匁筒張立之時」とあり、秘伝を、実際の制作工程とで照合している跡が読み取れる。

翻刻史料の解題には、秘伝書の作者は若林元敷という人物（身分経歴など不明）であるが、文化九年（一八二二）、七〇匁筒の張立を行い、所見を

書き入れたのは井上関右衛門直次と思われる、との指摘がある。

第六代関右衛門直次は寛政五年（一七九三）の生まれで、文化八年、祖父の五代関右衛門吉次の跡を受けて、当主となっている。父喜左衛門賢次が早世したためであるが、その五代関右衛門吉次が大筒の制作を行った記録が存在する。

ただしそれは寛政十三年の年記をもつ「大筒祝」と題する祝儀帳（翻刻史料の5）で、制作の実際を記したものではない。しかし大筒の制作は、通常の火縄銃の制作と比べ、人手も多く、経費も膨らむことから、鉄炮鍛冶井上関右衛門家では「非常時」、あるいは「ハレの場」と認識されたことが、その要因と判断される。実際、今回紹介するそれぞれの大筒制作に際しても、祝儀帳が作成され、残されているが、必ず紅白の熨斗で綴じられているので、祝儀帳の存在は、五代関右衛門吉次の下でたしかに大筒が制作されたことを教える。

さらにその後、七代関右衛門宗次が文化十年、「鉄炮張立伝授事」として三匁五分・七匁・十匁の並筒から、五〇目から五〇〇目玉に至る大筒の制作上のポイントと数値を記している。待筒として標準の一〇匁玉筒を例にとると、口径は元口一寸四歩、約五^ナセ^ン二^五リ、葉持（火葉を入れる部分）一寸五分半、約五^ナセ^ン二^五リ。筒の長さは二尺五寸、約七^五セ^ン七^五リとあり、これらは「鉄炮御断控」にも見える必須事項である。

それに対し注目は、地鉄・荒鉄から中巻鉄・上巻鉄と巻重ねることの鉄の掛目（重量）が指示されていることである。一〇匁玉筒でいえば、下記の数値が得られる。

地鉄一貫三五〇目（五〇六二・五^ムラ）

荒鉄軸一貫一五〇目（四三二・二^五ムラ）

中巻鉄一貫目（三七五〇^ムラ）

張立掛目 一貫四五〇目（五四三七・五^ムラ）

上巻鉄一貫三〇〇目（四八七五_ムグラ）

惣張上掛目 一貫九五〇目（七三二二_ム五_ムグラ）

地鉄・中巻・上巻と巻重ねることによって銃身が強化されることは、鉄炮鍛冶として常識であるが、その割合が秘伝であったと思われる。この場合、軸身で一貫一五〇目であった筒は、中巻・上巻と重ねられることで、最終的に一貫九五〇目、約一・六倍に重量が増えていることになると思われる。

これが基準となつて五〇目玉と一〇〇目玉とは、元口（銃身の尾栓の口径で、そこで捻頭と合体する）が三寸六歩五厘（約二一_セ）から四寸（約一二_セ）に増え、軸になる地鉄は一貫八〇〇目（約六七五〇_ムグラ）から三貫目（一一_キ二五〇_ムグラ）、中巻・上巻・惣上巻ののち出来上がった銃身の重量は一貫四〇〇目（約四二_キ七五〇_ムグラ）から二七貫七〇〇目（約一〇三_キ八七五_ムグラ）に増加する。

七匁玉には地鉄と巻き上げの二重巻上げに加え、その間に鍛鍛五〇〇目（約一八七五_ムグラ）と鍛鉄三〇〇目（一二二五_ムグラ）を加えることで、「地鉄二重鍛鍛巻張」と称しているが、鍛鍛と鍛鉄が数量で示されていると判断されるので、秘伝は、それぞれの段階で使用される鉄の重量であったと解することができるのではないだろうか。

もしそう判断できるなら、大筒制作に関する記録にとって必要な事項とは何かが見えてくる。いずれにしても五代関右衛門吉次以降、六代関右衛門直次・七代関右衛門宗次と三代にわたり大筒の制作が続けられ、八代関右衛門壽次の代に、以下に示す大筒張立記録を残すに至つたと理解する。それは時代の波であり、天保・弘化年間を機に、諸大名から一〇匁以上の大筒の注文が増えたからである（藪田「銃砲史」のなかの堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家について）『ヒストリア』二八八、二〇二二）。

さて井上家に残る大筒張立記録は、文化十四年、天保四年、同九年、弘

化二年、同三年の五例である。その内、文化十四年は、当主が七代関右衛門宗次の代で、それ以外はすべて八代関右衛門壽次の代の事例である。全体を通じて特徴的なことは、それぞれ筆者が異なり、制作の度に、実務担当者を作成した記録との印象を強く持つ。とくに当主関右衛門壽次は見事な筆捌きを見せているので、これらの筆者の運筆能力がそれと異なり、高くないことが顕著である。とくに「土之多」という表記は典型で、本来「槌の柄」とあるべきものである。

これは即ち、鉄炮鍛冶自身が監督者として張立に立ち会っているが、それを記録するのは別の人物であることを意味する。しかしそれが誰かを特定する手掛かりを今はもたない。

以下、順にコメントを加える。

史料1文化十四年の「百目玉筒張立諸入用控帳」は横帳二十二丁（紙面の表一・裏二とカウントしている）のうち、わずか七丁で記載が終わる、という簡単な記録である（写真1）。注文主は大洲藩加藤家家臣吉田兵太。注目されるのは、一〇匁玉の筒の払い下げを受け、それを百目玉筒の軸に再利用していることである。その軸身の上に、秘伝の言うように鉄を巻き上げていくことが、燃料である炭の項に「巻鉄鍛巻鉄張立之分」とあることと分かる。重量が分かっているのか、柑子口と火口の異なった箇所（槌）の代銀は未記入である。同じことは、一〇〇目玉筒張り立て用の土（槌）と、火力を上げる風の挿入口羽口にも見え、記録としては未完成であることを示唆する。

とすれば記録者の関心はどこにあるかと言えば、ほぼすべて人件費である。十月六日から九日の四日間の張立工程に要した人件費が、個々の労働者の氏名とともに記されている。筆頭は横座で二名、面立ちの惣吉に補助の伊兵衛であるが、惣吉の日当が錢七二五文に対し、伊兵衛が六三〇文と格差付けられているのが興味深い。全工程に関わる彼らに対し、二日目の

七日には通算七名、八日は八名、九日は一四名が数えられ、先手まてと思われるが、最低の日雇の賃金は五〇〇文である。ただし祝儀以外に一〇〇文から三〇〇文の賃金が見えるので、時間給的な処理がされていた可能性もある。先手として槌を打つ時間は、体力的に限られていたと思われるからである。しかし九日の一四人という人数を考えると、いかに頻繁に交替しながら槌を振るい続けたかが想像される。

史料2天保四年の「百目玉張立入用控」も、わずか一四丁のうち一一丁に記載があるという簡潔なモノ。注文主は加藤家野間半之助。三〇目玉筒を再利用して一〇〇目玉筒に張り立てる、という点で史料1に共通する。新規制作でなく、再利用による大筒の張立は、鉄炮鍛冶にとって技術習得上、有効な過程であったと推測する。

三〇目筒の長さ七尺二寸(約二一八^{サシ})が、口径を広げ、一〇〇目筒(史料中には「二二〇目」とあるが表題を採る)になると三尺四寸(約一〇三^{サシ})と約半分の長さになるが、その分、古筒の半分が残されている。したがって銃身が切斷されて、再利用されていることになる。

続いて古鉄に追加供給される鉄が庖丁鉄と小平鉄であること、打ち直しのための燃料である炭、羽口はぐちと槌、そして羽口の明細が記され、史料1より情報量が増えている。とくに羽口が常・一〇匁・一〇〇目・二〇〇目と、四種類用意されているのが注目される。

工程は表紙には四月二十六〜二十八日とあるが、前日二十五日にもフィゴ据えに横座・先手が動員されている。準備過程も、実際には工程に含まれていたのである。

最大の関心は史料1と同様、人件費にあるが、横座二名に先手六人というユニットは、史料1の二名に七、八名に対応する。加えてその氏名が横座は池田屋と屋号で、先手は箱常・布千と渾名で呼ばれているのも興味深い。堺鉄炮鍛冶全体で大筒の張立が活性化すれば、横座と先手は専門化する

可能性が考えられるが、どうであろうか。

史料2の四年後にも大筒の張立があった。それが史料3天保九年の「百目玉張立入用控」である。岸和田藩岡部内膳正の注文品で一四丁のうち一丁に記載がある。冒頭、長さの記載があるが、元口以下の記載がない。さらに掛目を記さない点においても、秘伝書の形式から大きく外れている。その意味でこれら「入用控」は、純然たる経費明細に近いと言える。

横座が二名に先手八名の態勢で、横座と先手に池田屋・箱常・布千の名が見え、天保四年からの継承が知れる。それは鉄商として見える鉄屋清七にも窺えるが、その実態は未詳である。

工程は十月朔日に始まる、と表紙にあるが、九月二十七日から日当が支給され、準備期間があり、その後、十月一〜三日に継続していったと推察される。その後、十二日以降にも経費の支出があり、作業は続いているが、内容は記されていない。

史料4弘化二年(一八四五)の「百目玉抱筒控」は宇和島藩伊達家の注文で、不易流と炮術流派を記したモノとして珍しいが、内容はとても簡素である。横座一人に先手五人にフィゴ一人という体制で、十月二十六日から二十八日の工程も含め、これまでの大筒と比べ少人数の態勢であるが、それは長さ二尺(約六〇^{サシ})の「抱筒」であることに関係するだろう。加えて最終日の支出には酒食が見え、作業は含まれていない。支払い先の海嘉は、天保十三年「金銀出入帳」に見え、鉄炮鍛冶組合が節季勘定を行う店であることから、横座や先手の接待の場ではなく、不易流の大筒の注文者の武家を接待した経費とも思われる。その点で異色な史料である。

最後の史料5弘化三年の「大洲様式百五拾目玉入用控」は、注目すべき史料である。なぜなら表紙にお得意先である大洲藩加藤家の注文とあり、さらに裏表紙に井上関右衛門の署名があるが、まさに関右衛門壽次その人の字である。その意味で、鉄炮鍛冶の当主がみずから記した大筒張立記録

ということになる。三二丁の横帳すべての紙面が記事で埋め尽くされ、これ以前の簡素な記録とは比較にならない内容が読みとれる。大筒張立記録として特筆されるものと判断する。

ただ、その砲術の技術史の専門家でないわたしでは、十分に解読することは困難である。そこで、貴重な資料として全文、紹介するが、最低限の役割として、その史料の構成を示すべく、段落ごとに順番に注記を*として施して記す。以下の通りである。

- ① 注文書
- ② 前段経緯
- ③ 手順書
- ④ 作業日程 i
- ⑤ 備品
- ⑥ 人件費
- ⑦ 諸雑費
- ⑧ 作業日程 ii
- ⑨ 作業日程 iii
- ⑩ 試射
- ⑪ 付属品
- ⑫ 運送

見ての通り、前年弘化二年の献上願を経て、翌三年二月に注文書①を受け、三月十八日から張立を始め、二十三日に完了するが、前日には大洲藩大坂蔵屋敷留守居などが現場で立会い、見分している。所要日数六日となるが、それについては「巻金は前々より拵置」いたからだ、と、前段の準備過程を教える②(写真2)。

ついで軸となる真(心)鉄、下・中・上の三段巻の仕様が記され③、すべて「沸かし付け」で行われる、としている。ここに火繩銃制作で鍛えてきた「沸かし付け」の技法、すなわち鍛造の技法が明記されている。鍛造での大筒張立は、鉄炮鍛冶井上関右衛門家の真骨頂であったと理解する。

ただしその作業は四月十五日から二十三日の九日間かけて行われ、二十一日には「夜八ツ時より■(明カ)而六ツ」、午前二時から六時にかけて行われている④作業日程 i。後段の⑦諸雑費に油蠟燭が出るのは、そのためである。それぞれの日ごとに使用された炭数が二五俵から一二〇俵の間で見え、その総数が⑤備品で明示される。それぞれの金額(銀貨で表示)が列記され、⑤備品一覧となる。

燃料の鉄と炭の量も半端ではないが、先手が振るう槌の柄三〇本、五〇

目から二五〇目に至る大小の羽口、鞆の弁となる狸革たぬきと並んで、計二〇荷の土からは、屋敷内鍛冶場に設えられた巨大な鍛冶炉が想像される。

ついで⑥人件費は、これまでの「入用控」でもっとも重視されていた項目であるが、日程は十九日から二十三日の間で、下巻・中巻・上巻の巻き上げに相当する。そこに先手が一〇名前後、動員されているが、横座の名が見えない。

ここで一旦、諸経費が集計され、さらに⑦諸雑費と続くが、油蠟燭と藁草履二〇〇足の数値から、④作業日程 i の間の雑費と理解する。そこまでの経費は五貫三九匁となり、総経費七貫六八匁余の七一%を要している。

したがってこの段階で玉目二五〇目の大筒の本体は完成しており、以後、荒操・はた付・仕立・荒錐・揉み上げ・鋸拵ねじしらへ・火口拵・うね立てなどの仕上げ工程⑧作業日程 ii と⑨作業日程 iii が、四月二十五日から五月末にかけて行われている。その後、⑩試射があり、十一月に入って磨きと色付け、さらに下職たちが作り上げた付属品と玉鑄型⑪が添えられ、大坂蔵屋敷への運送⑫が済むことで、大洲藩加藤家注文の二五〇目大筒の張立記録は終わる。

余談だが、小稿を記している折、町家歴史館鉄炮鍛冶屋敷の冬季企画展において展示されている大筒の木箱を初めて目にした(写真3)。大工を雇い、専用の木・釘・金物で特注された箱であることを、この史料で教えられたのである。文書である史料が、木箱という資料と出会った瞬間であるが、こんな楽しみが用意されているのが、堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家資料調査の醍醐味である。

なお参考に掲げた「大筒祝」について一言。関係者に祝儀として配られた金品の一覧であるが、名産鯛が目立つとともに、「酒切手」という商品券が流通していたことが分かる。大筒の制作記録では見えない、商業都市堺の社会相を教える史料としても貴重である。

〔注記〕 それぞれの大筒の注文者は、当該年度の記録「武家方百姓威鉄炮詔御窺帳」によって確認した。

〔付記〕 本稿の作成に当たっては、資料所蔵者の井上俊二氏、資料保管者である堺市文化財課ならびに同課会計年度職員春里友季子さんの助力を得た。記して謝意を表す。

（やぶた ゆたか 関西大学名誉教授）

写真1

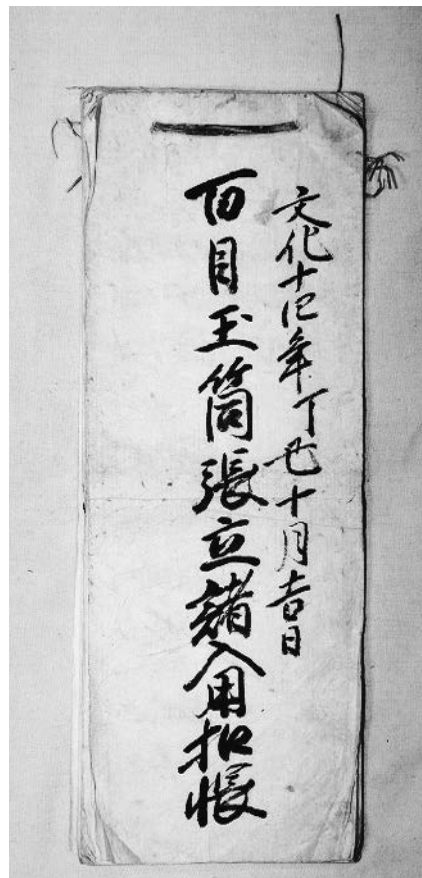


写真2

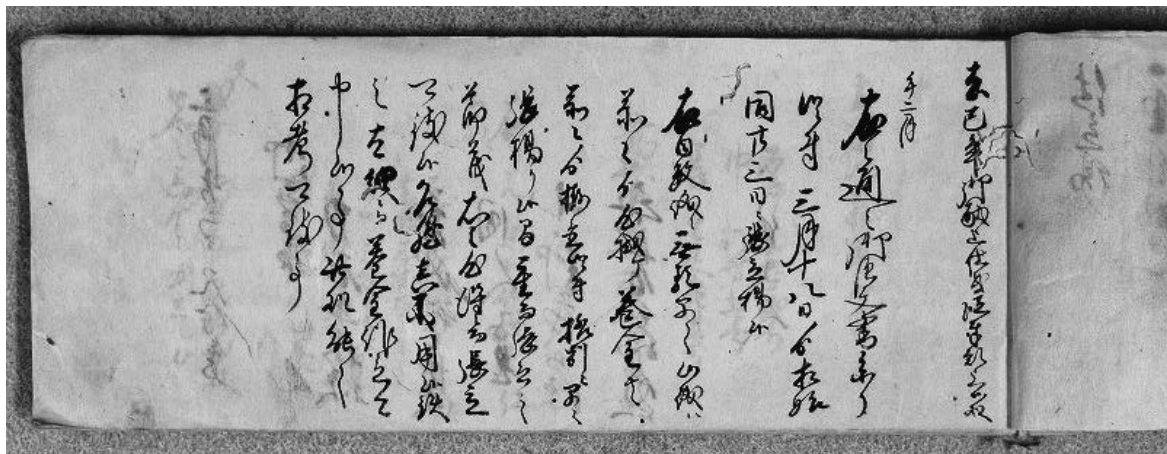


写真3



1 番号 三二一九八

(熨斗結び横帳)

(表紙)

文化十四年丁丑十月吉日

百目玉筒張立諸入用控帳

一 四十匁玉 三尺四寸
 掛目十五貫四百匁
 有之候古筒被下候
 右筒軸二致候事

一 卷鉄
 代銀

一 柑子鉄
 代銀

一 火口鉄
 代銀

一 炭 道具拵之分
 代銀

一 炭 卷鉄鍛卷鉄張立之分
 代銀

一 土

代銀

一羽口

代銀

六日七日八日九日

一三四四文

六百廿四文

七百廿八文

一貫二百四十八文

ノ二貫九百四文

百五十文 二百文

三百文

五百文

一貫二百四十八文

ノ二貫二百五拾文

横座 惣吉

介 伊兵衛

ぬしや万

惣吉分

伊兵衛分

一七百元

一六百元

一六百元

〇百元

一五百文

〇百元

七日八日九日

一二百文

三百五十文

六百元

ノ一貫百五十文

七日八日九日

一一貫百五十文

一 八百五十文

〇此内三百文

九日

一六百元

九日

一二百文

八日九日

一二百文

六百元

ノ八百五十文

熊助

惣兵衛

高安

寅蔵

庄八

伝右衛門

宮三郎

祝儀

日与(用) 安き

佐兵衛

藤兵衛

(以下空白)

九日

一八百元

金兵衛

(裏表紙)

井上氏

2 番号 三一―九九

癸天保四年巳ノ四月二十六日より二十八日迄
百目玉張立入用控

(表紙)

(表紙裏書、但し抹消)

岸和田取次 吉岡濱右衛門様

元口三寸三分

三十目玉 長サ七尺二寸

掛目十六貫目

右之古筒御登セ有之候而

百二十目玉 長サ三尺四寸

掛目

張立掛目三十二貫目有之候

右之通り之筒二張立

差上ケ申候

古筒 長サ三尺二寸

右之程残り申候

鉄屋清七より 掛目十二貫目

鉄 庖丁地 四束

代銀 二百六十目

同 小平 四貫百目

代十八匁四り(厘)

メ二百七十八匁四り

内(打)直し

炭 十俵

炭 百四十俵

メ土百八十目

三百目

羽 口 百目之巻ツ

同 二百目之巻ツ

同 十匁之 式ツ

常之 巻ツ

代

炭 俵 百五拾俵

代五百五十文

土(槌)之糸(柄) 拾本

代 七匁

廿五日分 四匁

四拾式匁

横 座 榎並屋儀兵衛

四拾式匁 池田屋安兵衛

長右衛門

代

先 手 箱弥三

三百文増し 箱 常

式貫百文ツツ 久兵衛

平 吉 源次郎

是迄 大師岩

壹貫八百文 寅 藏

又二百文二十五日入

治 助

壹貫八百文 庄 八

又三百文 友 吉

壹貫文 佐兵衛

壹貫式百文 吉兵衛

又三百文 梅川 龜 吉

壹朱 山田 佐兵衛

代 万 吉

壹貫文 徳兵衛

廿五日吹子すへニ

先手 貳百文ツ、

横座 四匁

壹貫貳百文

箱屋友 貳朱

布 千 壹朱

三笠山 壹朱

覚 榎並屋儀兵衛

四貫三百七十二文

四百十六文 廿五日之分

貳朱 心付

ノ四貫七百九十二文

拾貳貫六百元 先手 六人分

壹貫文 廿五日之分 五人代

貳貫文 寅藏分

ノ十五貫六百元 先手

四貫三百七十六文 池田屋安兵衛

壹貫八百文 庄 八

壹貫文 佐兵衛

壹貫五百文 吉兵衛

壹貫文 徳兵衛

壹朱 山田佐兵衛

貳朱 箱屋友

壹貫三百文

壹朱 布 千

壹朱 三笠山

ノ三拾壹貫三百七十一文

金一步三朱

長右衛門 内 二步三朱

次助 内 壹步壹朱

ノ壹兩壹步三朱

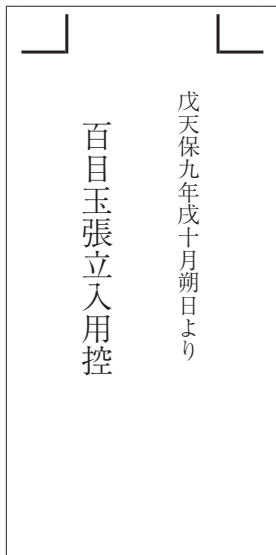
酒 五斗 代八拾貳貫五分

米

肴代

(裏表紙記載なし)

3 番号 三二一一〇〇



百目玉 長サ 三尺六寸五分

元口差渡シ

薬持差渡シ

末口差渡シ

掛匁

鉄屋清七より 掛匁

鉄 三速(束)

代 五貫目

下巻鉄

同 小平 拾貫目

代

内(打)直シ

炭

朔日二日三日

炭 百六拾俵

又四拾俵

ノ貳百俵

羽口 朔日 五拾目之壹ツ

同 二日 百匁

同 三日 百匁

同

ノ

廿七日廿八日

一 壹貫貳百文 ひら常

貳百文 心附 永吉 箱弥三

庄兵衛

五貫七百五十文

荒く利(繰)より内直シ

(裏表紙記載なし)

史料4 番号三一―一〇一

弘化貳巳年十一月二十七日
 百目玉抱筒控
 井上氏

不易

玉百目玉抱筒

諸人用

二十七日

一 平鉄 貳貫五百目

但し長壺尺九寸巾六寸

代

同

一 炭 五俵 いたの節

代 拾貳匁

同

一 卷金網別 拾貳本人 壺束

代 八拾六匁

同

一 横座 留吉 壺人

代

同

一 先手 五人

代

同

一 吹子吹 壺人

代

同

一 炭 三十五俵

代 九拾壺匁

二十六日

一 いた鉄 壺挺 横座・先手共

代 七百六十六文

二十八日

一 拾七匁 海嘉払

硯蓋・浜やき

つくり身

一 二十五匁 同人払

やき物

菓子椀

一 百文 味噌代

一 二百三十二文 かまぼこ・みずな

す・大こん

一 七拾七文 わらそり 拾貳束

一 二十五文 砂持かこ 武ッ

一 百五十文 昼じぶんさい

つげまめ

こふく□

一 六十文 えひ・酒肴

やきとうふ

一 四十八文 同断

いか

一 貳匁 酒肴下 三ッ位

一 拾五匁分 酒八升

一 拾七匁 米九升

薪式荷

醬油壺升

一 四匁 俵二十貫目

一 四匁八分 槌拾六本

一 三拾匁玉

之羽口 壺本

(裏表紙記載なし)

史料5 番号三一―一〇二

弘化三丙午歳年三月吉日

大洲様式百五拾目玉入用控

仕立揚

一玉目 式百五拾目

元口 五寸八歩

薬持 六寸式歩

銅中 五寸五歩

越 四寸三歩

末口 五寸五歩

玉口者中玉口
与之真中

長サ 三尺八寸

鎗長 四寸五歩

玉走り 三尺三寸五分

横火口 長サ

大山 高サ

小山 高サ

柑子笠 長サ

玉口上造 長サ

玉口 中

玉口下造

中玉口 式筋

巢中差渡し 壹寸七歩九厘五毛

*①注文書

去巳年御献上仕度段奉願上候処

午二月、右之通御注文書参り

候二付、三月十八日より相始

同二十三日ニ張立揚候

右日数誠ニ無類早く候儀ハ

前々より心掛ケ、卷金者

前々より拵置候ニ付格別ニ早く

張揚り候間、重而張立之

節茂、右之心得ニ而張立

可致候、乍然真不用候鉄

之太軸ニ而卷金作立可

申候事、此処能々

相考可致事

三月二十二日 見分旁

御留守居

力石平格様

菊地利兵衛様

同人子息

小野茂助様

斎藤嘉内様

供五人

*②前段経緯

真鉄(しんかむ)ニ相用候(かむ)金

厚ミ 壹寸式歩

巾 八寸五歩

長壹尺九寸五歩

此掛匆 拾三貫五百目

右ヲ元ニ用候、此鉄真ニ仕

候処

元口 三寸式歩余

薬持 三寸六歩余

末口 三寸式歩余

長サ 式尺五寸

掛匆拾貫目ニ相成候

又掛匆三貫余之鉄板式枚

先之真鉄ニ次足し候

真ニ相用長サ

三尺七寸位ニ致候

掛匆拾五貫程ニ相成候

右之位太く筒ニ

相成候ハバ(軸)ちく金

長く相成不申候与心得

初より筒長サ丈ケ之

真金ニ作立可申事

下卷ニ相用候金

厚サ 八歩位

巾 壹寸七歩

長サ 五間

尤わか鍛金ニ致候事

山成之鉄ニ而相用候ハバ

へり高く候故、卷金ハ

都すべ而わかし可申事

中卷

厚サ 壹寸七歩

巾 貳寸

元口より薬持末之処

次第恰好ニ付作可申事

末ニ而厚サ壹寸位之卷金ニ致候事

此長サ 六間余

鉄炮地二枚合候而わかし候事

上卷 元壹寸七歩より薬持ニ而

厚サ 貳寸位

巾 貳寸余

末ニ而壹寸二歩程

此長サ 七間

下卷より都而落口之処卷金

随分厚く可致心得

之事、わかし候処ノ

へり高く相成候ニ付

此処相考可申事

***③手順書**

十五日・十六日

兩日卷金わかし作立候

此炭 貳拾五俵

十八日

板広ケ

真致候処

此炭 五拾俵

十九日

真金先次足し

下卷致し

わかし附候

此炭 七拾俵

廿日

真金少し短く候ニ付

次足し、其上卷立

次足候故ニ、其処

半分わかし相成

中卷致、先留メ致候事

此炭 八拾五俵

廿一日 夜八ツ時より■而六ツ時迄

中卷わかし附

上卷半分差立候

此炭 百貳拾俵

廿二日

先半分上卷致

不残わかし附

此炭 百拾俵

廿三日

惣ならし

元口貳処わかし

柑子卷

此炭 百拾八俵

***④作業日程 i**

卷金鉄

掛匁 百拾貫匁余

真金 貳拾貫匁

鉄掛刃 百三十貫匁余
此代銀 壹貫貳百目

張立炭数 五百七拾俵
此代 壹貫七百匁

槌之柄 三拾本
代 貳拾四匁

俵 百貫匁
代 貳拾匁

土 拾五荷
代七百五拾文

のた
土 五荷
代三百五拾文

狸革 五枚
代貳拾五匁

大羽口 十八日 五拾目
十九日 百目
是ハ細く候

廿日 百五拾目
廿一日 貳百目
廿二日 貳百五拾目

廿三日 貳百目
代 貳百目

道具相用
釵(はがね) 貳貫匁余
代五拾匁

十匁并常之

小羽口 拾三本
代七百文

銀三貫貳百三拾七匁(A)
*⑤張立備品一覽

横座 下市屋
久兵衛

留吉事
七拾貳匁
金百疋 祝儀

先手 永吉
喜介

外ニ心付貳百文 平吉
外ニ心付五百文 同 栄吉
外ニ心付三百文 直吉 政吉

外ニ心付貳百文 熊吉
萬吉

一日六百文宛 八人
壹人前 三貫六百文ツツ
外ニ心付八百文

金 二歩 先手中江心附
芝辻 治兵衛

金壹両 同 松治郎

助 金壹歩貳朱

池田屋仁兵衛
十九日半日
廿日半日
廿一日 金壹歩貳朱

廿二日
廿三日 金物

十九日 金物
廿一日 金壹歩
廿二日
廿三日

十九日より

寅 藏

廿三日

貳貫貳百文ツ、

大工

三十五匁

柘屋佐兵衛

圓治郎

手伝

貳貫四百文ツ、

三貫文

のんこ政吉

庄八

貳貫四百文ツ、

酒切手壺枚

銅 附

吉松

借り候ニ付心附

貳貫四百文ツ、

次介

手間賃

貳貫四百文ツ、

佐兵衛

銀 七拾貳匁

十九日

貳貫四百文ツ、

錢 五拾貳貫七百文

廿日

徳兵衛

代

廿日半日

壺貫文

メ七百七十五匁(B)

井上伊介

又三十五匁 手間賃(C)

井上伊介

貳貫四百文ツ、

二口

友吉

惣メ 四貫四拾七匁(D)

貳貫四百文ツ、

*⑥人件費明細

壺貫文

喜兵衛

壺貫文

為 吉

壺貫文

龜 吉

諸雜用控

米貳石八斗 代三日目

魚屋払 代三百六拾目

青物八百屋払 代五貫

青物小払 外二小遣共五貫文

藁草履 貳百足 代壺貫文

下女祝儀 五人 壺人前貳匁ツ、

メ壺貫三百文

薪五荷 代貳貫五百文

油蠟燭 代貳拾目

小買物 代壺貫文

酒 貳挺 代百四匁

醬油みそ 代五貫文

小以 九百九十二匁(E)

*⑦雜費明細

荒操

四月廿五日 一 貳人 代 七百文

四月廿七日 一 三人 代 壺貫五拾文

四月廿八日 一 三人 代 壺貫五拾文

四月廿九日 一 三人 代 壺貫五拾文

五月四日 一 三人 代 壺貫五拾文

五月五日 一 三人 代 五百廿四拾文

是八半日

五月九日 一 四人 代 壺貫四百文

五月十日 一 九人 代 三貫百五拾文

五月十一日 一内(打)直し 九貫九百七十二文

炭 九俵 代廿貳匁五分

羽口 貳本 代百文

酒手形式枚

圓治郎俸

熊 吉

人足 拾壹人 代三貫三百文

酒 貳升 三百三拾貳文

魚 いろいろ 代三百文

はた付

五月廿五日 一 三人 代 壹貫五拾文

五月廿六日 一 貳人 代 七百文

五月廿七日 一 貳人 代 七百文

五月廿八日 一 貳人 代 七百文

*⑧作業日程 ii

仕立并荒錐拵共

荒錐新銀拵

一 鉄八貫目 代七拾匁

同断

一 劔 三百五拾匁 代八百九十文

同断

一 横座 代四百文 又百五拾文飯代

先手代 貳人 六百人 又二百文飯代

揉上ケ劔かけ

一 劔百五拾匁 代三百廿五匁

同断

一 手間 代五百文

荒錐揉上ケ共

一 炭 五俵 代拾貳匁五分

仕立入

一 八拾三日半 伊介

代 三拾三ノ(貫) 四百文

同断

一 七十二日半入 友吉

代 廿九ノ(貫) 文

鋤拵

一 槌地鉄 貳貫五百匁 代貳拾五匁

同断

一 炭 五俵 代拾二匁五分

同断

一 手間 横座壹人 先手三人

代 壹ノ三百文

同断

一 同飯代 代五百文

火口拵

一 鉄三貫六百目余 代三拾貳匁

同断

一 炭 五俵 代拾貳匁五分

錐羽すえたらならしたり

一 炭 三俵 代七匁五分

両目当せんさし三ツ

一 鉄 六百目 代五匁四分

同断 一 炭 壹俵 代貳匁五分

一 針鉄 代八百文

たかねやすり

一 鉄 細刺 四本 代三ノ貳百文

代廿八匁八分

同断

一 劔 五百目 代 壹ノ貳百五拾文

うね立損じニ付拵直し

一 鉄 貳貫匁 代拾八匁

同断

一 炭 三俵 代七匁五分

横手柄

一 杉丸太 貳本 貳間 三間

一 伊介・友吉 飯代 百五拾六匁

代拾五ノ六百文

*⑨作業日程 iii

打様し

一 煙硝 掛匁四百三拾匁

代 十六匁

同断 一 鉛 六百目 代 十八匁

同断 一 米 六升 代六百文

同断 一 酒三升 代五百文

同断 一 魚 代三百文

同断 一 菓子椀 廿五 代拾貳匁五分

同断 一 味噌 代百文

同断 一 薪 壹束 代百三十文

*⑩試射

色付

十一月十三日

- 一 壺ノ式百文 長右衛門・伊介・友吉
十一月十四日
 - 一 六六文 入式人
 - 一 磨石
 - 一 百五拾文
 - 一 炭 四俵 代拾匁
 - 一 うのめ 代六十文
 - 一 雨覆 掛目七百三拾匁
 - 一 代 三拾五匁 但し仕立て揚五百六十匁
 - 一 火蓋 掛目八百目 但し仕立て揚六百匁
 - 一 からくり 掛目三拾八匁
 - 一 鑄形 荒地 代五貫文
 - 一 同断 仕立 代八貫文
 - 一 同断 鉛入用ニ付 掛匁五百匁
代拾式匁五分
- *⑪付属品
- 箱
 - 一 大工 代拾式匁
 - 同断 一 木代 拾五匁
 - 同断 一 釘代 三匁
 - 同断 一 金物代 拾五匁
 - 大坂造人足賃
 - 一 式貫六百元 又外二三百文
 - 小以ノ 壺貫五百七十匁一分七厘(F)
- *⑫送料

惣ノ合 七貫六十八匁式分九厘(G)
(裏表紙)

弘化三丙午歳年三月吉日
井上関右衛門

史料6 番号七六一五九
(表紙・熨斗綴・横帳)

寛政十三年酉五月廿日
大筒 祝

- 一 鯛 一枚 籠屋 与右エ門
- 一 鯛 一枚 田中 善五郎
- 一 鯛 一枚 金物屋 治兵衛
- 一 たい一枚 しば辻 半兵衛
- 一 たい一枚 宮古 長兵衛
- 一 たい式枚 油屋 五兵衛
- 一 たひ壺ツ 台屋 重兵衛

- 一 たひ壺ツ はんこや彦五郎
- 一 鯛 五枚 井左
- 一 四人 同伊
- 一 同 治
- 一 同 又
- 一 たい壺枚 中嶋屋 源右衛門
- 一 たい壺枚 中嶋屋 源兵衛
- 一 たい壺枚 かな物屋 吉左衛門
- 一 たい壺枚 山田 五兵衛
- 一 たい壺枚 田嶋 友三郎
- 一 酒切手 式枚 辻 忠兵衛
- 一 酒切手 式枚 岡 一二力
- 一 たい壺枚 かこや喜兵衛
- 一 たい壺枚 梅や 儀兵衛
- 一 たい壺枚 おしかじ七兵衛
- 一 幸 八
- 一 惣 吉
- 一 ひめ吉 吉兵衛
- 一 ぬしや伊兵衛
- 一 清かくいん(学院)
- 一 儀兵衛
- 一 庄 八
- 一 芝辻 長左衛門
- 一 天満や 伝蔵
- 一 三十式

一 一 一
台 台
利 喜
にし 清左衛門

(裏表紙)

井上関右衛門吉次

関西大学なにわ大阪研究 第8号

発行日 2026年3月31日

発行者 関西大学なにわ大阪研究センター

〒564-8680

大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL: 06-6368-0095

印刷 株式会社 遊文舎

なにわ
大
研 究

第 8 号

